

岩手県埋文センター文化財調査報告書第69集

小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。貴重な文化財の保護、保存と現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つことは大きな課題であります。

地域開発の基幹となる道路など交通網整備は本県にとって重要施策といえます。当センターでは、昭和47年度から県教育委員会が直接実施しておりました東北縦貫自動車道建設に関連する埋蔵文化財の発掘調査事業を、昭和53年度から引継ぎ、現在も継続実施しております。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連し、昭和56・57年度にかけて発掘調査した一戸町小井田Ⅳ遺跡の結果についてまとめたものであります。

当遺跡は小井田川によって形成された段丘面にあり、背後の山地からの土砂堆積によって埋没し、小扇状地化した地形に位置し、湧水の影響もあって調査は難行しました。

調査の結果、縄文時代末の竪穴住居跡や、縄文時代中、後、晩期、弥生時代にわたる多量の遺物を出土しています。特に縄文時代後期末を中心とする生産活動の様子を知る上での貴重な資料が提示できたと思います。

この報告書が、研究者のみならず広く一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財に対する理解が深められるよう願ってやみません。

これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、同一戸工事事務所、一戸町教育委員会、をはじめ関係各位に衷心より感謝申し上げますとともに、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年 7月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター
理事長 金子彰吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事	長	金子彰吉	(県教育長)
副理事	長	柴内眞	(県教育次長)
常务理事	長	熊谷正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事		吉田良和	(県農政部長)
	〃	高橋健之	(県林業水産部次長)
	〃	後藤光雄	(県土木部次長)
	〃	板橋源一	(県立博物館長)
	〃	草間俊夫	(県立盛岡短期大学長)
	〃	小形信夫	(元常務理事)
監事		佐藤公志	(県教委総務課長)
	〃	小原吉雄	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷正男		
副所長	熊鈴	谷本	正信
[総務課]			
総務課長	小笠原喜一	阿部藤四郎	戸草内多加春
庶務係長	佐藤	立佐	立佐
技 能 員			
[調査課]			
調査課長	嶋 近	藤 生	千 宗
主任専門調査員	国朝	野池	孝利
〃	朝菊	木 邊	孝利
〃	鈴木	大 田	孝利
〃	渡大	原 鎖	孝利
〃	佐々	木 嘉	孝利
専 門 調 査 員			
〃	杉田	岩光	白石
〃	中橋	高橋	興右衛門
〃	高橋	高橋	義清
〃	高橋	高橋	義清
〃	高橋	高橋	義清
〃	高橋	高橋	義清
〃	高橋	高橋	義清
〃	高橋	高橋	義清
〃	高橋	高橋	義清
[資料課]			
資料課長	鈴木	木野	信
主任専門調査員	昆平	井木	吉靖
専 門 調 査 員	鈴	井	隆
〃	平	木	謙
〃	鈴	浦	英一
〃	三		

例 言

- 1 本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う「小井田Ⅳ遺跡」の緊急発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本書に用いた地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図、日本道路公団作成の「東北縦貫自動車道八戸線一戸インターチェンジ詳細設計平面図」である。
- 3 遺構の実測図は、縮尺60分の1及び40分の1の2通りのものを使用してある。その縮尺の表示は、該当のページに掲載してある。
- 4 遺構実測図等の方位表示は、日本道路公団作成の詳細設計図面（座標系 第X系）の座北を北としてある。
- 5 遺構図面には、遺構の位置を示すため座標位置を明示してある。座標値は、調査区域の原点を0としてm単位で示している。
- 6 本書に掲載した土器拓影の縮尺及び石器実測図の縮尺は、掲載ページに表示してある。
- 7 本書に掲載した遺構写真・遺物写真は、縮尺不定である。
- 8 相層の色調観察には、小山・竹原編著「新版・標準土色帳」日本色研事業(株)を用いた。
- 9 本書で使用したスクリーン・トーンの区分は、次の通りである。

地山  焼土 

- 10 石材・産地の同定は、佐藤二郎氏（岩手県立大船渡農業高等学校）に依頼した。
- 11 出土遺物については、相原康二氏（岩手県教育委員会文化課）、高田和穂氏（岩手県一戸町教育委員会）の御教示をいただいた。
- 12 発掘調査担当者は、（財）岩手県埋蔵文化財センター専門調査員 小平忠孝、同・栃沢満郎である。
- 13 本書の執筆分担は、次の通りである。

調査に至る経過 調査課長 嶋 千秋

調査方法と整理について	}	栃沢満郎
遺跡の立地と環境		
検出遺構		
遺構内出土遺物	}	小平忠孝
遺構外出土遺物		
まとめ		

本文目次

序

例言

I. 調査に至る経過	5	4. 排水施設状遺構(暗渠)	24
II. 調査方法と整理について	6	V. 遺構外出土遺物	44
III. 遺跡の立地と環境	7	1. 土器	44
IV. 検出遺構・出土遺物	13	2. 土製品	92
1. 住居址	13	3. 石器	92
2. ピット	19	4. 石製品	114
3. 焼土	22	VI. まとめ	160

図版目次

第1図 岩手県全図	1	D II-57ピット	
第2図 遺跡位置図	2	D II-58ピット	
第3図 遺跡周辺地形図	3・4	B III-151 焼土	
第4図 地形区分図	8	B III-152 焼土	
第5図 遺構配置図	9・10	D II-151 焼土	
第6図 遺跡グリット配置図	11	D II-151 焼土	
第7図 土層断面図	12	D II-153 焼土	
第8図 遺構実測図	25	第11図 遺構内出土遺物(1)	35
B III-1 住居址		第12図 遺構内出土遺物(2)	36
D II-1 住居址		第13図 遺構内出土遺物(3)	37
D II-51ピット		第14図 遺構内出土遺物(4)	38
D II-52ピット		第15図 遺構内出土遺物(5)	39
第9図 遺構実測図	26	第16図 遺構内出土遺物(6)	40
D II-2 住居址		第17図 遺構内出土遺物(7)	41
D II-3 住居址		第18図 遺構内出土遺物(8)	42
D II-59ピット		第19図 遺構内出土遺物(9)	43
第10図 遺構実測図	27	第20図 遺構外出土土器遺物(1)	47
D II-56ピット		第21図 遺構外出土土器遺物(2)	48

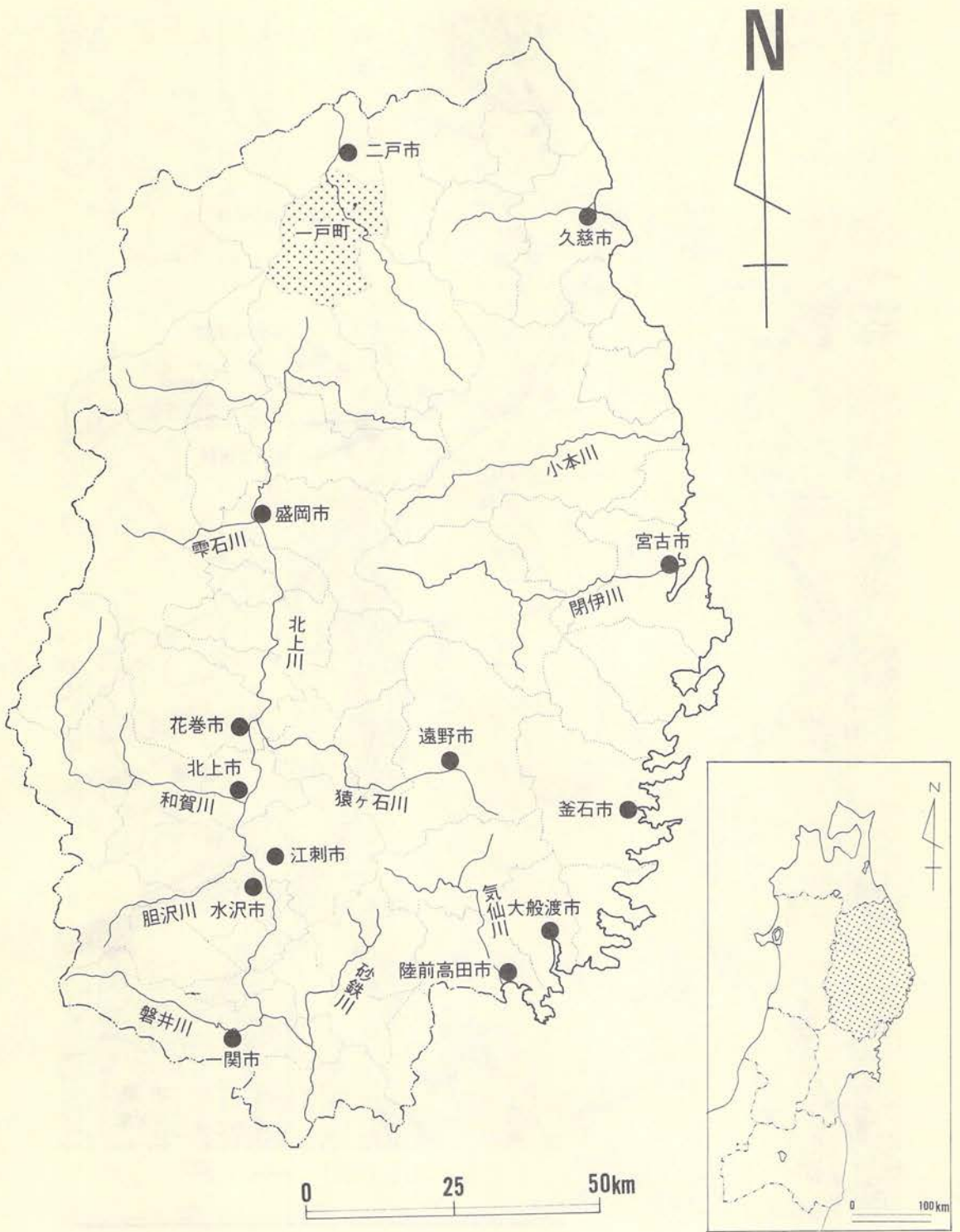
第22图	遺構外出土土器遺物 (3)	……………	49	第54图	遺構外出土土器遺物 (35)	……………	97
第23图	遺構外出土土器遺物 (4)	……………	50	第55图	遺構外出土土器遺物 (36)	……………	98
第24图	遺構外出土土器遺物 (5)	……………	53	第56图	遺構外出土土器遺物 (37)	……………	99
第25图	遺構外出土土器遺物 (6)	……………	54	第57图	遺構外出土土器遺物 (38)	……………	100
第26图	遺構外出土土器遺物 (7)	……………	55	第58图	遺構外出土土器遺物 (39)	……………	101
第27图	遺構外出土土器遺物 (8)	……………	56	第59图	遺構外出土土器遺物 (40)	……………	102
第28图	遺構外出土土器遺物 (9)	……………	61	第60图	遺構外出土土器遺物 (41)	……………	103
第29图	遺構外出土土器遺物 (10)	……………	62	第61图	遺構外出土土器遺物 (42)	……………	104
第30图	遺構外出土土器遺物 (11)	……………	63	第62图	遺構外出土土器遺物 (43)	……………	105
第31图	遺構外出土土器遺物 (12)	……………	64	第63图	遺構外出土土器遺物 (44)	……………	106
第32图	遺構外出土土器遺物 (13)	……………	65	第64图	遺構外出土土器遺物 (45)	……………	107
第33图	遺構外出土土器遺物 (14)	……………	66	第65图	遺構外出土土器遺物 (46)	……………	108
第34图	遺構外出土土器遺物 (15)	……………	68	第66图	遺構外出土石器遺物 (1)	……………	122
第35图	遺構外出土土器遺物 (16)	……………	69	第67图	遺構外出土石器遺物 (2)	……………	123
第36图	遺構外出土土器遺物 (17)	……………	70	第68图	遺構外出土石器遺物 (3)	……………	124
第37图	遺構外出土土器遺物 (18)	……………	73	第69图	遺構外出土石器遺物 (4)	……………	125
第38图	遺構外出土土器遺物 (19)	……………	74	第70图	遺構外出土石器遺物 (5)	……………	126
第39图	遺構外出土土器遺物 (20)	……………	75	第71图	遺構外出土石器遺物 (6)	……………	127
第40图	遺構外出土土器遺物 (21)	……………	76	第72图	遺構外出土石器遺物 (7)	……………	128
第41图	遺構外出土土器遺物 (22)	……………	78	第73图	遺構外出土石器遺物 (8)	……………	129
第42图	遺構外出土土器遺物 (23)	……………	79	第74图	遺構外出土石器遺物 (9)	……………	130
第43图	遺構外出土土器遺物 (24)	……………	80	第75图	遺構外出土石器遺物 (10)	……………	131
第44图	遺構外出土土器遺物 (25)	……………	81	第76图	遺構外出土石器遺物 (11)	……………	132
第45图	遺構外出土土器遺物 (26)	……………	83	第77图	遺構外出土石器遺物 (12)	……………	133
第46图	遺構外出土土器遺物 (27)	……………	84	第78图	遺構外出土石器遺物 (13)	……………	134
第47图	遺構外出土土器遺物 (28)	……………	86	第79图	遺構外出土石器遺物 (14)	……………	135
第48图	遺構外出土土器遺物 (29)	……………	87	第80图	遺構外出土石器遺物 (15)	……………	136
第49图	遺構外出土土器遺物 (30)	……………	88	第81图	遺構外出土石器遺物 (16)	……………	137
第50图	遺構外出土土器遺物 (31)	……………	93	第82图	遺構外出土石器遺物 (17)	……………	138
第51图	遺構外出土土器遺物 (32)	……………	94	第83图	遺構外出土石器遺物 (18)	……………	139
第52图	遺構外出土土器遺物 (33)	……………	95	第84图	遺構外出土石器遺物 (19)	……………	140
第53图	遺構外出土土器遺物 (34)	……………	96	第85图	遺構外出土石器遺物 (20)	……………	141

第86図 遺構外出土石器遺物 (21) …………… 142	第 95図 遺構外出土石器遺物 (30)…………… 151
第87図 遺構外出土石器遺物 (22) …………… 143	第 96図 遺構外出土石器遺物 (31)…………… 152
第88図 遺構外出土石器遺物 (23) …………… 144	第 97図 遺構外出土石器遺物 (32)…………… 153
第89図 遺構外出土石器遺物 (24) …………… 145	第 98図 遺構外出土石器遺物 (33)…………… 154
第90図 遺構外出土石器遺物 (25) …………… 146	第 99図 遺構外出土石器遺物 (34)…………… 155
第91図 遺構外出土石器遺物 (26) …………… 147	第100図 遺構外出土石器遺物 (35)…………… 156
第92図 遺構外出土石器遺物 (27) …………… 148	第101図 遺構外出土石器遺物 (36)…………… 157
第93図 遺構外出土石器遺物 (28) …………… 149	第102図 遺構外出土石器遺物 (37)…………… 158
第94図 遺構外出土石器遺物 (29) …………… 150	第103図 遺構外出土石器遺物 (38)…………… 159

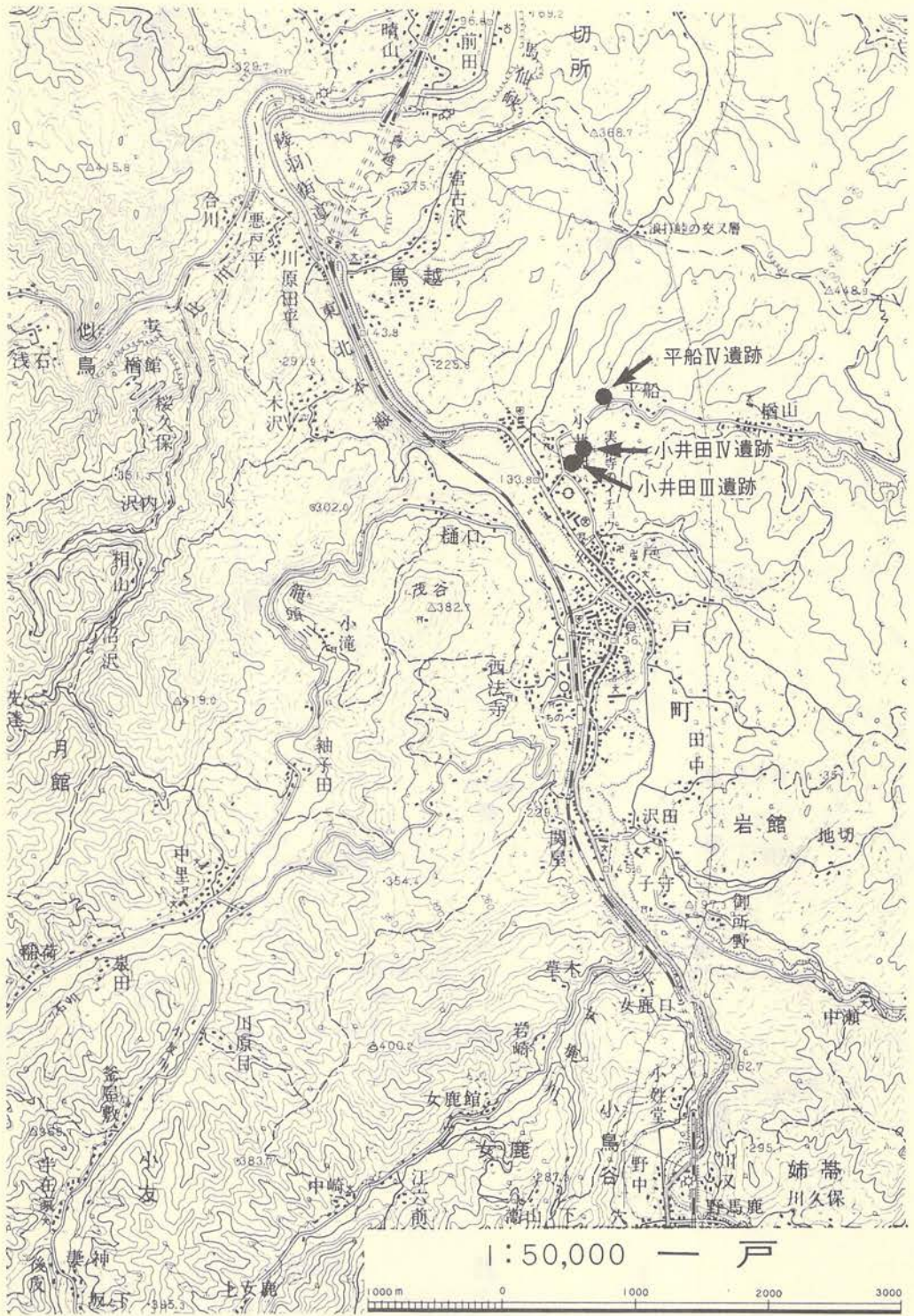
写 真 図 版 目 次

写真図版 1 遺跡周辺地形…………… 28	B III—152 焼土
遺跡全景	D II—151 焼土
写真図版 2 B III—1 住居址…………… 29	D II—153 焼土
D II—1 住居址	D II—153 焼土断面
写真図版 3 D II—2 住居址…………… 30	写真図版 7 排水施設状遺構 (暗渠) …… 34
D II—3 住居址	土層断面 (D II区 e 軸)
写真図版 4 D II—2 住居址炉…………… 31	写真図版 8 遺構内出土遺物 (1) …… 163
D II—2 住居址炉断面	写真図版 9 遺構内出土遺物 (2) …… 164
D II—3 住居址炉	写真図版10 遺構内出土遺物 (3) …… 165
D II—3 住居址炉断面	写真図版11 遺構内出土遺物 (4) …… 166
D II—51ピット	写真図版12 遺構内出土遺物 (5) …… 167
D II—52ピット	写真図版13 遺構外出土遺物 (1) …… 168
写真図版 5 D II—53ピット…………… 32	写真図版14 遺構外出土遺物 (2) …… 169
D II—54ピット	写真図版15 遺構外出土遺物 (3) …… 170
D II—55ピット	写真図版16 遺構外出土遺物 (4) …… 171
D II—56ピット	写真図版17 遺構外出土遺物 (5) …… 172
D II—57ピット	写真図版18 遺構外出土遺物 (6) …… 173
D II—59ピット	写真図版19 遺構外出土遺物 (7) …… 174
写真図版 6 B III—151 焼土…………… 33	写真図版20 遺構外出土遺物 (8) …… 175
B III—151 焼土断面	写真図版21 遺構外出土遺物 (9) …… 176

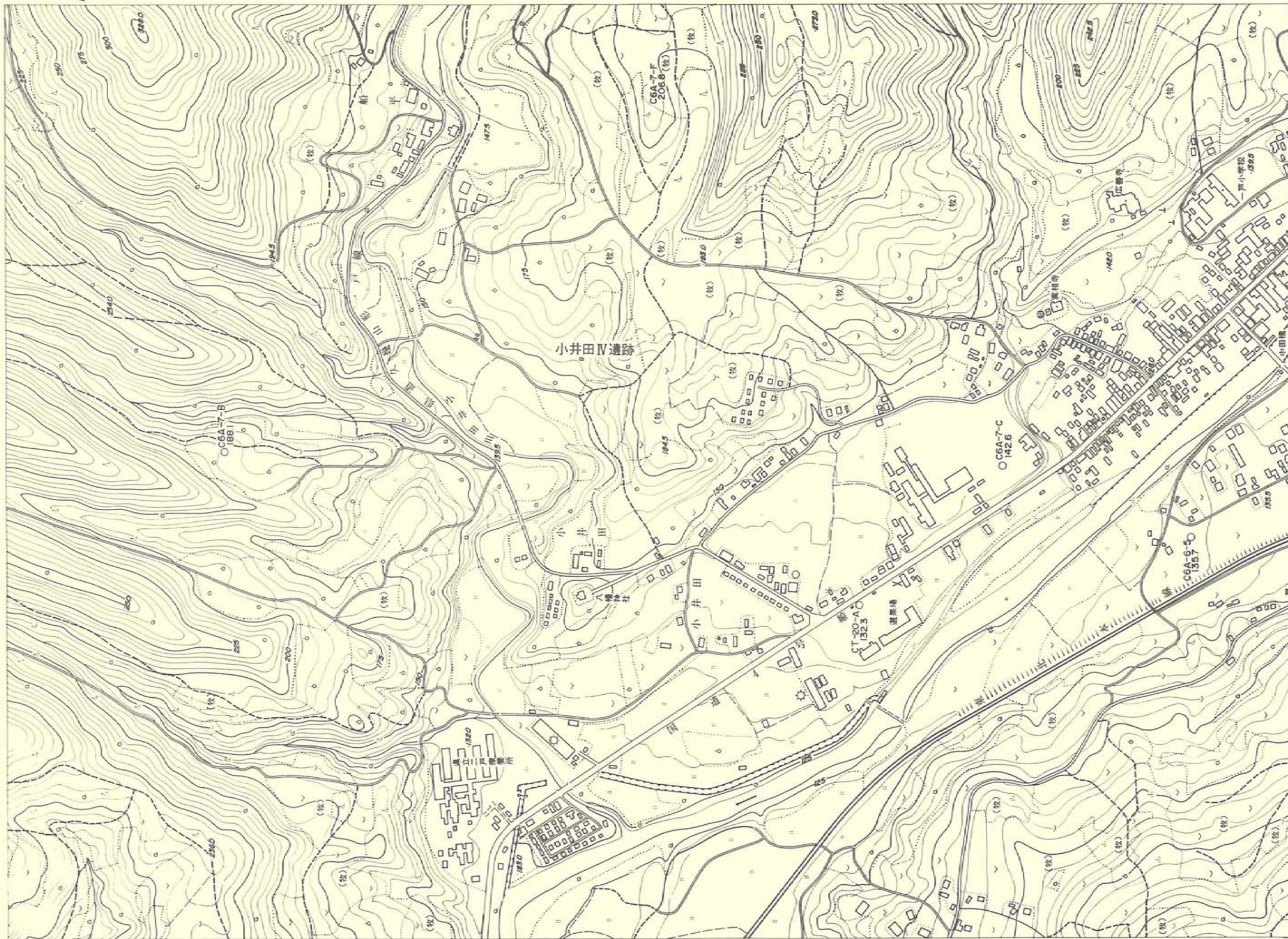
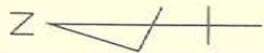
写真図版22	遺構外出土遺物 (10) ……	177	写真図版47	遺構外出土遺物 (35) ……	202
写真図版23	遺構外出土遺物 (11) ……	178	写真図版48	遺構外出土遺物 (36) ……	203
写真図版24	遺構外出土遺物 (12) ……	179	写真図版49	遺構外出土遺物 (37) ……	204
写真図版25	遺構外出土遺物 (13) ……	180	写真図版50	遺構外出土遺物 (38) ……	205
写真図版26	遺構外出土遺物 (14) ……	181	写真図版51	遺構外出土遺物 (39) ……	206
写真図版27	遺構外出土遺物 (15) ……	182	写真図版52	遺構外出土遺物 (40) ……	207
写真図版28	遺構外出土遺物 (16) ……	183	写真図版53	遺構外出土遺物 (41) ……	208
写真図版29	遺構外出土遺物 (17) ……	184	写真図版54	遺構外出土遺物 (42) ……	209
写真図版30	遺構外出土遺物 (18) ……	185	写真図版55	遺構外出土遺物 (43) ……	210
写真図版31	遺構外出土遺物 (19) ……	186	写真図版56	遺構外出土遺物 (44) ……	211
写真図版32	遺構外出土遺物 (20) ……	187	写真図版57	遺構外出土遺物 (45) ……	212
写真図版33	遺構外出土遺物 (21) ……	188	写真図版58	遺構外出土遺物 (46) ……	213
写真図版34	遺構外出土遺物 (22) ……	189	写真図版59	遺構外出土遺物 (47) ……	214
写真図版35	遺構外出土遺物 (23) ……	190	写真図版60	遺構外出土遺物 (48) ……	215
写真図版36	遺構外出土遺物 (24) ……	191	写真図版61	遺構外出土遺物 (49) ……	216
写真図版37	遺構外出土遺物 (25) ……	192	写真図版62	遺構外出土遺物 (50) ……	217
写真図版38	遺構外出土遺物 (26) ……	193	写真図版63	遺構外出土遺物 (51) ……	218
写真図版39	遺構外出土遺物 (27) ……	194	写真図版64	遺構外出土遺物 (52) ……	219
写真図版40	遺構外出土遺物 (28) ……	195	写真図版65	遺構外出土遺物 (53) ……	220
写真図版41	遺構外出土遺物 (29) ……	196	写真図版66	遺構外出土遺物 (54) ……	221
写真図版42	遺構外出土遺物 (30) ……	197	写真図版67	遺構外出土遺物 (55) ……	222
写真図版43	遺構外出土遺物 (31) ……	198	写真図版68	遺構外出土遺物 (56) ……	223
写真図版44	遺構外出土遺物 (32) ……	199	写真図版69	遺構外出土遺物 (57) ……	224
写真図版45	遺構外出土遺物 (33) ……	200	写真図版70	遺構外出土遺物 (58) ……	225
写真図版46	遺構外出土遺物 (34) ……	201	写真図版71	遺構外出土遺物 (59) ……	226



第1図 岩手県全図



第2図 一戸町小井田IV遺跡位置図



第3図 遺跡周辺区形図



I. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、東北縦貫自動車道青森線と二戸郡安代町で分岐し、一戸町を経由し青森県八戸市に至る68kmの高速道路である。このうち本県に関係する第7次施行命令区間は延長距離27.6kmであり、二戸郡一戸町で国道4号線と接続する一戸インターチェンジを起点とし折爪岳の山裾をトンネルで貫き、九戸村、軽米町を通過し、青森県南郷村へと続いている。

昭和48年10月に第7次施行命令が出され、それ以後、埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団仙台建設局と県教育委員会事務局文化課とによって協議が重ねられた。

文化課では、昭和50年、51年度にわたって道路公団の協力を得て実施計画路線沿い巾400mを対象に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行った。その結果にもとづき遺跡保存とルート設定についても協議があった。

昭和52年9月に路線発表となり、中心杭・巾杭設置作業が開始され、昭和54年9月から用地取得へと進展していった。

その間、発表された路線巾内における遺跡の確認調査も文化課によって行われた。しかし、山林地帯における分布調査や確認調査には限界があり、改めて立木等の伐採後に行うこととした。

昭和55年度から当埋文センターが第7次施行命令区間の発掘調査を文化課の指導と調整のもとに九戸村田代遺跡、軽米町吠屋敷I a遺跡、君成田IV遺跡について実施した。

昭和56年度は第7次施行命令区間全域に含まれる、一戸町、九戸村、軽米町所在の16遺跡の発掘調査を実施した。

本書にかかわる一戸町小井田IV遺跡の調査対象面積は7,240㎡であるが、用地問題の関係から56年度には5,340㎡、57年度には1,900㎡と地域を分割して調査を実施することにした。

Ⅱ．調査方法と室内整理の方法

(1) 調査の方法

調査区域における地区設定の原点は、日本道路公団測量の路線内中心杭（「測定記号・BランプS T A O + 0」 X座標値 25144,0163、Y座標値 39920,4892）とし、それと他の中心杭（「測定記号・EランプS T A O + 10」 X座標値 25138,5778、Y座標値 39912,0975）を見通す直線と、原点を通りこれに直交する直線を発掘調査のためのグリッド設定の基準線とした。

グリッド設定にあたっては、原点から東西及び南北の基準線を30m毎に区切り1ブロックとし、北から南へA・B・C……の記号を付し、西から東へI・II・III……の記号を付した。これを東西・南北に10等分し3m×3mのグリッドを設定し、北から南へa～j、西から東へ0～9の記号を付して、これとブロック記号の組合せで「A I a 1、B II a 2」等のように表した。

原則として3m×3mのグリッドで、調査地における遺構・遺物の分布状況を把握するために粗掘りを行い、遺構を確認した後に面的に拡大した。

遺構が検出された場合の精査にあたっては、2分法乃至4分法による平面発掘に留意したが湧水による泥土化等のため断面を確認できないものもあった。

遺物は、原則としてグリッド毎に取り上げ、遺跡記号、出土地点、出土層位を記録した。

写真記録は、35mm版モノクロ、カラー、6×7版モノクロを用いた。発掘した遺構の実測は原則として遣り方実測を用いた。原図の実測は1/20とした。

(2) 整理の方法

遺構実測図は、調査時に作成した図面を当センターの作業員がトレースした。

遺物は、現地で遺物の洗浄、ラベル記入を行い、センターにおいて遺物の仕分け、接合復元、実測、トレース、遺物の写真撮影を行った。作業は、調査員及び当センター作業員が行った。

Ⅲ．遺跡の立地と環境

本遺跡は、岩手県二戸郡一戸町檜山字平船向地内に所在する。東北本線一戸駅より北直線距離にして、およそ2 kmに位置する。

岩手県の中央部から東には北上山地が、西には奥羽山脈がそれぞれ南北に連っている。県の北部においては、この二つの山系の間を馬淵川が北流し、県南部においては北上川が南流している。

一戸町は、岩手県北部に位置し、町の中心部は馬淵川によって形成された谷底平野に沿ってひらけている。

馬淵川は、岩手郡葛巻町三菓子岳・国境峠の分水嶺より北流し、青森県南部の沖積平野を流れ青森県八戸市から太平洋に注いでいる。流路の延長は142.4 kmで、流域面積2,054.6 km²の岩手県第2の河川である。

一戸町の東部には、北上山地の最北端に位置する折爪岳（852 m）、小倉岳（652 m）、傾城峠（736 m）の山々が高原状をなしながら南北に連り、起伏に富んだ地形となっている。

遺跡は、小倉岳の西山腹に源を發し西流する馬淵川支流の小井田川南岸の段丘に位置する。

遺跡付近の地形は、調査区域の東背後に山地がせまり、この山麓から馬淵川までのおおよそ、400 mの間に東から西へ洪積世中位段丘、洪積世低位段丘、沖積世低地が並列している。

調査区域の北側においては、小井田川が洪積世中位段丘をきって、巾約50 mの沖積低地を形成し、西直線距離にしておよそ250 m下流で馬淵川と合流する。

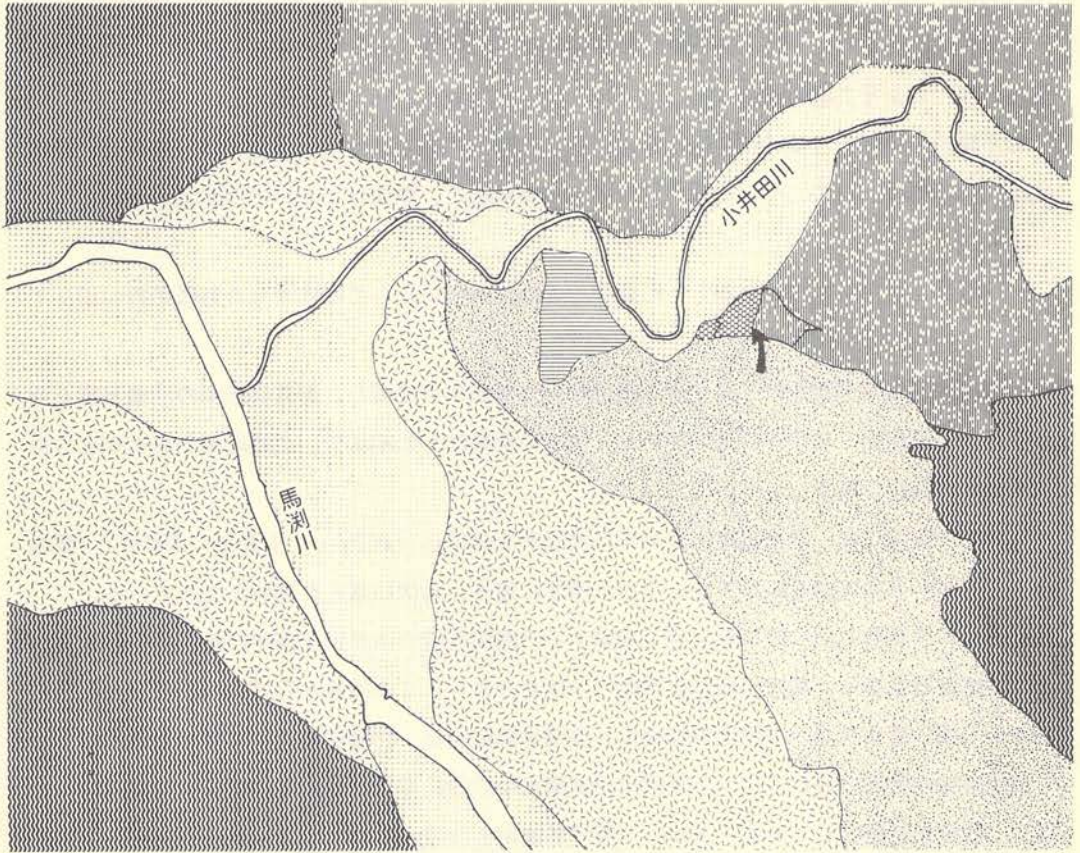
遺跡は、洪積世中位段丘の北東縁が開析されてできた谷に位置する。谷は埋積谷となっている。

調査区域は、小井田川によって形成された沖積低地の南端に接する埋積谷の谷口付近に形成された極小の扇状地とそれに続く埋積谷に載っている。

調査区域の現況は、埋積谷において南側約30 m、北側約10 mの谷壁が立ち上がり、谷底の埋積部分で巾約30 mの平坦北緩斜面を形成している。これに続く谷口の極小の扇状地は、北東に向って開け、約1.5 mの崖下から調査区域外の沖積低地へと続いている。

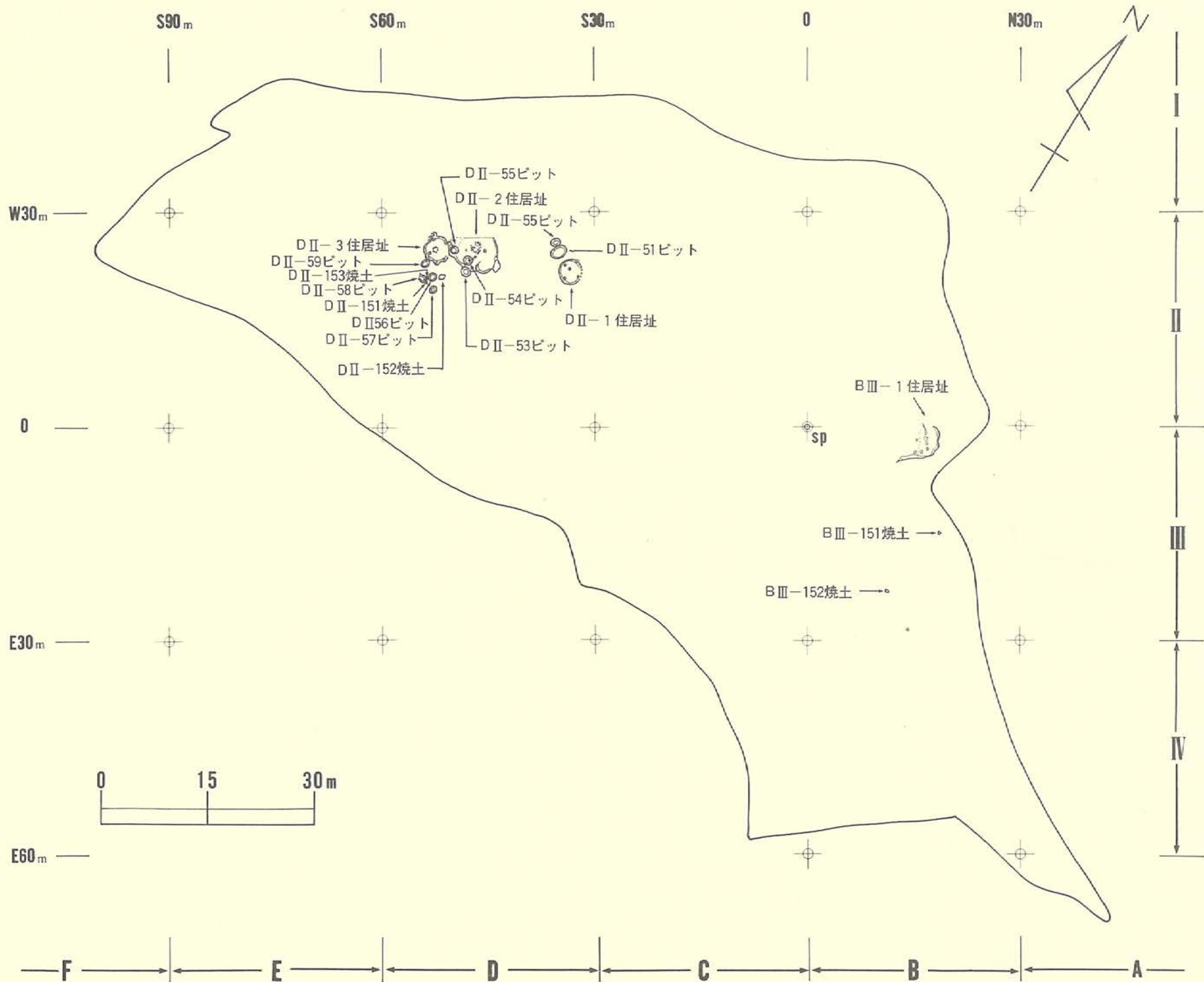
周辺遺跡としては、本遺跡の小井田川対岸の舌状台地に載る縄文時代早期を中心とした平船Ⅲ遺跡、洪積世低位段丘に載る縄文時代～歴史時代の遺跡である北館A・B・C・E遺跡、上野D遺跡、小井田遺跡、馬淵川によって形成された沖積低地に載る縄文時代晩期遺跡の蒔前台遺跡などがある。

小井田IV遺跡周辺の地形の地形区分図

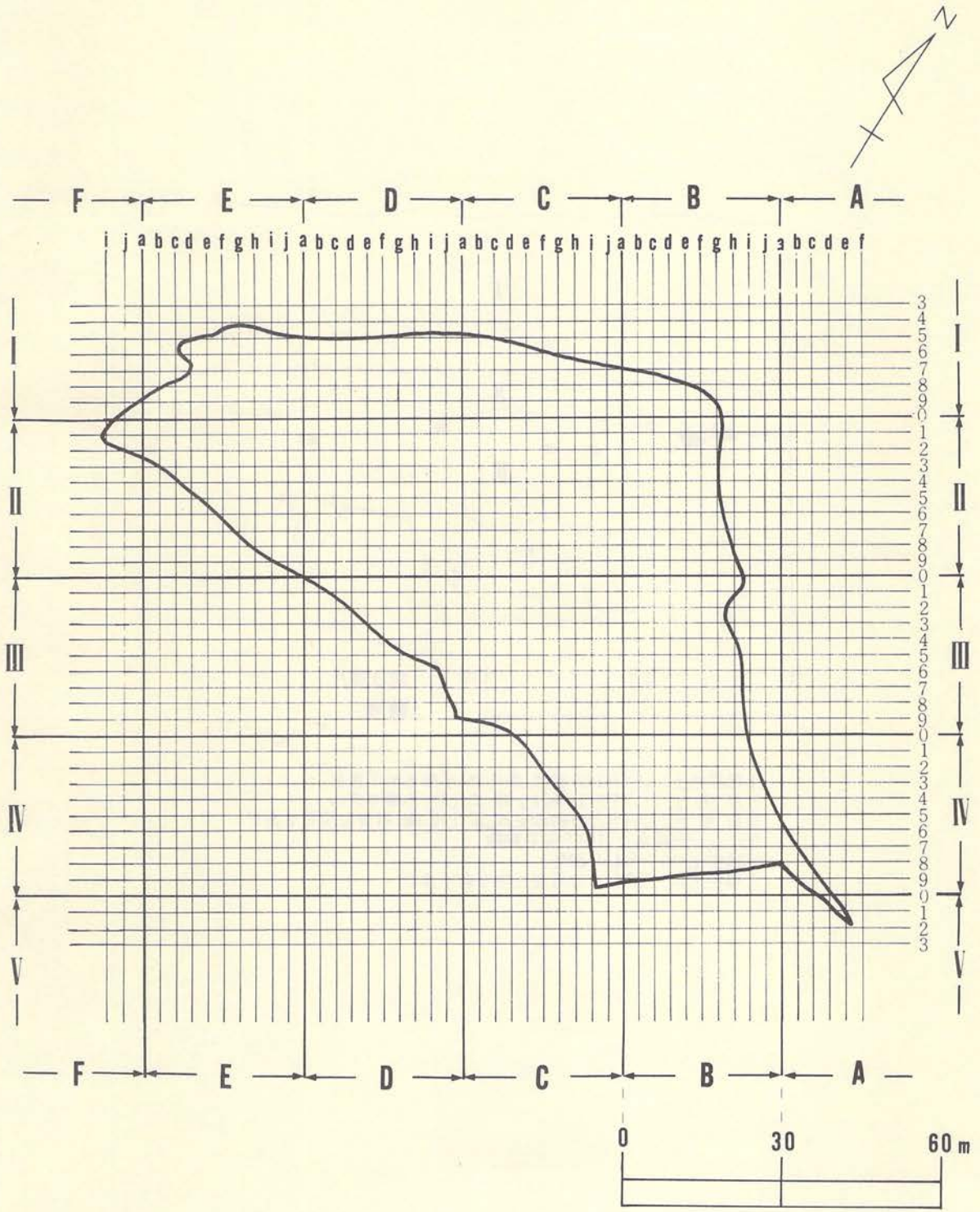


段丘区分は松山力 (一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書工1980) による。

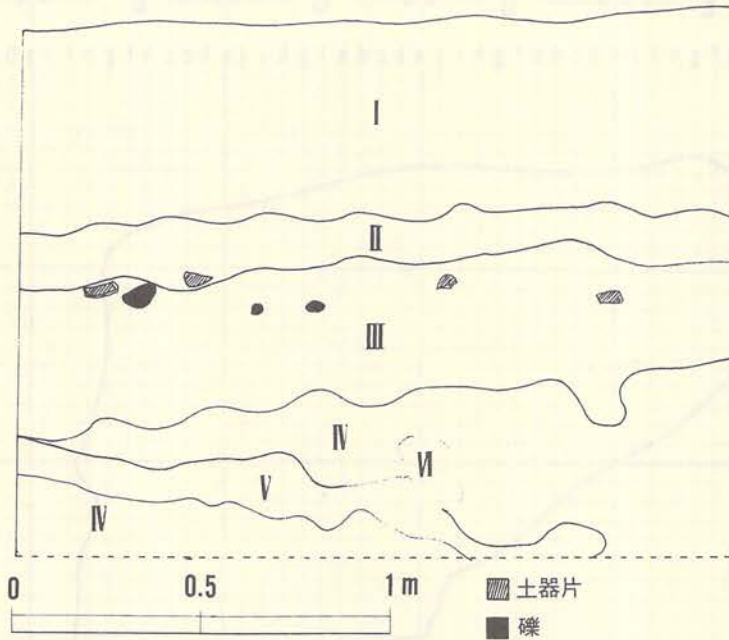
第4図 遺跡周辺地形図



第5図 小井田IV遺跡構配置図



第 6 図 小井田Ⅳ遺跡グリッド配置図



- I 黒褐色土 (7.5YR3/2) 微砂、炭化物、小礫を若干含む
- II 黒色土 (7.5YR2/1) 微砂土器、炭化物、小礫を含む
- III 黒褐色 (7.5YR2/2) 微砂土器、炭化物、礫、砂質凝灰石を含む
- IV にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 細砂
- V 褐色土 (10 YR4/4) 細砂
- IV 褐色土 (7.5YR4/3) 細砂炭化物を若干含む

第7図 小井田IV遺跡埋積谷基本層序
(D II e₃区南壁)

Ⅳ．検出遺構

1．竪穴住居址

BⅢ-1住居址（図版第8図、写真図版2）

本住居址は、調査区域東側の段丘緩斜面に位置する。検出面は、表土下に位置する弱粘性の10YR2/3黒褐色を呈するII層上面である。埋土は10YR2/2黒褐色土の単層である。

平面形及び規模については、住居址の西側約 $\frac{1}{2}$ が削剝を受けており不明である。壁の残存部分の最大巾は4.6mである。

住居址の壁は、東側が半円形にのびている。南側は、南西方向へほぼ直線的にのび他の壁様の立ち上がりと連続している。壁様の立ち上がりについては、削剝がはげしく性格は不明である。

壁の高さは、東壁で現高44cmを計測し、北及び南西方向につれて低くなっている。

床面は、東から西へ微傾斜している。東壁から西方約1.5mの床面に地床炉が存在する。焼土は、東西の最大巾で約60cm、南北の最大巾で約70cmの不整形なひろがりを示している。色調は赤褐色を呈し、炭化物粒を含み北半分においてはその量を増している。焼土のほぼ中央位置に灰が認められる。

柱穴は、5ヶ検出した。

P₁は、東壁から西へ1.3m、南壁から北へ1.9mの床面に位置する。平面形は円形である。規模は、直径約27cm、深さ約30cmである。

P₂は、南東壁から北西へ約70cmの床面に位置する。平面形は円形である。規模は、直径約35cm、深さ約25cmである。底部には、最大長25cm、最大巾10cmの垂円礫が1ヶ落ち込んでいる。

P₃は、南壁から北へ約50cmの床面に位置する。平面形は円形である。規模は、直径約35cm、深さ約30cmである。

P₄は、南々西壁約10cmの削剝を受けている床面に位置する。平面形は円形である。規模は、直径約50cm、深さ約20cmである。

P₅は、地床炉から西へ約1mの削剝を受けた部分に位置する。平面形は円形である。規模は、直径約30cm、深さ約15cmである。

住居址の東壁際の床面から、長さ35cm、巾約5cmを最大とする炭化木材を十数点検出した。

出土遺物（1～6）

埋土中から土器片が多数出土した。大半が地文のみ施文された粗製深鉢の破片である。1と

4・5は粗製深鉢の上半部および口縁部片で、単節斜縄文(LR)のみが施文された土器片である。2は底部を欠失した小型粗製深鉢の半完形品で、羽状縄文(LR+RL)のみが施文されている。3は無文のミニチュア鉢である。6は地文以外の文様(沈線による磨消縄文)が施された唯一の土器片である。しかし細片のため器種および全体の文様構成は不明である。これら土器片の時期は、器厚、焼成、および地文等からすべて後期に属するものと思われるが、詳細については不明である。わずかに6が後期中葉のものではないかと思われるだけである。

DⅡ-1 住居址 (図版第8図、写真図版2)

本住居址は、調査区域北西の埋積谷の谷口に位置する。検出面は、現地表面下およそ1.2mの2.5Y3/2黒褐色砂質土の堆積層の上面である。住居址の堆積土は、7.5YR2/1黒色土の単層である。

平面形は、円形である。規模は、直径約3.5mである。

壁の高さは、現高で東壁18cm、西壁11cm、南壁18cm、北壁2cmで均一でない。壁は緩く傾斜して立ち上がる。

床面は、ほぼ平坦である。床面の北側から西側にかけて中央付近までの1.6㎡が貼床となっている。床面は、2.5Y3/2黒褐色の軟弱な砂質土であるのに対して、貼床は、10YR6/4の褐色土でややかたくしまっている。

柱穴は、床面から4ヶ、床から壁にかけて1ヶの計5ヶを検出した。

P₁は、東壁際床面に位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径約30cm、深さ約30cmである。

P₂は、南壁際に位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径約25cm、深さ約10cmである。

P₃は、西壁際に位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径28cm、深さ約10cmである。

P₄は、住居址の中央よりやや北に位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径約25cm、深さ約30cmである。

P₅は、住居址の北壁にかかって位置する。平面形は、楕円形である。規模は、長軸約30cm、短軸23cm、深さ30cmを計測する。長軸の方向は南東—北西である。

本住居址においては、炉や周溝等は認められなかった。

出土遺物 (7~12)

床面直上から土器片(7~11)と石器1点(12)が出土した。7は浅鉢の下半部で、その胴下半部に平行沈線による磨消帯縄文が施文されている。8は口縁がや、外反気味を呈する深鉢

の口縁部片である。文様は沈線による磨消縄文と棒状工具による刺突文が施されている。地文はLRの単節斜縄文である。9と10は同一個体片で壺型土器の胴部片と思われるものである。文様は2～4条の沈線によって幾何学的区画文が施文されており、地文は無文である。11は大きく外反する粗製深鉢の口縁部片で、LRの単節斜縄文のみが施文されている。これら土器片の時期は、8～10が十腰内I式、7と11が十腰内III式に併行するものと思われる。12は破損した乳棒状磨製石斧を磨石として再利用したもので、側面に相当に使用された磨面が存在する。石質は硬砂岩である。

D II - 2 住居址 (図版第9図、写真図版3)

本住居址は、調査区域北西の埋積谷の谷口に位置する。検出面は、現地表面下およそ1.2mの2.5Y3/2黒褐色砂質土の堆積層上面である。検出面の上位に存在する7.5YR2/1黒色土の堆積土から土器を検出中に数個の礫が寄り集まって露出した。礫は、精査の結果石囲炉の構成礫であり、住居址の存在を確認した。

住居址の検出にあたっては、多数の小さい湧水がみられ排水作業をしながらの検出で、埋土は泥土化したため、層位については不明である。また、住居址の検出面も湧水によって削剝を受け、形状及び規模も不明である。

壁は、北東から南東にかけては検出できたが、他はつかめなかった。壁の現高は、南東位置で26cm、北東位置で13cmを計測し、北東にかけて低くなっている。

床面は、緩い起伏を呈している。

石囲炉は、東壁から西へ約3mの位置に設けられているが、住居址全体における位置については、削剝が激しく全体形状をつかめないため不明である。

石囲炉は、構成礫の内側のものを床面に礫の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ を埋め込んでいる。これらの礫を、垂円礫及び円礫でおさえ込むような形でとり囲んでいる。礫は、北側に多く配されている。構成礫は48ヶあり、最大のもは35cm×30cm、最小のもは6cm×7cmである。

柱穴は、床面から6ヶ検出した。

P₁は、東側の床面から壁にかかって位置する。平面形は楕円形である。規模は、長軸25cm、短軸20cm、深さ30cmを計測する。長軸の向く方向は、南東—北西である。柱穴は、南東の方向へ傾斜して掘り込まれている。

P₂は、石囲炉の中心部から東におよそ1.3mの床面に位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径約30cm、深さ47.5cmである。

P₃は、石囲炉の中心部から南におよそ1.1mの床面に位置する。平面形は、楕円形である。規模は、長軸28cm、短軸24cm、深さ13.5cmである。底部は丸底である。

P₄は、P₃の南側約20cmに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長軸約30cm、短軸約25cm、深さ25.5cmである。

P₅は、石囲炉の中心部から南西約1.3mの床面に位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径17cm、深さ17cmである。

P₆は、石囲炉の中心部から西北西約2mに位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径約27cm、深さ約12cmである。底部は丸底である。

重複する遺構は、床面に掘り込まれているD II—54ピットと床面から遺構外にかけて掘り込まれているD II—55ピットの2基である。二つのピット共に、住居址の検出同様、湧水によって堆積土は泥土化し、住居址とピットの前後関係は不明である。

本住居址の南に隣接して、D II—53ピットを検出したが、住居址の壁が削剝を受けており、重複関係については不明である。

出土遺物 (13~22)

床面から半完形の土器2個体(13・14)が出土した。13は大型粗製深鉢の上半部片である。口縁部は直立気味を呈し、その口唇部に小突起が施されている。文様は単節斜縄文(LR)のみである。なお内外面に煤の付着が著しい。14は注口土器と思われるものの下半部である。無文で外面のミガキが綿密に施されている。埋土中からは深鉢と浅鉢(鉢)の土器片と思われる口縁部片(15~17、20)、胴部片(18、19、21)および底部片(22)が出土した。15は直立気味を呈した深鉢の口縁部片で、口唇部に2個1対の突起が施されている。文様は沈線による区画状の磨消縄文が施文されている。地文は単節の羽状縄文である。なお18は15と同一個体片である。16と17はそれぞれ鉢型土器と浅鉢の口縁部片と思われるもので、16は平縁で直立気味を呈する。文様は15とほぼ同じような磨消縄文が施されている。地文は16がLR+RLの羽状縄文、17が縦と横回転の単節斜縄文(LR)が施文されている。19は16と同一器形の胴部片と思われる。20は地文LR+RLの羽状縄文のみが施された粗製深鉢の口縁部片である。21は粗製深鉢の口縁部片で、口縁部から胴上部にかけて三叉文と平行沈線文が施文されている。22は無文の小型深鉢の底部片である。これら土器片の時期は、13~20・22が縄文後期中葉から後葉にかけてのもので、所謂十腰内IIIからIV式に併行するものと思われる。21は縄文晩期の大洞B式に併行する土器片である。なお23の凹石は本住居址の石囲炉を構成していた円礫である。側面に磨面も確認できることから、凹石および磨石として使用されたものをさらにこの炉の構築の際に再利用したものと思われる。石質は輝石安山岩である。

D II—3 住居址 (図版第9図、写真図版3)

本住居址は、D II—2住居址の面に隣接して位置する。検出面は、現地表面下およそ1.2m

の2.5Y3/2黒褐色砂質土の堆積層上面である。住居址の堆積土は、レンズ状に垂れ下がり、自然堆積状況を示す。

平面形は、円形であり、規模は、直径3.3mである。

壁は、傾斜して立ち上がる。トレンチ掘の際に、東壁の一部を削平したが、他の壁の現高は34cm～19cmであり均一でない。

床面は平坦で、中央からやや南側に石囲炉が設置されている。炉の平面形は円形であるが、東側で約25cm開口する。炉の構成礫は14ヶで、円礫及び垂円礫が用いられている。最大のものは35cm×15cm、最小のものは5cm×7cmである。炉石は、床面下9cm～12cmの深さに埋設されている。

炉床は、10YR4/2灰黄褐色土の色調を呈している。炉石の埋込み部分と床面との間に2cm～5cmの弱粘性の10YR2/2黒褐色土が存在し、炭化物及び砂を含んでいるが、この部分以外からは炭化物は検出できなかった。炉石は、焼成を受けていない。

柱穴は、床面に3ヶ存在する。

P₁は、南西の壁から約50cm内に入る床面に位置する。平面形は、円形である。規模は、直径20cm、深さ20cmである。

P₂は、北西の壁際に位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、直径20cm、深さ20cmである。

P₃は、北東の壁際に位置する。平面形は、楕円形である。規模は、長軸20cm、短軸15cm、深さ20cmである。

周溝や他の遺構との重複関係は認められない。

出土遺物 (24～50)

床面から完形土器(半完形土器も含む)3個体(24～26)と土器片(34・35)および石器3点(51～53)が出土した。24は注口部だけを欠失したほぼ完形の注口土器である。文様は頸部に1条、胴上部と胴中部に各1条の平行沈線文による磨消帯縄文が施され胴上部文様帯を構成している。その胴上部の文様は、弧状の沈線によって入組状磨消縄文が施文されている。さらに上記の平行磨消帯縄文同様文様帯の要所に小円錐状の瘤状突起が貼付されている。25は口縁部を欠失した無文の注口土器である。外面はミガキが綿密で底部が上底風を呈する。26は粗製深鉢と思われるものの下半部である。底部は上底風を呈し、胴最下部にミガキが施され、その上部に地文(RLの単節斜縄文)のみが施文されている。34と35は粗製深鉢の口縁部片である。34にはLRの単節斜縄文、35には羽状縄文(LR+RL)のみが施文されている。51～53は円礫を使用した磨石である。側面の一部に磨面が残されている。石質は51と53が輝石安山岩、52が硬砂岩である。埋土中からは完形土器(半完形土器も含む)7個体(27～33)と土器片(34

～48) および石器2点(49・50)が出土した。27は底部を欠失した浅鉢である。文様は24同様の数条の直線的沈線文と弧状文によって入組状磨消縄文が施され、その文様帯の要所要所に円錐状の瘤状突起が貼付されている。28は胴上半部のみが残る深鉢である。口縁部は平縁でやや外傾気味を呈する。文様は口唇部直下に一条の磨消帯縄文が施され、その上に円錐状の瘤状の小突起が貼付されている。さらに胴上部には、上記と同じ2条の貼瘤を有する磨消帯縄文によって区画された文様帯が構成されている。その内部の文様は格子目状の沈線によって磨消縄文が施文されている。29は24同様の注口土器の胴上部以上の破片であろう。ミガキが施された後に沈線が施文されその沈線間に24と同じ貼瘤が施されている。30～32は粗製深鉢の体部破片である。33は、体部下半から底部にかけての破片である。30は平口縁で口縁部が外反し、肩部にや、張り出しがみられる土器である。文様は口縁部が無文で胴部にRLの単節斜縄文のみが施文されている。31は胴部片で羽状縄文(LR+RL)で、32は単節斜縄文(RL)のみが施文されている。33は胴下部以下が残る深鉢の破片で底部が上底風を呈する。文様は羽状縄文(LR+RL)のみが施文されており、内面に黒色処理が施されている。34は、地文にLRの単節斜縄文が施され、35は羽状縄文が施されている。36～39は深鉢の口縁部片で沈線文と磨消縄文が施されており、地文はLRの単節斜縄文である。40と41は同一個体片で、浅鉢と思われるものの口縁部片と胴部片である。細片のため全体の文様構成は不明であるが沈線文と隆起線による区画状の文様が施文されている。地文はLRの単節斜縄文である。42は外傾し山形突起を呈する深鉢の口縁部片である。文様は粘土紐の貼付による隆起線上に縄文(LRの単節斜縄文)を回転させ、さらにその両側に沈線文を施しその内側を磨消している。43～45は細片のため器形不明の口縁部片(43)と胴部片(44・45)である。文様は沈線による磨消縄文が施されている。45のみには、さらに刺突文がみられる。地文は43がRLとLRの充頃縄文、44が羽状縄文(LR+RL)、45が横と斜め回転の単節縄文(LR)がそれぞれ施文されている。46は28と同一個体片と思われる。47と48は沈線による磨消縄文と瘤状突起が貼付された器形不明の口縁部片(48)と胴部片(47)である。48の貼瘤は、本遺構内から出土した貼瘤が施された土器片のそれと異なって瘤の中央部に縦の刻みが施された瘤状突起である。これら土器および土器片の時期は36～42が後期前葉の十腰内I式、43～45が後期中葉の十腰内III式、24～30が後期末葉の十腰内IV～V式に併行するものと思われる。なお49はスクレーパーの破片であり、50は円礫を用いた磨石である。石質は49が珪質細粒凝灰岩、50が輝石安山岩である。51は円礫を用いた磨石である。楕円体の長軸のほぼ中央線から半割されている。円礫の周囲に打痕を有している。52は、平偏楕円体の磨石である。両面が摺られ、礫の周囲に打痕を有している。53は、凹石である。表裏に各1箇所凹みを有し、礫の周囲が両面から磨かれやや稜をなしている。

D II—51ピット (図版第8図、写真図版4)

本ピットは、D II—1住居址の北西約60cmの位置から検出した。検出面は、D II—1住居址と同じである。ピットの埋土は、7.5YR2/1黒色土の単層である。

平面形は楕円形で、短軸の断面形は浅い逆台形状である。規模は、開口部で長軸2.2m、短軸1.5mである。

壁は、傾斜して立ち上がる。現高は、23cm～11cmを計測し均一でない。

底部は、平坦である。小穴及び他の遺構との重複関係は認められない。

出土遺物 (54～58)

埋土中から深鉢と思われるものの口縁部片 (54) と胴部片 (55～58) が出土した。54は平縁で外反する口縁部片で、頸部に3条の平行沈線文が施文されているのみである。55は沈線による磨消帯縄文のみが施文された細片である。地文は単節斜縄文 (RL) である。56は地文 (LRの無節縄文) が施された後に沈線文が施された胴部片で、一部に磨消がみられる。57と58は網目状燃糸文のみが施文された粗製深鉢の胴部片と思われる。これら土器片の時期は、54～56は縄文後期の十腰内I式に併行するものと思われる。なお57と58は、54等と同時期のものと思われるが、しかしその詳細については不明である。

D II—52ピット (図版第8図、写真図版4)

本ピットは、D II—51ピットの北西約20cmに位置する。検出面は、D II—1住居址と同じである。ピットの埋土は、7.5YR2/1黒色土の単層である。

平面形は、楕円形である。規模は、開口部で長軸100cm、短軸85cmである。

壁は、傾斜して立ち上がり、現高23cm～20cmを計測し、ほぼ等高である。底部は、ほぼ平坦である。他の遺構との重複関係は認められない。

出土遺物 (59～61)

埋土中から深鉢の胴部片 (59～61) と思われる土器片が出土した。59と60は地文 (ともにLRの単節斜縄文であるが59が縦回転、60が横回転である) を施した後に沈線文が施された土器片である。61は網目状燃糸文のみが施されている。摩耗が著しい土器片である。これら土器片のうち、59と60は十腰内I式に併行するものと思われる。なお61は59らと同時期の土器片であろう。

D II—53ピット (図版第9図、写真図版5)

本ピットは、D II—2住居址の南壁に隣接している。D II—2住居址の検出作業中に、確認した。検出面は、D II—2住居址と同じ面である。

平面形は、ほぼ円形である。断面形は、逆台形状を示す。規模は、開口部で直径約1.2mを計測する。

壁は、傾斜して立ち上がり、現高30cm～15cmを計測し均一でない。底部は、平坦であるが北へ微傾斜している。

ピットの埋土は、湧水のため泥土化しており層位は確認できなかった。

重複関係については、DⅡ-2住居址と隣接しているものの、住居址の壁が削剝を受けており不明である。

出土遺物 (62～69)

埋土中から地文のみが施された土器片 (62～65) と、地文以外の文様が施された土器片 (66～68)、および底部片 (69) が出土した。62～65は粗製深鉢の口縁部片で、62以外すべて平縁である。62は小波状口縁を呈するのが他と異なる点である。文様は地文のみであり、62～64がLRの単節斜縄文、65がRLの単節斜縄文ですべて横回転によって施文されている。66～68は鉢型土器の口縁部片と思われる土器片であるが、細片のため詳細な器形については不明である。66・67は平縁で直立気味を呈し、その口縁部に羽状縄文 (単節LR+RL) が施され、さらに平行沈線による磨消縄文が施文されている。68は内湾するもので、ともに口唇部に刻み目が施されている。また口縁部と頸部には、平行沈線が施され、その沈線間に刻み目文が施文されている。なお胴部には地文 (ともにLRの単節斜縄文) が施文されている。69は深鉢の底部片である。胴部下半に地文を施文した後に磨消が施されている。内面はミガキが施されている。なお内外面ともに煤の付着が著しい。これらの土器片の時期については、62～65・69が縄文後期に属するものと思われる。なお66は後期の十腰内Ⅱ式土器、67と68は晩期の大洞CⅠ式に併行する土器片と思われる。

DⅡ-54ピット (図版第9図、写真図版5)

本ピットは、DⅡ-2住居址の北壁際の床面に位置する。DⅡ-2住居址を精査した際に床面に黒褐色の円形の広がりが見られ、認められたことにより確認した。

平面形は、円形である。断面形は、逆台形状を示す。規模は、開口部で直径約1.2mである。

壁は、傾斜して立ち上がり、現高は東壁で25cm、西壁で15cmを計測し均一でない。底部は、ほぼ平坦である。

ピット底部に、一辺が約30cmの三角形の礫が存在している。ピットの埋土は、DⅡ-2住居址と同様に湧水のため泥土化しており層位は確認できない。住居址との前後関係も不明である。

出土遺物 (70～76)

埋土中から土器片が多数出土した。70は器種不明の口縁部の細片である。口唇部に山形突起

を有し、その内面に縦方向に2条の沈線文が施されている。外面は地文（RLの単節斜縄文）が施された後に沈線文が施文されている。71と72は深鉢の胴部片である。文様は、71が燃糸文が施された後に、沈線文と隆起線文が施文され、その文様の基部にボタン状貼付文が施文されている。72は平行および曲線の沈線による磨消縄文が施され、さらに平行沈線間に刻目列文が施文されている。73～76は粗製深鉢の口縁部片（73・74）と胴部片（75・76）である。それぞれの地文は、73が無節縄文（RL）、74と75が羽状縄文（LR+RL）、75が燃糸文が施文されている。これらの土器片の時期は、70～72が縄文後期の十腰内V式に併行するものと思われる。なお73～76は後期に属する土器片と思われるが、詳細な時期については不明である。

D II—55ピット（図版第9図、写真図版5）

本ピットは、D II—2住居址の床面から遺構外にかけて位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部で、直径約50cmを計測する。

壁は、傾斜して立ち上がり、現高25cm～20cmを計測する。底部は、ほぼ平坦である。D II—2住居址との重複関係が認められるが、ピット及び住居址の埋土が湧水のため泥土しており前後関係は不明である。

出土遺物（77～80）

埋土中から深鉢か鉢型土器の胴部片（77～80）と思われる土器片が出土した。それぞれの土器片の文様は次の通りである。77は磨消帯縄文が施され、その文様の基部に瘤状の小突起が貼付された後がみられる。地文はLRの単節縄文である。78と79は沈線による磨消縄文が施文されている。地文は78がLRの単節縄文、79がLR+RLの羽状縄文である。80はミガキを施した後に縦位に数条の平行沈線が施文されている。これらの土器片の時期は、77が十腰内IV式に併行するものと思われる。なお78～80は細片のため詳細は不明である。

D II—56ピット（図版第10図、写真図版5）

本ピットは、D II—3住居址の南東約1.3mに位置する。検出面は、D II—3住居址と同じ、2.5Y3/2黒褐色砂質土の上面である。平面形状は、円形である。規模は、開口部で直径約1mである。壁は、傾斜して立ち上がり、南側の約きがオーバーハングしている。壁の現高は、27cm～9cmと均一でない。

底部は、ほぼ平坦である。底部のほぼ中央部付近に3ヶの礫が存在する。礫は、不整形な角礫で、最大のものは、15cm×8cm、最小のものは15cm×8cmである。

ピットの埋土は、黒褐色の単層である。

出土遺物 (81~83)

埋土中から土器片 (81~83) が出土した。81は壺型土器の胴上部片と思われるもので、文様は羽状縄文 (L R + R L の単節斜縄文) を充填した後に沈線による磨消縄文が施されている。82と83は粗製深鉢の胴部片と思われるものである。その地文は82が羽状縄文 (L R + R L の単節縄文)、83が網目状撚糸文である。これら土器片の時期は、81が十腰内Ⅲ式に併行するものと思われる。なお82と83も同時期のものであろう。

D II—57ピット (図版第10図、写真図版5)

本ピットは、D II—56ピットの南西約1 m に位置する。検出面は、D II—56ピットと同じである。

平面形は、円形である。規模は、開口部で直径約80cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、現高約30cmである。底部は、ほぼ平坦である。ピットの堆積土は、黒褐色の単層である。

D II—58ピット (図版第10図)

本ピットは、D II—56ピットの南西側約50cmに位置する。西側壁は、攪乱と削剝を受けており検出できなかった。

平面形は、東西に長軸をもつ不整形を呈している。規模は、開口部で80 cm × 140 cm である。壁の高さは、北壁で約10cm、南壁で約12cmである。壁は、外傾ぎみに立ち上がる。

D II—59ピット (図版第9図、写真図版5)

本ピットは、D II—3住居址の南約20cmに位置する。検出面は、D II—3住居址と同じである。

平面形は、不整形楕円形である。規模は、ピットの中心付近を通る長軸で1.2m、短軸で0.8 m である。

壁は、ピットの東半分がほぼ垂直に立ち上がり、残りは傾斜して立ち上がる。壁の現高は、11cm~4 cm と均一でない。

ピットの北西壁際と西壁際に各1ヶの小穴が存在する。平面形は、2ヶ共に楕円形である。規模は、北西の小穴は長軸10cm、短軸7 cm、深さ6 cm、西に位置するものは、長軸18cm、短軸12cm、深さ32cmである。

B III—151焼土遺構 (図版第10図、写真図版6)

本遺構は、埋積谷の東側谷壁付近に位置する。検出面は、耕作土の下に位置する7.5YR 2/1

黒色土（Ⅱ層）上面である。

焼土は、現地性のもので、赤褐色土と黒褐色土が混在し、径約50cmの範囲に不整形に広がっている。焼土の断面形は、レンズ状を呈し、最大厚10cmを計測する。焼土の北端に30cm×10cmの礫が載っている。礫には、焼成痕は認められない。

BⅢ-152焼土遺構（図版第10図）

本遺構は、BⅢ-151焼土遺構の北約 1m に位置する。検出面は、BⅢ-151焼土遺構と同じ面である。

焼土は、現地性のもので、径約50cmの範囲に不整形に広がっている。焼土の最大厚は3cmである。

DⅡ-151焼土遺構（図版第10図）

本遺構は、DⅡ-58ピットの東に隣接している。検出面は、黒褐色砂質土の上に載る10YR 2/3黒褐色土である。

焼土は、現地性のもので、最長40cm、最大巾20cmの不整形を呈し、それを挟み込む形で2ヶの礫が存在する。礫は、黒褐色土に6～7cm埋め込まれている。焼土を形成している黒色土から、炭化物粒及び土器を検出した。礫の埋め込みや、焼成を受けていることから石囲炉の構成礫とも考えられるが断定できず、焼土遺構に分類した。

出土遺物（84・85）

焼土の直上から、粗製深鉢の破片と思われる口縁部片（84）と胴部片（85）が出土した。84は内湾気味を呈する口縁部片で、口唇部がやや肥厚する。文様は、地文（RLの単節斜縄文）のみが施文されている。85は地文（LRの単節斜縄文）のみが施文された胴部片である。これらの土器片は、縄文時代後期に属するものと思われるが、その詳細な時期については不明である。

DⅡ-152焼土遺構（図版第10図）

本遺構は、DⅡ-56ピットの東約3mに位置する。検出面は、56ピットと同じ2.5Y3/2黒褐色砂質土の上面である。

焼土は、小ブロックで分散し、それを囲む形でおおよそ1mの範囲に灰が広がっている。灰の広がっている部分から土器片と小礫を検出した。焼土は、現地性のものである。

D II—153焼土遺構（図版第10図）

本遺構は、D II—58ピットの東に隣接している。検出面は、D II—58ピットと同じ2.5Y3/2黒褐色砂質土の上面である。

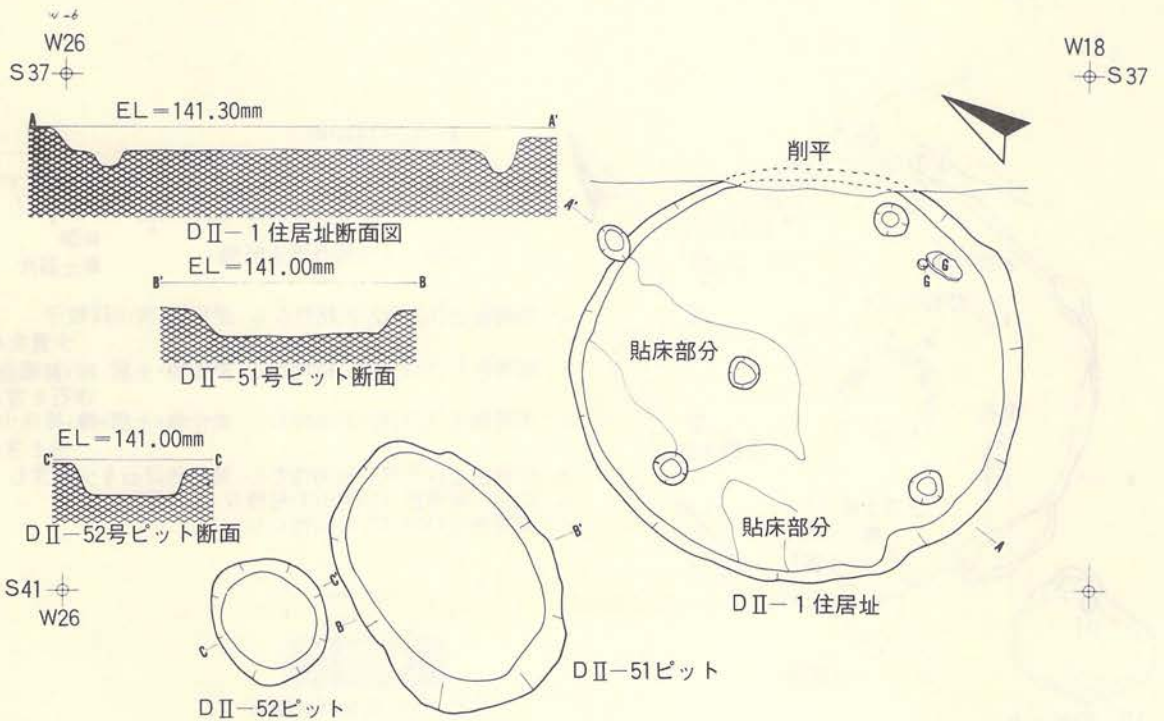
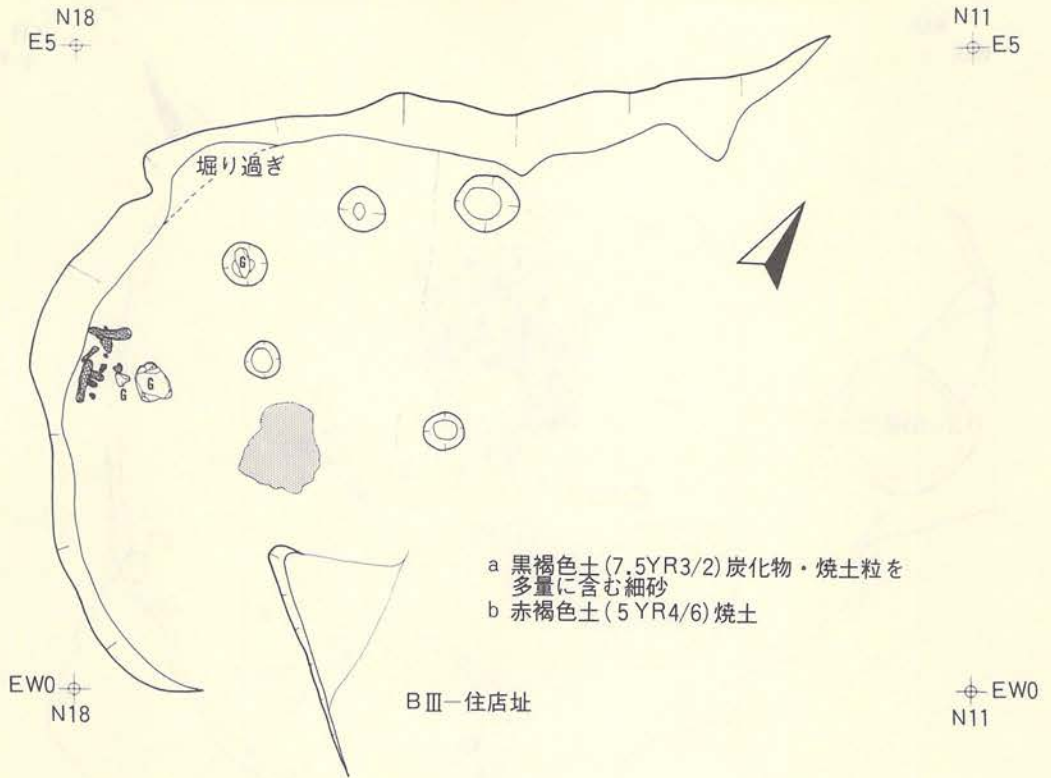
焼土は、現地性のもので、90cm×50cmの範囲に不整形に広がっている。焼土が形成されている周辺には、9ヶの礫が散在している。礫は、黒色土及び黒褐色土に埋め込まれている。焼土の厚さは、約2cmを計測し、その周辺及び下方から炭化物粒を検出した。

排水施設状遺構（暗渠）（写真図版7）

本遺構は、調査区域北西の埋積谷に位置する。検出面は、基本層序II層に相当する黒色土(7.5YR2/1)上面で、III層相当の暗褐色土からIV層のにぶい黄褐色土(10YR5/4)にかけて掘り込まれている。掘り込まれた溝の内部には、巨礫～砂が混合して埋め込まれている。

平面形状は帯状で、谷頭から谷口にかけてほぼ直線的にのびている。断面形状は、U字状を呈している。規模は、全長約37m、検出面での開口巾の最大150cm、最小95cm、開口部から底面までの深さ50cm～110cmである。

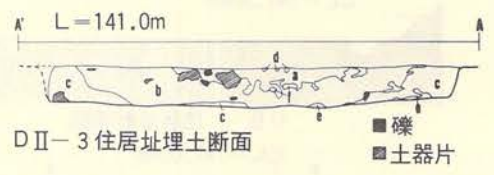
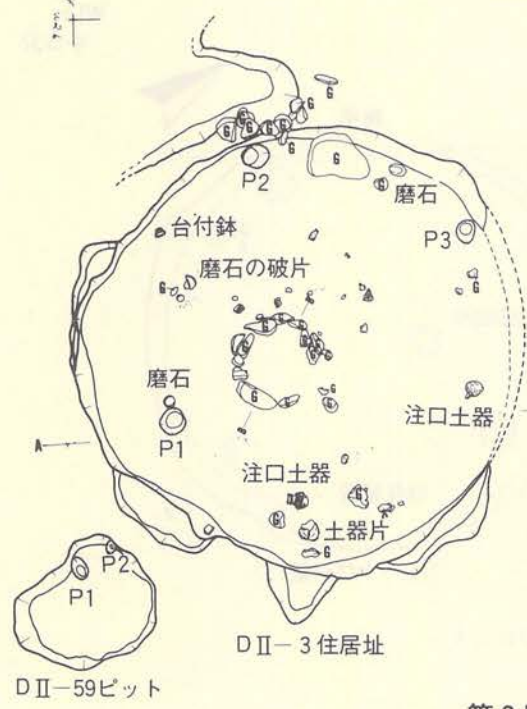
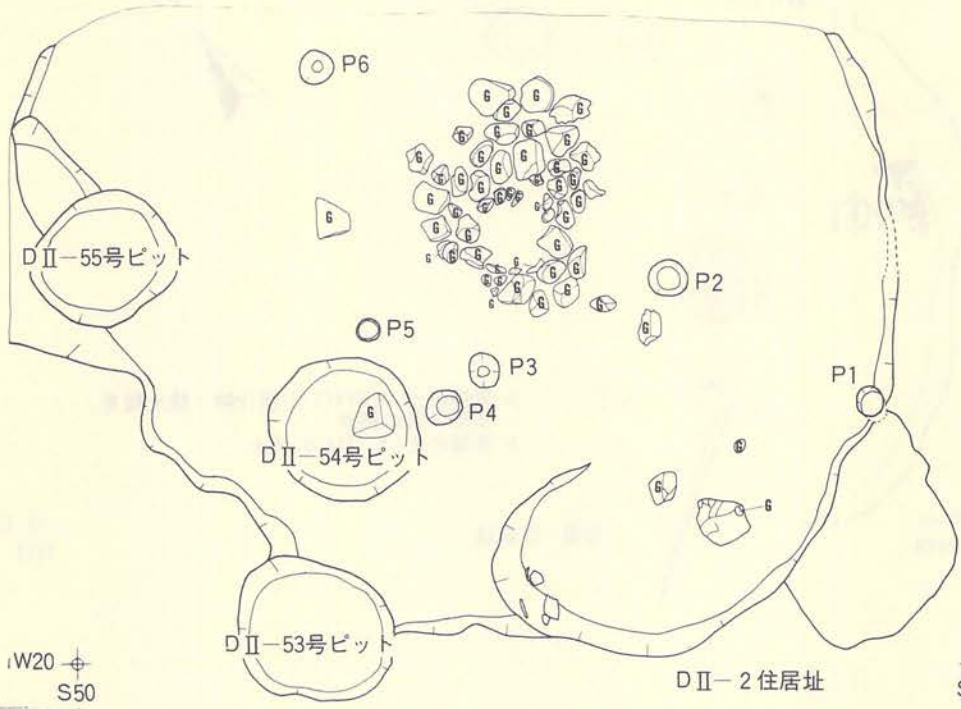
構築された年代については不明であるが、この遺構に隣接して、現在も使用されている木材を埋め込んだ暗渠も検出されており、本遺構も比較的新しい時期に構築されたものと考えられる。



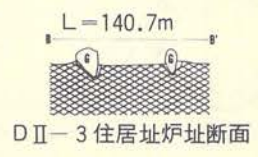
第8図 検出遺構

S50
W26

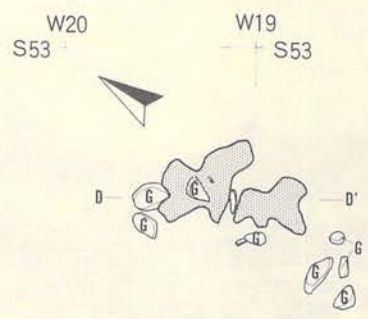
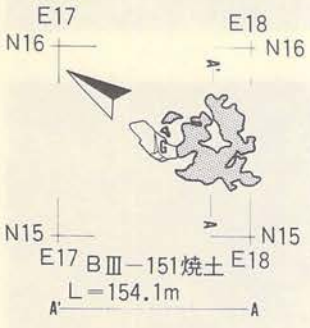
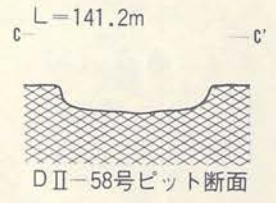
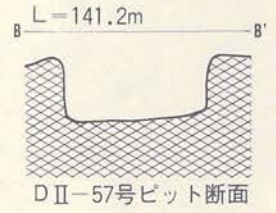
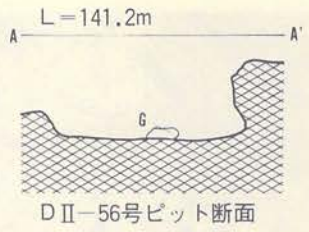
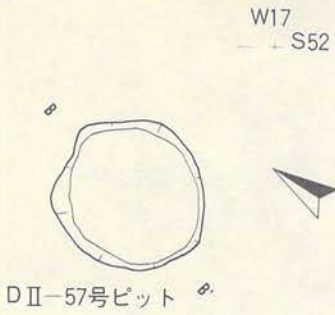
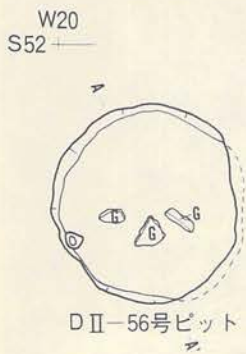
S43
W26



- a. 黒褐色土(10YR2/2)粘性なし、炭化物・火山灰粒子
少量含む
- b. 黒褐色土(10YR2/3)粘性なし、炭化物・土器・礫・黄褐色
浮石を含む
- c. 黒褐色土(10YR2/2)粘性なし、炭化物・土器・礫・褐色火山
灰を含む
- d. 暗褐色土(10YR3/3)粘性なし、黄褐色浮石を少量含む
- e. にぶい黄褐色(10YR3/4)粘性なし、含有物なし
- f. 黒褐色土(10YR2/3)粘性なし



第9図 遺構実測図



第10図



遺跡周辺全景航空写真(東方上空より)



写真図版 1

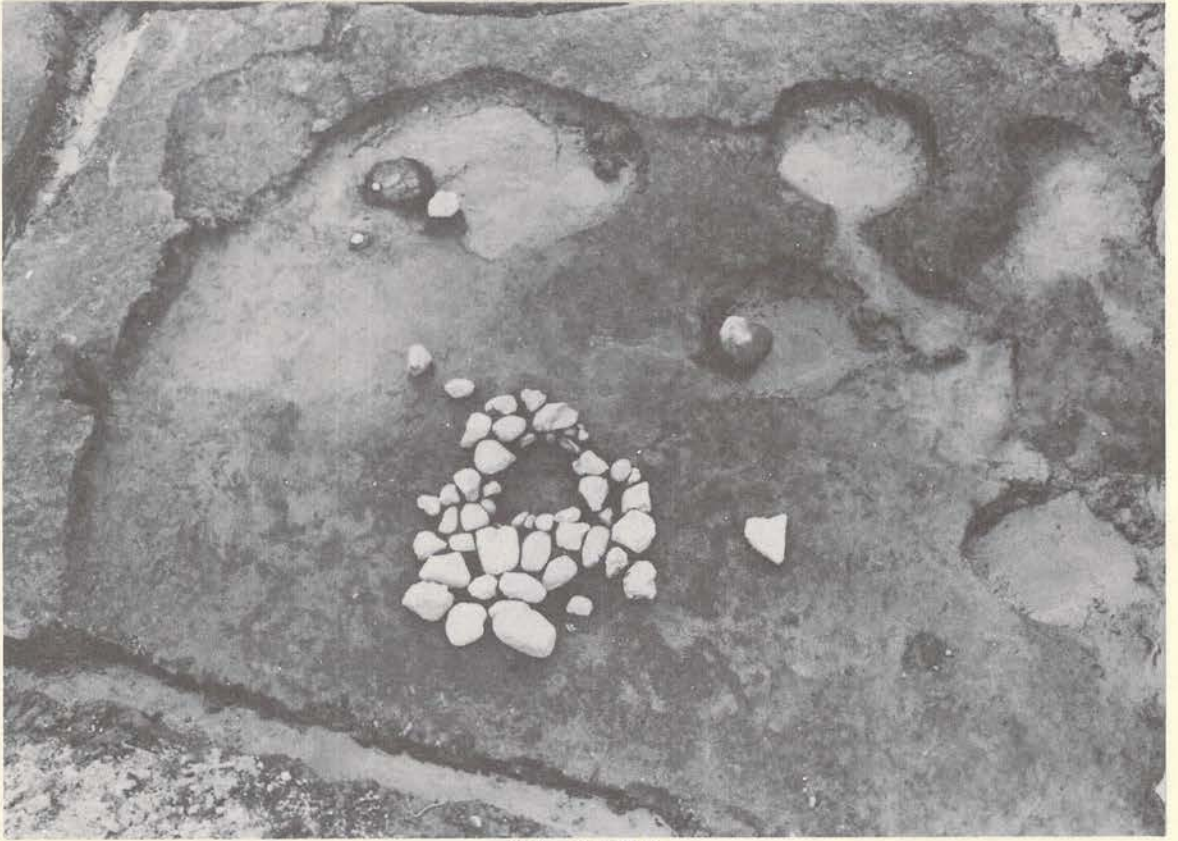
遺跡全景



B III-1 住居址



D II-1 住居址
写真図版 2



D II-2 住居址



D II-3 住居址

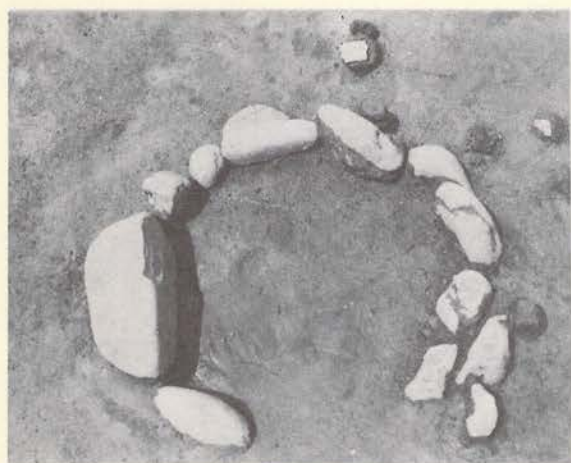
写真図版 3



D II-2 住居址炉



D II-2 住居址炉断面



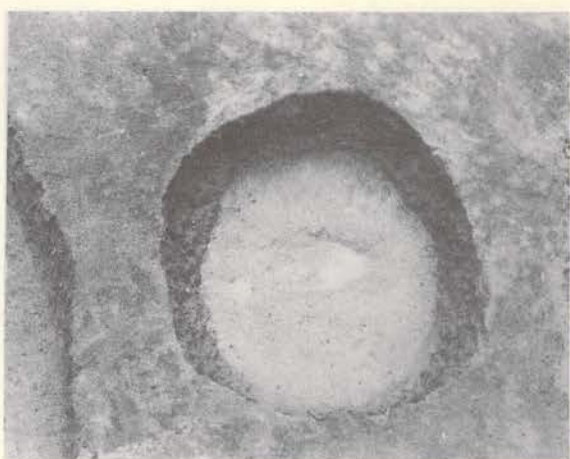
D II-3 住居址炉



D II-3 住居址炉断面



D II-51ピット



D II-52ピット

写真図版 4



D II-53ピット



D II-54ピット



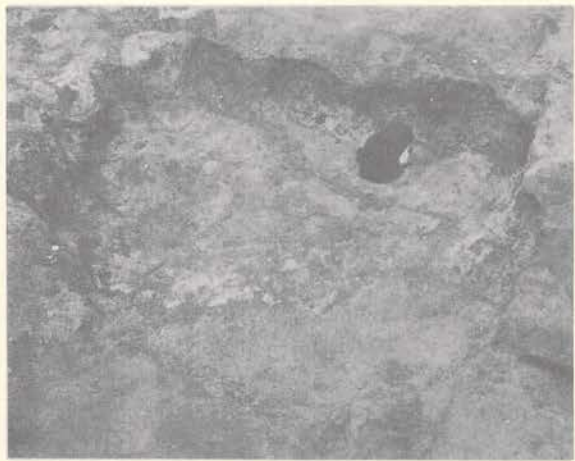
D II-55ピット



D II-56ピット



D II-57ピット

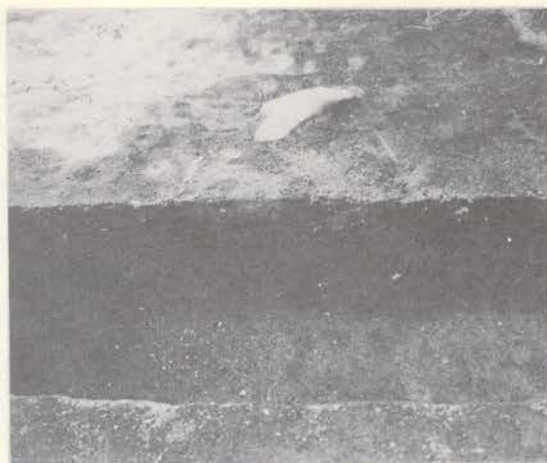


D II-59ピット

写真図版 5



B III-151 烧土



B III 151 烧土断面



B III-152 烧土



D II 151 烧土



D II-153 烧土

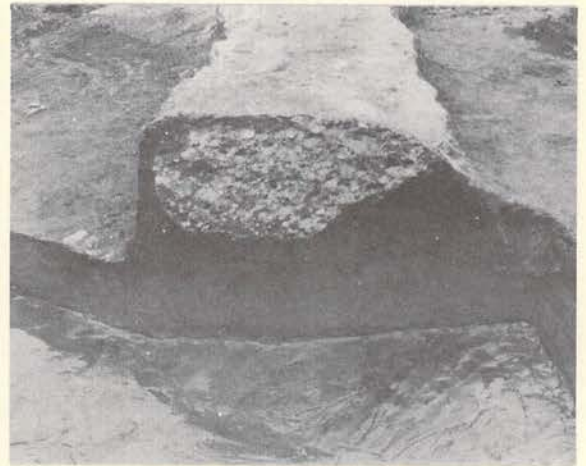


D II 153 烧土断面

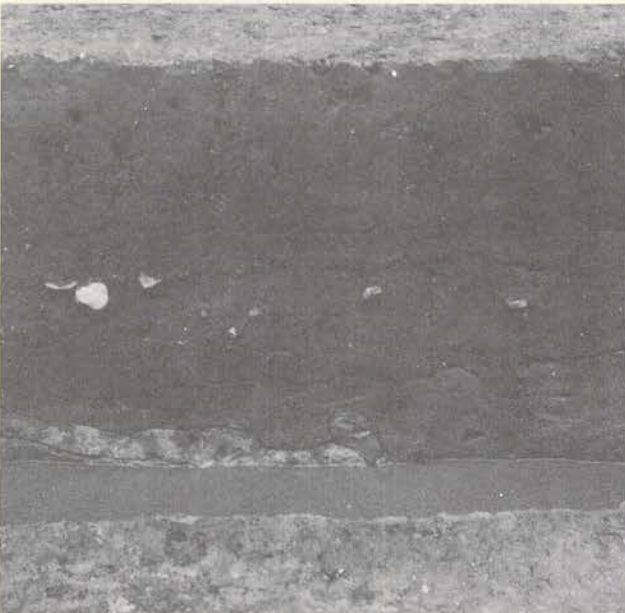
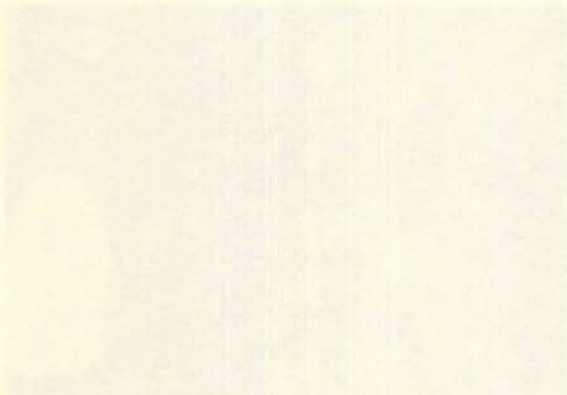
写真图版 6



排水施設状遺構(暗渠)



排水施設状遺構(暗渠)断面



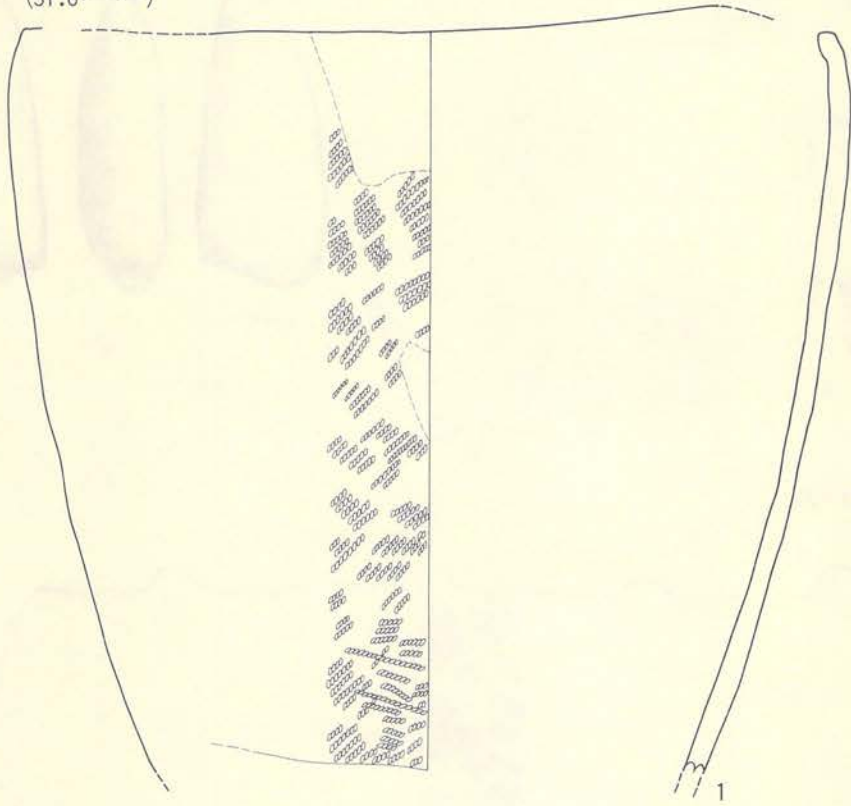
D II区e軸トレンチ南壁断面

- I 黒褐色(7.5YR3/2)微砂、炭化物、小礫を若干含む
- II 黒色土(7.5YR2/1)微砂、土器、炭化物、小礫を含む
- III 黒褐色土(7.5YR2/2)微砂、土器、炭化物、礫、砂器、凝灰岩を含む
- IV にぶい黄褐色土(10YR2/4)細砂
- V 褐色土(10YR4/4)細砂
- VI 褐色土(7.5YR4/3)細砂炭化物を若干含む

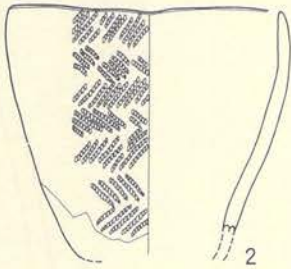
写真図版 7

B II-住居址(1~6)

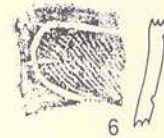
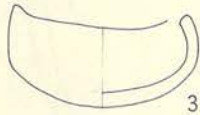
(31.6····)



10.6····



4.7···2.1



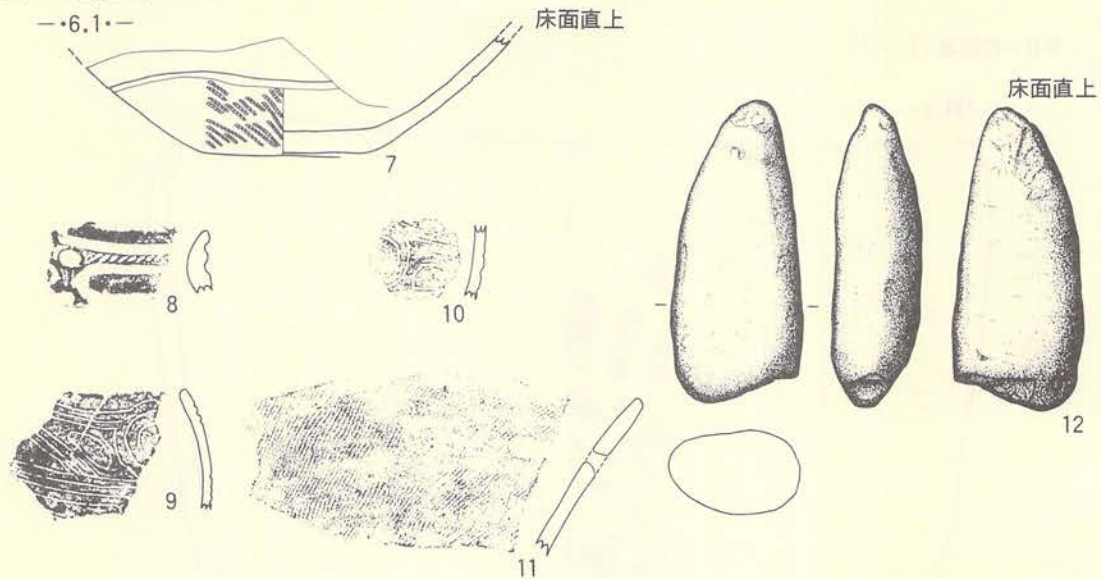
$$3 \quad S = \frac{1}{2}$$

$$1 \cdot 2 \cdot 4 \sim 6 \quad S = \frac{1}{3}$$

第11図 遺構内出土遺物(1)

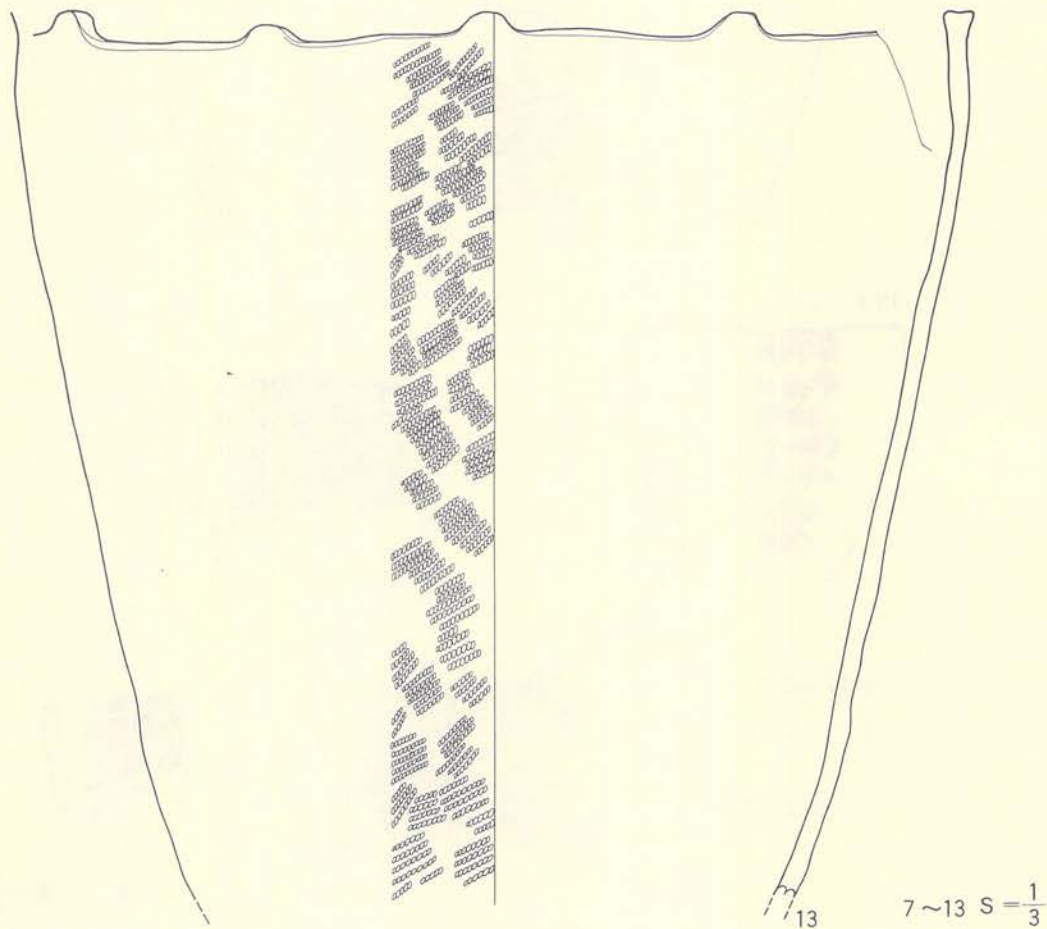
D II- 1 住居址 (7 ~ 12)

—6.1—



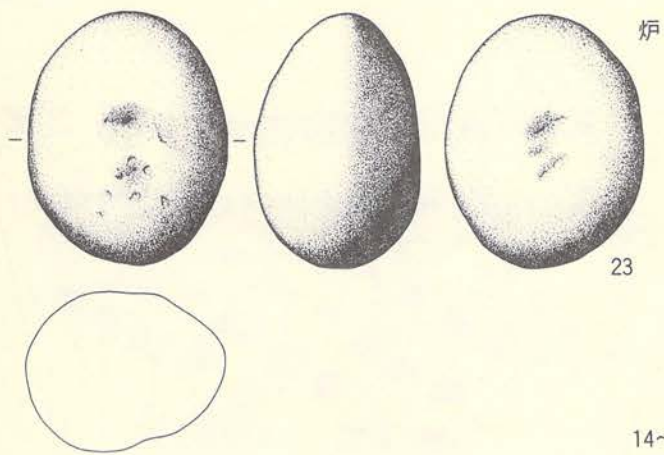
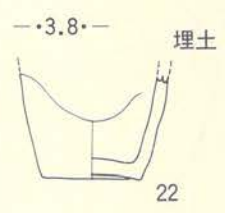
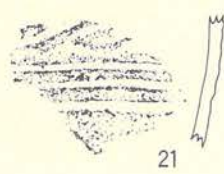
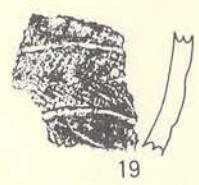
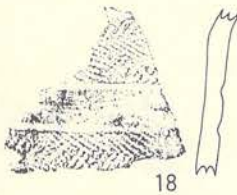
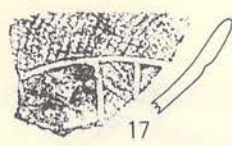
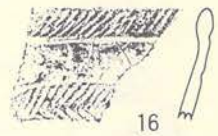
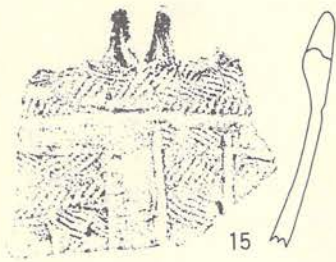
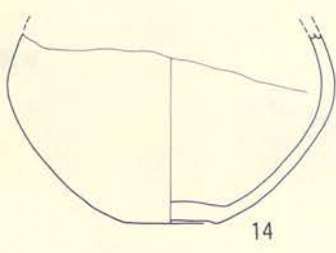
D II- 2 住居址 (13 ~ 23)

(37.8) ····



第12図 遺構内出土遺物(2)

—3.6—

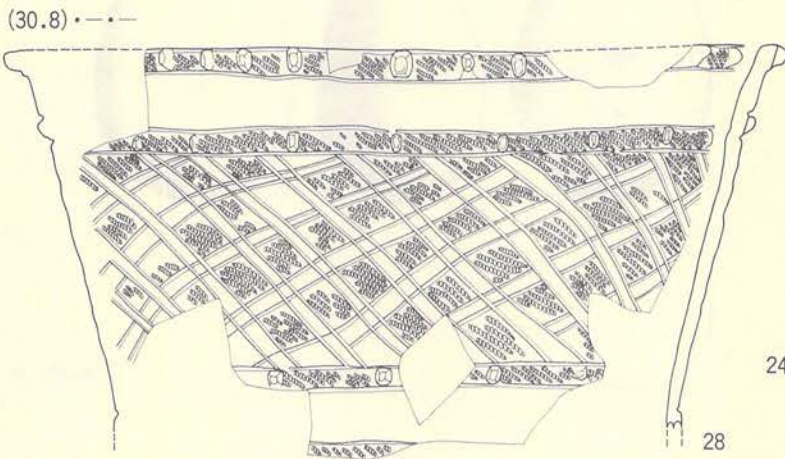
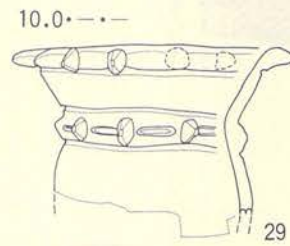
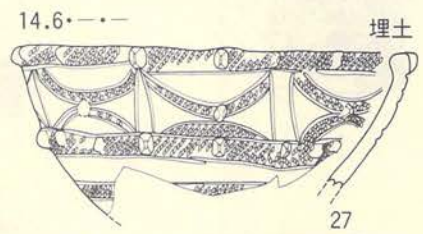
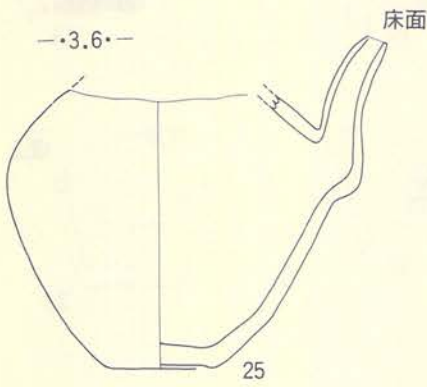
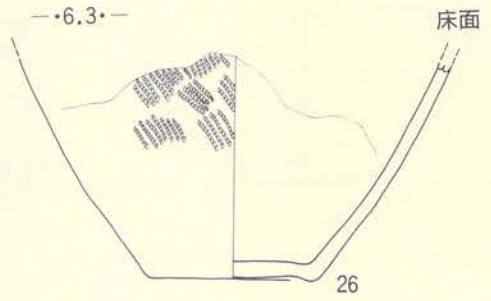
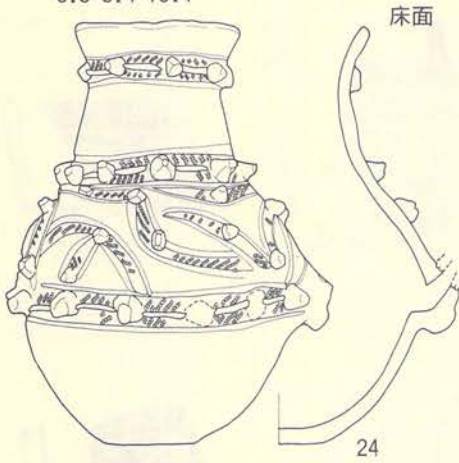


14~23 S = $\frac{1}{3}$

第13図 遺構出土遺物(3)

D II-3 住居址 (24~53)

6.5・3.4・16.4

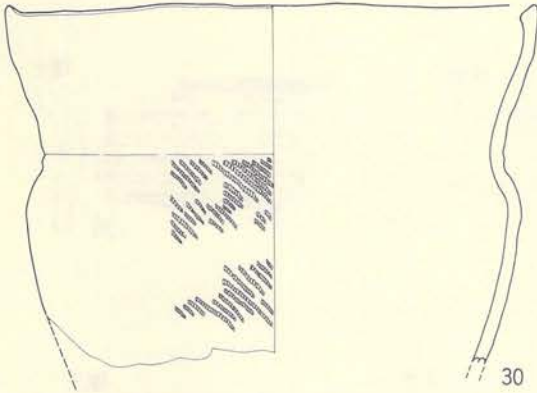


24~28 S = $\frac{1}{3}$

第14図 遺構出土遺物(4)

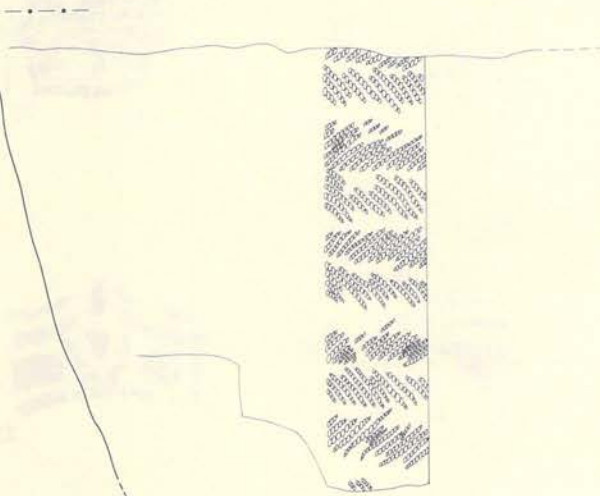
20.7. ---

埋土

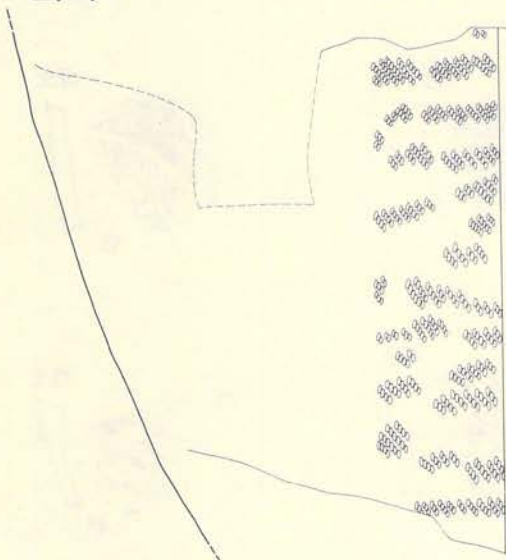


-7.0-

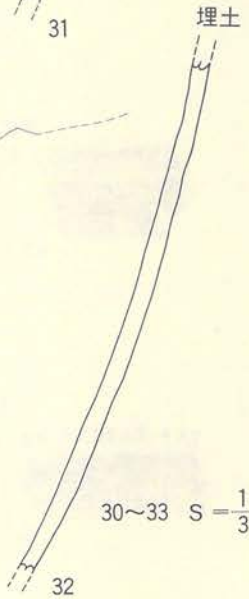
埋土



埋土

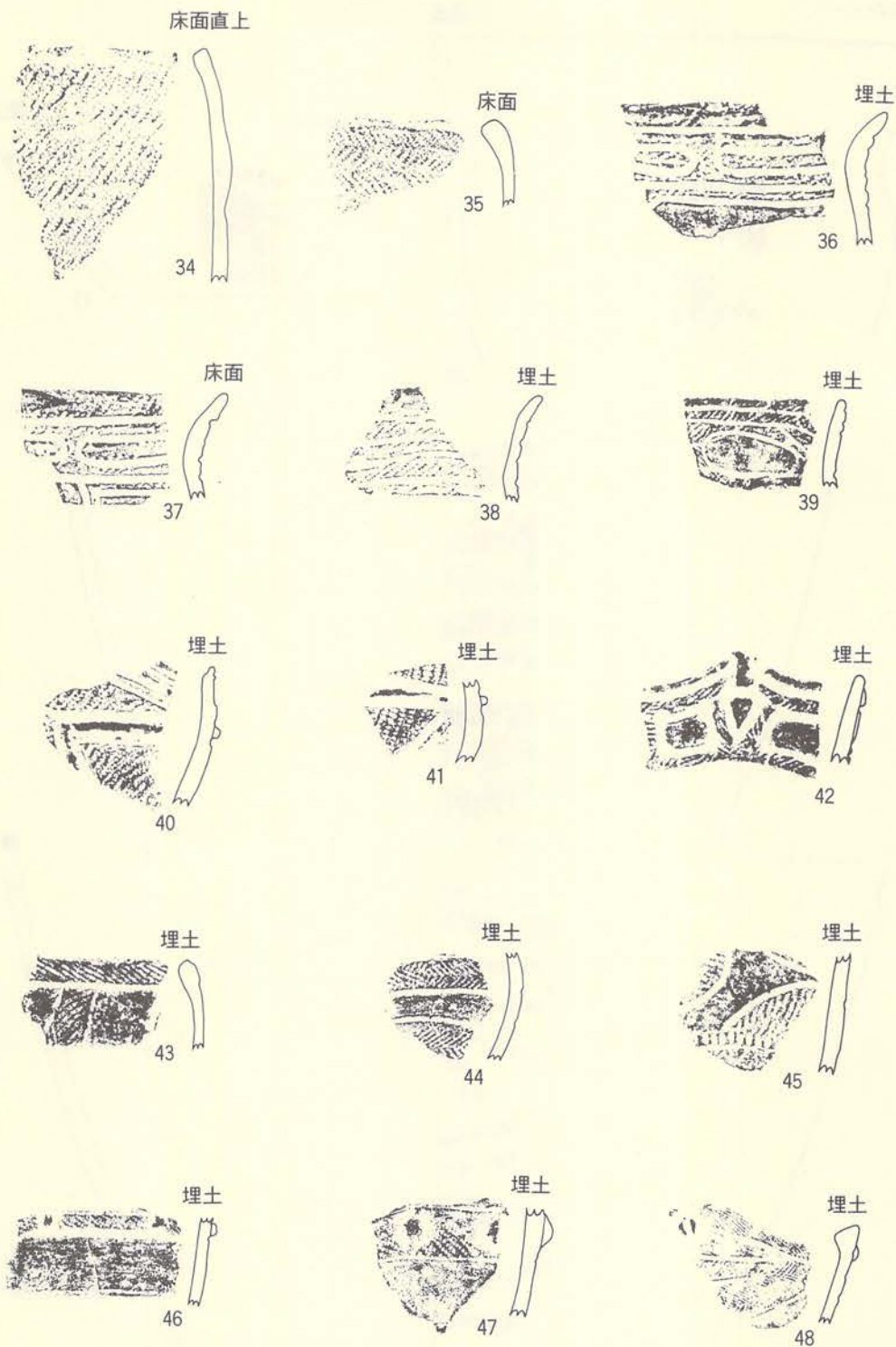


埋土



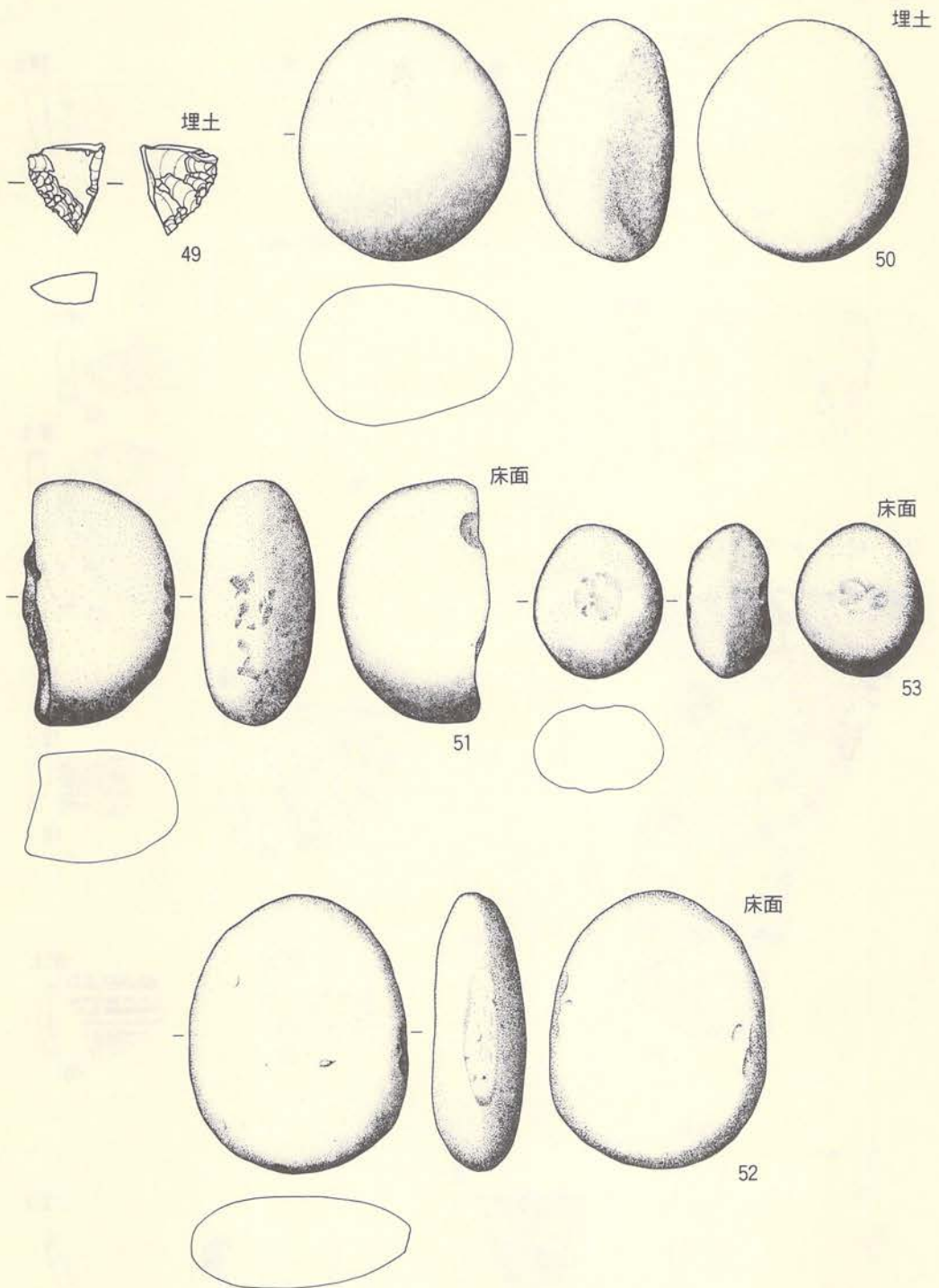
30~33 S = 1/3

第15図 遺構内出土遺物(5)



34~48 S = $\frac{1}{3}$

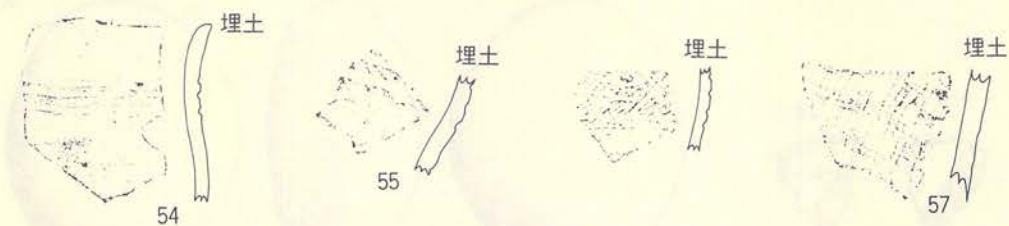
第16図 遺物内出土遺物(6)



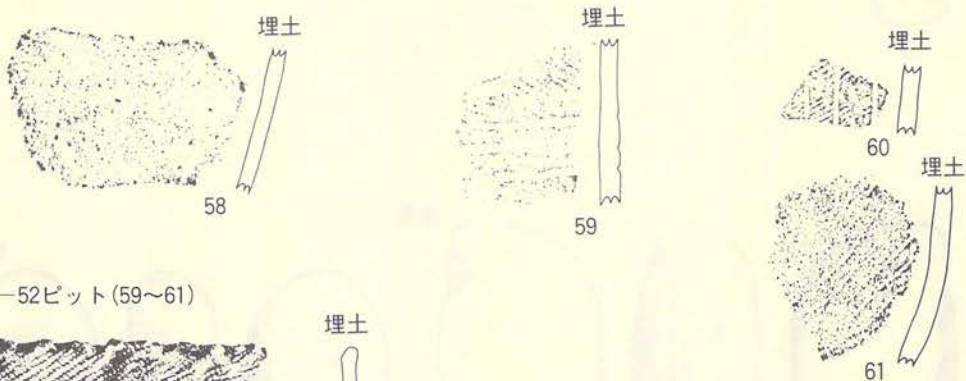
49 $S = \frac{1}{2}$
 50~53 $S = \frac{1}{3}$

第17図 遺構内出土遺物(7)

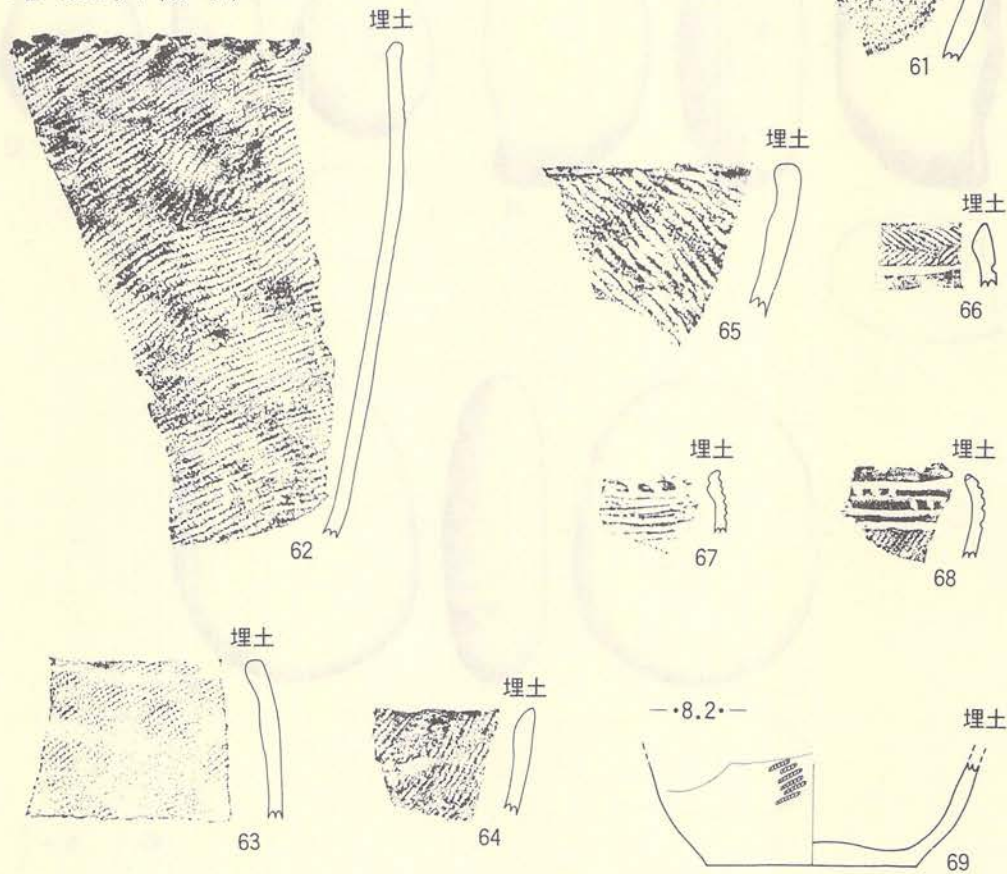
D II-51ピット (54~58)



D II-53ピット (62~69)



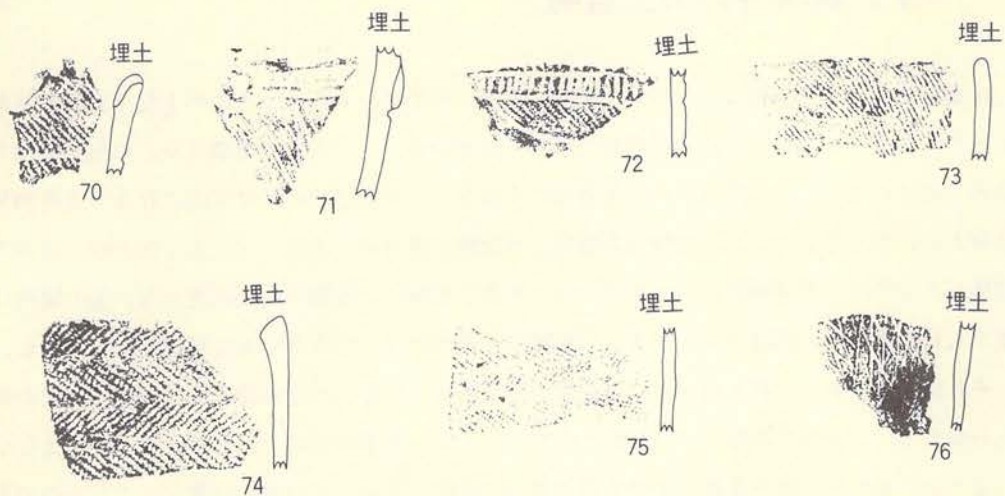
D II-52ピット (59~61)



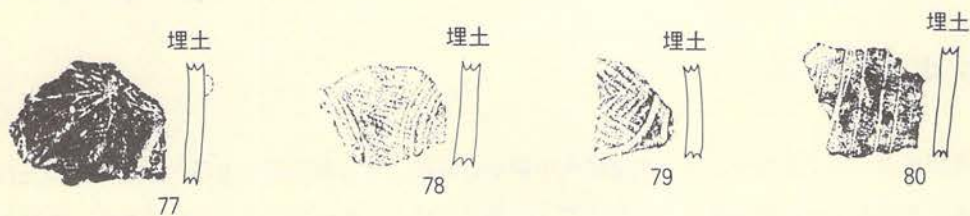
54~69 S = $\frac{1}{3}$

第18図 遺物内出土遺物(8)

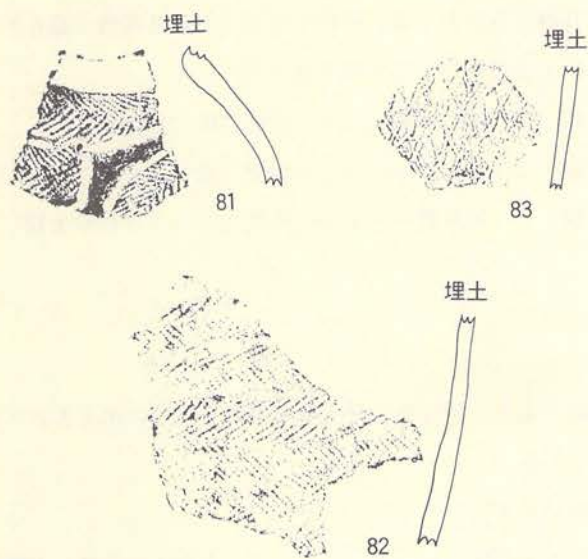
D II-54ピット(70~76)



D II-55ピット(77~80)



D II-56ピット(81~83)



D II-151焼土遺構(84・85)



70~85 S = $\frac{1}{3}$

第19図 遺構内出土遺物(9)

V. 遺構外の出土遺物

本遺跡からの出土遺物は、土器・土製品・石器・石製品からなり、その出土量は遺構内外あわせてダンボール箱にして約200個分にもおよんでいる。その大半が遺構外からの出土遺物で占められている。これら遺構外の出土遺物の大部分は、調査区域のD II区内に存在する遺物包含層からの出土である。この遺物包含層は、本遺跡の後背地の山地から流入した土砂によって埋積した小井田川の沖積段丘上に存在する。その包含層は、遺物の出土状況から、他の場所に棄てられた遺物が短時間の内に流入して堆積した再堆積性の包含層である様相を示している。

それは、出土層位がII b層とIII a層に集中していることと、出土遺物の時期が縄文時代中期から弥生時代にかけての幅ひろい時期にもかゝらず、大半がこの2層から混在して出土していること、またその出土遺物の中で土器がすべて破片であり、かつ摩耗が著しいことからである。

1. 土器

遺構外から出土した土器は、縄文時代中期から晩期に至る各時期の土器と弥生時代の土器である。その大半が粗製深鉢で、精製土器はその出土量から比較してごく少数である。これらの土器は、上記の出土状況から層位的にとらえることができなかったため、土器の諸特徴によって分類を行なった。分類は時期別に第I群から第IV群までの4分類とし、さらに各群の土器をその特徴ごとに細分した。なお、第II群と第III群土器に並行すると思われる粗製土器を第V群、無文や地文のみで時期不明な小型土器および袖珍土器を第VI群とした。

第I群……………縄文時代中期	第IV群……………弥生時代（弥生土器）
第II群……………縄文時代後期	第V群……………粗製土器
第III群……………縄文時代晩期	第VI群……………小型土器および袖珍土器

(1). 第I群土器

本群は縄文時代中期に属する土器群である。数量的にはごく少数の土器片の出土をみただけである。その諸特徴から2区分に細分した。

①. 第1類（第20図—1、写真図版13—1）

本類に属する土器は、深鉢と思われる土器片1片（1）のみの出土である。1は、4単位の大波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、口縁部文様帯を有する。その口縁部文様は、無文上に

粘土紐の貼り付けによる隆線文を縦位、斜位、横位の幾何学状に施し、さらにその隆帯上に縄文原体の側面圧痕が施文されている。また、一部の隆線文に沿ってヘラ状工具による列点文が施文されている。なお、胴部にはRLの単節斜縄文（縦回転）が施文された後に、その最上部に結節部の横回転による綾絡文が施されている。この土器片は、中期中葉の円筒上層C式に併行するものと思われる。

②. 第2類（第22図—8～12、写真図版14—8～12）

深鉢の口縁部片と思われる土器片が5片（8～12）ほど出土している。すべて別個体の破片である。8と9は平縁で、10～12は波状口縁を呈する。この口縁部の文様は、細い粘土紐の貼り付けによる隆起線が施された後に、その外側が磨消され、さらに隆起線に沿って棒状工具によって刺突列文が施文されている。地文は、8と9・12のみが確認できる。8と12が縦回転のRLの単節斜縄文、9が横回転のRLの単節斜縄文がそれぞれ施文されている。これらの土器片は中期最末葉の大木10式に併行するものと思われる。

（2）. 第Ⅱ群土器

本群は縄文時代後期に属する土器群である。本遺跡から出土した土器群の中で、最もその出土量が多かった土器群である。時期は、初頭から末葉までの後期全般にわたって出土しているが、特に後葉の所謂瘤付土器群がその中心を占めている。なお、本群の出土土器をその諸特徴から6区分に細分した。

①. 第1類

本類は後期初頭に位置づけられると思われるものを一括した。文様は、数条の平行沈線文を用いて、無文および磨消帯縄文を直線的・曲線的に展開するという特徴を持つ土器群である。焼成は一般的に良く、一部のものを除いて薄手のものが大半である。なお、大部分が破片であるため、器形および全体の文様構成を把握することができなかった。したがって個々の文様の特徴からA～Cの3種に細分した。

A. 無文の器面に低い隆帯を貼りつけて区画し、さらに隆帯の側縁に沿ってと隆帯内に沈線文が施文された土器（第20図—2、第22図13～18、写真図版14—13～18）

2は、壺型土器の胴上部以上の破片である。隆帯が貼りつけられていないが、沈線文の施文方法が類似することから本類に入れた。13～18は、すべて深鉢の口縁部片である。文様は、隆帯を貼りつけて区画した後に、器面を研磨し、その隆帯の両側縁に沿って沈線文が施され、さらに隆帯によって区画された内側に数条の平行沈線による曲線文が施文された土器片である。

B. 主文様が数条の平行沈線によって渦巻状の曲線文が施文された土器（第22図19～25、写真

図版14—19～25)

19～22と24は、深鉢の口縁部片と胴部片である。25は体部片である。口縁部はわずかに外反し、山形突起を呈する。24を除いてすべての口縁部片は、口唇部直下に隆起線が施され、その両側縁に沈線文が施文されている。25を含めた胴部の文様は2～3条の平行沈線による変形渦巻文が施文されている。21のみは、山形突起の直下に円形の隆起線が施されているのが他と異なる点である。23は壺型土器の口縁部片である。頸部と胴上部に隆起線が施されて胴上部文様帯を区画しているのが他の土器片と異なる。しかし他の沈線文と施文方法は類似する。なお、以上の土器片の文様の展開が横方向である点は同一である。

C. 沈線文と磨消縄文が施された土器で、沈線文のみ施されたものは細沈線文化し、変形の渦巻文と流れ文風の文様を呈する。磨消縄文が施されたものは、磨消帯縄文による渦巻文的なモチーフが主体的である。これらは同時期のものと思われるため同類としたが、さらに地文の有無によってa、bに細分した。

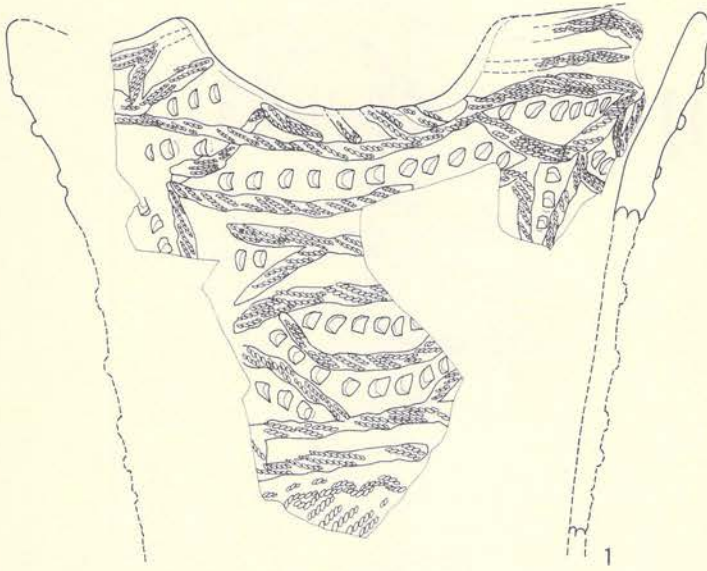
a. 沈線文のみが施された土器 (第21図5・6、第22図26～33、写真図版13—5・6、写真図版14—26～33)

26～33は深鉢の口縁部片と胴部片である。26と27はや、外反し、波状口縁を呈する口縁部片である。28と29の胴部片も同じく文様はすべて2～3条の細沈線によって変形の渦巻文が施文されている。30～33は深鉢の胴部片で、文様は平行細沈線文が施文されている。なお、5と6は同一個体片で、口縁部から胴上部にかけて26・27と同じ文様が施文されているが、これらと異なる点は胴下部に木目状撚糸文が施されていることである。しかし、主体的な文様のモチーフから本類と同一のものと思われる。

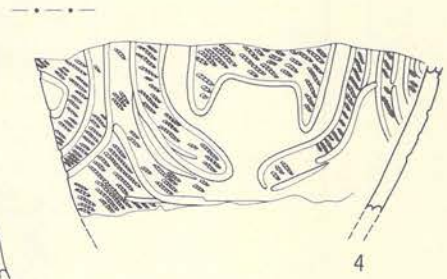
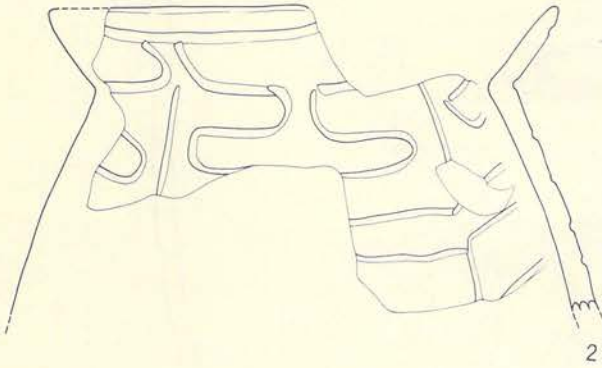
b. 沈線による磨消帯縄文が施文されている土器 (第20図—3・4、第23図—34～50、写真図版13—3・4、写真図版15—34～50)

深鉢が大部分で、一部に鉢型土器と思われる土器片が存在する。3と4は深鉢の胴上部以上と胴下部の破片である。3は口縁部が外反し、小波状口縁を呈し、肩部がわずかに張り出している。文様は3条の曲線的な沈線による磨消帯縄文が施文されている。そのモチーフは渦巻文が主体的である。4は胴下部の一部分のみのため全体の文様構成は把握できないが、曲線的な沈線による磨消帯縄文が施文されている。地文は3がR1の無節縄文、4がLRの単節斜縄文が施文されている。34～44は深鉢の口縁部片と胴部片、45は壺型土器の胴部片、46～50は鉢型土器の口縁部片と胴部片である。深鉢の口縁部は「く」字状に外反し、大波状口縁を呈するその頂部にキザミを施し、さらに内面に沈線を施したもの(38～40)も存在する。41はキザミのみが施されている。34～39の文様は、口縁部から胴上部にかけて1～3条の平行帯縄文が施文されている。40は入組文的な磨消帯縄文が、40～45の胴部片の文様は、区画的なものや楕円

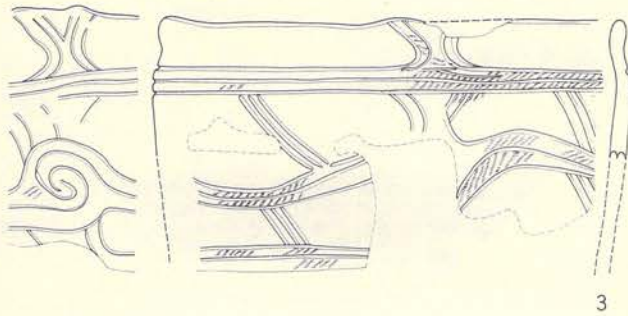
(13.7) ····



(20.0) ····



(18.0) ····

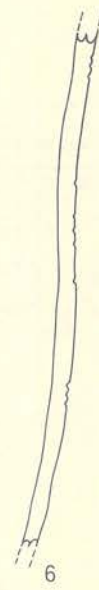
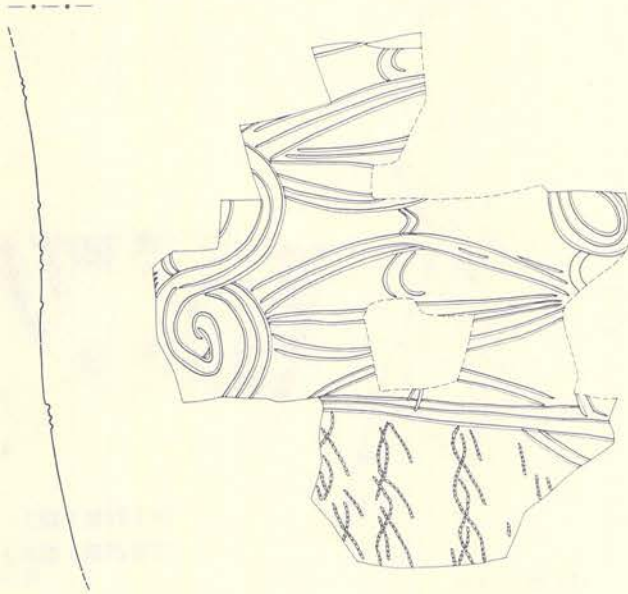
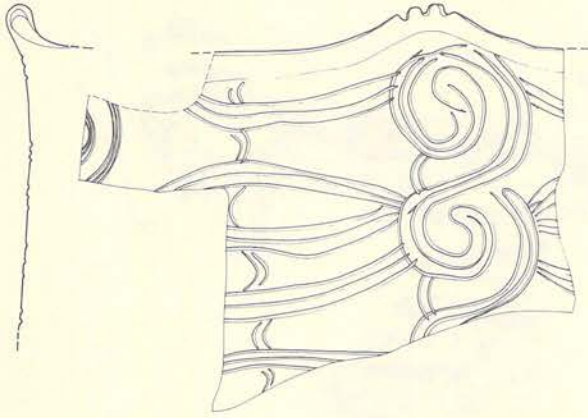


第I群第1類1
 第II群第1類A2
 C-b·3·4

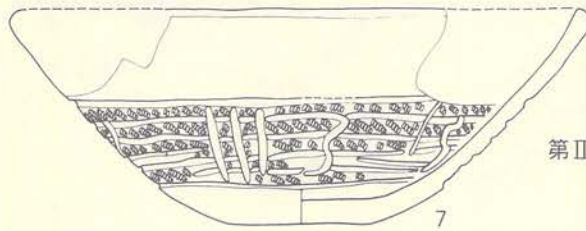
1~4 S = $\frac{1}{3}$

第20図 遺構外出土遺物(1)

(32.4) · · · · ·



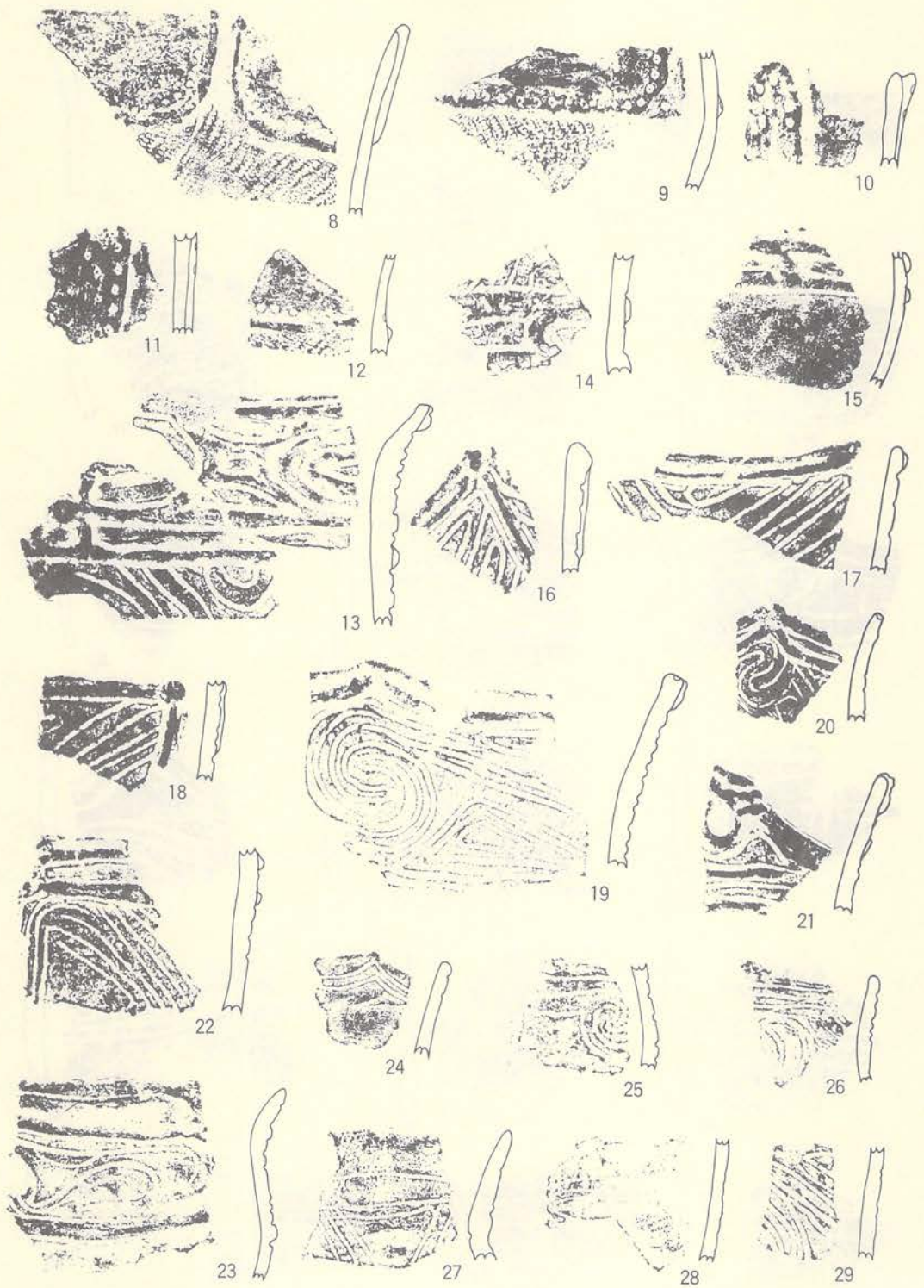
(22.9) · 5.8 · 8.4



第Ⅱ群第1類C-a、5·6
第2類A 7

5~7 S = $\frac{1}{3}$

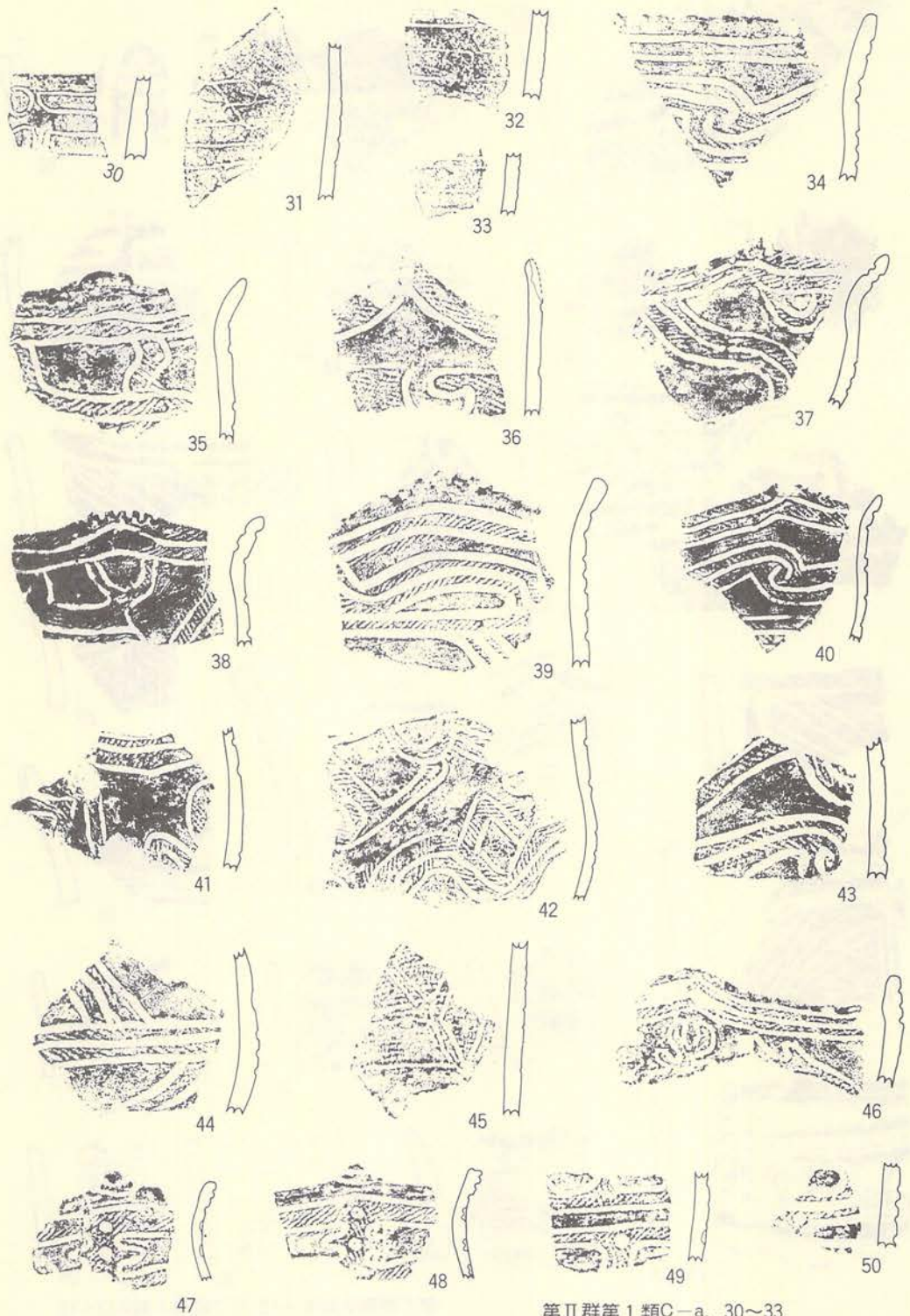
第21図 遺構外出土遺物(2)



第I群第2類 8~12 第II群第1類 A13~18
 B19~25
 C-a、26~29

第22圖 遺構外出土遺物(3)

S=1/3



第II群第1類C-a、30~33
C-b、34~50

第23圖 遺構外出土遺物(4)

S = $\frac{1}{3}$

形文的な磨消帯縄文が施文されている。46～48はともに波状口縁を呈するが、46は直立気味で、47と48は外反する口縁部片である。ともに口唇直下に磨消帯縄文が施文されているが、46がさらにその下位（胴上部）に先端がカニのハサミ状を呈する磨消縄文が施文されており、47と48は、磨消帯縄文の基点や分岐点に竹管による同型の刺突文が施されている。49と50も同様の文様が施文されている。

②. 第2類

本類に属する土器は、後期の各時期の中でその出土量が最も少なかった土器群である。文様は平行線化した磨消帯縄文がその主体を占める。しかし、一部にキザミ状の刺突文のみが施文された土器もみられる。これらの土器を文様の特徴によってA・Bの2種に細分した。

A. 磨消帯縄文が施された土器（第21図—7、第24図—51・52、第26図—67・68、写真図版13—7、写真図版16—51・52、写真図版18—68・68）

縄文を主文様とする土器群であるが、7は浅鉢の半完形品で、胴中央部から下部にかけて上記の文様が施文され、さらに帯縄文を縦に直線と曲線の沈線によって区切っている。51は鉢型土器の胴部片、52は高台付土器の台部である。ともに頸部から「く」の字状に外反する器形を呈する。文様は平行帯縄文が施されているが、68は、頸部と胴部に3条の沈線文を施し、その沈線間に2列のキザミ状の刺突列文を施して胴部文様帯を区画している。なお、地文は7と68がRLの単節斜縄文、51と67がLRの単節斜縄文、52が羽状縄文（LR+RL）がそれぞれ施文されている。

B. キザミ列文が施された土器（第26図—69～71、写真図版18—69～71）

深鉢の胴部片3片（69～71）のみの出土である。すべて同一個体片である。無文の器面に、キザミ状の刺突文が横方向に条線状に施されている。なお70には、粘土粒の貼付が1個見られる。

③. 第3類

本類は、刻み帯と直線的、曲線的な磨消縄文が器面に縦横に展開され、無文部が丹念に研磨された土器である。これらの土器の文様と施文状の特徴からA・Bの2種に細分した。

A. 口縁部や口縁付近などに刻み目帯や平行沈線をめぐらし、無文や地文を施した土器

（第24図—53・54、第26図—79～90、第27図—91・92、写真図版16—53・54、写真図版18—79～90、写真図版19—91・92）

53は深鉢の口縁部片で、口縁部が平縁で口頸部から「く」の字状に大きく外反する。文様は口唇部直下と頸部に刻み目帯と平行沈線文が施され、その間が無文となっている。これと同じ文様を示すのが72～75である。なお72と74の胴部には磨消縄文が施文されている。76と78は17等と同じ器形と類似する文様を有するが、異なるのは口唇部直下の刻み目帯と頸部の刻み帯間

に羽状縄文が施文されている点である。78はこれらの胴部片と思われる。54は、やや外傾気味で大波状を呈する深鉢の口縁部片である。口縁部に刻み目帯と沈線文が施され、その下位には羽状縄文を地文とする磨消縄文が施文されている。79～90は、同じ器形および類似する文様を有する口縁部片であるが、79と80、84～86は刻み目帯と沈線文以外は無文である。また、84～89の波状口縁の波頭部にさらに山形状の小突起、90には円錐状の突起が施されている。なお、91と92は注口土器の頸部片である。

B. 直線的、曲線的な磨消縄文を器面全体に縦横に展開した土器

(第24図—55～57、写真図版16—55～57)

55～57は、深鉢の半完形品および口縁部片である。55は、口縁部が平縁で、頸部から「く」の字状に大きく外反する形状を呈する。文様は、口縁部から胴部にかけて入組風の曲線的な沈線による磨消縄文が施文されている。器面は緻密で、無文部分がよく研磨されている。57の地文は羽状縄文(LR+RL)である。56は小型の深鉢土器で、胴部から口縁部にかけて直線的に外傾している。波状口縁を呈する。文様は、口縁部が帯縄文が施され、胴部に入組状の帯縄文が施文されている。さらにその起点と思われる部分に刺突文が施されている。地文はRLの単節斜縄文が充填されている。57は平行沈線による磨消縄文が施された平縁で直立気味を呈する大型深鉢の口縁部片である。地文は羽状縄文(RL+LR)が施文されている。

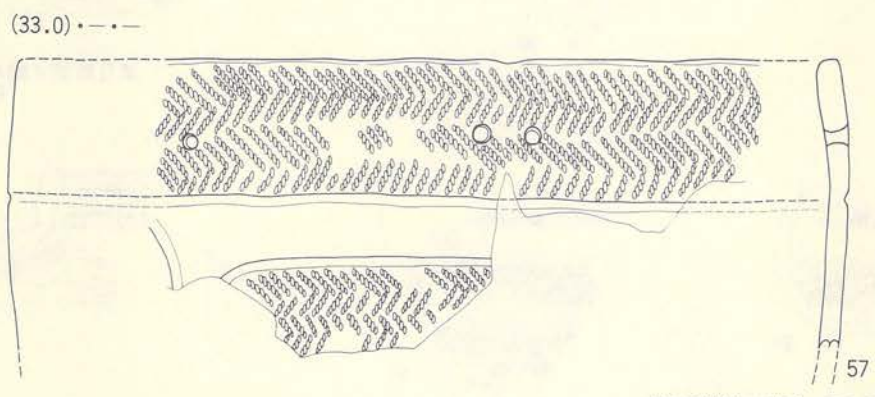
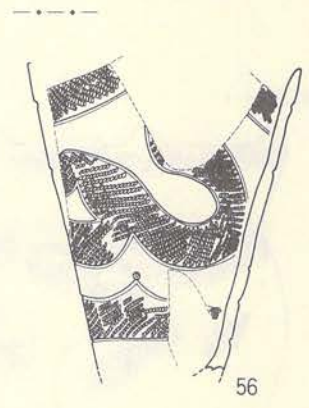
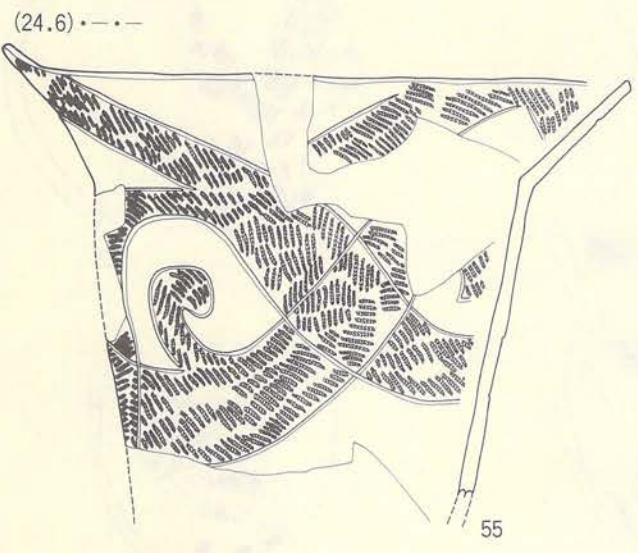
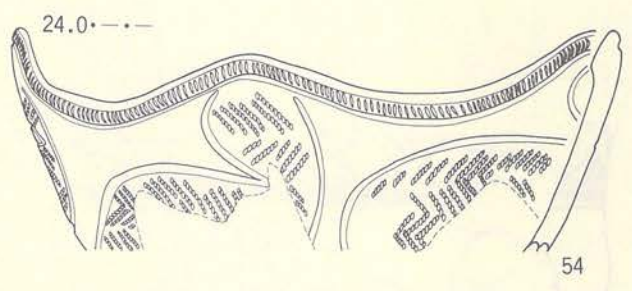
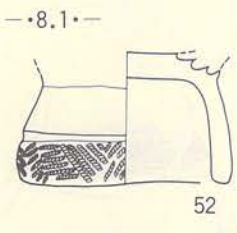
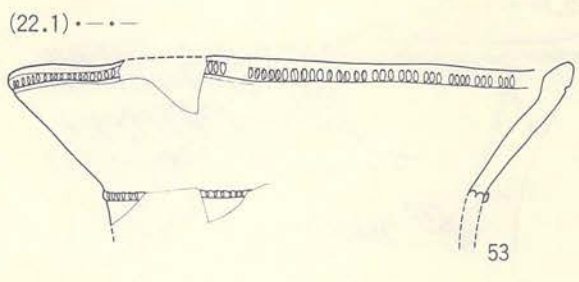
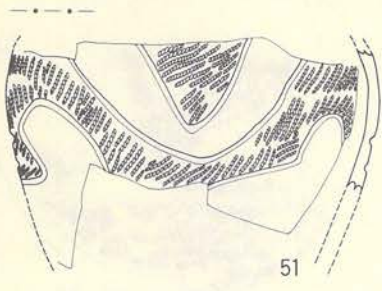
④. 第4類

本類は口縁部に小突起を有し、文様が平行線あるいは曲線状の沈線による磨消縄文が施文された土器群で、一部に貼瘤状の突起もみられる。その文様の特徴からA～Cの3種に細分した。

A. 頸部に1～2条の刻み目帯と平行沈線文および曲線文による磨消縄文が施された土器

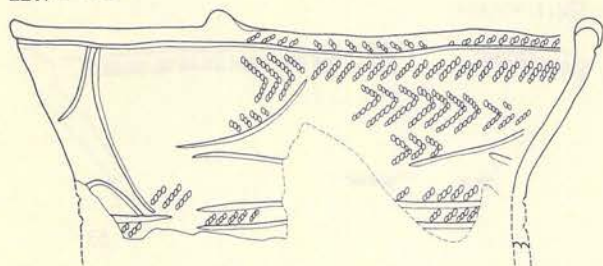
(第25図—58・59・65、第27図—93～97、写真図版17—58・59・65、写真図版19—93～97)

58は、口縁部が頸部から「く」の字状に外反し、口唇部付近でやや内弯気味になる深鉢の口縁部片である。口唇部が内側に肥厚し、その頂部に小突起が施されている。文様は、口唇部直下に平行沈線、頸部に刻み目帯と平行沈線を施し、口縁部文様帯を構成している。その内部文様は、曲線状の沈線による磨消縄文が施文されている。地文は、横位回転の単節羽状縄文(LR+RL)が施されている。59は58とほぼ類似する器形と文様を有する深鉢の頸部～胴上部にかけての破片である。胴部の文様は、胴上部に孤線状の沈線による磨消縄文が施されているのが確認できる。65も同様の文様が施された小型の鉢型土器である。地文は58・65と全く同一の羽状縄文である。93～95は同一個体片で、深鉢の頸部から胴上部にかけての破片である。96と97は壺型土器と思われるものの口縁部片である。これらの土器片は、58等と同様の文様が施されている。わずかに異なるのは、93～95は頸部に2条の刻み目帯、96と97は口唇部直下に刻み目帯が施されている点である。地文はすべて横位に回転された単節の羽状縄文(LR+RL)



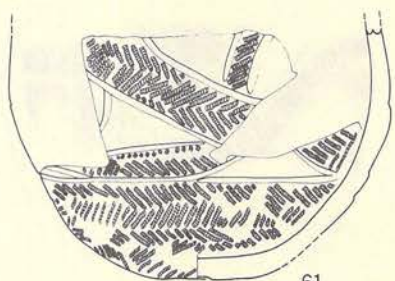
第24図 遺構外出土遺物(5)
 第Ⅱ群第2類A—51·52
 第3類 A—53·54 B—55~57 S=1/3

22.7·---



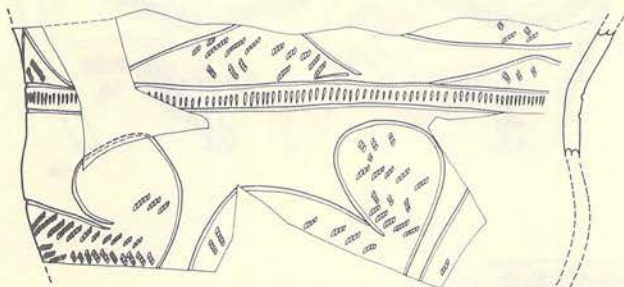
58

·3.7·



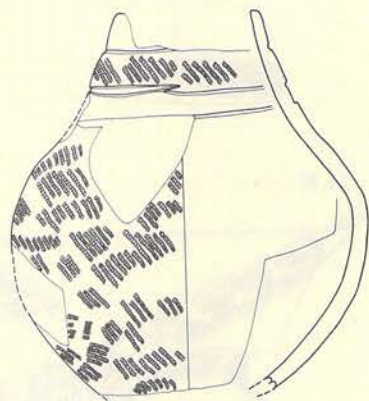
61

·---·



59

(5.6)·---



62

(18.8)·---



60

·3.5·



63

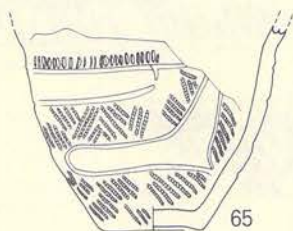
第II群第4類A58·59·65
B60·61·63·64

·3.0·



64

·3.8·



65

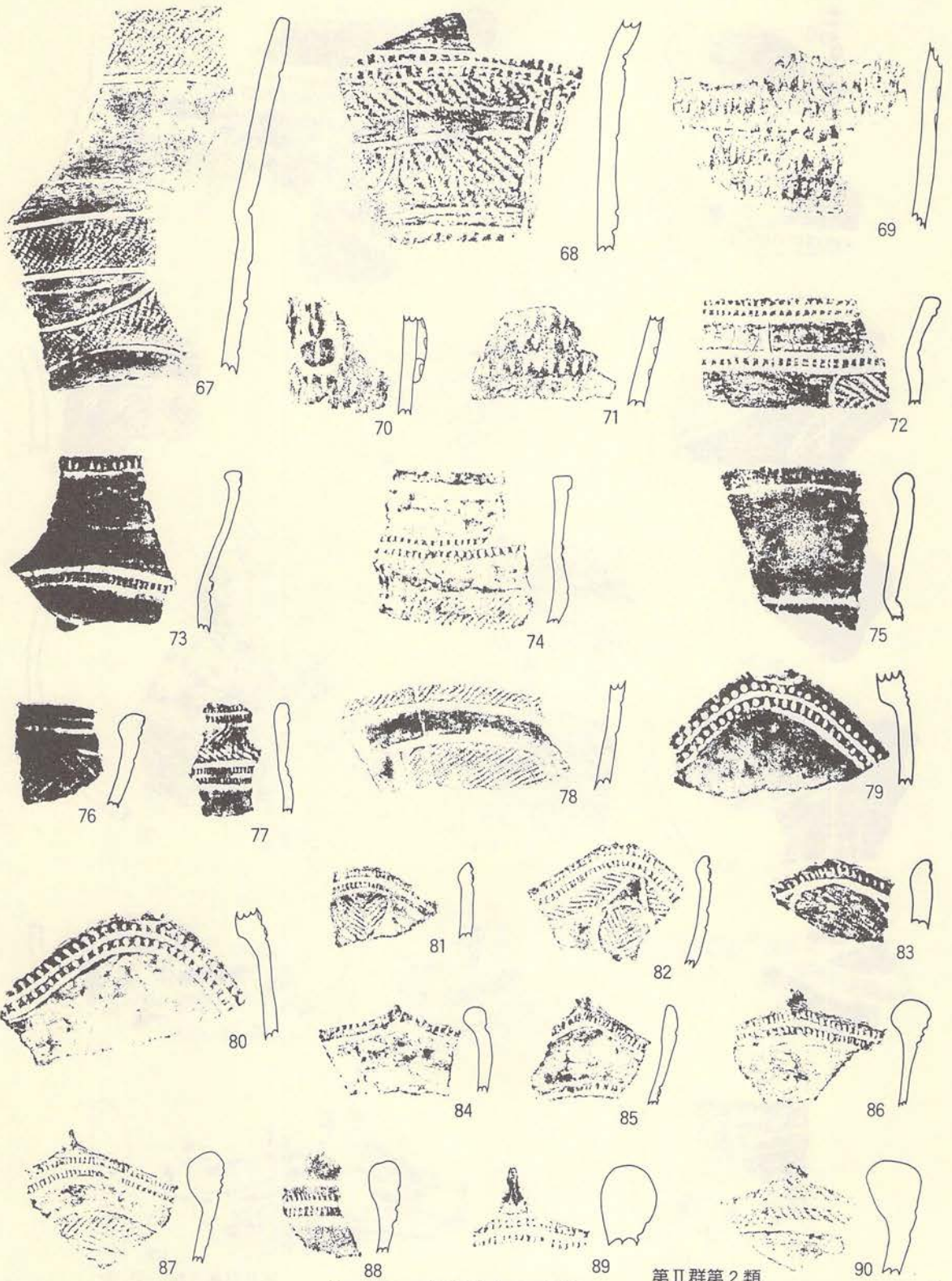
4.2·---



66

第25図 遺構外出土遺物(6)

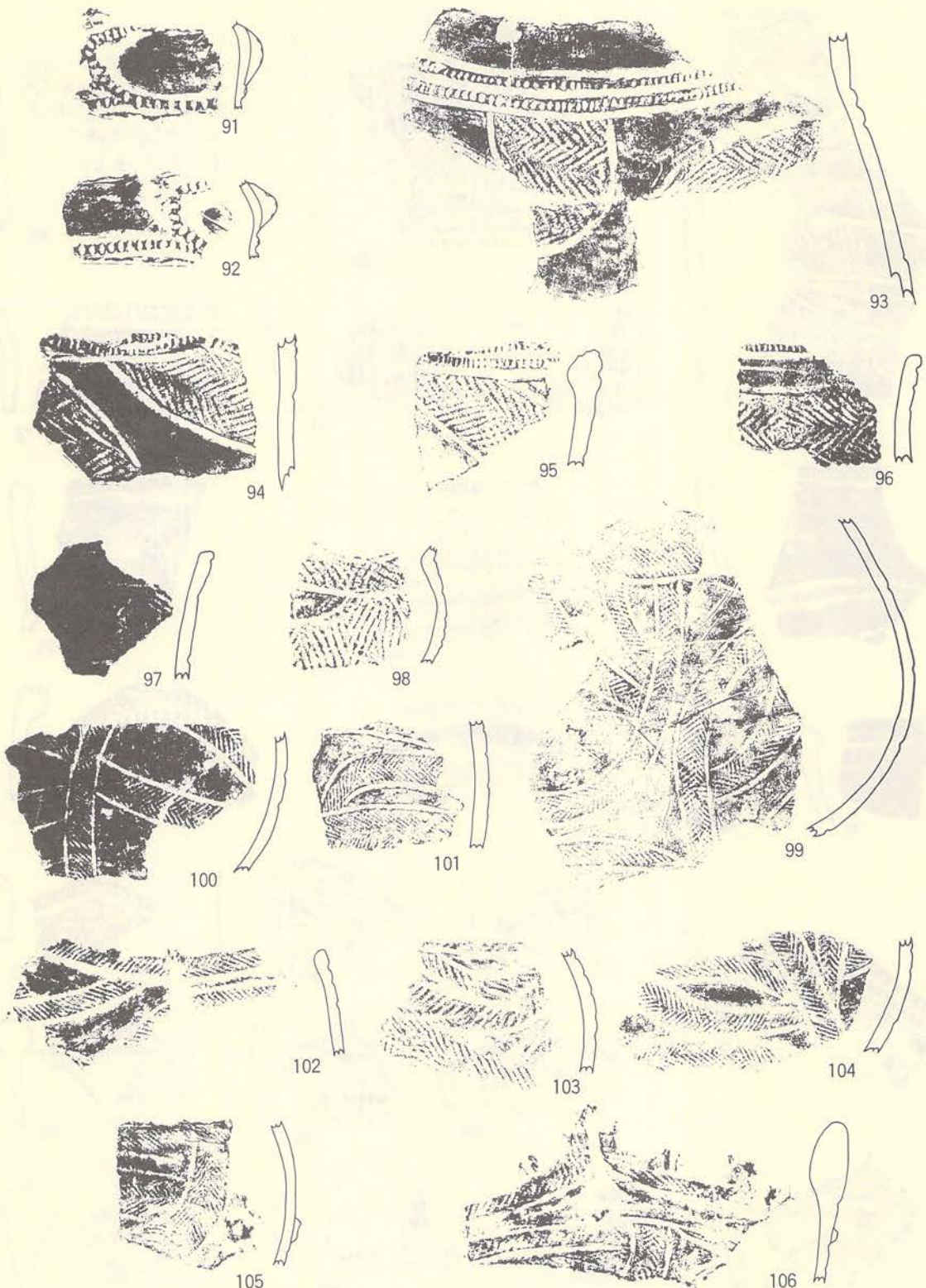
S = $\frac{1}{3}$



第26圖 遺構外出土遺物(7)

第II群第2類

A·67·68 第3類A·79~90 S = $\frac{1}{3}$
B·69~71



第27図 遺構外出土遺物(8)

第Ⅱ群第3類A・91・92
 第4類A・93~97
 B・98~104
 C・105~106

S = $\frac{1}{3}$

が施文されている。なお、これらすべての土器片は第3類のAの流れをくむものと思われる。

B. 口縁部に小突起を有し、平行線と曲線状の沈線による磨消帯縄文が施された土器 (第25
図-60・61・63・64、第27図-98~104、写真図版17-60・61・63・64、写真図版19-98~104)

60は底部を欠失した深鉢の半完形品である。口縁部は平縁で瘤状の小突起が施されている。器形は頸部でしまつて口縁部が外反する。文様は、口唇部直下と頸部に平行沈線による帯縄文をめぐらし、その間に無文帯を形成している。胴部文様は縦方向に向きの異なる弧線による入組状の弧線帯縄文が施文されている。これと同様のものに63の小型鉢と64の小型壺型土器がある。61は胴上部以上が欠失した壺型土器と思われる胴下部片である。文様は弧線による入組状の磨消帯縄文が施文されている。これと同様の文様が施された土器が98~104の土器片である。これらは深鉢と壺型土器と思われるものの口縁部と胴部片である。62は口縁部の一部と底部を欠失した壺形土器の半完形品、66は胴上部以上の壺形土器の破片である。文様は、ともに口縁部に平行沈線による帯縄文が施され、胴部には地文のみ、66が無文の器面に沈線文のみが施されている。

C. B種の文様に瘤状の突起が施された土器 (第27図105・106、写真図版19-105・106)

105と106は深鉢の口縁部片と胴部片である。106は山形状の突起に瘤状の小突起を施し、さらに山形状の口縁部分に三角形の透かしが施されている。文様は口唇部に沿って磨消帯縄文が施されており、胴部には平行線と弧線状の沈線による磨消縄文が施文されている。しかし全体の文様構成については不明である。105は、細片のため全体の文様構成を把握することができないが部分的な弧線状の磨消縄文から推定して、入組帯縄文の一種である弧線連絡文ではないかと思われる。なお、両土器片の文様の中心部分と思われる磨消部分に貼瘤状の小突起が施されている。地文はともに羽状縄文(LR+RL)が施文されている。この土器片は次の貼瘤全盛の土器群に続くものではないかと思われる。

⑤. 第5類

本類は、所謂「瘤付土器」と呼ばれる土器群に属するものを一括した。本遺跡から出土した精製土器の中で第6類と伴にその出土量、器形の種類等が比較的多かった土器群である。しかし、前にも述べたとおりの出土状況から大半が破片である。従つて、詳細な器形と、それらに施文された文様等について正確に把握することができなかったが、個々の諸特徴からA~Cの3種に細分した。

A. 平行帯縄文と入組状磨消縄文を主体文様として瘤状突起を施した土器

本種の特徴的な瘤状の突起の中で、瘤の施法に種々の特徴がみられる。その相違によってさらにa、bの2種に分類した。

a. 瘤状の突起が小粒でつまみ状、および先端の尖ったイボ状の形状を呈するもの

(第28図—107～109、第29図—111～113、第30図—114～117、第31図—121～142、第32図—143～148、写真図版20—107～109、写真図版21—111～113、写真図版22—114～117、写真図版23—121～142、写真図版24—143～148)

大半が深鉢型の土器で一部に、壺型（114、116、146）、および注口土器（115）が出土した。107、121～128は深鉢の口縁部片と胴部片である。口縁部はすべて平縁で直立気味を呈する。口縁部と胴部に平行帯縄文が施され、その帯縄文上に先端の尖ったイボ状の貼瘤が施された後にさらに網目状の刷毛目文が施されている。この刷毛目文は器面装飾のために施されたものである。これらの土器は、刷毛目文の土器の範疇に入るものと思われるが貼瘤と帯縄文の様相から本種に入れた。なお、121と123、124のように貼瘤が帯縄文の中央および両端に沿って列点に施されているものと、それ以外のもののが存在する。108、109、111、112、129～141は、深鉢の口縁部と胴部片である。108と109は同一個体片で、口縁部が平縁で直立気味を呈する。文様は口縁部に平行帯縄文が施され、その上につまみ状の貼瘤が施されている。また平行沈線文によって区画された胴部には、弧状の沈線による磨消縄文が施され、その沈線上にイボ状の形状を呈する小突起の貼瘤が施されている。111と112は頸部でわずかにしまり口縁部が平縁で外反する器形を呈する深鉢である。口縁部と頸部に2～3条の平行帯縄文が施して口縁部文様帯を区画している。区画内の文様は、入組状の弧線帯縄文が施されている。イボ状の貼瘤は、この平行帯縄文や沈線上に施されているが、入組状の文様の部分には、帯縄文の基点の部分のみに貼付されている。129～141は、111等と同じ器形および文様を施した土器片である。113と142～144は、口縁が平縁で小突起が付けられており、口縁部のみに平行帯縄文が施文されている点が異なる以外は、貼瘤の形状、施文部分、および胴部の入組状の弧線帯縄文等、すべて111のそれと同一のものである。なお、147と148の貼瘤が比較的大型の円錐状を呈するのがや、特徴的である。114と115は、それぞれ壺型土器と注口土器の胴上部以上の破片と完形品である。器形は異なるが、111等と同じ文様が施文されている。116と117、145、146は壺型土器か注口土器のどちらかと思われる口縁部片である。口縁部に沈線文と条線文が施されているのがわずかに異なるが、それ以外は114等と同じ文様が施文されたものと思われる。なお、110は無文の小型台付鉢である。108と同じようなつまみ状の貼瘤が口縁部に貼付されているのみである。以上の土器片等の地文は、羽状縄文と横位回転の単節斜縄文（大半がLR）である。

b. 瘤状の突起が比較的大きく、円錐および縦長の形状を示し、その突起の先端に刻み目が施され、2分乃至3分にされたもの（第32図—149～165、第33図—166～175、写真図版24—149～165、写真図版25—166～175）

149～153は直立気味を呈し、口縁部に小突起が施された深鉢の口縁部片である。口縁部の一部のため、正確な器形は不明であるが、おそらく頸部ですぼまり、外反してから上部で内湾気味に直立するものと思われる。なお、口唇部は肥厚する。この口唇部に施された小突起で若干

の相違がみられる。すなわち149と150のように2個1対で、その内外面の縦方向に沈線が施されているものと、頂部に刻みのみが施された2種類の小突起が付されたもの、151と153のように、小突起の内外面に149同様の沈線が施されただけのもの、152のように小突起の頂部に刻みのみ施されたものである。これらの土器片の文様は、口唇部直下に2条の平行帯縄文と、おそらく頸部にも同様の帯縄文を施して口縁部文様帯を構成しているものと思われる。その文様帯には、曲沈線による入組帯縄文が施文されている。この平行帯縄文上と入組帯縄文の起点と思われる部分に、先端部に刻み目が施された瘤状の小突起が貼付されている。154は152同様の口縁部突起および貼瘤が施された壺型土器口縁部片である。155は154同様の口縁部片である。156と157は、同一個体片と思われるもので、口縁部が平縁で直立気味を呈する鉢型土器の口縁部片である。文様は、口唇部直下の平行帯縄文上にや、縦長の貼瘤を施した後に横方向にキザミを入れ、さらにその貼瘤間に沈線が施されている。その下位には、2～3条の曲沈線による入組状の沈線文が施文されている。158と159は、平縁で直立気味を呈する口縁部片と、頸部ですぼまる形状を呈する頸部で、ともに深鉢の破片である。文様は平行帯縄文のみが施され、その帯縄文上に縦方向にキザミを施した縦長の瘤状突起と、つまみ状の瘤状小突起の2種類が施されている。160は、159の前者の瘤状突起が沈線上に並列的に施された深鉢の頸部片である。161～167は、平行帯縄文に代って2条のキザミ状を呈する刺突列点文がすぼまる頸部に施された深鉢の頸部片である。平行帯縄文が刺突列点文に代った点と、165と166にみられる瘤状の頂部に2つのキザミを施した点が異なる以外は、すべての面で基本的に149以下の土器片と類似する。168と169も前記の土器片と類似する深鉢の頸部片であるが、わずかに頸部に施された口縁部と胴部の文様を区画する平行帯縄文上に沈線で結ばれた2個1対の瘤状の小突起が施されている点が異なる。170と171は平縁で直立気味を呈する深鉢の口縁部片である。この口縁部には、キザミが施され、小突起が貼付されている。また、161～167と同じように口唇部直下の平行帯縄文に代って2条の平行沈線によって区画された部分にキザミ状の刺突列点文が施されており、その刺突列点文上と磨消部分に比較的大型の形状を呈する円錐状の瘤状突起が施されている。なお、胴部文様には入組帯縄文が施されており、その起点部分につまみ状を呈する瘤状の小突起が貼付されている。172～175は深鉢の口縁部片と胴部片である。口縁部は平縁で直立気味を呈し、その口唇部にキザミが施されている。他のB種の土器片にみられる瘤状の小突起が全く施されていないが、この口縁部片と胴部片の文様が弧線連結文状の入組帯を施されており、その文様のモチーフが類似することから本亜種に入れた。以上の土器片の地文はすべて横位回転の単節斜縄文(LRかRL)と羽状縄文である。

B. 刻み目状の刺突列点文が主文様となる土器

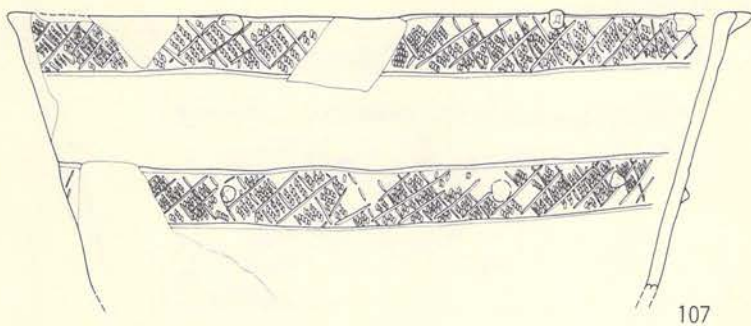
(第33図—176～196、第34図—200・201、写真図版25—176～196、写真図版26—200・201)

200は、頸部でしまり、口縁部が平縁で外反する深鉢の口縁部片である。この平縁には3個1対の小突起が施されている。文様は、無文の器面に半裁竹管による刺突列点文が施されており、さらに口縁部端に平行沈線文、縦方向に曲沈線文を施して、刺突列点文を区画している。201は浅鉢型土器の口縁部片で、平縁な口縁部に小突起が施されている。文様は、無文の器面の一部に平行沈線と曲沈線を施し、その内部に針状の棒状工具によって不規則な刺突文が施文されている。無文部分は器面調整が緻密であり、また薄手の精巧な土器片である。同様の沈線と刺突文が施された土器片に198と199がある。176～184は、深鉢の口縁部片と頸部片と思われるものである。口縁部は平縁で、直立気味を呈し、その口唇部に小突起が施されている。また文様は無文の器面に刻み目状の刺突列点文を施し、さらに、これを挟むように平行沈線文が施文されている。なお、179のみにその刺突列点文上にボタン状の瘤状小突起が施されている。185～189は、176と同様の文様が施された波状口縁と山形口縁の形状を呈する深鉢の口縁部片である。187～189の山形口縁の直下の沈線上および、刺突列点文上に円錐状を呈する瘤状の小突起が施されているのが特徴的である。190～196は刻み目列文が、口縁部端および頸部に施された深鉢型土器の口縁部片と頸部片である。すべて波状口縁が山形口縁を呈する。190と191は小突起を有する波状口縁で、口唇部直下に刻み目列文を施して、口縁部文様帯を区画している。口縁部文様は、沈線による磨消縄文が施文されている。192は刻み目列文が施された頸部片である。この土器片と190等から推測して、おそらくこの刻み目列文による口縁部文様帯を区画しているのではないと思われる。193～196は同一個体片か、若しくは類似する器形、文様が施された深鉢型土器の口縁部片と頸部片である。193は頸部でしまり、その頸部から外反し、山形口縁を呈する深鉢型土器の口縁部片である。文様は、頸部に刺突列点文を施し、その上下を平行沈線文で挟んで口縁部文様帯と胴部文様帯を区画している。その刺突文上にボタン状の瘤状小突起が施されている。口縁部文様は、刻み目列文を施した後にさらに平行沈線文が施されている。以上のように本種の土器は、190と191以外すべて地文が施文されていないのが特徴である。なお、190と191の地文は横位回転の単節斜縄文(LR)である。

C. 櫛目文(刷毛目文)が主文様となる土器(第30図—118～120、写真図版22—118～120)

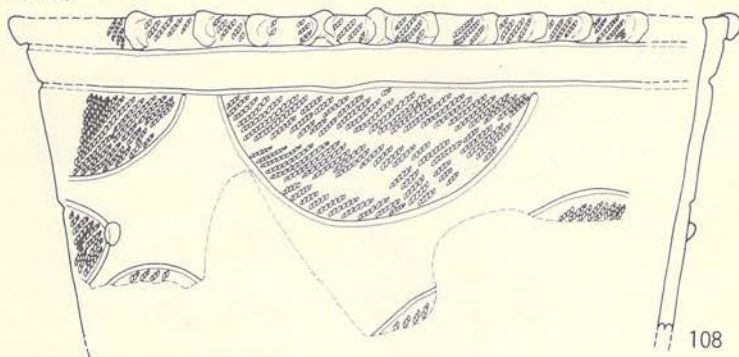
この文様を主文様とする土器の出土は少なく、わずかに118～120の3個体である。118は注口土器の上半部片である。口縁部には2個1対の小突起が施されており、口縁部と胴部には、櫛目状の細沈線が施文されている。この櫛目状の細沈線の起点となる部分にや、大型の縦長の形状と、小型で円形を呈し、その頂部に刻み目が施された2種類の瘤状突起が施されている。119は、注口土器か壺型土器のどちらかと思われるものの胴部片である。文様は、胴上部に櫛目状の平行細沈線を、胴下部には同じ櫛目状の弧状細沈線がそれぞれ施されている。この細沈線上および、弧状細沈線の接点部分に円錐状を呈する瘤状の小突起が施されている。120は118同

(28.4) ···



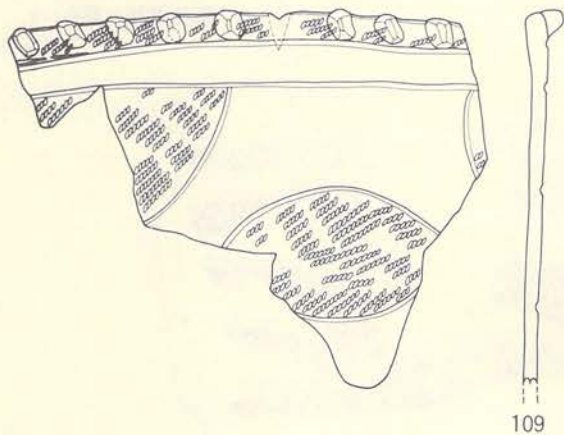
107

(14.3) ···



108

第Ⅱ群第5類A-a、107~110

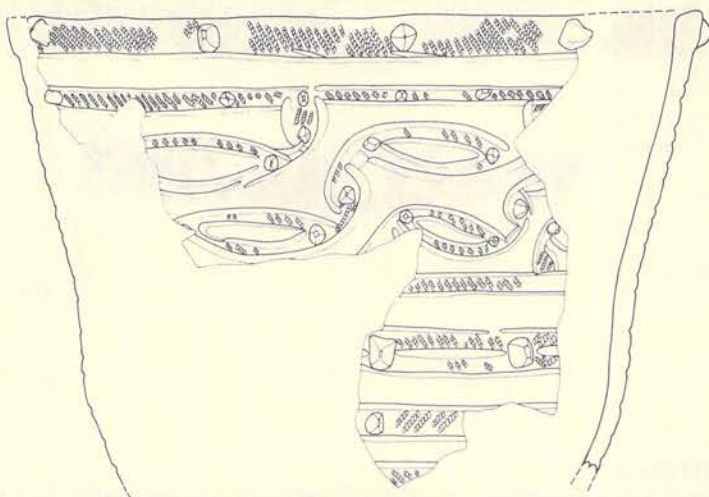


109

107~109・S=1/3

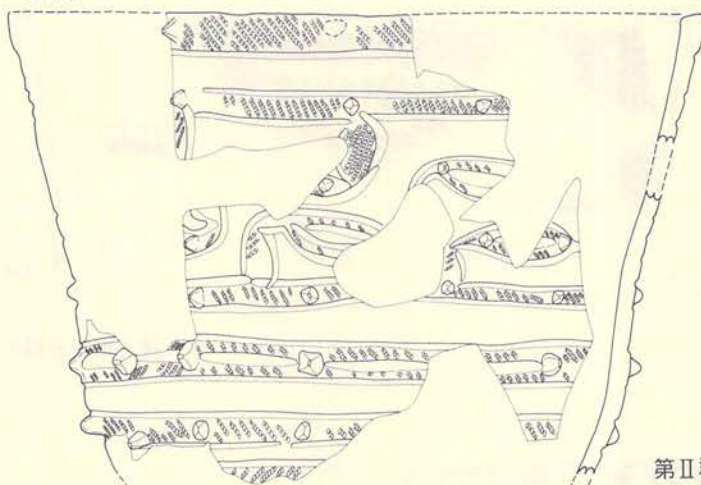
第28図 遺構外出土遺物(9)

(27.3) ···



111

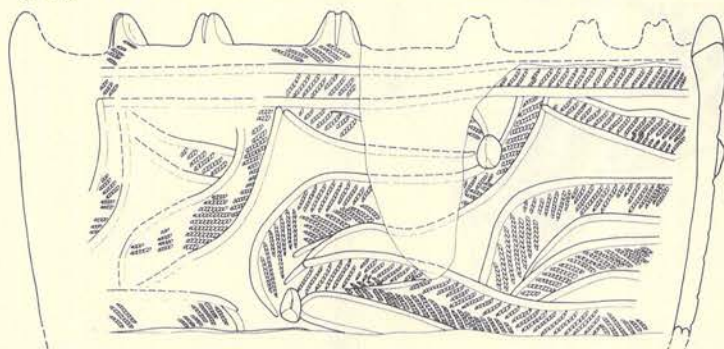
(27.3) ···



112

第Ⅱ群第5類A-a、
111~113

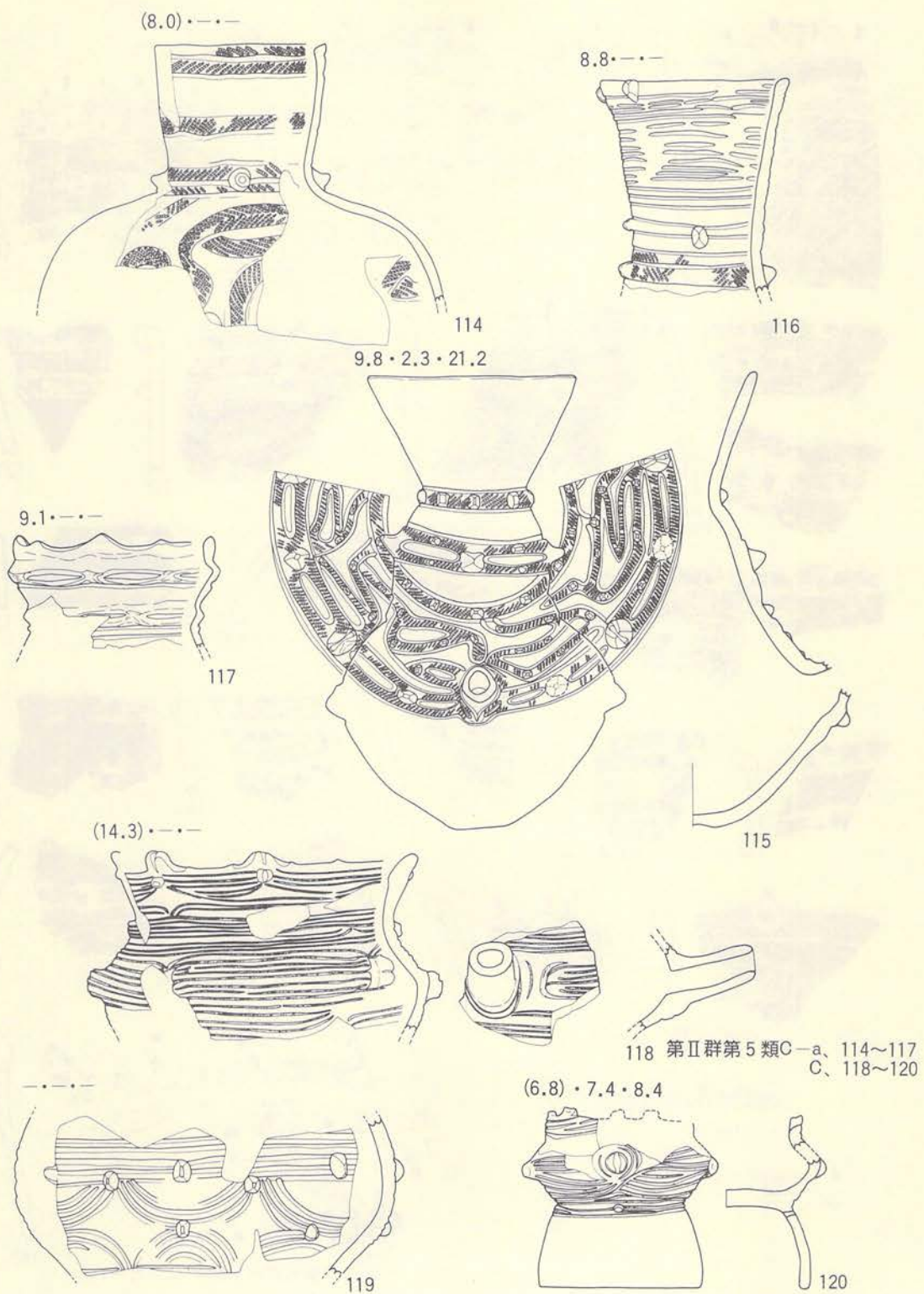
(27.0) ···



113

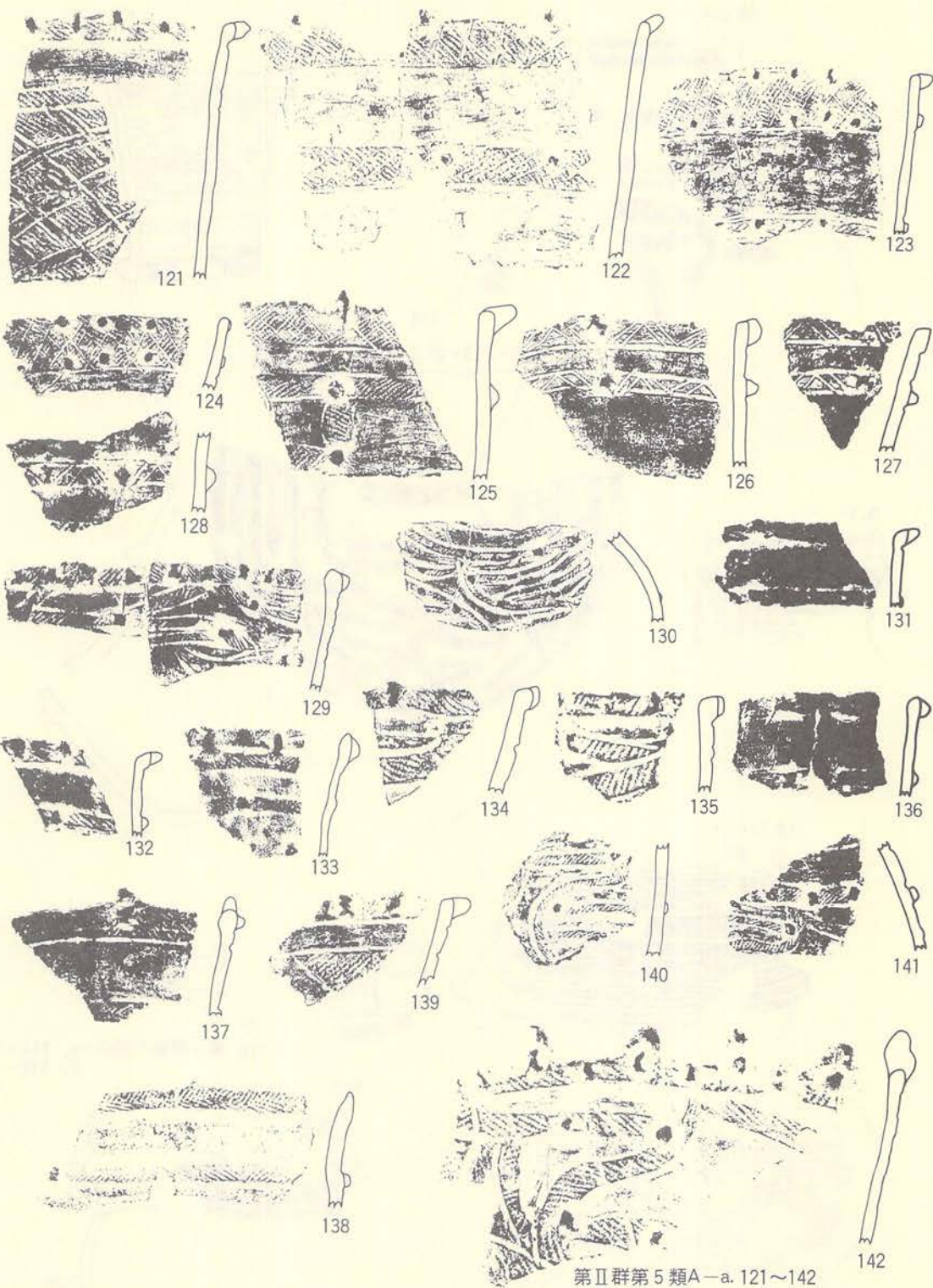
第29図 遺構外出土遺物(10)

S- $\frac{1}{3}$



第30図 遺構外出土遺物(11)

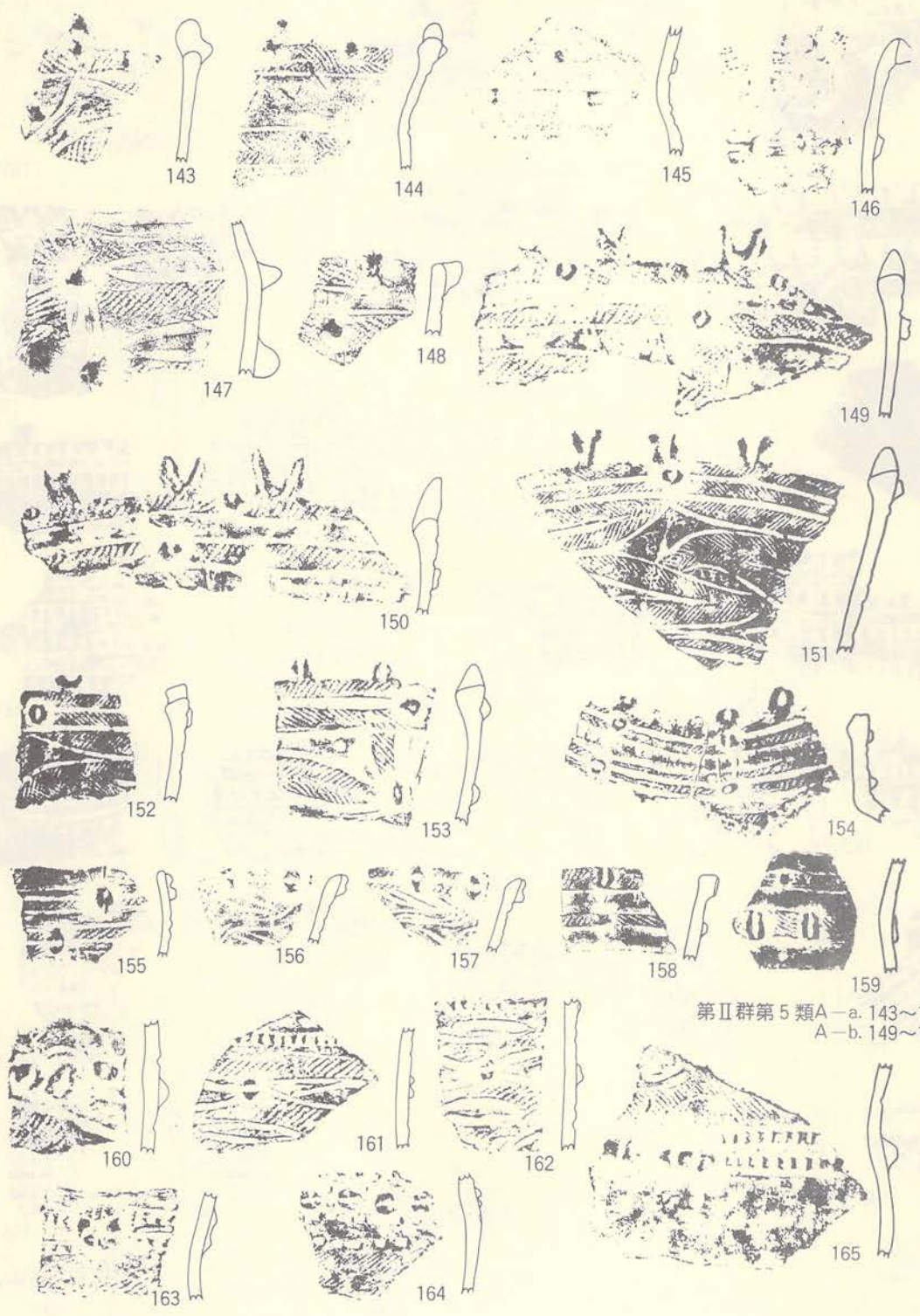
S- $\frac{1}{3}$



第Ⅱ群第5類A—a. 121~142

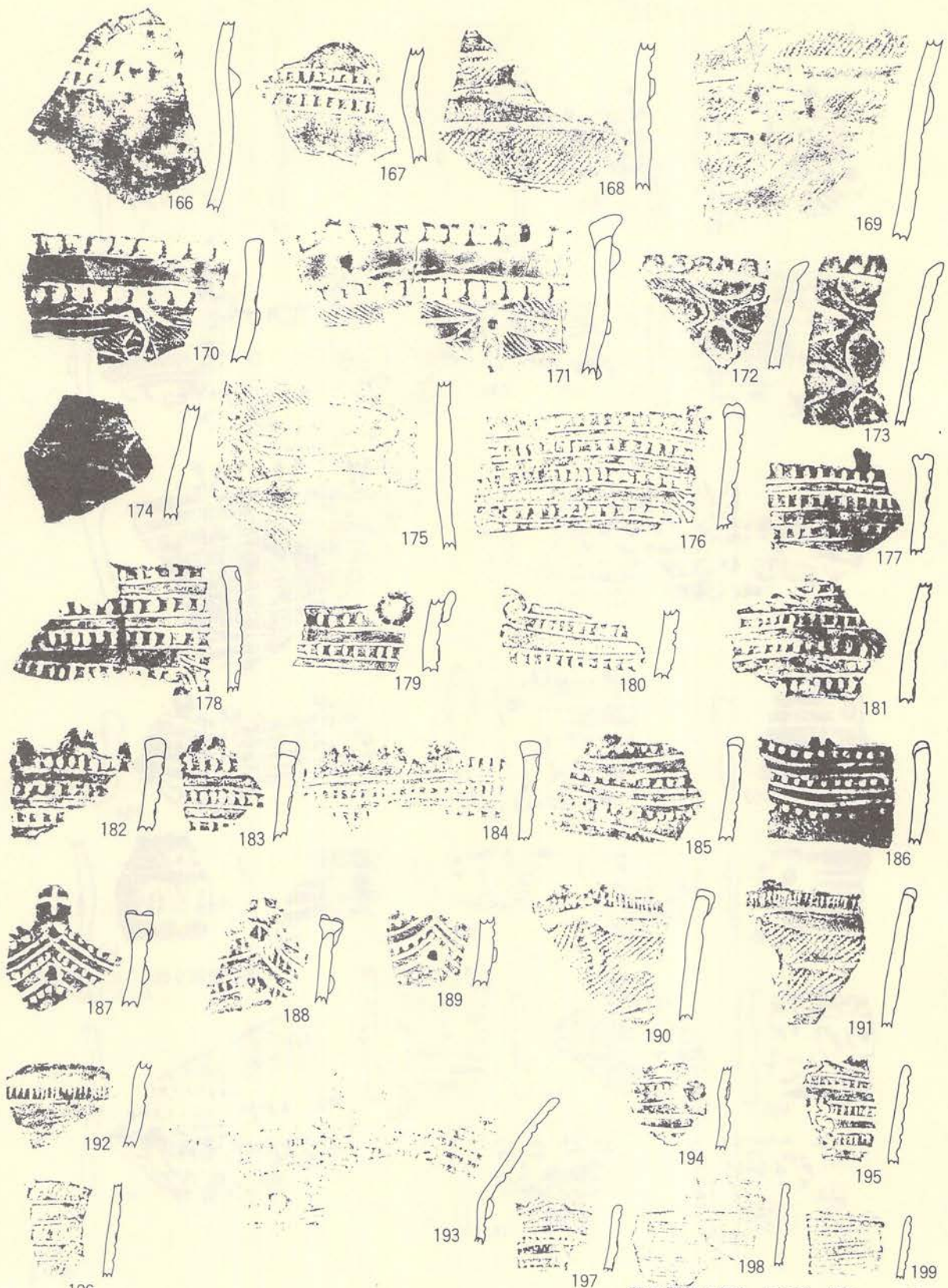
第31圖 遺構外出土遺物(12)

S- $\frac{1}{3}$



第II群第5類A-a. 143~148
A-b. 149~165

第32図 遺構外出土遺物(13)



第33図 遺構外出土遺物(14)

第II群第5類A-b. 116~175
B. 176~199

S = $\frac{1}{3}$

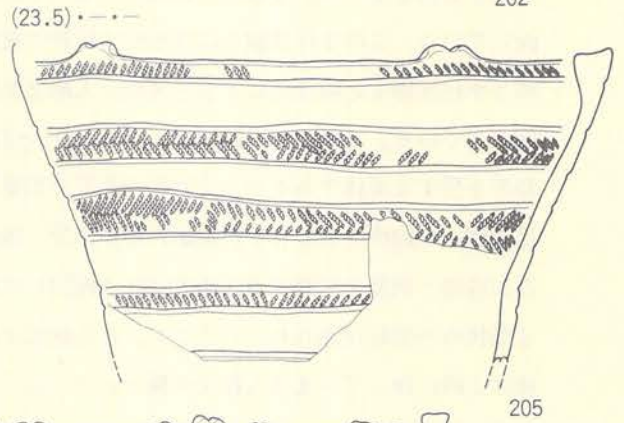
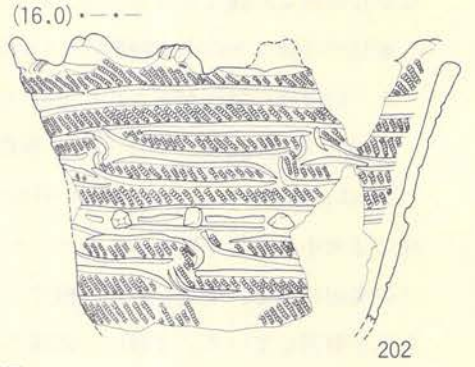
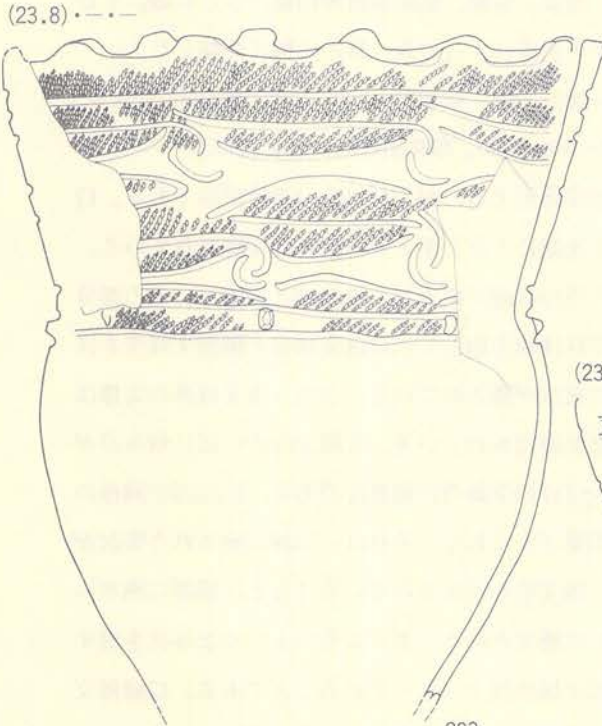
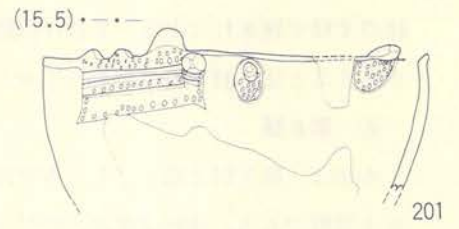
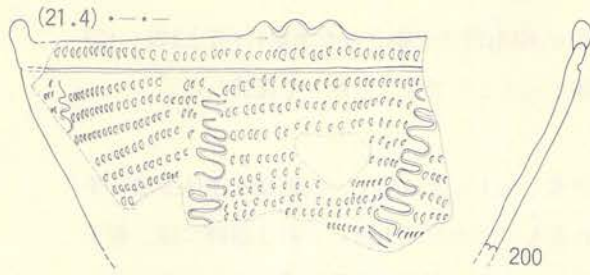
様の文様が施された小型の高台付浅鉢である。なお、刷毛目文が施された土器に107と121～127があることは、前に述べた通りであるが、主文様と云うことでAに分類して記述した。

⑥. 第6類

本類は、第5類土器とともに本遺跡から比較的多く出土した土器で、入組文を主体文様とする土器群である。器形は深鉢と鉢型土器と思われるものばかりである。この土器群には、若干ながら入組文の施文される方法、および器形、器質、装飾、器面調整等相違がみられる。しかし本類では特にその中で特徴的な口縁部の器形の相違によってA、Bの2種に分類した。

A. 口縁部に突起が施された土器（第34図—202～205、第35図—206～230、第37図—254・2255、写真図版26—202～205、写真図版27—206～230、写真図版29—254・255）

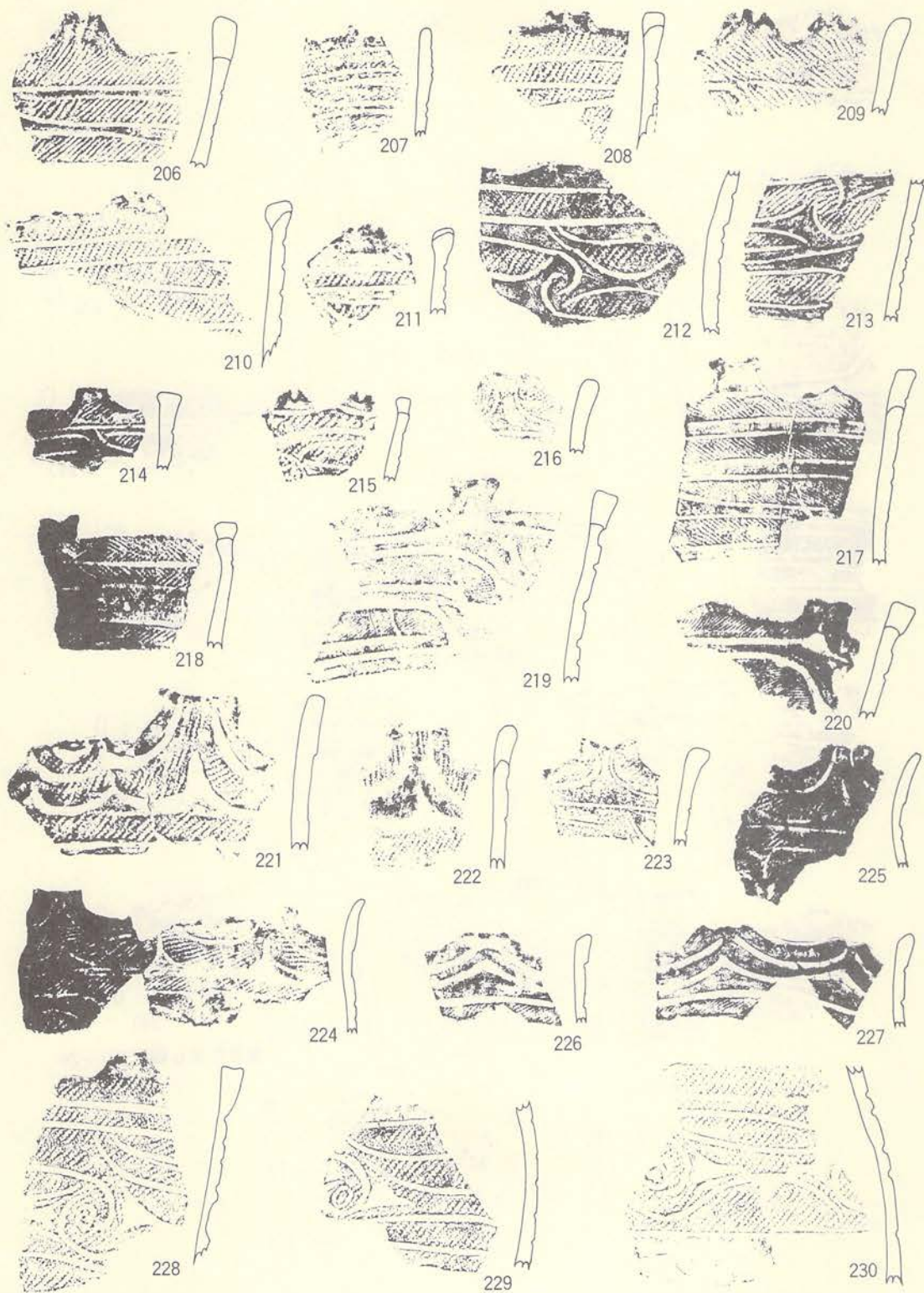
202は、頸部がしまり、口縁部が外反する小型深鉢形土器の胴上部以上の半完形品である。口縁には大小の突起が施されており、その突起の先端に2分乃至3分の刻み目が施されている。この突起の中で、大突起のみの根元には1条の平行沈線が描かれ、縄文帯と区画し、その部分を殆ど磨消している。文様は、頸部に2条の平行沈線を施して口縁部文様帯と胴部文様帯を区画している。この平行沈線上には小粒の瘤状の突起が施されている。なお、両文様帯の文様は同じ平行沈線文と曲沈線による三叉状の入組文が施文されている。入組文内の一部に刻み目が施されている。この土器と同様のものは、215と217の深鉢の口縁部片である。203は202同様の器形を呈する深鉢であるが、文様等で若干の相違がみられる。それは、口縁に施された突起がほぼ同一の台状を呈し、その突起の磨消部分と縄文帯がぼかされていることと、頸部に施された口縁部と胴部を区画する2条の平行沈線間には縄文が残り、さらにその上につまみ状を呈する瘤状の小突起が施されていること、また胴部文様は無文となっていることである。口縁部文様は2段に渡って三叉状入組文が施されている。この入組文の磨消は不完全で雑である。この土器と同様の文様が施されたのが206～214の深鉢形土器の口縁部片である。204は203とほぼ同じ器形と文様が施された胴上部以上の半完形品である。わずかに異なるのは、口縁に施された突起が大小あり、刻み目が入られて2分されていることと、口縁部と胴部を区画する平行沈線上になにも施されていないこと、胴部には地文（横位回転のLRの単節斜縄文）のみが施文されていることである。なお、本種の土器の中で最も精製された粘土を利用し、焼成も良く、器質もしまっている。205は、203等と同じ器形および口縁部突起を有する深鉢の胴上部以上の半完形品である。口縁部文様は、平行沈線による帯縄文のみが施されているのが特徴的である。同様のものに218の口縁部がある。地文は羽状縄文（LR+RL）である。216、219～226は山形状の突起の施された深鉢と鉢形土器の口縁部片である。この突起の下には、「八」字文のみが施されたもの（216、223、226、227）と三叉文のみが施されたもの（219、220）、「八」字文と三叉文が施されたもの（221～225）がみられる。その下位には入組文が施文されているよう



204
 第Ⅱ群第5類B. 200・201
 第6類A. 202~205

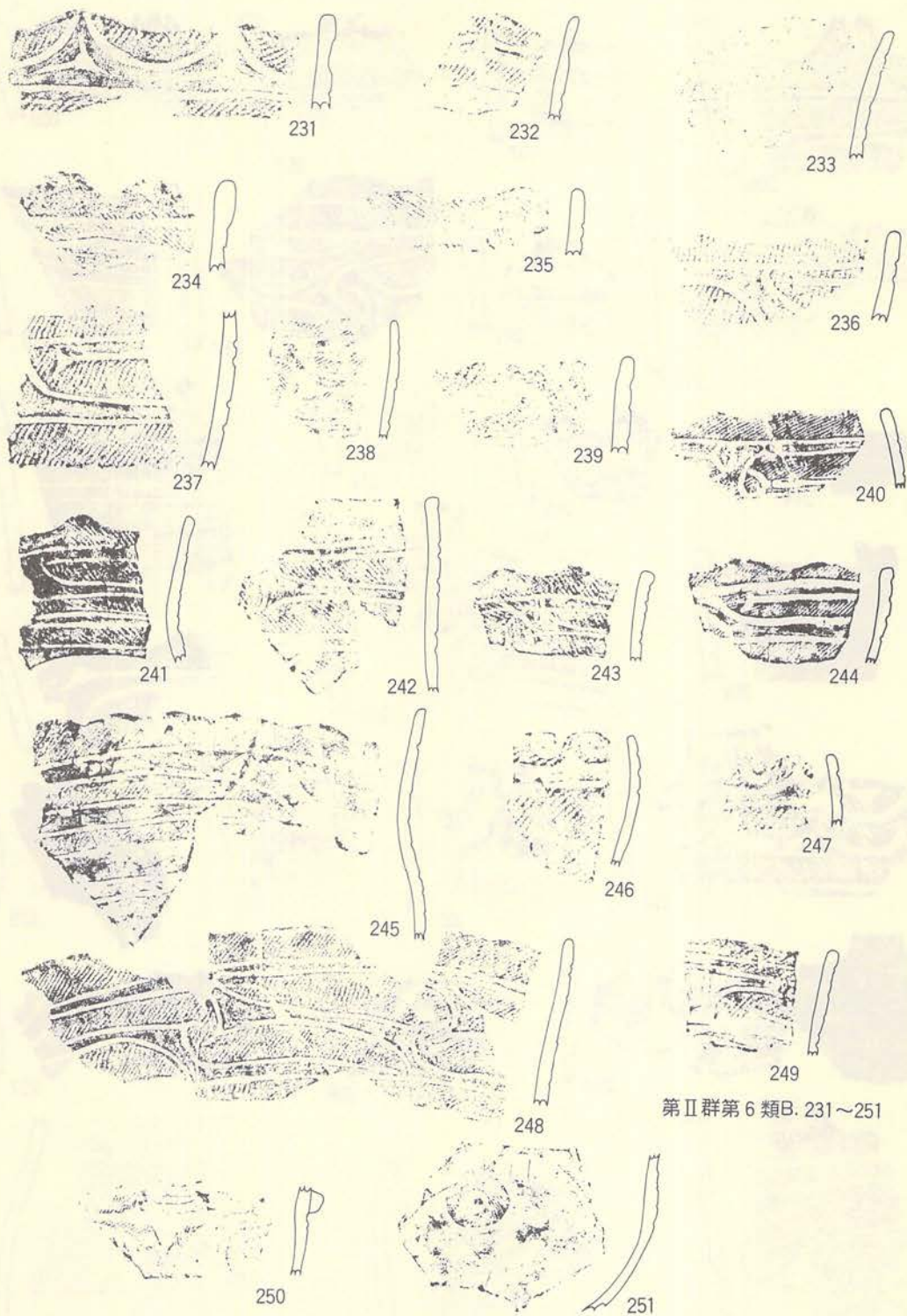
S-1/3

第34圖 遺構外出土遺物(15)



第II群第16類A. 206~230

第35圖 遺構外出土遺物(16)



第II群第6類B. 231~251

第36図 遺構外出土遺物(17)

あるが、破片のため詳細は不明である。これら土器片の地文は、すべて横位回転のLRかRLの単節斜縄文である。228～230は、203等と同じ器形と口縁部突起が施された深鉢の口縁部片と胴部片である。文様は魚眼状入組文が施文されている。地文はすべて横位回転のLRの単節斜縄文である。254と255は小型鉢型土器の完形および半完形品である。ともに口縁に刻み目の施された突起を有し、無文の器面に平行沈線文と三叉状入組文が施された土器である。なお、254のみには入組文内の一部に刻み目列文が施文されている。

B. 口縁部が小波状口縁と平縁を呈する土器（第36図—239～245、第37図—252・253、写真図版28—239～245、写真図版29—252・253）

252は、203等と同じ器形を呈すると思われる深鉢の口縁部片である。口縁部には入組文が施文されている。同様のものに234と235の深鉢の口縁部片がある。253も同様の器形を呈する小型深鉢の胴上部以上の破片である。頸部には2条の平行沈線が施され、その間は磨消され無文帯となっている。これは、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画するものと思われる。なお、両文様帯には三叉状入組文が施文されている。この土器片と同じ器形、文様を有する土器片に、241～244がある。231～233は波状口縁の頂部直下に三叉文が施された深鉢の口縁部片である。236～238は、細片のため詳細について不明であるが、おそらく入組文の左右に三叉文が施されたと思われる深鉢の口縁部片である。239と240は魚眼状入組文が施された鉢形土器の口縁部片である。同じように246と247も口唇部直下に魚眼状入組文が施された鉢形土器の口縁部片である。245は205と同じ器形、および文様が施された深鉢の口縁部片であるが、口縁部が波状口縁を呈する点が異なるのみである。248と249は、ともに平縁でわずかに外傾する深鉢の口縁部片である。文様是三叉状の入組文が施されている。250と251は、同一個体片と思われる壺型土器か注口土器の頸部片と胴部片である。魚眼状の入組文が施文されている。この土器片と245の土器片は、精製された粘土を利用し、焼成も良く、器質も非常に良くしまっている。なお、本種の土器片の地文はすべて横回転のLRかRLの単節斜縄文である。

(3). 第Ⅲ群土器

本群は縄文時代晩期に属する土器群である。本遺跡から出土した土器の中で、後期に次いで出土量が多かった土器群である。その出土した土器は、前に述べた通りの状況から大半が破片である。時期は、初頭から末葉までの晩期全般にわたって出土しているが、特に初頭から中葉にかけてのものが最も多い。器形は深鉢、浅鉢、鉢、皿、台付、壺形土器、注口土器、片口土器等が出土している。なお、本群の出土土器を大洞式の分類を参考にして6区分に細分した。

① 第1類

本類は三叉文と魚眼状を含んだ入組文を主体文様として施文された土器で、大洞B式に相当すると思われるものを一括した。器形は、破片のため明確に把握することができないが、深鉢と鉢形土器、注口土器と思われるものが出土している。平縁のものがわずかにみられるが、大半が小波状口縁を呈するものばかりである。その文様の特徴によってA・Bの2種に細分した。

A. 三叉文を有する土器 (第37図—256・257、第39図—266～282・285、写真図版29—256・257、写真図版31—266～282・285)

すべての土器片が口縁部のみに文様帯を有し、胴部文様が地文の所謂半精製土器と呼ばれるものばかりである。256と257は小波状口縁で、直立気味を呈する深鉢の胴上部以上の破片である。文様は、ともに頸部に2条の平行沈線文を施して口縁部文様帯と胴部を区画している。口縁部の文様は、無文研磨した面に三叉文を沈刻しており、胴部には横位回転の単節斜縄文(LR)のみが施されている。これらと同様の文様を有するものに266～276、278～282がある。これら土器片の中で、268と269の頸部に施された平行沈線間に刻み目が施文されていることと、274～276は胴部も全面研磨されていることが他と異なる。また、器形は274～276と282が鉢形土器の口縁部片である以外すべて深鉢の口縁部片である。地文は、大部分が横位回転の単節斜縄文(LR)である。なお、285は三叉文から羊歯状の文様に変化する過渡期のものが施された浅鉢形土器と思われるものの口縁部片である。内面にも曲線的隆線による文様が施されている。

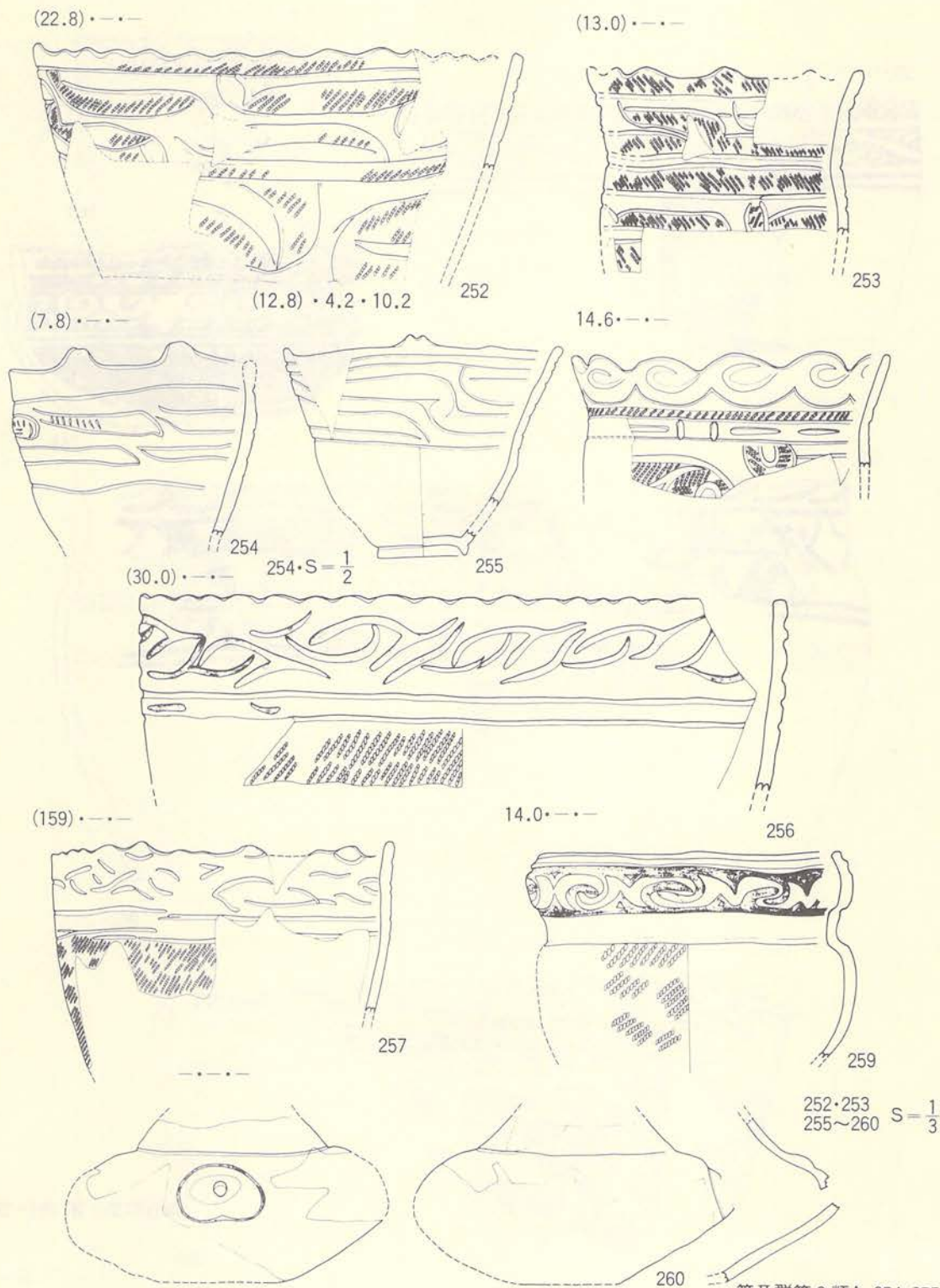
B. 入組文が展開される土器 (第37図—258～260、第39図—277・283・284、写真図版29—258～260、写真図版31—277・283・284)

すべて魚眼状を含んだ入組文が施された土器である。258と259は鉢形土器の胴上部以上の破片である。口縁部は、258が波状口縁を呈し外反するのに対し、259は平縁で頸部がくぼみ、内湾するものである。258の文様は、頸部に平行沈線によって口縁部と胴部の文様帯を構成している。口縁部文様は、波状口縁の頂部の無文研磨した面に魚眼状の沈刻文が施されており、胴部には魚眼状の入組文が施文されている。259は、口唇部直下に2条の平行沈線文が施され、その下位の無文研磨された部分に沈刻による魚眼状の入組文が施文されている。なお、胴部文様は横位回転の単節斜縄文(LR)のみが施されている。これらと同じ文様が施された土器に277の鉢形土器の口縁部片と283と284の深鉢の口縁部片、胴上部片がある。地文はすべてLRの単節斜縄文(横位回転)である。なお、A、Bに属さない無文の注口土器(260)1点が出土している。器形等から同時期のものと思われる。

②. 第2類

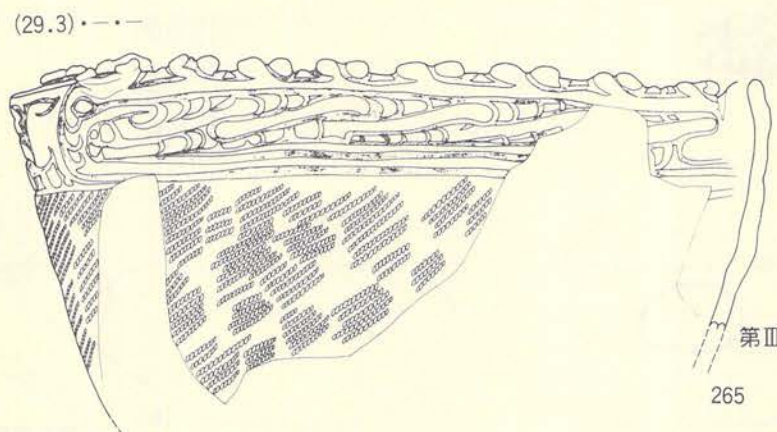
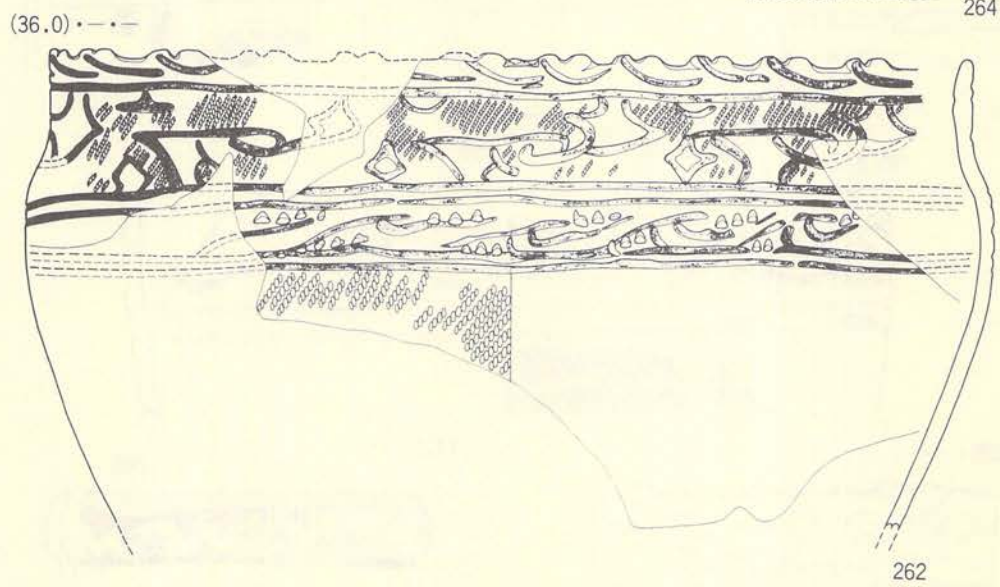
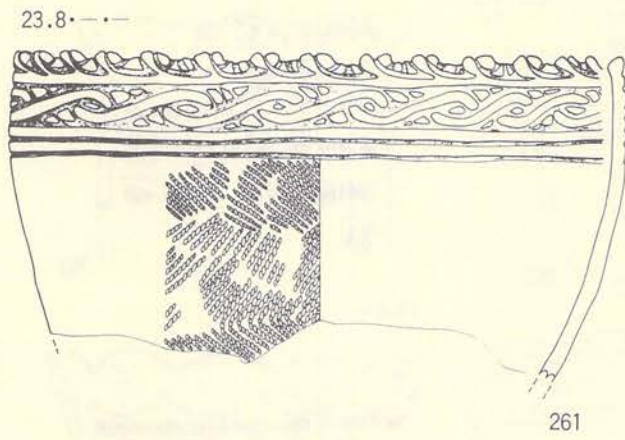
(第38図—261～265、第39図—286～295、第40図—296～320、第42図—321～323、写真図版30—261～265、写真図版31—286～295、写真図版32—296～320、写真図版33—321～323)

本類は、羊歯状文を主体文様とした土器で、大洞B—C式に相当すると思われるものを一括



第37図 遺構外出土遺物(18)

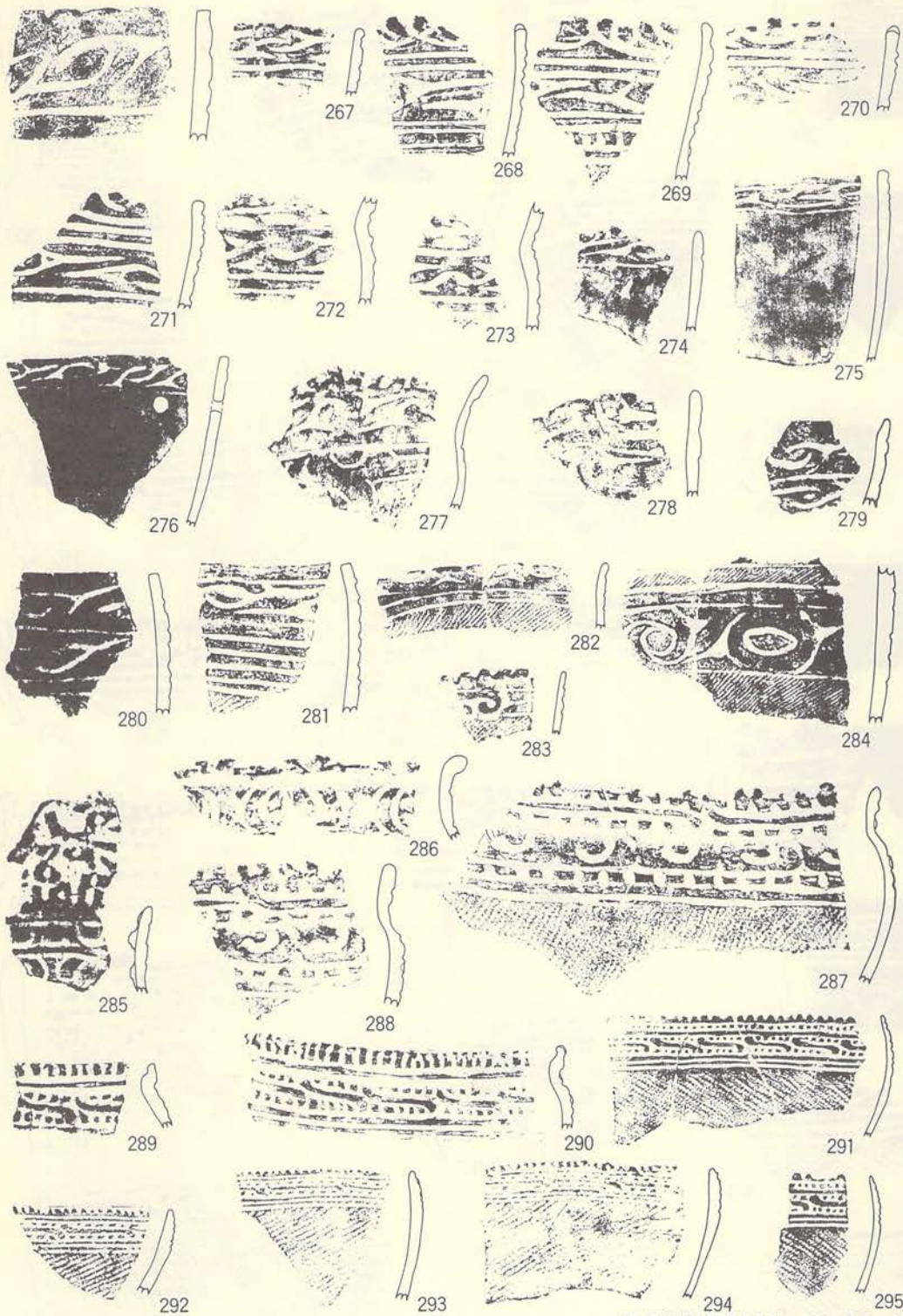
第Ⅱ群第6類A. 254·255
B. 252·253
第Ⅲ群第1類A. 256·257
B. 258·260



第Ⅲ群第2類 261~265

第38図 遺構外出土遺物(19)

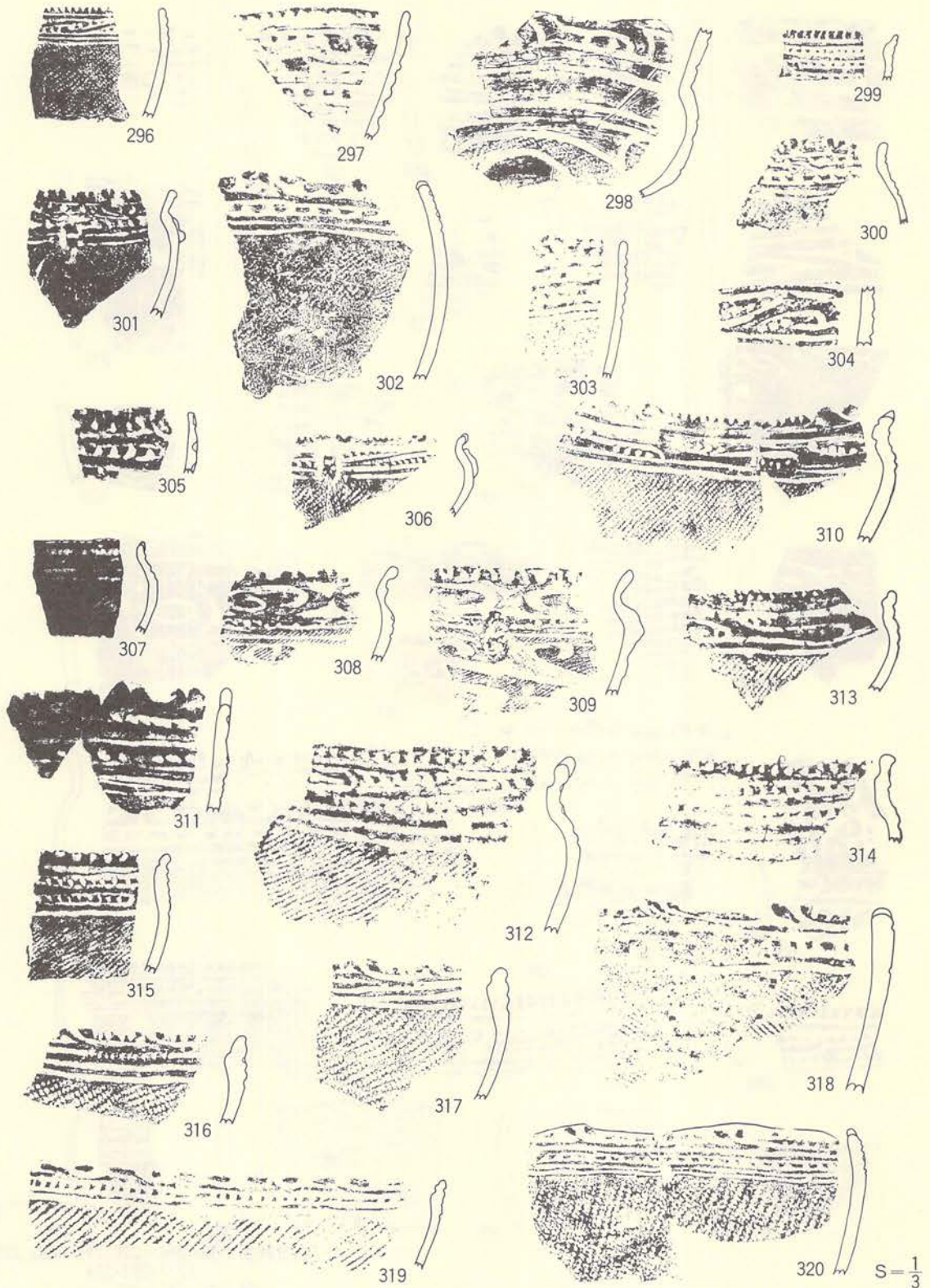
S = 1/3



第Ⅲ群第1類 A 266~276, 278~282, 285
 B 277, 283, 284
 第2類 286~295

$S = \frac{1}{3}$

第39図 遺構外出土遺物(20)



第40図 遺構外出土遺物(21)

第三群第2類296~320

した。器形は、深鉢が大半を占めるが、鉢、浅鉢、片口注口、高台付土器等もわずかながら出土した。261～265・321・322は、完形および半完形品の土器で、261と262が深鉢、263が鉢、264が浅鉢、265が片口注口土器、321と322が高台付土器、323が台付土器の台部である。261～322の口縁部には、すべて2個1対の小突起が施されており、その間に刻み目状の小波状が施されているもの(263、321、322)と平縁なもの(264)がみられる。文様は、262の深鉢の口縁部の一部に狭い範囲で横位に入組状の磨消縄文が施されていることと、264の浅鉢の胴部に所謂、太腿骨文と呼ばれる磨消縄文が施されている以外、すべて頸部を挟んで口縁部と胴上部にだけ羊歯状文が施された土器である。なお、321～323の台部にはそれぞれ次のような特徴がみられる。321の胴上部と胴下部にそれぞれ1条の刻み目文が巡らして無文帯を形成し、最下部に地文が施されている。322は321とほぼ同じであるが、321にみられる無文帯に沈線とすかしが施されているのが異なる。323は刻み目が施されておらず、胴上部は無文、下部には羊歯状文が施文されている。これら土器の地文は、261に羽状縄文(LR+RL)が施されている以外、すべてLRの単節縄文である。回転方向は大部分が横位であるが、一部に斜めのものもみられる。なお289～307もほぼ同様の文様を有した深鉢、鉢、浅鉢と思われるものの口縁部片である。286～288は、魚眼状の名残が口縁部に残るものであり、308と309は「K」字状の沈線文が口縁部に施されたものである。また、301、306、309には瘤状の小突起が胴上部に施されている。地文は、LRかRLの単節縄文で、回転方向は縦位と横位のものがみられる。

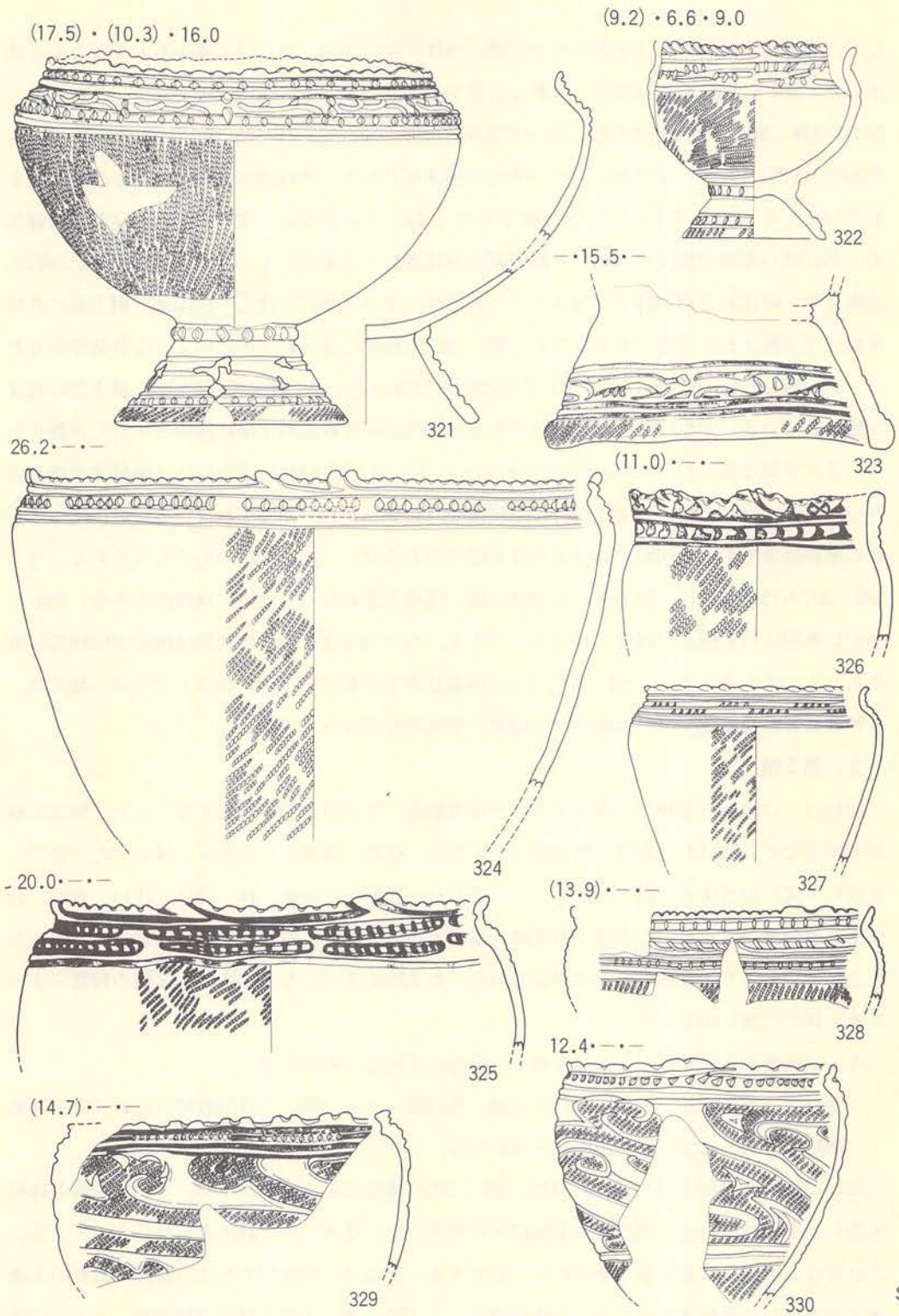
③. 第3類

本類は、口縁部の文様が羊歯状文から平行沈線文、刻み目文等に変化することと、胴部文様が雪形文などと呼ばれる縦横に磨消縄文が変化し、複雑に展開した文様を主体とした土器で、大洞C1式に相当すると思われるものを一括した。器形は、深鉢、鉢、浅鉢、注口、壺形、台付土器等である。また、本遺跡で第III群に属するものの中で、第4類とともに最も多く出土した土器群でもあり、完形品(半完形品も含む)も比較的多い。なお、本類を文様の特徴によってA、Bの2種に細分した。

A. 口縁部および頸部に文様帯を有し、胴部には地文のみの土器

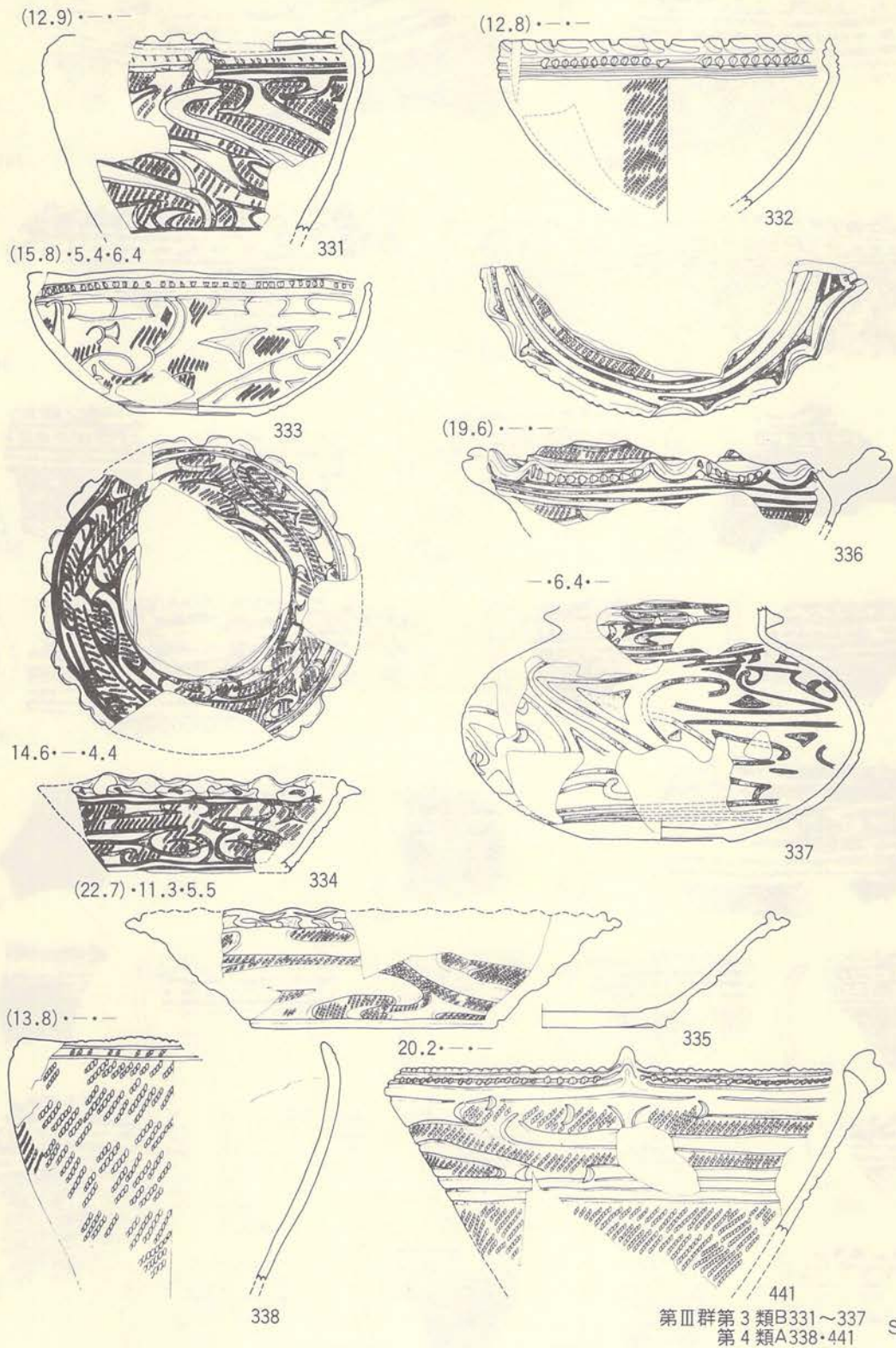
(第41図—324～328、第43図—340～368、第44図—369・370、写真図版33—324～328、写真図版35—340～368、写真図版36—369・370)

324～328の半完形土器と、310～320、340～370の破片にみられるように、すべて深鉢と鉢形土器にかぎられている。332は、胴下部以下を欠失しているが、台付鉢と思われるものである。これらは、所謂半精製土器と呼ばれる土器である。文様は、口縁部または口頸部に前類の羊歯状文が退化して平行沈線化したその沈線間に1～3段に渡って刻み目文が施され、さらに口唇部分に小突起が施されている土器群である。胴部は地文のみで、352以外すべて横位回転でRL

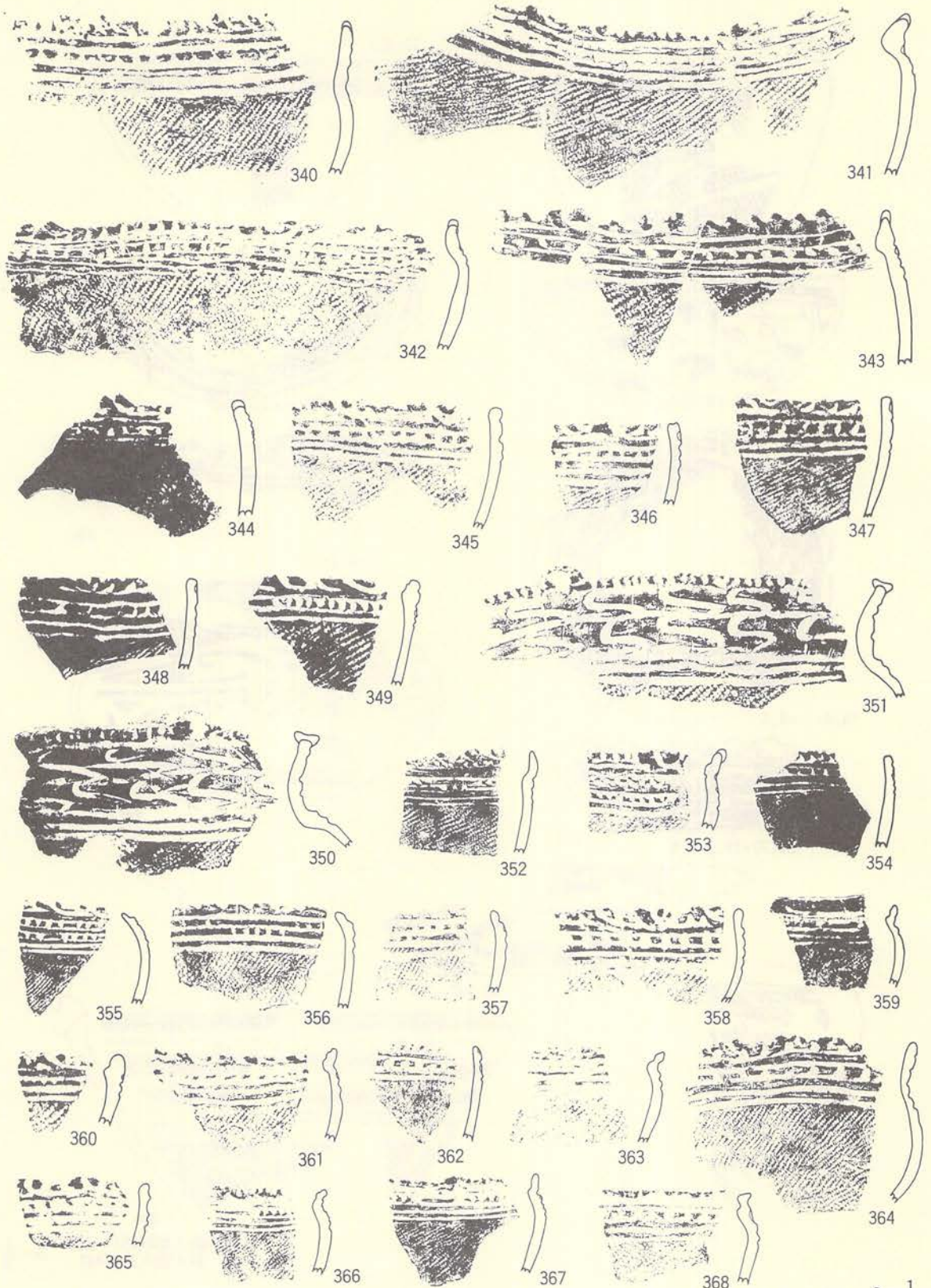


第Ⅲ群第2類321~323
第3類A324~328

第41図 遺構外出土遺物(22)



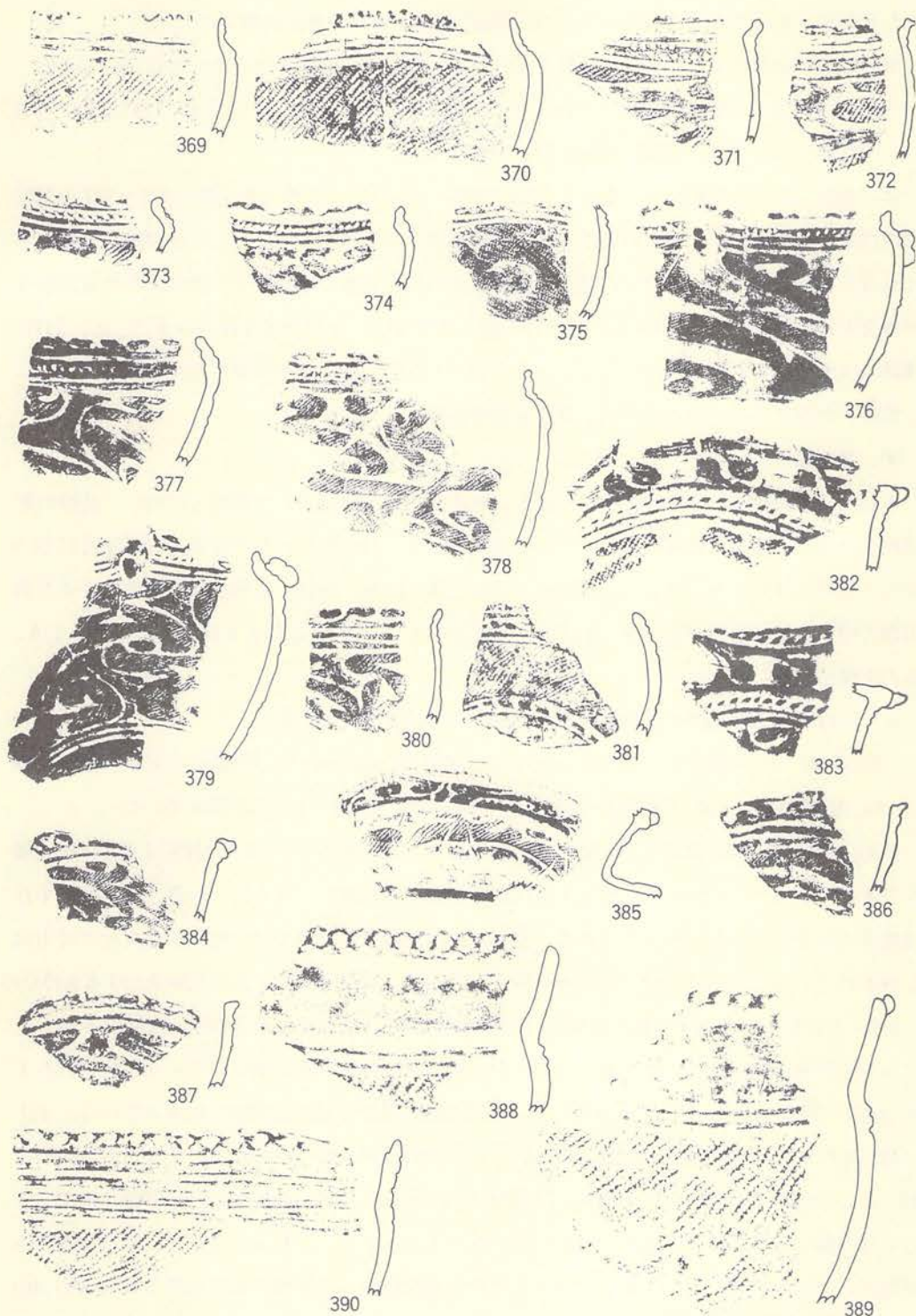
第42図 遺構外出土遺物(23)



第43図 遺構外出土遺物(24)

第Ⅲ群第3類A340~368

S = 1/3



第Ⅲ群第3類A369・370
 第3類B371～387
 第4類A388～390

S = 1/3

第44図 遺構外出土遺物(25)

かLRの単節斜縄文が施されている(352は縦位回転でRLの単節斜縄文)。

B. Aの口縁部および口頸部文様帯を有し、さらに胴部に磨消縄文が施文されている土器
(第41図—329~330、第42図—331~337、第44図—371~387、写真図版33—329・330、写真
図版34—331~337、写真図版36—371~387)

鉢(329~331)、浅鉢(333~335)、注口(336)、壺(337)の半完形土器と371~387の同器
形の口縁部~胴部破片にみられるように比較的小型の土器である。これらは所謂精製土器と呼
ばれるものであろう。文様は、口縁部および頸部以外の胴部に磨消縄文による浮彫的な雲形文
が施文されている。なお、331と376、379の胴上部に瘤状の突起が施されていることと、334の
浅鉢には朱塗りが行なわれていること、また、337の壺形土器は良く研磨された器面に沈刻によ
る雲形文が施文されているのが他と異なる点である。

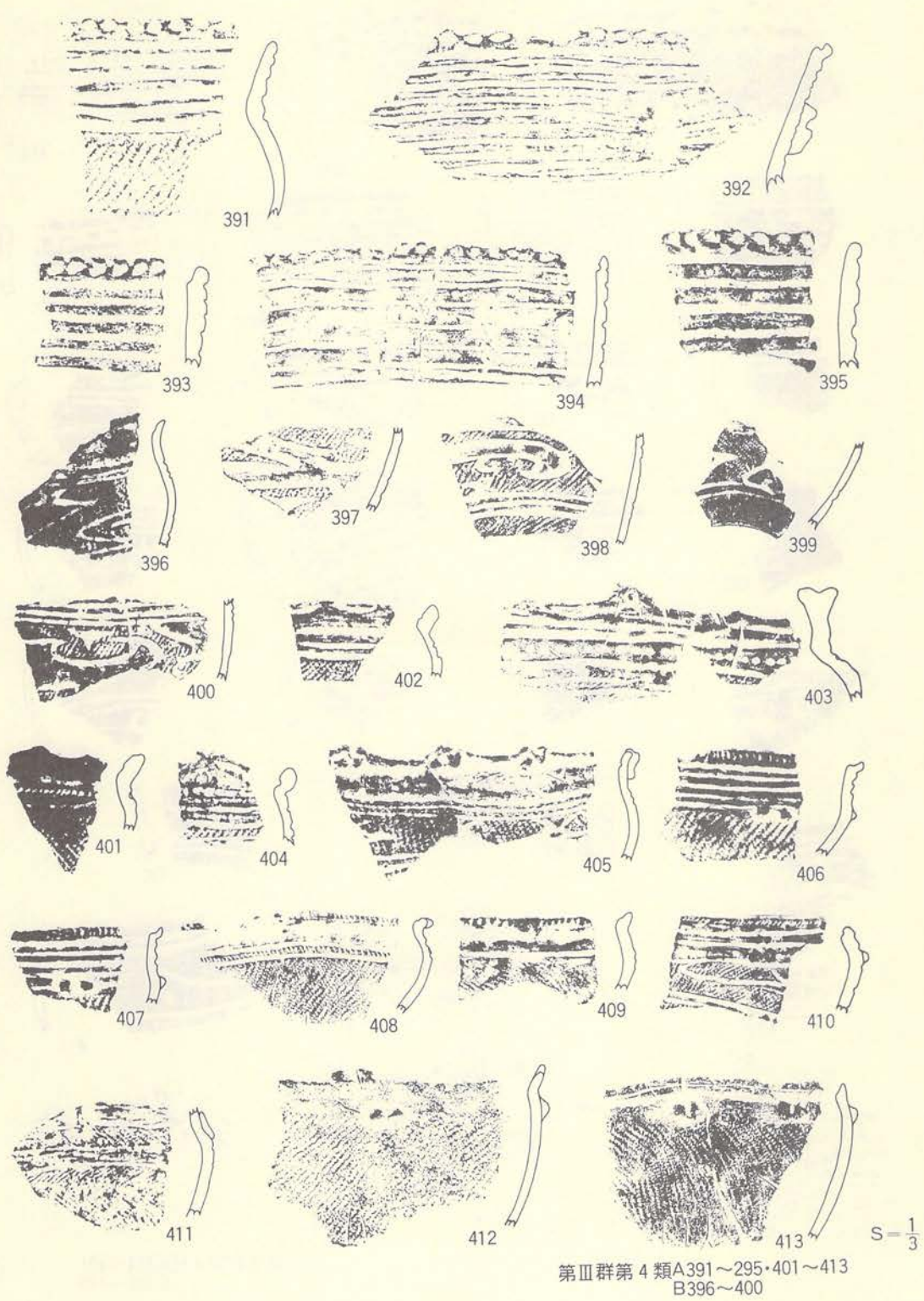
④. 第4類

本類は、羊歯状文の名残が完全に消滅し、わずかに刻み目文として残ると同時に、曲線の磨
消縄文から平行沈線文に置き換えられていく様相を示す文様が施された土器で、大洞C₂式に相当
すると思われるものを一括した。器形は、深鉢、鉢、浅鉢、台付、壺形土器等である。また第
III群の中で、第3類とともに多く出土した土器群である。なお、本類を文様の特徴によってA、
Bの2種に細分した。

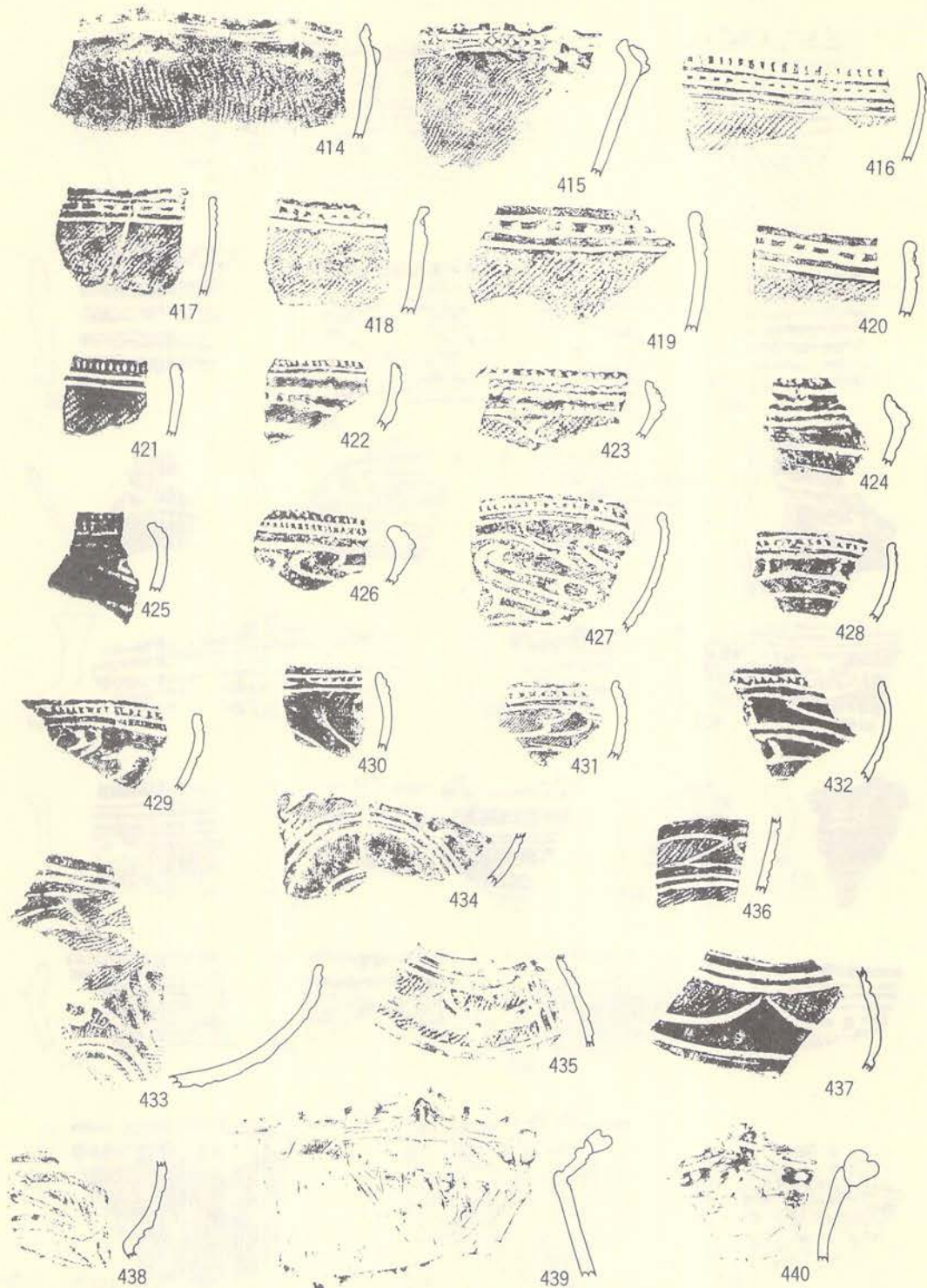
A. 口縁部および頸部に文様帯を有し、胴部には地文のみの土器

(第42図—338・441、第43図—340~368、第44図—369~390、第45図—391~395・401~413、第46図—414~421、写真図版34—338
441、写真図版35—340~368、写真図版36—369~390、写真図版37—391~395・401~413、写真図版38—414~421)

338と441の半完形の鉢形土器と388~395の深鉢の口縁部片と401~421の鉢形土器が本種に属
するものである。338と441は、内湾する口縁部に刻み目を施し、さらにその直下に2条の平行
沈線文のみが施された鉢形土器である。なお、平行沈線上に2個1対の瘤状の小突起が縦方向
に施されている。388~395は、頸部から外反するもの(388~392)と直立気味を呈するもの(393
~395)とがある。すべて口唇部に刻み目が施されているが、頸部に2条の平行沈線文が施され
ている以外無文帯となるもの(388、389)と、その無文帯に平行沈線文が5~9条施されたも
の(390~395)とがある。なお392のみは、441同様の瘤状突起が沈線上に施されている。401
~421はすべて鉢形土器の口縁部片であるが、口縁部の器形に種々みられる。すなわち、山形突
起を呈し外反するもの(401~405)、平縁で外反するもの(406~409・412)、平縁で内湾、若
しくは内傾するもの(410・411・413~421)等である。また、これらの文様は、平行沈線のみ
が施されたもの(402・413・414)、さらにその沈線間に刻み目が施されたもの(401、403、404、
415~420)、口唇部に刻み目が施され、その直下に平行沈線文のみが施文されているもの(406
~411)、口唇部に2個1対の瘤状突起が施され、口縁部が無文帯となるもの(412)等がある。



第45圖 遺構外出土遺物(26)



第Ⅲ群第4類A414~421
B422~440

S = $\frac{1}{3}$

第46圖 遺構外出土遺物(27)

また、406、407、410～415には沈線上若しくは胴上部に2個1対の瘤状突起が施されている。なお、338、441、388～395、および401～421の地文は大半が横位回転のLRかRLの単節斜縄文である。

B. Aと同様の口縁部および口頸部文様を有し、さらに胴部には雲形文から工字文、平行沈線文への移行する要素をうかがわせるようなや、平行線化した磨消縄文が施文された土器

(第45図—396～400、第46図—422～440、第47図—339・442～444、写真図版37—396～400、写真図版38—422～440、写真図版39—339・442～444)

鉢(339)と浅鉢(442～444)の半完形土器と鉢(397～400、422～426)、浅鉢(427～434)および壺形土器(435～440)の破片が本種に属するものである。口縁部は、396以外すべて内湾若しくは「く」字状内傾するもので、その口縁に刻み目状の刺突列文が1～3条巡らされ、さらに胴部には雲形文が大きく横へ流れ、平行線化した磨消縄文が施されている。特に434～438の壺形土器の胴上部片の文様は、平行沈線を直線と弧線とで区切った磨消縄文が施されたものであり、次の段階の工字文への過渡的様相を呈している。439と440は「く」字状に外傾する壺形土器の口縁部片で、無文研磨されたものである。これら土器の地文は大部分が横位回転のLRかRLの単節斜縄文である。

⑤. 第5類

(第47図—445～453、第48図—454～463、写真図版39—445～453、写真図版40—454～463)

本類はほとんど平行する直線によって文様が構成され、所謂工字文が主体的文様として施された土器で、大洞A式に相当すると思われるものを一括した。器形は、深鉢(445)、鉢(446～448、451、454～463)、浅鉢(449、452、453)、壺形土器(450)のものが出土した。口縁部は平縁なもの、山形突起を呈するもの(446～448・463)があり、さらに451以外すべて外反若しくは外傾するものばかりである。文様は口縁部から胴上部にかけて研磨された器面に平行沈線のみが施されたもの(446、454～458)、その沈線間にさらに刻み目が施されたもの(448、450)、「π」字工字文および逆「π」字工字文が施されたもの(445、448、449、450～453、459、46460)、太い重ね描き沈線で浮き出しにした擬似工字文が施されたもの(461～463)等がみられる。また、口縁に刻み目が施されているものが大部分である。これらの半完形土器および土器片の中で地文を有するものは横位と斜位回転のLRかRLの単節斜縄文である。

⑥. 第6類(第48図—464～472、写真図版40—464～472)

本類は、工字文の端にあたる平行沈線の一部に2個ずつの粘土粒がはりつけられた土器で、大洞A'式に併行すると思われるものを一括した。晩期の土器群の中で最も出土量が少なく、また破片ばかりである。出土したのは鉢形土器と思われるものの口縁部片で、山形状の波状口縁を呈するもの(464～469)と平縁のもの(470～472)がみられる。文様は、重ね描き沈線で浮

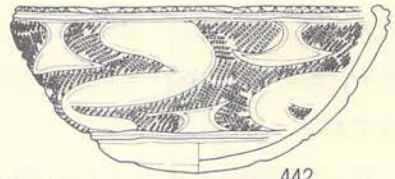
12.6 · · ·



(20.8) · · ·

339

14.4 · · · 6.5



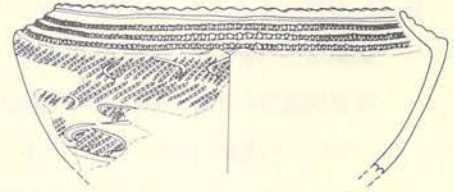
17.0 · · ·

442



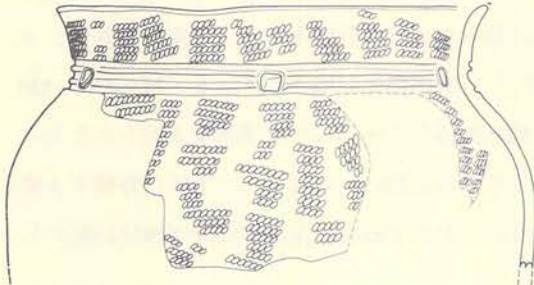
17.0 · · ·

443



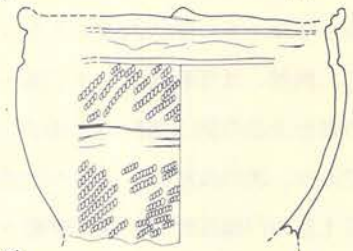
(12.5) · · ·

444



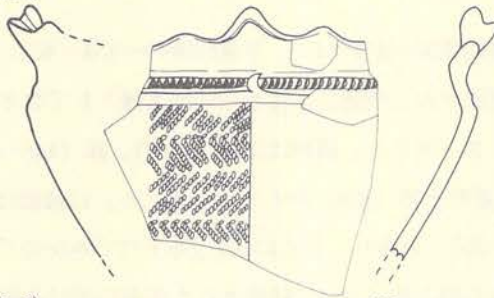
(17.4) · · ·

445



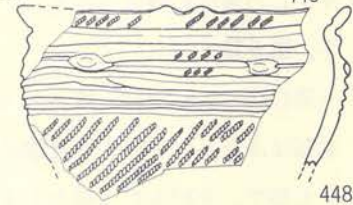
(13.2) · · ·

446



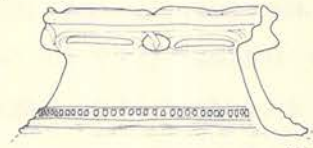
(18.8) · · ·

447

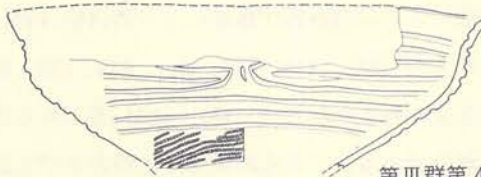


448

5.7 · · ·



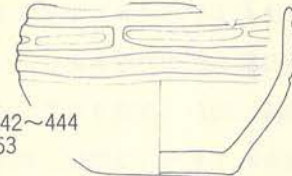
450



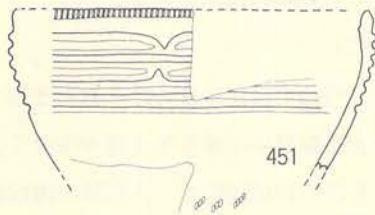
(14.0) · · ·

449

(7.0) · 3.8 · 4.6

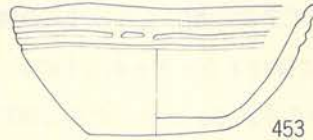


452



451

8.2 · 2.1 · 3.4



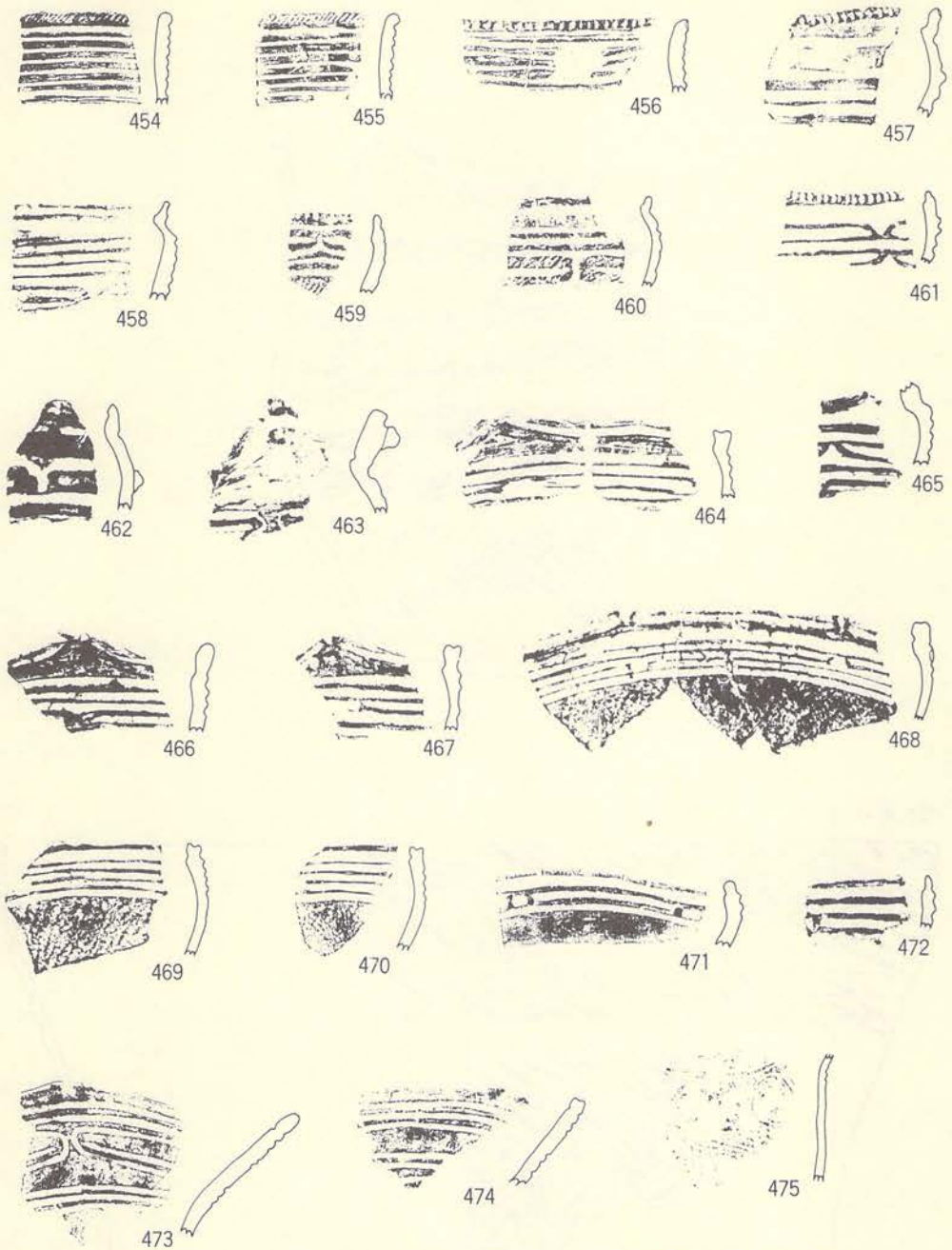
453

339 · 442 ~ 449 · 451 · S = $\frac{1}{3}$

450 · 452 · 453

S = $\frac{1}{2}$

第47図 遺構外出土遺物(28)

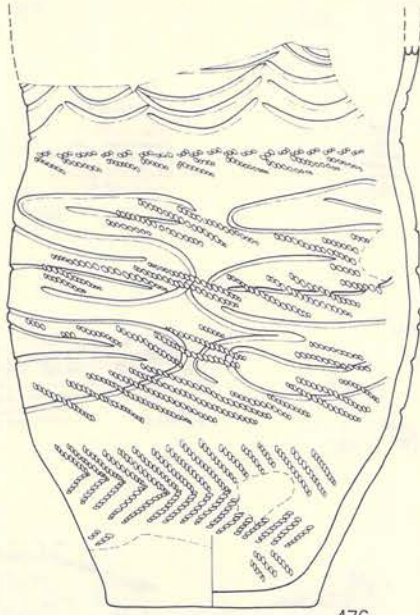


第Ⅲ群 5類 454~463
 第Ⅲ群 第5類 454~463
 第6類 464~472
 第Ⅳ群 第1類 473~474
 第2類 475

$S = \frac{1}{3}$

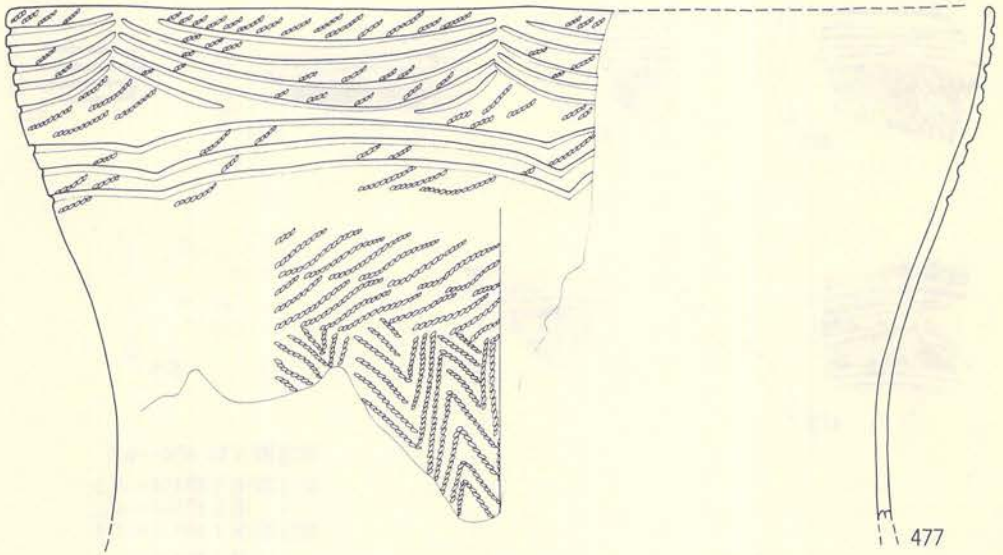
第48圖 遺構外出土遺物(29)

—5.5—



476

(25.8) · · · · ·



477

第IV群第2類476・477

S = $\frac{1}{2}$

第49図 遺構外出土遺物(30)

き出しにした工字文が施されており、その沈線の一部に2個ずつの粘土粒がはりつけられている。468～470の地文は横位回転のLRの単節斜縄文である。

(4) 第Ⅳ群土器

本群は弥生時代に属する土器である。その出土類は半完形土器2個体と数片の土器片のみである。その諸特徴から2区分に細分した。

①. 第1類 (第48図—473・474、写真図版40—473・474)

本類は、東北地方北部で谷起島式と呼ばれる土器に併行するもので、わずかに2片(473・474)の土器片が出土している。473と474は、ともに浅鉢の口縁部片である。文様は、研磨した器面に沈線によって変形工字文が施文されており、さらに内面にも1条の平行沈線文が施されている。

②. 第2類 (第48図—475、第49図—476・477、写真図版40—475、写真図版41—476・477)

本類は、弥生時代末葉の天王山式土器に併行すると思われる土器で、完形および半完形土器2個体(476・477)と土器片1片(475)のみが出土した。476と475は鉢、477は深鉢である。口縁部で外反する器形を呈する。文様は、器面を研磨した後に不整撚糸文を施し、さらに沈線文が連弧状に施文されている。その沈線文は、476が器面全体に、477と475は口縁部のみに施されており、焼成も良好で非常に精巧な薄手の土器である。

(5) 第Ⅴ群土器

第Ⅱ群および第Ⅲ群土器に併行すると思われる粗製土器を一括した。器形は、深鉢、鉢、台付鉢、壺形土器等である。この粗製土器の出土は膨大であり、ここでは復元した完形および半完形土器のみを図版に掲載し、破片は除外した。また、これらの粗製土器は前述した通りの出土状況のために、どの時期に属するのか、あるいは、時期決定しうる土器とどの様な共伴関係にあるのか不明である。従ってここでは、器種および器形、地文から以下5つのグループに分類した。

①. 第1類 (第50図—478～483、第51図—484～488、第52図—489、写真図版41—478・479、写真図版42—480～483、写真図版43—484～488、写真図版44—489)

本類は、平縁で外反する口縁部の深鉢を一括した。器形は胴部から外傾し、口縁部で外反するもの(478、489)、胴部が膨らんで頸部でしまり、それから外反するもの(479～483)、胴部からやや鋭角で立ちあがるもの(484～489)等がある。文様は、480・482の口縁部に平行沈

線文、478、479、481、489の口縁部が無文帯となっている以外はすべて口縁部から地文のみが施されている。地文は、網目状撚糸回転文のもの(478、479)、木目状撚糸回転文のもの(480)、横位および斜位回転のLRかRLの単節斜縄文のもの(481~485、488、489)、単節羽状縄文のもの(RL+LR)等である。

②. 第2類

本類は、平縁で直立、若しくは内湾する口縁部の深鉢を一括した。

A. 口縁部が直立気味を呈する土器(第53図—490、第54図—491~494、第55図—495~500) 490~500の比較的大型の深鉢である。大半が胴中央部からほぼストレート気味に口縁部まで直立するもので、器面全体に地文のみが施されている。地文はすべて横位回転のLRかRLの単節斜縄文である。

B. 口縁部が内湾するもの(第54図—501、第55図—502~507、第56図—508~513、第57図—514~517、写真図版46—501、写真図版47—502~507、写真図版48—508~513、写真図版49—514~517)

胴部が外反し、頸部から内湾するもの(501、505、506)と、胴中央部が膨らんでゆるやかに内湾するもの(502~504、507~517)とがある。地文は、A同様器面全体に地文のみが施されている。その地文は502と517が単節羽状縄文(LR+RL)、511がLRの無節縄文が施文されている以外、すべて横位回転のLRかRLの単節斜縄文である。

③. 第3類

本類は、小波状口縁を呈するものと、口唇部に瘤状の小突起が施された深鉢を一括した。

A. 小突起が施された土器(第59図—521・522)

521と522の深鉢の2個体である。ともに胴中央部がや・膨らみ、口縁部が内湾するものである。521は横位回転のLRの単節斜縄文が、522は口縁部に横位回転のRLの単節斜縄文、胴部に斜位回転のLRの単節斜縄文のみが施文されている。

B. 小波状口縁を呈する土器(第59図—523、第60図—524~529)

523~529の7個体である。523がや・直立気味を呈する以外、すべて胴中央部が膨らみ口縁部が内湾する。文様は、524が口縁部に無文帯を有する以外、すべて地文のみが施されている。その地文は、すべて横位回転のLRの単節斜縄文である。

④. 第4類(第57図—518~520、第60図—530~534・536~541、第61図—542・543、写真図版49—518~520、写真図版52—530~534・536~541、写真図版53—542・543)

本類は、粗製の鉢形土器(台付も含む)を一括した。口縁部が平縁で外反するもの(519、520、540)、平縁で内湾するもの(533、536~538)、小波状口縁で外反するもの(530、541)等がみられる。これら土器の文様は、530の口縁部に沈線文状のものが数条不整に施文されていることと、540の口縁部に無文帯が形成されている以外、すべて口縁部から胴部にかけて地文

のみが施されている。その地文は、横位回転のL rの無節縄文のもの(530、531)、横位回転でLRかRLの単節斜縄文のもの(518～520、536、537、540～543)、単節の羽状縄文のもの(LR+RL)(532、534、539)がある。なお、542と543は台付鉢の胴下部以下の破片である。543は、台部に粘土紐の貼り付けによる隆帯が巡り、その下位は無文帯となっている。

⑤. 第5類 (第61図—544～550、写真図版53—544～550)

本類は粗製の壺形土器を一括した。胴中央部が大きく膨らみ、頸部でくびれてから口縁部が外反するもの(544、547～549)と、頸部に明瞭なくびれが存在しないで、口縁部が内傾するもの(545、546、550)とがある。また、544のみは波状口縁を呈するが、それ以外はすべて平縁である。また、口縁部が外反するものはすべてその部分が無文帯となっている。なお、549のみには口唇部直下に帯縄文が存在するが、それ以外の土器は地文のみが施されている。地文は、545と546が単節の羽状縄文、544が縦位回転の単節斜縄文(LR)が施されている以外すべて横位回転の単節斜縄文(LR)が施文されている。

(6). 第Ⅵ群土器

無文研磨されただけの土器や小型土器、袖珍土器などを一括した。これらは第Ⅱ群土器と第Ⅲ群土器に伴うものと思われるが、前述した状況から詳細については不明である。これらを一応無文研磨土器と、小型土器、および袖珍土器に分けた。

1. 無文研磨土器

深鉢、鉢、浅鉢、皿、台付、壺形土器等が出土している。

a. 深鉢形土器 (第62図—551・552・556、写真図版54—551・552・556)

出土は551と552および556の3個体である。胴中央部以上を欠失しているため、全体の器形は不明である。

b. 鉢形土器 (第62図—553～555、写真図版54—553～555)

出土は553～555の3個体である。553は口縁部が平縁で胴中央部から直立する器形を呈するが、554と555は、胴中央部以上を欠失しているため全体の器形については不明である。

c. 浅鉢形土器 (第62図—557～561、写真図版54—557～561)

出土は557～561の5個体である。口縁部が平縁のもの(557～559)と小波状口縁を呈するもの(560、561)がみられる。しかし、これらはすべて外反気味を呈する点では共通する。

d. 皿形土器 (第62図—562、第63図—563・564、写真図版54—562、写真図版55—563・564)

出土は562～564の3個体である。562は、口縁部が平縁で複合口縁である。その複合口縁部分に棒状工具による刺突列文が巡らされている。また、563の底部はわずかに段が存在する。

e. 台付土器 (第63図—565～568、写真図版55—565～568)

台付浅鉢状のもの (565、566) と高台付鉢状のもの (567) が出土している。568は台部のみの破片である。

f. 壺形土器 (第63図—569～573、第64図—574・575、写真図版55—569～573、写真図版56—574・575)

出土は、569～575の7個体である。すべて平縁であるが、頸部がしまって口縁部が外反するもの (569、573～575) と、胴中部が大きく膨らんで、それからストレートに口縁部が内傾するもの (570、571)、頸部がしまって口縁部が内湾するもの (572) 等がある。なお、573の頸部直下に2個1対の瘤状突起が施されている。

2. 小型土器、袖珍土器

a. 小型土器 (第64図—576～580、写真図版56—576～580)

すべて小型の壺形土器で、5個体出土した。無文研磨されたもの (576、577) と縄文のみが施文されたもの (578～580) が出土している。578～580は、口縁部が無文帯となっており、胴部に地文のみが施文されている。地文は、578が斜位回転の単節斜縄文 (LR)、579が単節羽状縄文 (LR+RL)、580が横位回転の単節斜縄文 (LR) である。

b. 袖珍土器 (第64図—581～585、写真図版56—581～585)

所謂ミニチュア土器、手づくね土器等と呼ばれるもので、581～585の5個体出土した。すべて無文のものである。

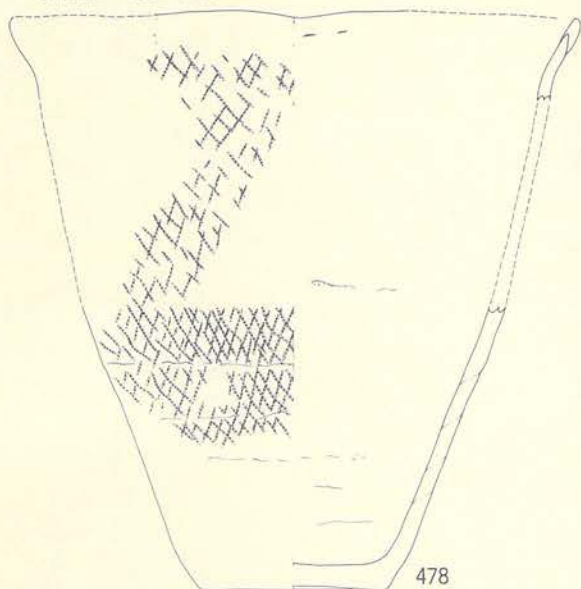
2. 土製品 (第65図—586～596、写真図版57—586～596)

出土した土製品は、わずかに11点のみである。種類は、滑車形耳飾り3点 (586～588)、耳栓1点 (589)、鐸状土製品の破片1点 (590)、香炉形土製品1点 (592)、キノコ形土製品1点 (593)、泥面子1点 (595)、名称不明の土製品3点 (591、594、596) である。これら土製品の中で、593の香炉形土製品は香炉形土器の冠の部分ではないかと思われる。また、名称不明の594と596は、それぞれ顔面把手付土器の顔面部分と、縄文時代後期の加曾利B式土器の口縁部に付く突起部分ではないかと思われるが、しかし詳細については不明である。

3. 石器

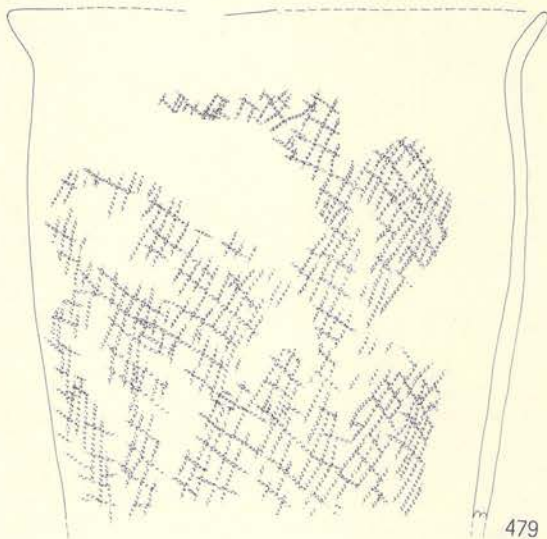
遺構外出土の石器は、石鏃、石匙、石錐、石筥状石器、スクレイパー、ノッチ、不定形石器、磨製石斧、砥石、石錘、半円状扁平打製石器、凹石、敲石、磨石、石皿等である。これらの出土した石器の特徴は、圧倒的に調理用具と云われる敲石、磨石、石皿および用途不明の凹石等

(30.0) · 9.8 · 30.3



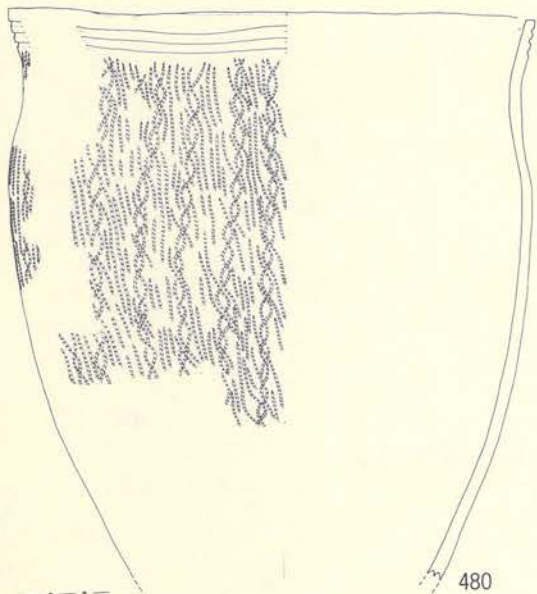
478

28.8 · · · ·



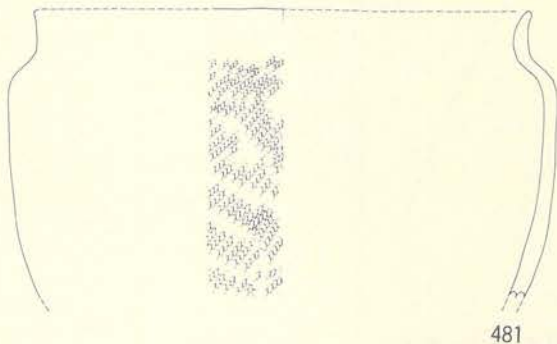
479

28.0 · · · ·



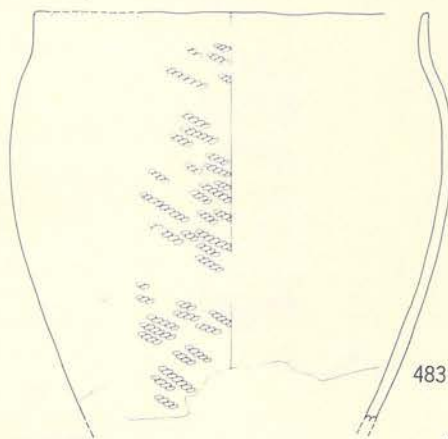
480

(26.0) · · · ·

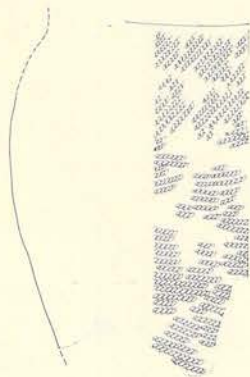


481

(18.5) · · · ·



483

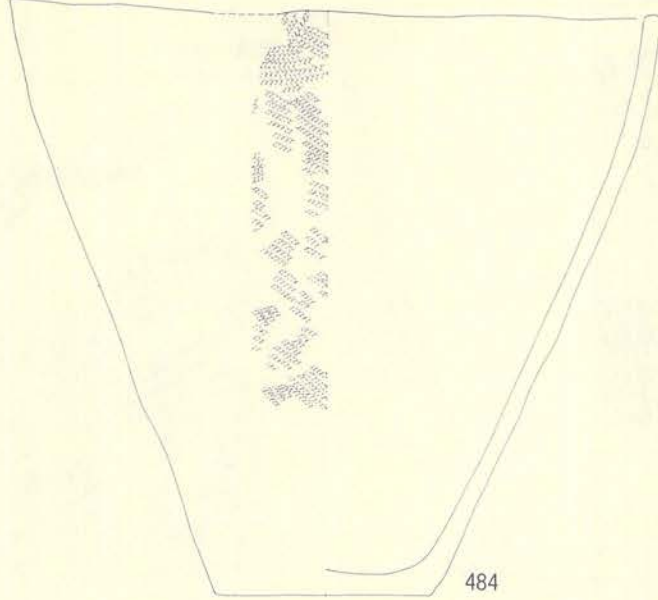


482

S = 1/4

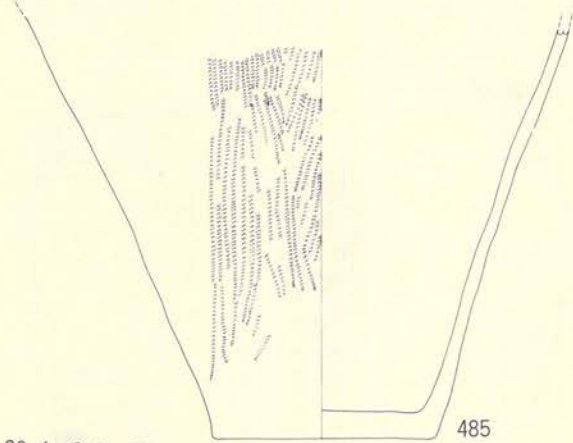
第50図 遺構外出土遺物(31)

34.7 · 11.2 · 30.7



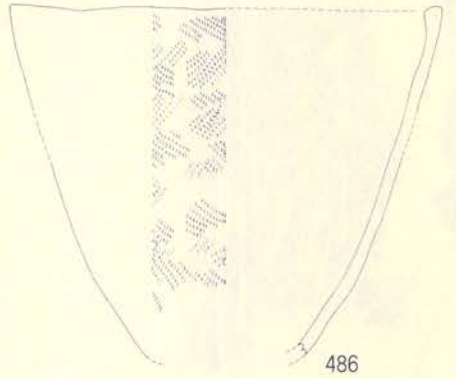
484

— 6.4 —



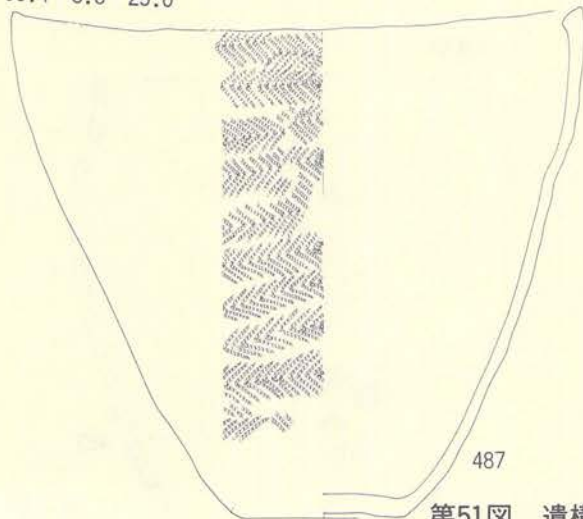
485

23.0 · — · —



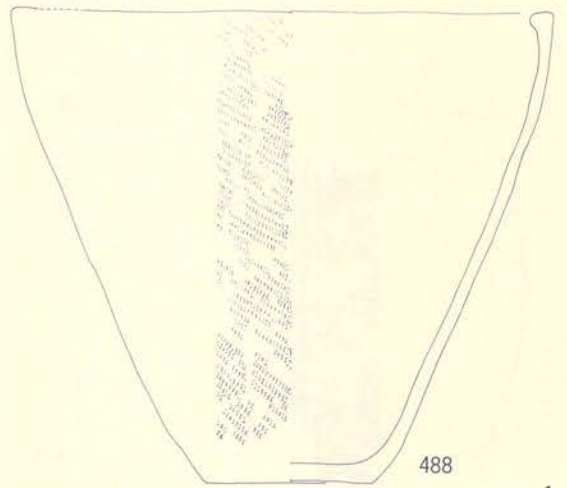
486

30.4 · 8.6 · 25.0



487

29.9 · 9.0 · 25.2

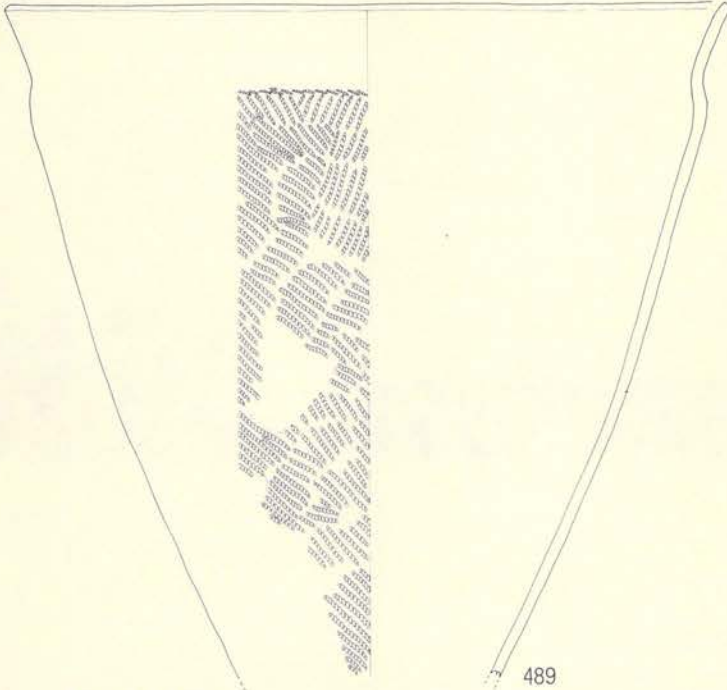


488

第51図 遺構外出土遺物(32)

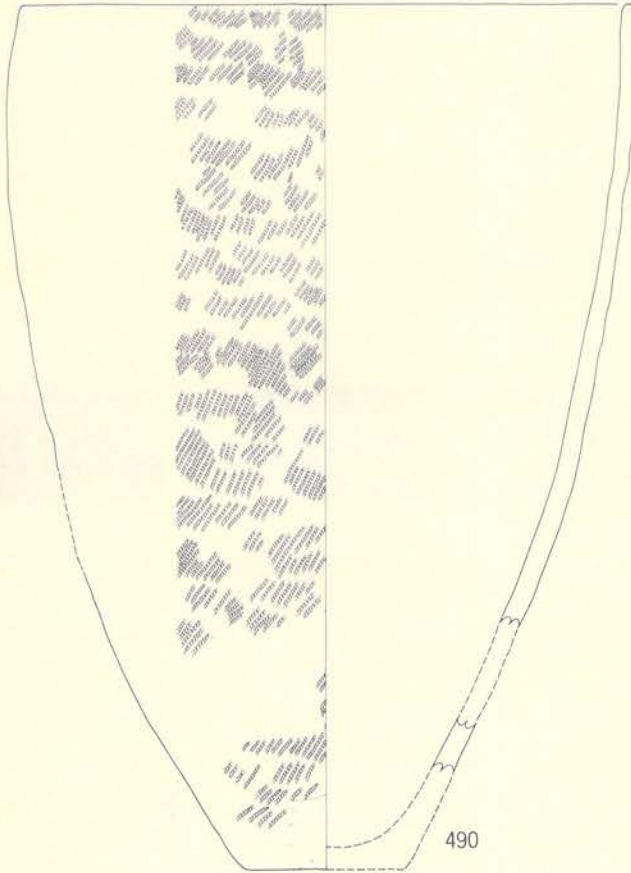
S = $\frac{1}{4}$

38.0 · · · ·



489

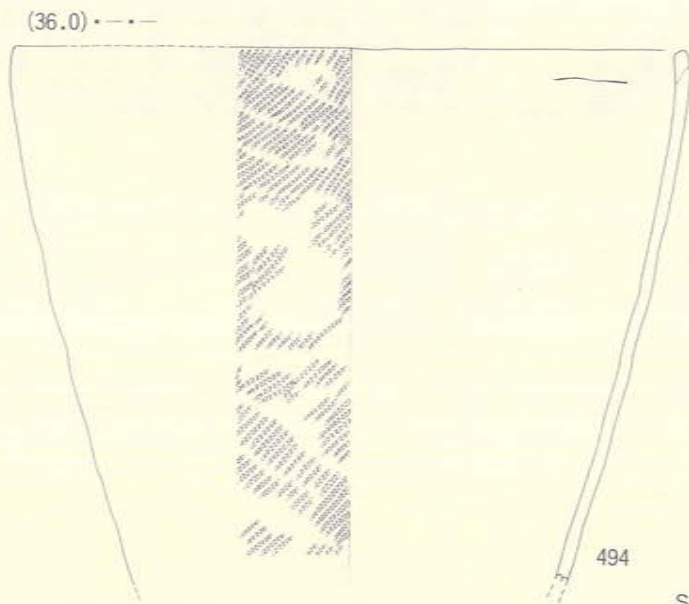
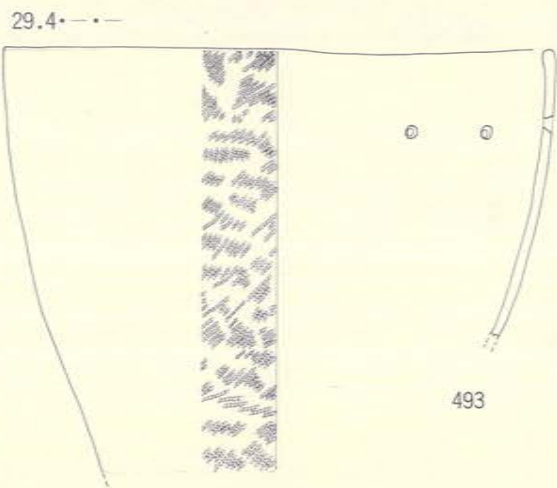
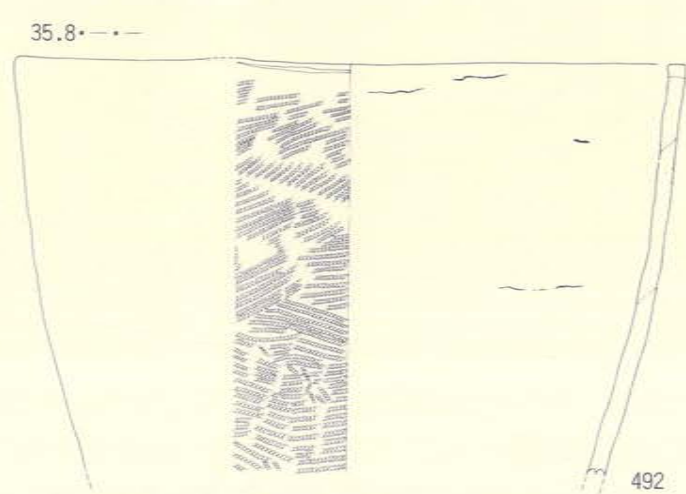
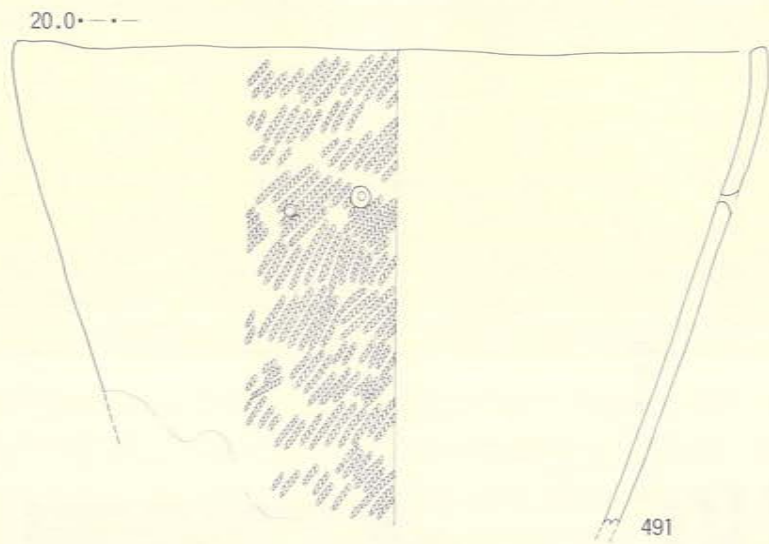
32.6 · 8.5 · 46.0



490

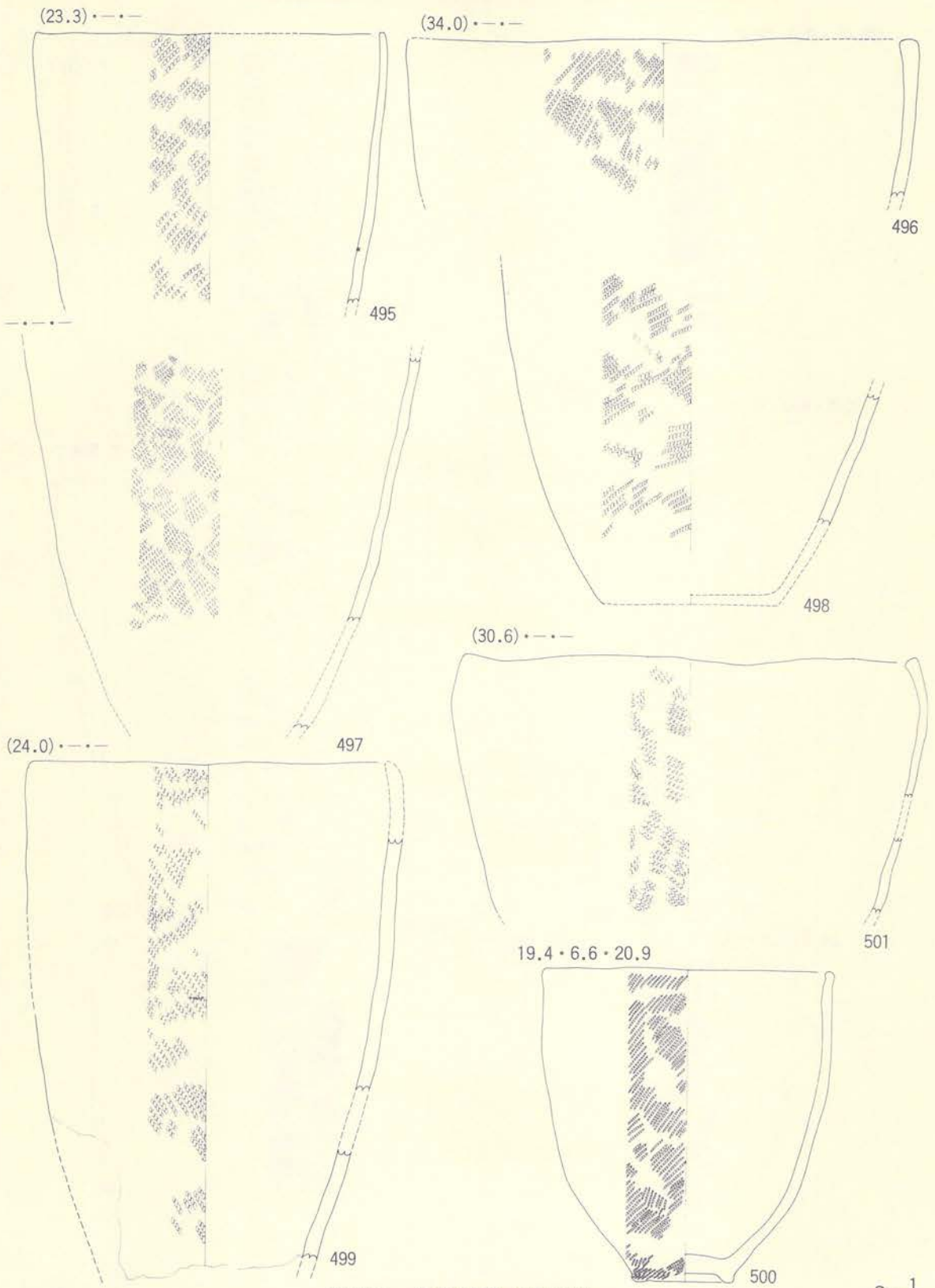
第52図 遺構外出土遺物(33)

S = $\frac{1}{4}$



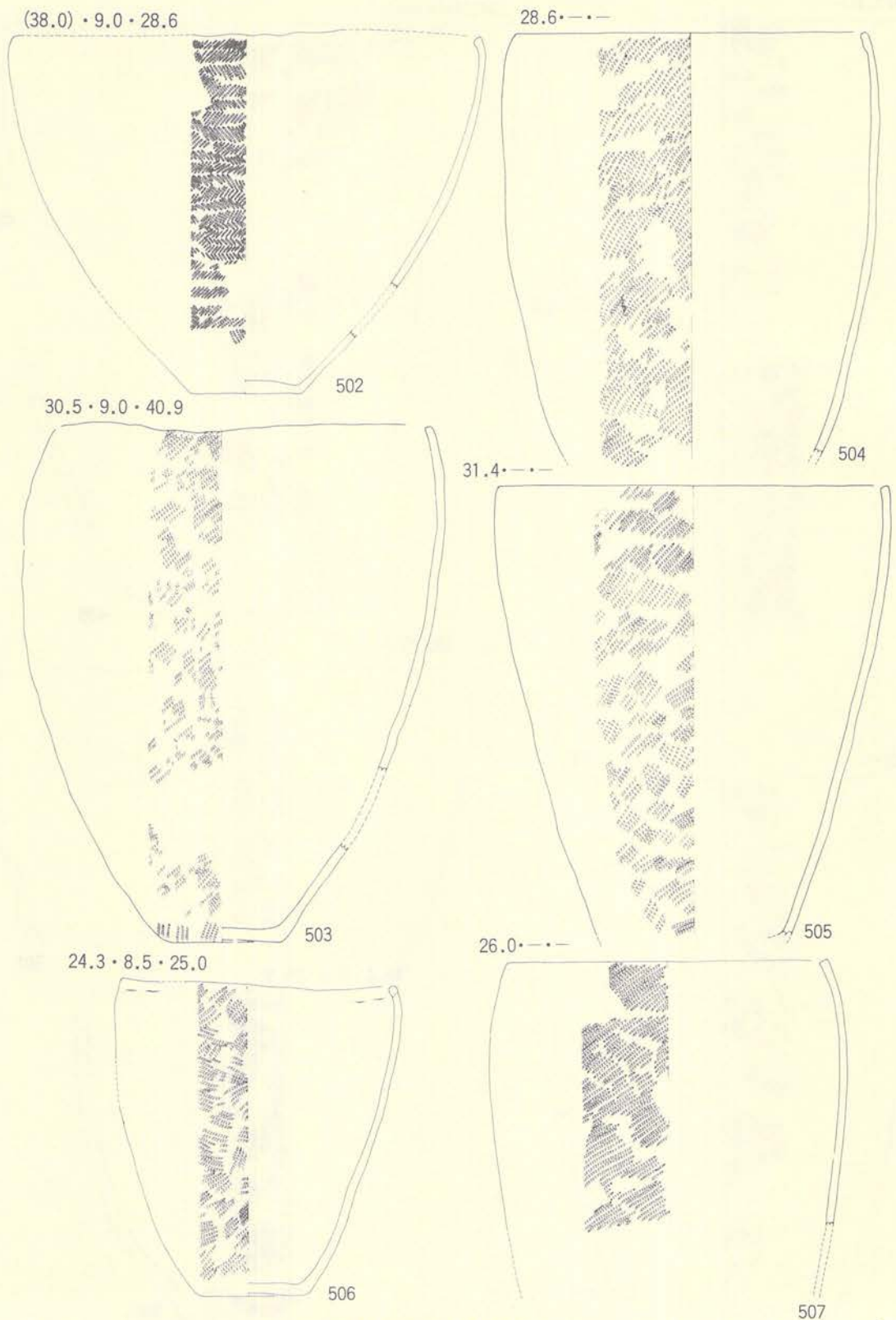
$S = \frac{1}{4}$

第53図 遺構外出土遺物34



第54図 遺構外出土遺物(35)

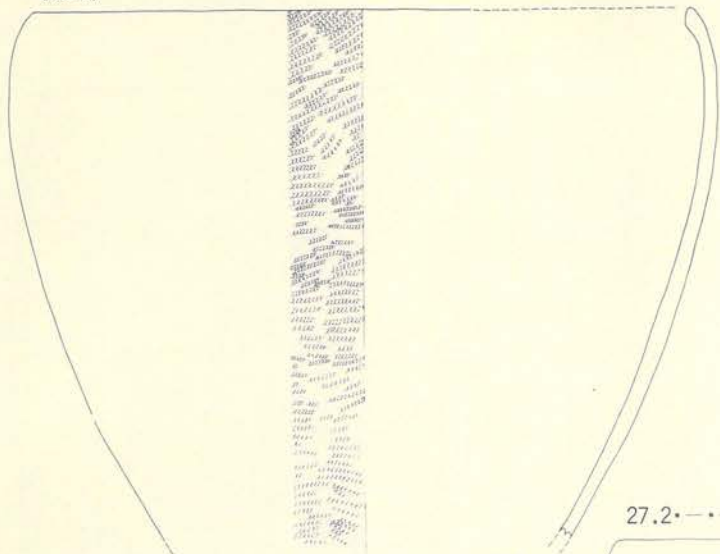
S = $\frac{1}{4}$



第55図 遺構外出土遺物(36)

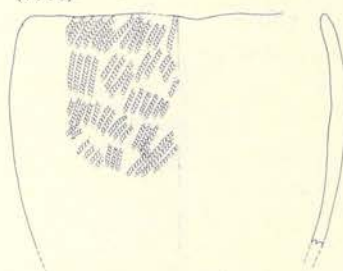
S = $\frac{1}{5}$

(35.0) ···



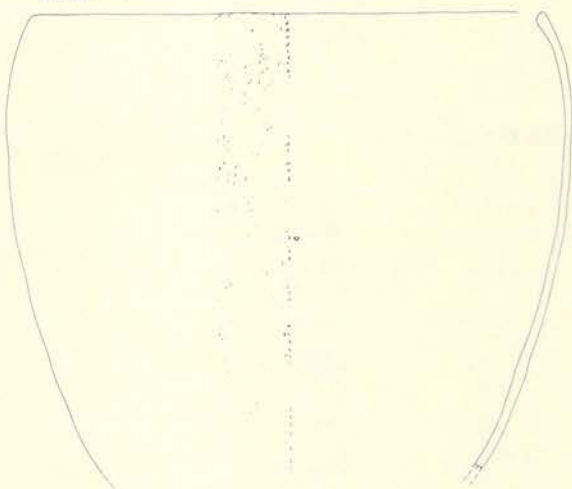
508

(15.6) ···



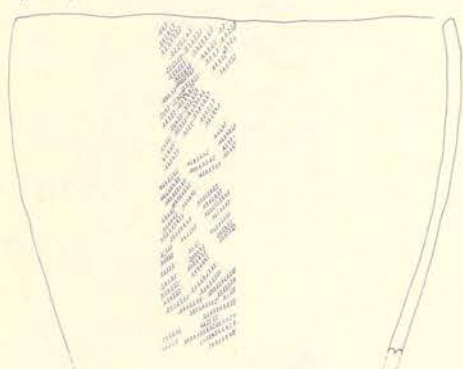
513

27.2 ···



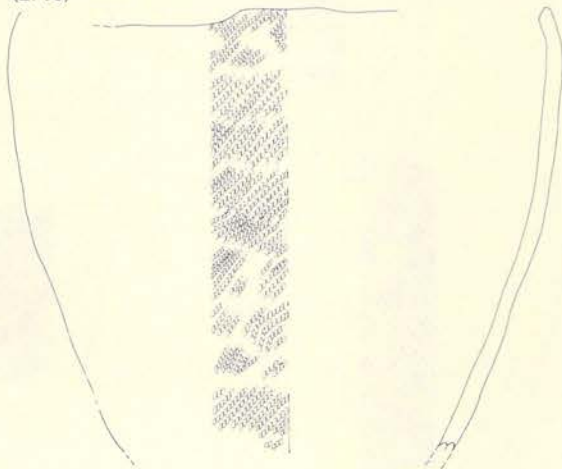
511

(23.7) ···



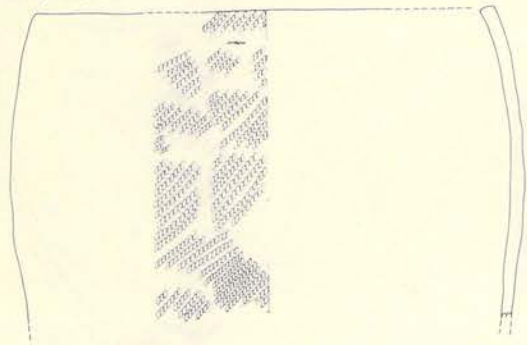
509

(27.8) ···



512

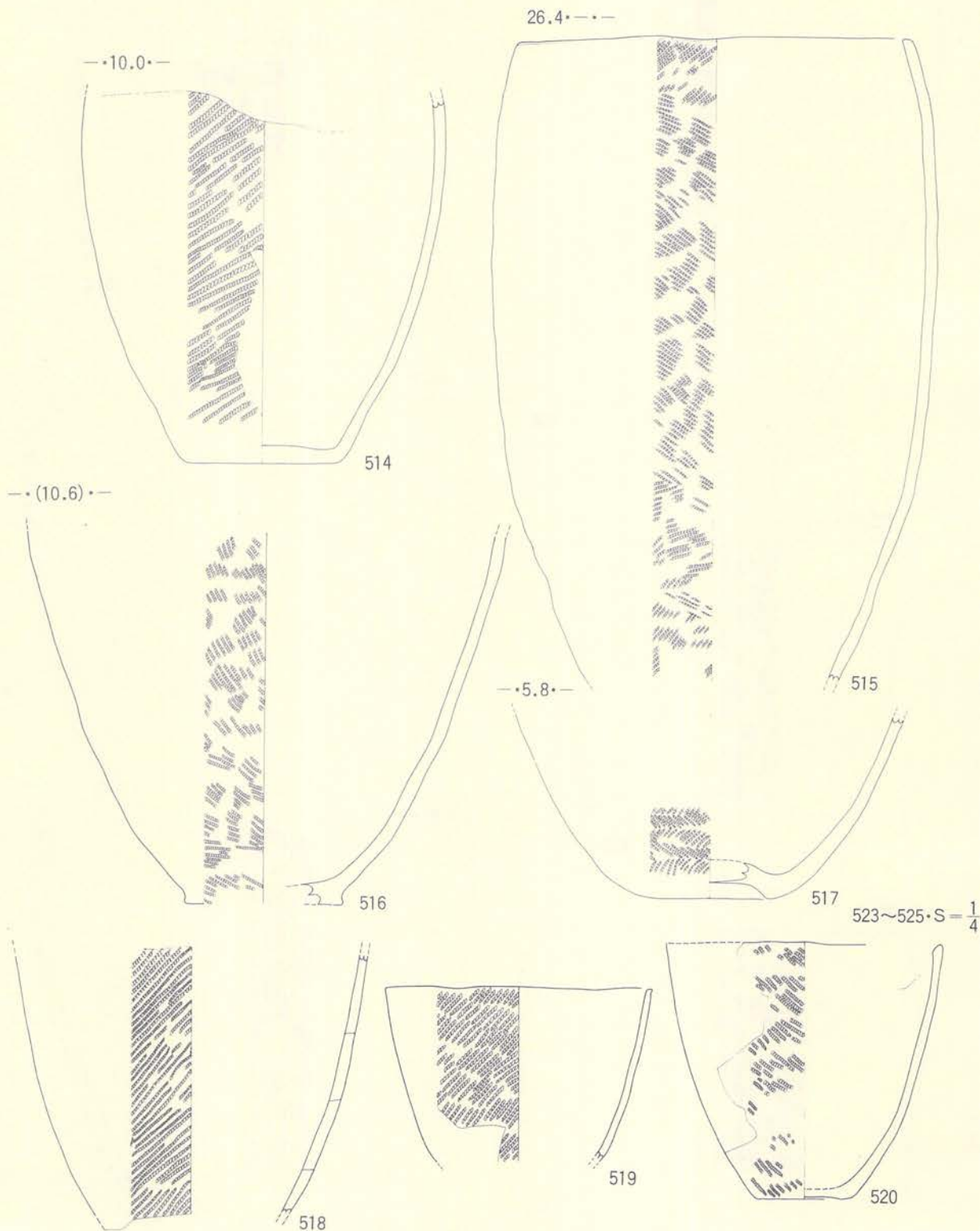
(24.4) ···



510

第56図 遺構外出土遺物(37)

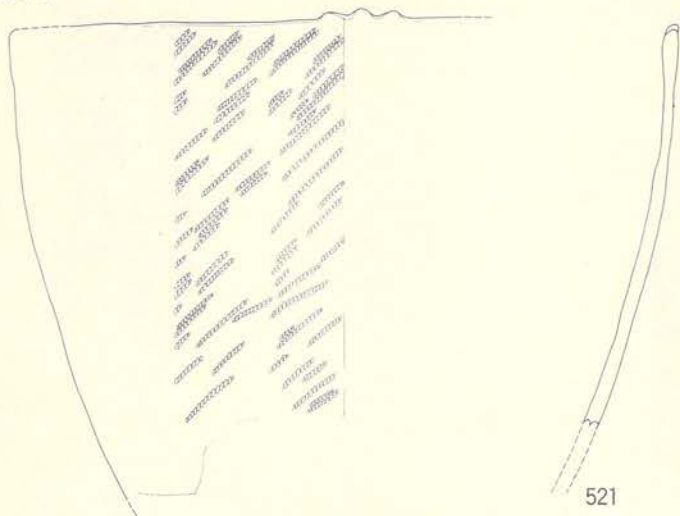
S = 1/4



第57図 遺構外出土遺物(38)

518~520 $S = \frac{1}{3}$

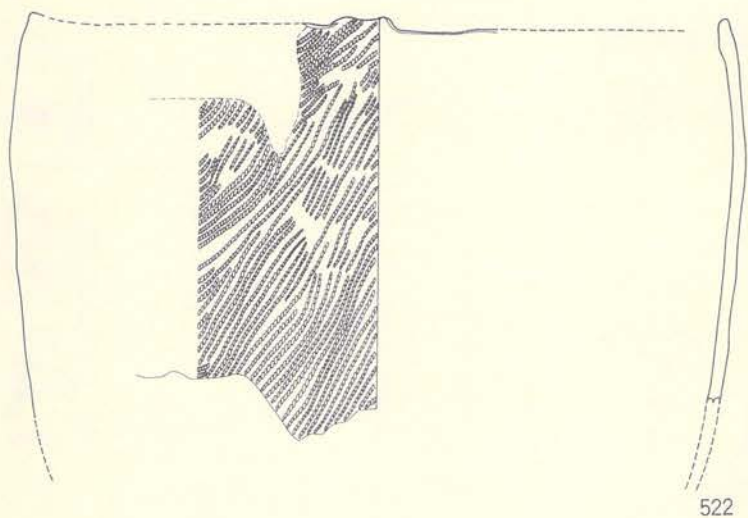
(35.3) ···



521

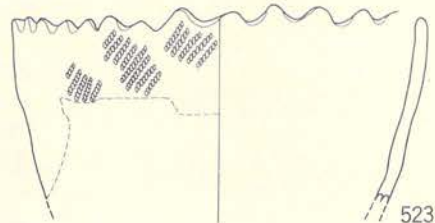
S = $\frac{1}{4}$

(27.4) ···



522

16.2 ···

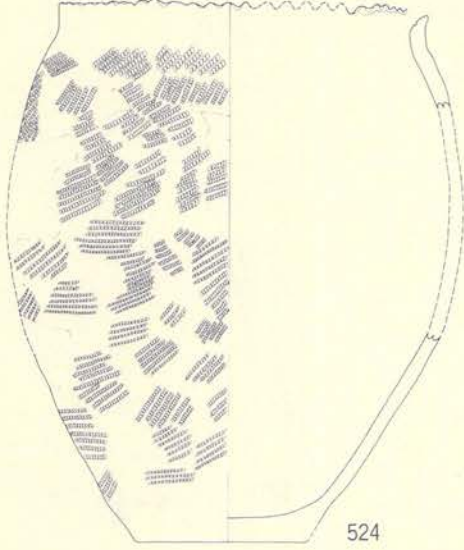


523

522·523·S = $\frac{1}{3}$

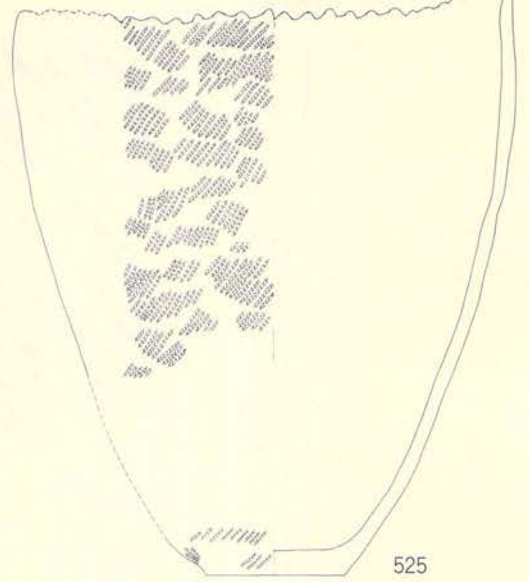
第58図 遺構外出土遺物(39)

19.7 · 9.4 · 28.5



524

25.2 · 7.3 · 30.0

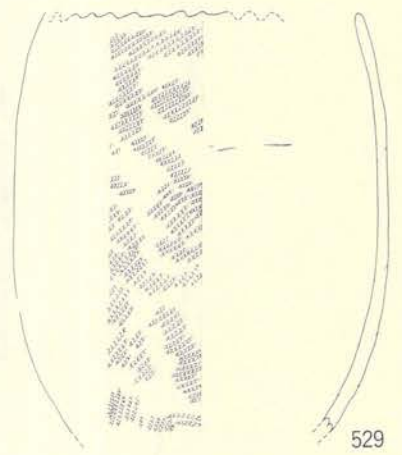


525

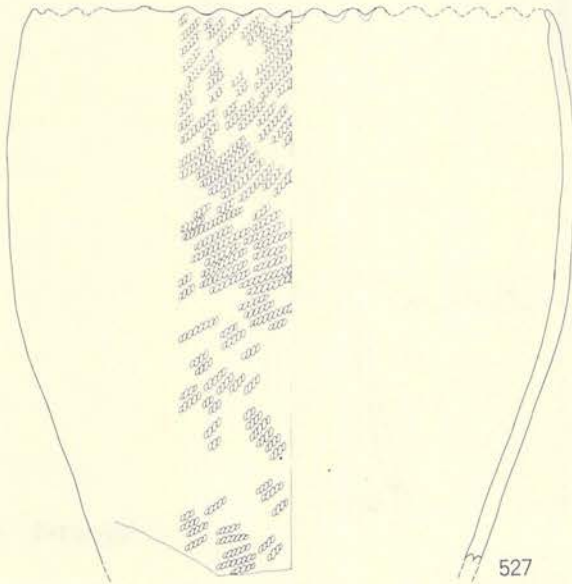
36.0 · ---



526

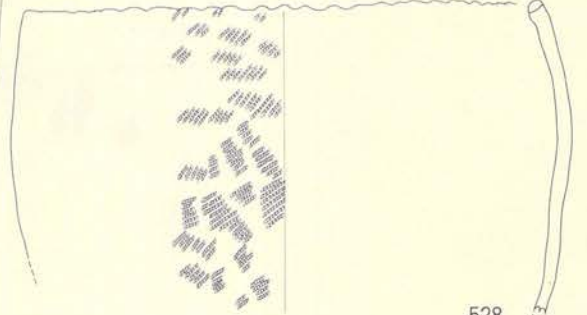


529



527

(27.8) · ---



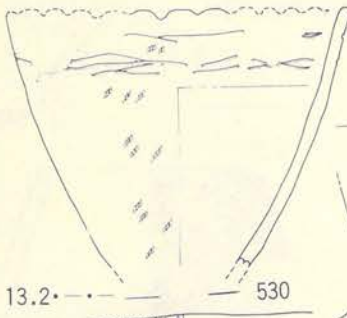
528

第59图 遺構外出土遺物(40)

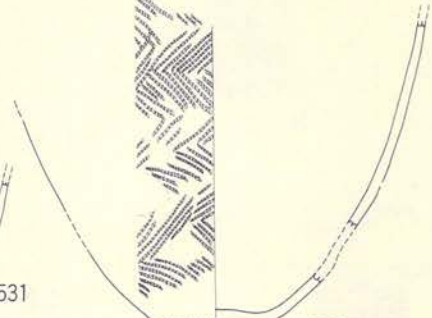
S = 1/4

(13.4) ···

··· (4.3) ···



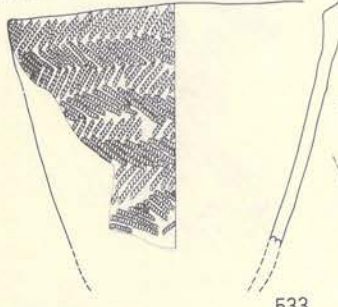
··· 4.6 ···



13.2 ··· 530

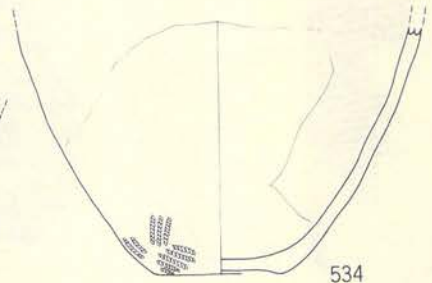
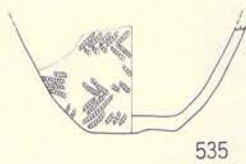
531

532



··· 3.3 ···

··· 4.8 ···

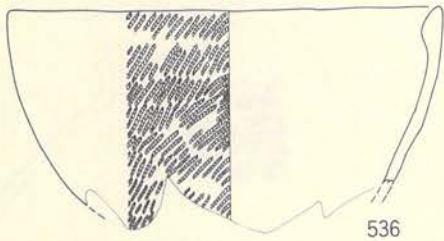


17.1 ···

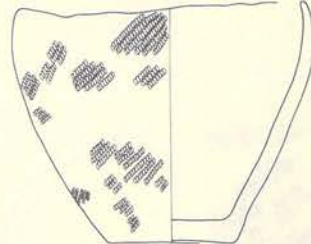
533

535

534



11.3 · 4.8 · 9.2

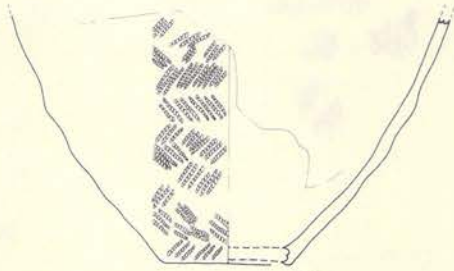
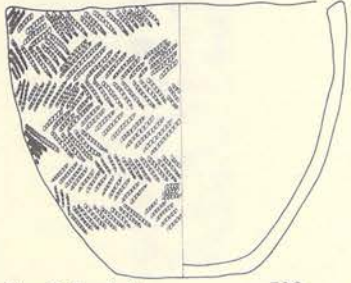


13.4 · 5.2 · 10.8

536

··· 5.0 ···

537

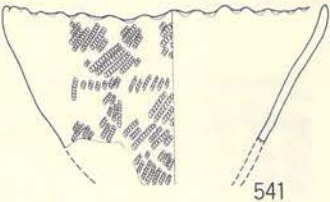
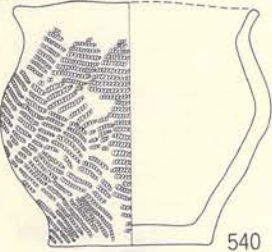


(9.5) · 6.5 · 9.6

538

12.7 ···

539



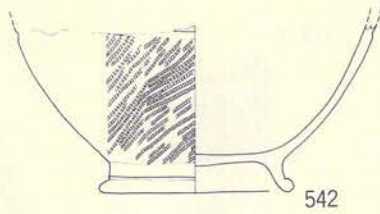
540

541

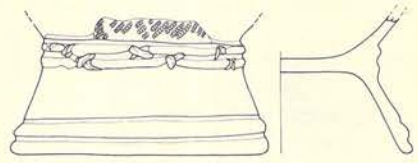
第60図 遺構外出土遺物(41)

S = 1/3

—8.6—



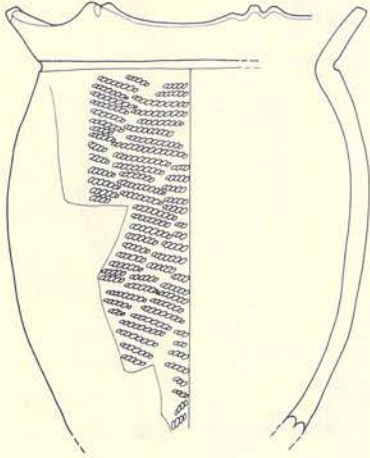
542



543

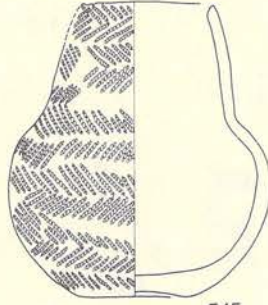
8.5—

14.2—

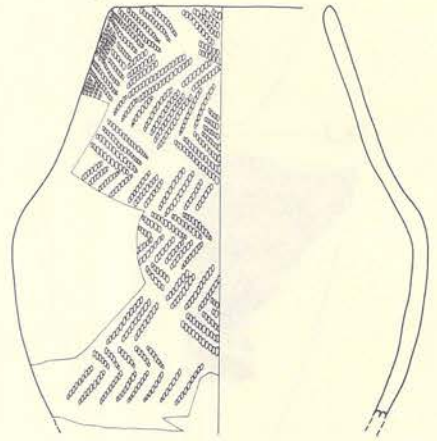


544

5.2·4.3·11.6

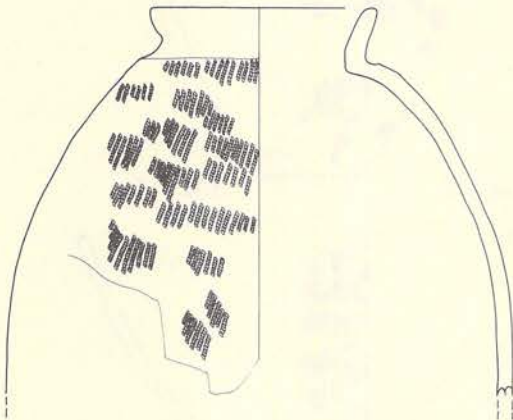


545



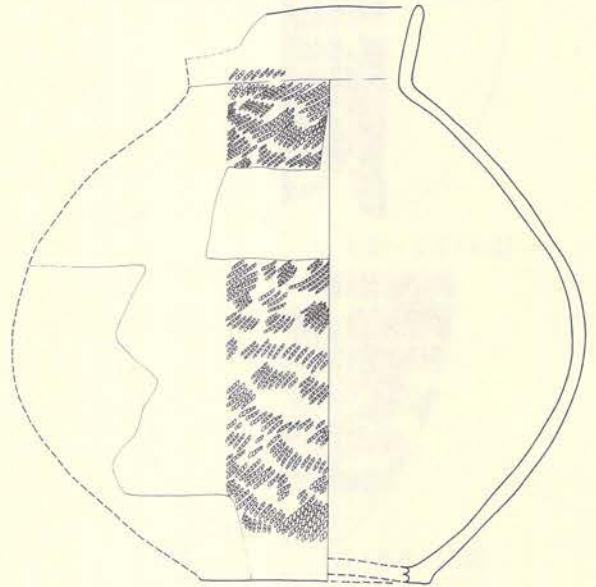
546

—9.0·22.6

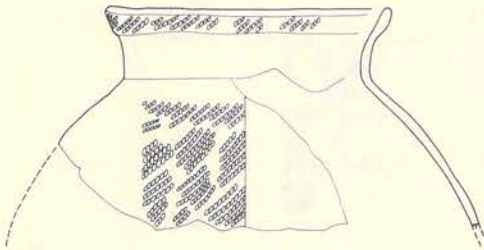


547

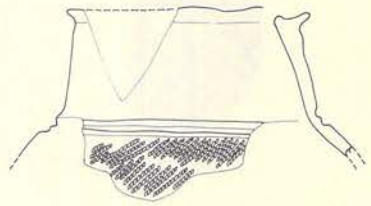
11.3—



548



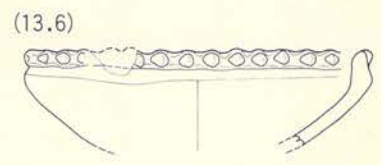
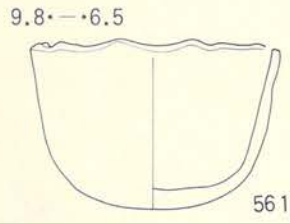
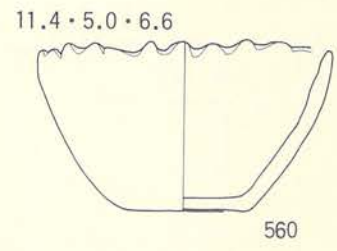
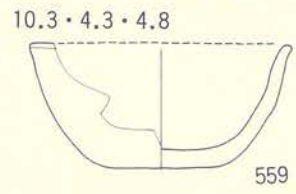
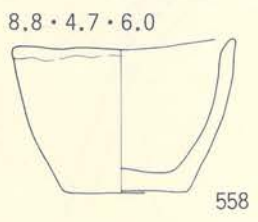
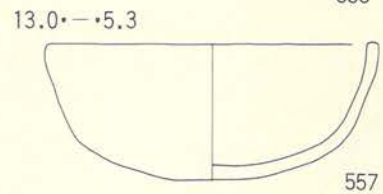
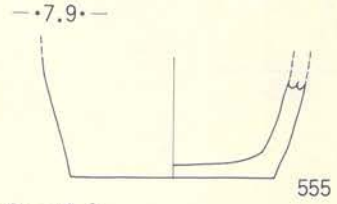
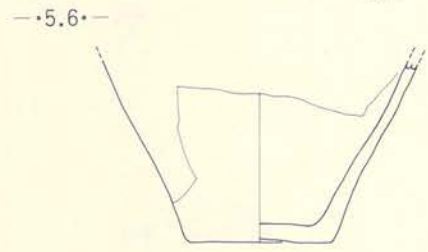
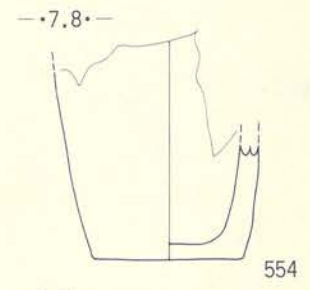
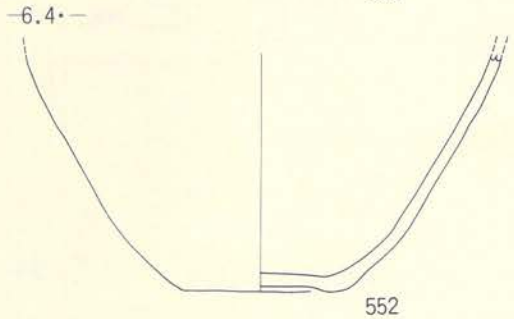
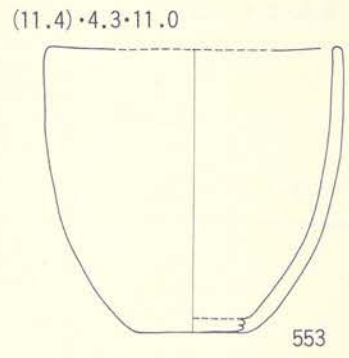
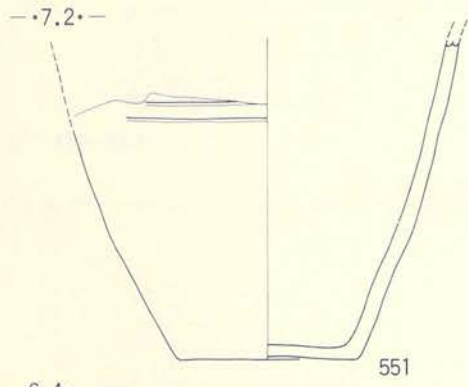
549



550

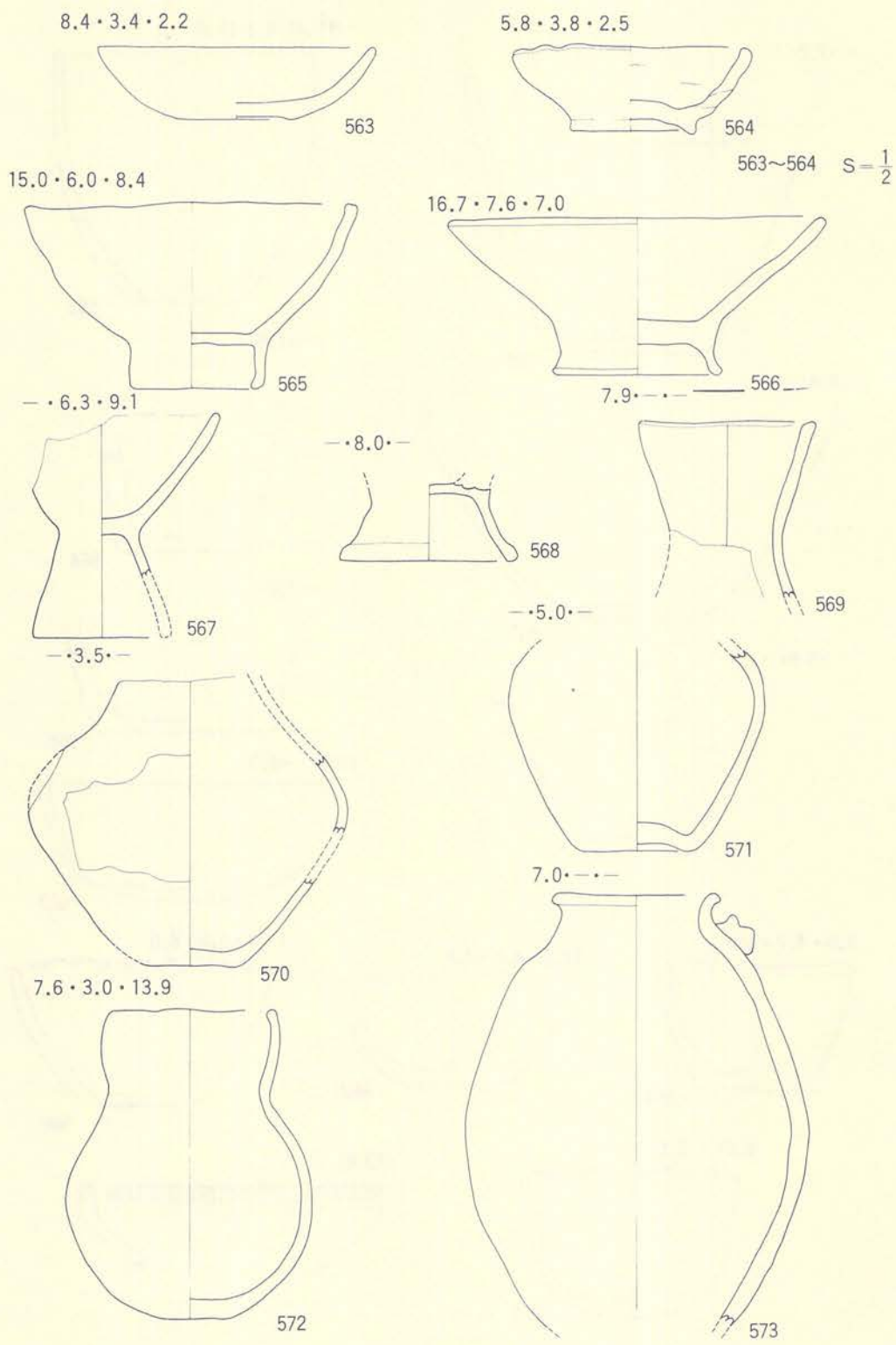
第61図 遺構外出土遺物(42)

S = 1/3



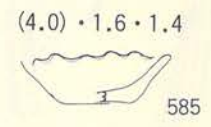
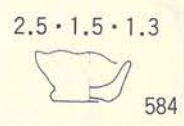
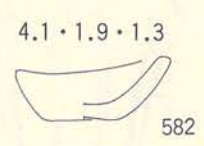
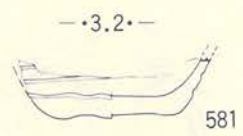
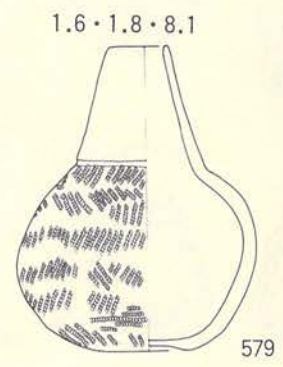
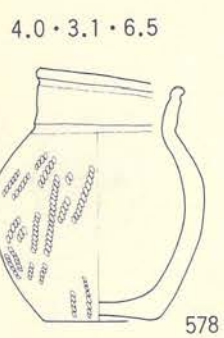
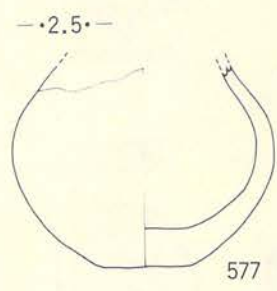
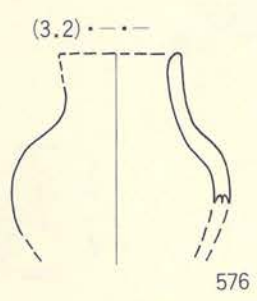
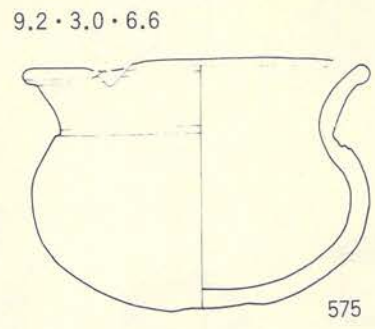
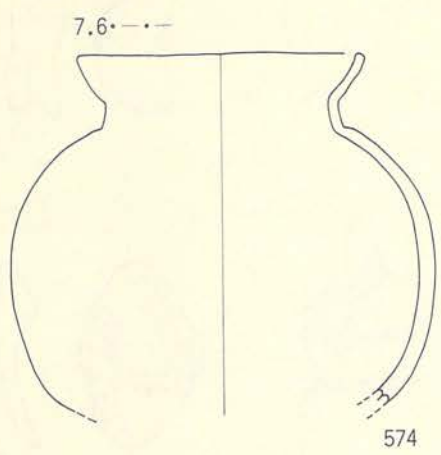
S=1/3

第62図 遺構外出土遺物(43)



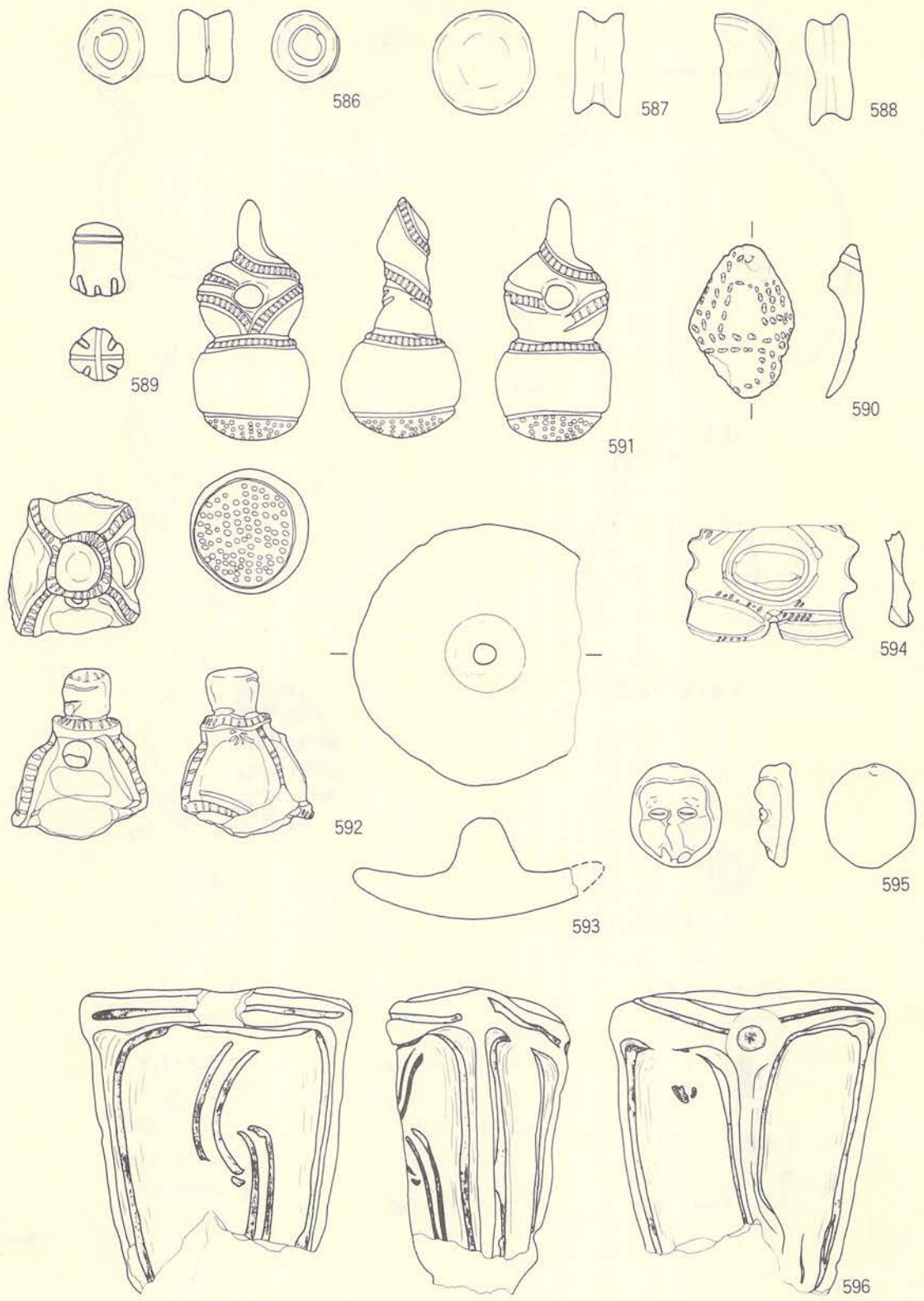
第63図 遺構外出土遺物(44)

565~573 S = $\frac{1}{3}$



S = 1/2

第64図 遺構外出土遺物(45)



第65図 遺構外出土遺物(46)

S-1/2

所謂礫石器によって占められていることである。それ以外の石器は、器種が多い割にその出土数が極めて少ないことである。なお、土器同様の状況から層位的に取りあげることができなかつたのでどの時期に属するものかは不明である。

(1) 石 鏃

石鏃は11点の出土である。これらが無茎石鏃と尖基石鏃、および有茎石鏃の3種に細分した。

A. 無茎石鏃のもの(第66図-1・2、写真図版58-1・2)

わずかに2点(1、2)のみの出土である。2は基部が欠失しているため、正確な形状を把握することはできないが、残存部の状況から1と同様の無茎石鏃に属するものと思われる。1は、基部がや、丸味を持ち、側縁部がや、外側に弧を描いているがほぼ正三角形に近い形状を呈する。2は、側縁部が直線的であり、おそらく二等辺三角形形状を呈するものであろう。これらの石鏃は、ともに入念な調整剝離が全面に加えられている。石質はともに玻璃質流紋岩である。

B. 尖基石鏃のもの(第66図-3、写真図版58-3)

1点(3)のみの出土である。基部が尖頭部と同じように尖るもので、断面は菱形に近い形状を呈する。なお全面に入念な調整剝離が加えられている。石質は玉ずいである。

C. 有茎石鏃のもの(第66図-4~11、写真図版58-4~11)

4~11の8点が出土した。4は、基部が直線的な平基有茎鏃であり、5~11は、基部が突出する所謂凸基有茎鏃に属するものである。4は、尖頭部が欠失しており、11は、基部に未加工部分が残る半完成の石鏃である。また、11を除いた4~10の石鏃は全面に入念な調整剝離が加えられている。なお、5~9の石鏃の尖頭部、基部の突出部が尖鋭的に作り出されている。これら石鏃の石質は、4が硬質泥岩、5が玻璃質流紋岩、6と10がチャート、7と9が玉ずい、8が黒色粘板岩、11が珪質細粒凝灰岩である。

(2) 石 匙

石匙は29点(12~40)出土した。これらを形態的に縦形石匙と横形石匙の2種に細分した。

A. つまみ部に対して刃部が平行するもの(第66図-12~21、第67図-19~21、写真図版58-12~21)

石器の長軸方向につまみ部を作り出した縦長石匙で、10点(12~21)出土した。これらの中でや、細身、長身で先端の尖るもの(12~17)と、先端部が直線的でや、台形状を呈するもの(18)、先端部が丸味を帯びるもの(19、20)とがある。これらの石匙の調整剝離は、刃部を含めて両面の全面に加えられたもの(12)、片面の全面に加えられたもの(14、16)、片面の刃部のみに加えられたもの(13、15、17、18、21)、両面の刃部に加えられたもの(19、20)等がある。石質は12、15、16、21が硬質泥岩、13が珪質凝灰質泥岩、14がチャート、17と18が珪質泥岩、19と20が珪質細粒凝灰岩である。なお、21は先端部を欠失しているため正確な形状

を把握することができない。

B. つまみ部に対して刃部が直角をなすもの

(第67図—22~30、第68図—31~40、写真図版58—22~30、写真図版59—31~40)

石器の長軸方向に対して直角方向につまみ部を持つ横形石匙で19点(22~40)出土した。これらすべての石器の両面に一次剥離が残されており、全体的に雑な調整剥離が加えられた石匙群である。しかし刃部だけは入念な調整剥離が加えられている。これらの中で、32は他のものと異なり、明瞭な挟り込みのあるつまみ部を有しないのが特徴点である。また、37~39の3点是一部欠失したり半加工の未完成的石匙である。石質は、珪質細粒凝灰岩(22、32、33、36)、珪質泥岩(23、24、26、27、30)、玉ずい(25)、硬質泥岩(28、29、31、34、35)、チャート(37、40)、白色細粒凝灰岩(38)、玻璃質流紋岩(39)等である。

(3) 石 錐 (第68図—41~43、写真図版59—41~43)

石錐は3点(41~43)出土した。41は細身棒状のもので、その棒状の $\frac{2}{3}$ ほどの部分につまみ部と思われるふくらみが存在する。全体に剥離調整が入念に加えられており、横断面形は菱形に近い形状を呈する。42と43は不定形な剥片の一端に両端から剥離調整を加えて、錐部を作り出したものである。石質は、41が硬質泥岩、42が珪質細粒凝灰岩、43が珪質凝灰質泥岩である。

(4) 筥状石器 (第69図—44、写真図版59—44)

出土した筥状石器は1点(44)のみである。44はほぼ左右が対称で上方が狭く、下方が広がっている。側縁は直線的であり、その片面に剥離調整が加えられて刃部を作り出している。石質は硬質泥岩である。

(5) スクレーパー

スクレーパーは27点(45~71)出土した。これらを形態的にサイド・スクレーパー、エンド・スクレーパー、ラウンド・スクレーパーの3種に細分した。

A. サイド・スクレーパー (第69図—45~54、第70図—55~63、写真図版59—45~57、写真図版60—58~63)

剥片の長軸方向に平行する縁辺の片面に刃部が形成された石器で19点(45~63)出土した。これらの中で45~60は、片側の側縁に刃部を形成しているのに対し、61~63は両側の側縁に刃部を形成している。刃部の作り出しは、大部分が入念な調整剥離が加えられている。なお、63は剥片の長軸と直交する縁辺に1個のノッチ(挟り)が存在し、その部分だけ簡単な調整剥離が施されている。これらサイド・スクレーパーの石質は、珪質凝灰質泥岩(45、63)、珪質泥岩(46、59)、硬質泥岩(47、48、50、52、55、57、62)、チャート(49)、珪質流紋岩(51)、珪質粘板岩(53)、黒色粘板岩(54、60、61)、珪質泥質凝灰質泥岩(56)、珪質細粒凝灰岩(58)等である。

B. エンド・スクレーパー (第70図—64~66、第71図—67・68、写真図版60—64~68)

剥片の長軸と直交する片面の縁辺に刃部を形成した石器で5点(64~68)出土した。刃部の作り出しは、67のみが簡単な剥離調整を行なっている以外、すべて入念な剥離調整が加えられている。なお66のみは、異なる側面にも刃部を作り出している。これらの石質は、64、65が珩質細粒凝灰岩、66が黒色粘板岩、67が粘板岩ホルンフェルス、68が輝緑凝灰岩である。

C. ラウンド・スクレーパー (第71図—69~71、写真図版60—69~71)

所謂、円形搔器と云われるもので、円形状の剥片の周縁に刃部を作り出した石器である。出土数は3点(69~71)である。69と70は、円形状の厚い剥片の周縁に剥離調整によって刃部が急角度に形成されたものである。70は、ほぼ円形状を呈する薄い剥片の周縁の $\frac{2}{3}$ 近くに剥離調整によって刃部を作り出したものである。これらの石質は、69が珩質細粒凝灰岩、70が黒燧石、71がチャートである。

(6) 不定形土器 (第71図—72~76、写真図版60—72~76)

出土は5点(72~76)である。不定形な剥片の縁辺の一部に簡単な剥離調整によって刃部を作り出した石器である。石質は、72が珩質泥質凝灰質泥岩、73が珩質凝灰質泥岩、74が珩質細粒凝灰岩、75が珩質粘板岩、76がチャートである。

(7) ノッチ (第71図—77~80、写真図版60—77~80)

ノッチは4点(77~80)出土した。不定形な剥片の一部側縁に1個の深いノッチ(抉り)が存在する石器である。77のみは、その部分に簡単な調整剥離が加えられている。なお、これらの石質は、77と78が黒色粘板岩、79が珩質泥質凝灰質泥岩、80が珩質泥岩等である。

(8) 使用痕の認められる剥片

(第71図—81、第72図、第73図、第74図—103~109、写真図版60—81~86、写真図版61—87~109)

不定形な剥片の1部側縁に使用痕が認められるもので29点(81~109)出土した。これら剥片の石質は、珩質泥質凝灰質泥岩(81、82、91、94、97、103、107)、硬質泥岩(83、89、98、99)、珩質粘板岩(84、100、104)、珩質凝灰質泥岩(85、87、88、101、108)、珩質細粒凝灰岩(86、90、93、95、102、105、106)チャート(92、96)、珩質泥岩(109)等である。

(9) 磨製石斧 (第74図—110~113、第75図—114~121、写真図版61—110~116、写真図版62—117~121)

磨製石斧は小型のものを含んで12点(110~121)出土している。小型磨製石斧(121)以外すべて頸部および刃部のみと云った破損したものがばかりで、完全に原形をとどめているのは皆無である。従って正確に形状を把握することはできないが、残存部から推定して110が所謂乳棒状磨製石斧、それ以外は定角式磨製石斧ではないかと思われる。なお110~117は刃部を欠失、118~120は頸部側の半分を欠失し、刃部のみを残す石斧である。121は小型の定角式磨製石斧である。小型ながら良く研磨された磨製石斧であるが、刃部の作り出しが簡単で鋭利さに欠け、丸味を帯びている。これは、実用品としてよりも儀器か装飾品として作られたためであ

ろうと思われる。なお、これら石器の石質は表一の通りである。

(10) 石 錘 (第75図—122、写真図版62—122)

出土はわずかに1点(122)のみである。122は、扁平な亜円礫の向い合う両側面を打ち欠いて凹を作り出したものである。石質は表一の通りである。

(11) 半円状扁平打製石器 (第76図—123~125、写真図版62—123~125)

出土は3点(123~125)である。123は扁平な亜円礫を半分に打ち割った後に円縁の一部を打ち欠いたものであり、124と125は、扁平な亜円礫の周縁の一部のみを打ち欠いたものである。これら石器の石質は、表一の通りである。

(12) 砥 石 (第76図—126、写真図版62—126)

出土はわずかに1点(126)のみである。126は、扁平な長方形の礫を用いた砥石状の石器で半分ほど欠失している。その側面全体に使用痕跡が認められる。石質は表一の通りである。

(13) 凹 石

凹石と思われる石器は75点出土したが、欠損したり不明確なものは除外し、本報告書の図版にはその中から31点を抽出して図版に掲載した。それらの中で、使用痕跡および凹みのあり方によってさらにA~Dの4種に細分した。

A. 両面に凹みが存在する凹石 (第76図—127~130、第77図、写真図版62—127~140)

亜円礫か扁平な亜円礫を用いた礫石器である。127~132と138~140は、両面に1個のみの凹みが存在するのに対し、134~137は、両面に1~3個の凹みが存在する。また、前者は亜円礫を用いているのに対し、後者がどちらかと云えば扁平な亜円礫を用いているのが特徴的である。これら石器の石質は表一の通りである。

B. 片面にのみ凹みが存在する凹石 (第78図、写真図版62—141・142、写真図版63—143~148)

141~144は亜円礫、145~147は扁平な亜円礫、148は小型の臼状の礫石器を用いた凹石である。143と146に2個の凹みが存在するのを除いて、すべて片面に凹みが1個のみ存在する。これら石器の石質は表一の通りである。

C. 両面に凹みが存在し、その面に明瞭な磨面が認められる凹石

(第79図—149~155、写真図版63—149~155)

149~155はすべて亜円礫を使用した凹石である。その両面に凹みが存在する点ではAと同じである。しかし片面および両面、あるいは側面に明瞭な磨面が認められる点で異なる。なお、石質は表一の通りである。

D. 片面にのみ凹みが存在し、反対側の凹みのない面に明瞭な磨面が認められる凹石

(第79図—156、第80図—157、写真図版63—156・157)

156と157の2個は片面にのみ凹みが存在し、その反対側の面には磨石として使用されたと思

われる明瞭な磨面が認められる。石質は表一の通りである。

(14) 敲石 (第80図-158~162、第81図、第82図-168~173、写真図版63-158~172、写真図版64-173)

敲石と思われるものは37点出土した。その内、欠損したり敲打痕の不明瞭なものは除外し、16点(158~173)のみを抽出して図版に掲載した。158~160は棒状の垂角礫を用いたもので、その先端部の片方および両方に敲打痕が明確に残っている。161~165は長方形の扁平な礫を用いたもので、158等と同じ様な敲打痕が残っている。また、163の両面と164の片面に磨面が確認できるが、これは磨石としても使用したためであろう。なお、165は乳棒状磨製石斧の破損したものを敲石として再利用したと思われる。166~173は、長方形、若しくは楕円形状を呈した垂円礫を用いたもので、158等と同様の敲打痕が残っている。また166の両面、167~169の側面には、163と同様の磨面が認められるが、これは磨石としても利用したためと思われる。なお、これら石器の石質は表一の通りである。

(15) 磨石

磨石と思われるものは149点出土した。その内欠損したものを中心に95点ほどを除外し、54点を抽出して図版に掲載した。これらをその磨面の違いからA~Dの4種に細分した。

A. 全面研磨されたもの (第82図-174、第83図-175~182、第84図、第85図-191~194、写真図版64-174~194)

174~194の21点が本種に属する。形状は、186が球形に近い以外、すべて楕円球状の円礫を用いている。また、175と176の側面にさらに著しい擦痕が確認できる。これらの石質は表一の通りである。

B. 両面に擦痕が残るもの (第85図-195~198、第86図、第87図-207、写真図版64-195~198、写真図版65-199~207)

195~207の13点が本種に属するもので、すべて楕円形状の礫を用いている。その側縁に使用痕跡が認められず、両面のみに擦痕が認められる。また、195、197と205の先端部には敲打痕が認められる。おそらく磨石として使用された以外に敲石としても使用したためであろう。なお石質は表一の通りである。

C. 片面にのみ擦痕が残るもの (第87図-208~214、第88図-215~221、写真図版65-208~221)

208~221の14点が本種に属するもので、扁平な垂円礫と円礫を用いている。その片面のみに擦痕が残っている。また208、210、220、221の4点の先端部、および側縁に敲打痕が認められるが、これは195等と同じように磨石以外に敲石としても使用したためと考えられる。石質は表一の通りである。

D. 側面にのみ擦痕が残るもの

(第88図-222・223、第89図-224~227、写真図版65-222・223、写真図版66-224~227)

222~227の6点が本種に属するもので、すべて楕円形状の垂円礫が用いられている。その礫の片方の側面、および両側面に著しい擦痕が認められる。石質は表一の通りである。なお、224

の1点のみの先端部に敲打痕が確認できる。これは208等と同様に敲石としても使用したためであろう。これらの石質は表2の通りである。

(16) 石 弾 (第89図—228~230、第90図、第91図—241~247、写真図版66—228~247)

石弾状を呈する小型の円礫で、19点(228~247)出土した。形状はや、扁平で楕円形状を呈するもの(228~232)、や、扁平で円形状を呈するもの(233~236)、卵形を呈するもの(237~242)、球形を呈するもの(243~247)等がみられる。これらの中で、特に241と242は全面に著しい研磨が施されている。これらの石質は表一の通りである。

(17) 石 皿

(第91図—248、第92図—103、第 図—279、写真図版66—248~251、写真図版67・68・69・70・71—270~279)

石皿は51点出土したが、その内欠損したものを除外し(19点)、32点を抽出して図版に掲載した。248~251は楕円形状を呈し、その周辺に明瞭な縁を持ち、磨面が明確な石皿である。252~279は、扁平な楕円形および、長方形形状を呈する大小の河原石を使用した石皿で、周辺に縁を持たず、磨面から縁辺まで変化に乏しいものである。これらの中で特に252~255の4点は、使用痕跡が著しく磨面のほぼ中央部に凹状に磨へった部分が存在する。これらの石質は表一の通りである。

4. 石製品 (第103図—280、写真図版71—280)

石製品はわずかに石棒1点(280)のみの出土である。280は、長大な完形石棒で、その両端に頸部が作られている。両方ともに同じ作り出しで、細い溝を一条持つ頸部的要素を有する隆帯と、末端の幅広い頸部からなっている。頸部の作り出しは、浅い「凹」字状に切られた部分と細い溝だけの単純なものである。なお、隆帯上の溝および頸部の溝の上下に刻み目状のものが施されている。なお、石質は粘板岩ホルンフェルスである。

表1 遺構内石器

番号	器 種	出土地区	層 位	図版 番号	法			量 重量(g)	石 質	産 地
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)			
1	石 斧	DII-1住	床面直上No.1	12	11.7	5.1	3.2	300.2	硬砂岩	北上山地、古生界
2	凹 石	DII-2住	炉跡構内礫	23	9.8	7.8	6.3	610.3	輝石安山岩	二戸、中新統
3	スクレーパー	DII-3住	埋土中	49	2.5	2.8	0.9	5.9	珪質細粒凝灰岩	零石、中新統
4	磨 石	DII-3住	埋土No.2	50	10.5	9.1	6.0	760.0	輝石安山岩	二戸、中新統
5	々	DII-3住	床 面	51	10.4	6.8	4.9	490.9	普通輝石安山岩	。
6	々	DII-3住	床 面	52	12.0	9.5	4.0	690.0	硬砂岩	北上山地、古生界
7	々	DII-3住	床 面	53	6.7	5.7	3.5	180.5	普通硬石安山岩	二戸、中新統

表2 遺構外(剥片石器) No.1

番号	器種	出土地区	層位	図版番号	法			重量(g)	石質	産地
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
1	石鏃	D II-h 1	III層	1	2.2	1.7	0.5	1.5	玻璃質流紋岩	奥羽山地、中新統
2	〃	D II-f 1	III層	2	1.8	1.1	0.4	0.7	〃	〃
3	〃	D II-e 7	II層(下)	3	2.6	1.3	0.4	1.0	玉ずい	不詳
4	〃	D II-g 3	II層上	4	3.9	1.2	0.8	3.5	硬質泥岩	雫石、中新統上部
5	〃	D II-f 1	II層	5	3.5	1.4	0.3	1.3	玻璃質流紋岩	奥羽山地、中新統
6	〃	D II-f 7	III層	6	2.8	1.4	0.4	0.9	チャート	北上山地、古生界
7	〃	D II-h 3	III層	7	3.4	1.7	0.5	2.0	玉ずい	不詳
8	〃	D I-e 9	II層上	8	3.6	1.2	0.3	1.1	黒色粘板岩	北上山地、古生界
9	〃	D II-e 7	III層上	9	2.4	1.3	0.3	0.7	玉ずい	不詳
10	〃	D II-b 5	III層	10	5.9	2.8	1.2	15.7	チャート	北上山地、古生界
11	〃	D II-j 4	III層	11	3.1	1.9	1.0	5.4	珪質細粒凝灰岩	雫石、中新統
12	石匙	D II-h 2	III層上	12	6.2	2.1	0.7	8.4	硬質泥岩	雫石、中新統上部
13	〃	D II-f 5	II層下	13	5.9	2.5	0.8	11.7	珪質凝灰質泥岩	雫石、中新統
14	〃	D II-j 4	III層相当	14	4.8	2.3	0.9	7.5	チャート	北上山地、古生界
15	〃	D II-d 7	III層下	15	7.9	2.3	0.5	9.6	硬質泥岩	雫石西部、中新統
16	〃	D II-e 8	III層	16	6.2	2.4	0.6	10.5	〃	雫石、中新統上部
17	〃	D II-d 8	II層下	17	5.1	1.4	0.6	5.3	珪質泥岩	〃
18	〃	D II-f 5	II層下	18	5.0	3.6	1.0	15.6	〃	雫石盆地西部、中新統上部
19	〃	D II-d 3	III層	19	3.5	3.3	0.5	6.8	珪質細粒凝灰岩	雫石西部、中新統
20	〃	D II-e 4	III層	20	3.7	3.3	0.7	8.6	〃	〃
21	〃	D II-f 0	III層下	21	6.5	4.2	1.0	19.5	硬質泥岩	雫石、中新統上部
22	〃	D II-e 7	II層下	22	3.3	6.7	0.6	11.5	珪質細粒凝灰岩	雫石西部、中新統
23	〃	D II-f 5	III層上	23	3.3	6.1	0.8	14.6	珪質泥岩	雫石盆地西部、中新統上部
24	〃	D II-f 5	III層上	24	3.7	5.9	1.0	18.8	〃	〃
25	〃	D II-d 6	II層上	25	3.3	5.8	0.9	15.8	玉ずい	不詳
26	〃	D II-d 2	II層下	26	3.7	5.9	1.0	18.8	珪質泥岩	雫石盆地西部、中新統上部
27	〃	D II-i 2	II層下	27	4.9	4.9	1.4	21.4	〃	〃
28	〃	D II-c 1	II層	28	6.0	4.1	1.0	29.0	硬質泥岩	雫石、中新統上部
29	〃	D II-f 1	III層下	29	3.6	5.3	0.6	11.1	〃	雫石西部、中新統上部
30	〃	D II-a 5	II層上	30	3.1	5.3	0.5	4.9	珪質泥岩	雫石盆地西部、中新統上部
31	〃	D II-c 4	III層	31	5.9	8.6	1.5	43.3	硬質泥岩	〃
32	〃	D II-e 5	II-III層(II下)	32	6.3	3.1	0.9	15.3	珪質細粒凝灰岩	雫石西部、中新統上部
33	〃	D II-f 1	III層	33	6.5	3.5	0.8	14.0	〃	〃
34	〃	D II-g 2	III層(上)	34	5.0	6.3	1.0	23.0	硬質泥岩	〃
35	〃	D II-d 0	III層	35	5.6	3.2	0.5	11.0	〃	〃
36	〃	D II-j 6	II層	36	2.7	5.4	0.5	8.4	珪質細粒凝灰岩	雫石西部、中新統
37	〃	D II-a 7	II層下	37	1.1	3.1	0.5	2.9	チャート	北上山地、古生界
38	〃	D II-d 3	III層上	38	4.0	5.0	0.8	9.8	白色細粒凝灰岩	奥羽山地、中新統
39	〃	D II-g 3	II層下	39	3.5	3.6	0.5	3.5	玻璃質流紋岩	〃
40	〃	D II-b 4	III層下	40	2.8	2.3	0.6	3.8	チャート	北上山地、古生界
41	石錐	D II-h 3	II層下	41	5.6	1.4	0.9	4.8	硬質泥岩	雫石西部、中新統上部
42	〃	D II-h 1	III層下	42	6.1	3.6	1.2	29.5	〃	〃
43	〃	D II-h 1	II層下	43	3.7	3.0	1.6	14.1	珪質細粒凝灰岩	雫石、中新統

表2 遺構外(剥片石器) No. 2

番号	器種	出土地区	層位	図版番号	法量				石質	産地
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)		
44	石筍状石器	D II-f 1	III層	44	3.5	2.2	0.8	5.2	珪質凝灰質泥岩	零石、中新統
45	スクレーパー I a	D II-e 3	III層	45	6.9	4.9	1.5	54.8	〃	〃
46	〃	D II-d 7	III層(上)	46	6.6	3.4	1.6	34.4	珪質泥岩	零石盆地西部、中新統上部
47	〃	D II-e 2	III層(下)	47	5.6	3.3	1.2	32.2	硬質泥岩	〃
48	〃	D II-c 5	II層(下)	48	5.7	3.3	1.1	22.5	〃	〃
49	〃	D II-b 4	III層上	49	5.8	3.2	0.7	14.1	チャート	北上山地、古生界
50	〃	C II-i 6	II層	50	8.3	5.8	0.9	48.6	硬質泥岩	零石西部、中新統上部
51	〃	D II-d 7	III層(上)	51	8.6	4.7	1.5	44.1	珪質凝灰質泥岩	奥羽山地、中新統
52	〃	D II-g 3	III層(上)	52	7.5	3.2	0.9	16.5	硬質泥岩	零石西部、中新統上部
53	〃	B III-d 7	I層	53	2.9	5.1	0.9	12.0	珪質粘板岩	北上山地、古生界
54	〃	D II-b 4	III層(下)	54	6.8	2.8	1.3	18.1	黒色粘板岩	〃
55	〃	D II-d 6	III層	55	5.9	3.7	0.9	23.6	硬質泥岩	零石、中新統上部
56	〃	D II-d 6	II層	56	5.7	3.5	1.1	25.7	珪質凝灰質泥岩	零石、中新統
57	〃	D II-e 5	II-III層(II層下)	57	5.2	3.9	0.9	25.8	硬質泥岩	零石、中新統上部
58	〃	D II-f 6	II層(下)	58	3.1	4.3	0.8	6.9	珪質細粒凝灰岩	零石西部、中新統
59	〃	D II-h 7	II層	59	4.3	3.3	0.8	12.4	珪質泥岩	零石盆地西部、中新統上部
60	〃	D II-g 3	III層(上)	60	6.4	2.9	1.4	23.8	黒色粘板岩	北上山地、古生界
61	〃	D II-j 2	III層	61	5.2	3.5	1.3	21.4	硬質泥岩	零石西部、中新統上部
62	〃	D II-a 6	III層(上)	62	4.1	2.1	1.0	9.7	珪質細粒凝灰岩	零石、中新統
63	〃	D II-d 7	II層上	63	6.3	4.3	1.2	17.4	珪質凝灰質泥岩	〃
64	スクレーパー II	D II-f 5	III層	64	6.1	5.6	1.1	38.0	珪質細粒凝灰岩	零石西部、中新統
65	〃	D II-e 9	II層(下)	65	5.2	7.6	1.2	36.7	黒色粘板岩	北上山地、古生界
66	〃	D II-e 9	II層(下)	66	4.1	4.9	0.6	13.1	〃	〃
67	〃	D II-f 6	II層(下)	67	4.5	3.1	1.5	13.7	粘板岩ホルンフェルス	〃
68	〃	D II-h 3	III層(上)	68	3.5	3.1	1.1	9.6	輝緑凝灰岩	〃
69	スクレーパー III	D II-f 4	II層(下)	69	3.4	3.9	1.5	27.2	珪質細粒凝灰岩	零石西部、中新統
70	〃	D II-h 4	II層上	70	2.8	3.1	1.2	11.0	黒燧石	産地時代不詳
71	〃	D II-f 2	III層	71	3.4	3.1	0.8	7.2	チャート	北上山地、古生界
72	不定形石器	D II-f 0	II層(下)	72	4.0	4.3	1.3	14.1	珪質凝灰質泥岩	零石、中新統
73	〃	D II-g 2	III層	73	3.5	3.0	1.1	12.8	珪質凝灰質泥岩	〃
74	〃	D II-e 6	II層(下)	74	4.6	3.2	0.9	9.4	珪質細粒凝灰岩	〃
75	〃	D II-f 2	III層	75	4.2	2.2	1.1	10.8	珪質粘板岩	北上山地、古生界
76	〃	D II-j 2	II層	76	4.4	3.1	1.7	23.8	チャート	〃
77	ノッチ	D II-h 4	II層(上)	77	7.8	4.0	1.4	40.4	黒色粘板岩	〃
78	〃	H II-h 2	III層(上)	78	2.9	3.2	0.7	4.7	〃	〃
79	〃	D II-i 2	II層(上)	79	3.4	3.5	0.5	5.5	珪質凝灰質泥岩	零石、中新統
80	〃	D II-f 5	II層(下)	80	4.6	4.4	0.8	12.6	珪質泥岩	零石、中新統上部
81	使用痕の認められる石器	D II-j 4	III層	81	8.0	5.5	0.9	40.5	珪質凝灰質泥岩	零石、中新統
82	〃	D II-f 4	II層(下)	82	5.6	7.2	1.5	35.0	〃	〃
83	〃	D II-e 7	II層(下)	83	7.4	5.0	1.4	53.4	硬質泥岩	零石、中新統上部
84	〃	D II-d 0	II層(下)	84	3.9	6.4	1.1	24.0	珪質粘板岩	北上山地、古生界
85	〃	D II-f 4	II層(下)	85	5.4	4.9	2.1	42.6	珪質凝灰質泥岩	零石、中新統
86	〃	D I-e 8	III層	86	5.0	3.5	1.0	12.7	珪質細粒凝灰岩	〃

表2 遺構外(礫石器) No.1

番号	器種	出土地区	層位	図版番号	法			重量(g)	石質	産地
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
110	石斧	D II-j 6	III層	110	9.0	6.0	3.8	33.0	凝灰質硬砂岩	北上山地、古生界
111	〃	D II-c 4	II層(上)	111	10.8	5.3	2.5	220.0	輝石珸岩	〃
112	〃	D II-d 3	III層(上)	112	10.4	4.5	2.5	210.0	〃	北上山地、中生界
113	〃	D II-f 5	II層(下)	113	10.6	4.4	2.6	210.0	輝石安山岩	北上山地、古生界
114	〃	D II-g 5	II層(下)	114	8.1	4.8	2.4	140.0	粘板岩ホルンフェイス	〃
115	〃	D II-d 5	III層(上)	115	6.6	4.2	2.6	110.0	輝石珸岩	北上山地、中生界
116	〃	D II-d 4	III層(上)	116	10.4	5.1	3.0	270.0	硬砂岩	北上山地、古生界
117	〃	B III-e 8	II層	117	6.2	4.0	2.5	80.0	凝灰質硬砂岩	〃
118	〃	D II-b 4	II層下	118	8.1	4.6	2.7	160.0	輝石珸岩	北上山地、中生界
119	〃	D II-d 4	III層(上)	119	8.8	5.1	3.0	240.0	硬砂岩	北上山地、古生界
120	〃	D II-b 5	I層	120	13.6	8.9	2.6	430.0	〃	〃
121	〃	D II-f 2	III層	121	6.2	2.0	1.1	30.0	粘板岩	〃
122	石錘	D II-e 6	II層(下)	122	7.1	6.3	2.3	200.0	〃	〃
123	半円状扁平打製	D II-g 4	II層(下)	123	11.1	5.1	1.6	130.0	〃	〃
124	〃	D II-e 9	II層下右	124	15.6	9.4	3.5	960.0	輝緑凝灰質硬砂岩	〃
125	〃	D II-f 4	II層下	125	14.1	11.6	2.7	650.0	〃	〃
126	砥石	D II-f 3	II層(上)	126	8.2	5.7	3.5	360.0	硬砂岩	〃
127	凹石(A)	D II-e 2	III層	127	11.9	10.5	7.0	990.0	輝石安山岩	二戸、中新統
128	〃	D II-f 6	II層(下)	128	10.9	8.8	6.2	800.0	〃	〃
129	〃	D II-e 5	II~III層(II下)	129	10.8	10.5	6.1	870.0	〃	〃
130	〃	D II-g 2	III層上	130	8.0	7.8	4.6	410.0	普通輝石安山岩	〃
131	〃	D II-i 4	III層相当	131	10.0	9.8	5.1	690.0	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)、中新統
132	〃	D II-g 1	II層下	132	9.9	7.9	4.5	470.0	半花崗内緑岩	北上山地、中生界
133	〃	D II-e 5	II層(下)	133	11.6	8.4	5.5	610.0	輝石安山岩	二戸一帯、中新統
134	〃	D II-g 4	II層下	134	10.7	9.8	5.3	660.0	〃	〃
135	〃	D II-h 5	III層	135	10.6	7.7	4.0	450.0	〃	〃
136	〃	D III-f 2	III層	136	10.5	7.7	4.7	530.0	〃	〃
137	〃	D II-g 6	III層	137	11.7	7.5	3.5	360.0	普通輝石安山岩	〃
138	〃	D II-f 6	II層下	138	9.6	6.8	2.5	240.0	輝石安山岩	〃
139	〃	D II-d 5	III層	139	8.0	5.6	4.0	220.0	普通輝石安山岩	〃
140	〃	D II-f 4	II層下	140	7.5	6.7	3.6	250.0	輝石安山岩	〃
141	凹石(B)	D II-e 4	III層	141	13.1	10.8	9.4	2,100.0	花崗閃緑岩	北上山地、古生界
142	〃	D II-g 4	III層	142	13.0	10.6	7.1	1,330.0	輝石安山岩	二戸一帯、中新統
143	〃	D II-e 9	II層(下)	143	11.6	9.5	6.6	990.0	〃	〃
144	〃	D II-f 0	III層	144	11.0	8.9	6.5	1,390.0	半花崗閃緑岩	北上山地、中生界
145	〃	D III-c 2	II層	145	10.6	8.5	5.3	610.0	輝石安山岩	二戸、中新統
146	〃	D II-e 7	II~III層(II下)	146	11.5	8.8	4.7	730.0	〃	〃
147	〃	D II-h 3	II層下	147	10.2	5.8	2.3	150.0	安山岩(熔岩片)	第四系、奥羽山地
148	〃	D II-e 6	II層下	148	7.3	6.7	3.6	210.0	輝石安山岩	二戸、中新統
149	〃	D II-f 5	II層下	149	7.3	6.7	3.6	210.0	〃	〃
150	〃	D II-e 9	II層下(右)	150	9.8	7.6	4.9	520.0	〃	〃
151	〃	D II-f 7	III層上	151	9.4	7.5	4.9	490.0	〃	〃
152	〃	D II-b 6	III層	152	8.0	6.2	4.4	270.0	普通輝石安山岩	二戸一帯、中新統

表2 遺構外(礫石器) No.2

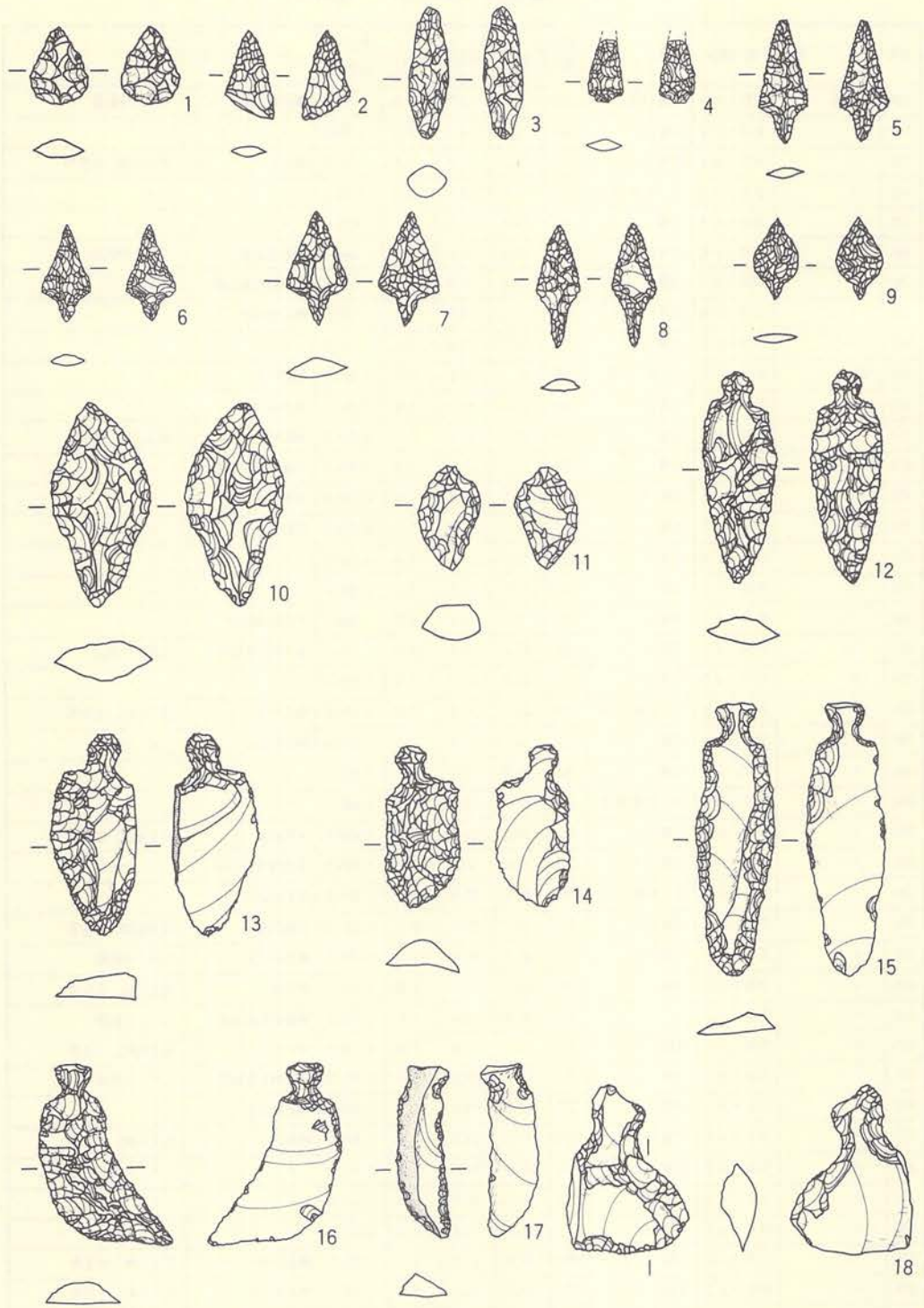
番号	器種	出土地区	層位	図版番号	法			重量(g)	石質	産地
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
153	くぼみ石	D II-c 7	III層上	153	10.8	8.8	4.6	600.0	輝石安山岩	二戸、中新統
154	〃	D II-d 7	II層(下)	154	9.6	6.8	5.7	480.0	〃	〃
155	〃	D II-g 5	II層下	155	8.6	6.1	3.7	270.0	〃	〃
156	〃	D II-c 7	II層	156	11.6	8.5	4.7	650.0	半花崗閃緑岩	北上山地、中生界
157	〃	D II-e 5	II層下	157	10.8	9.1	5.4	740.0	輝石安山岩	二戸、中新統
158	敲石	C II-i 6-j 6	II層	158	14.6	6.3	4.5	530.0	硬砂岩	北上山地、古生界
159	〃〃	D II-f 7	II層	159	13.9	5.9	4.8	630.0	粘板岩	〃
160	〃	D II-d 5	III層	160	14.5	5.1	4.1	480.0	泥質硬砂岩	〃
161	〃	不明	包含層	161	15.5	7.4	2.2	380.0	硬砂岩	〃
162	〃	D II-f 6	II層(下)	162	13.3	6.2	1.9	220.0	〃	〃
163	〃	D II-i 6	III層(相当)	163	14.2	6.2	3.1	470.0	凝灰質硬砂岩	〃
164	〃	D II-d 0	III層(下)	164	14.1	6.2	4.5	660.0	〃	〃
165	〃	C II-i 5	II層	165	13.4	6.6	3.6	420.0	輝石安山岩	二戸、中新統
166	〃	D II-d 7	III層(右)	166	12.3	7.0	5.0	670.0	硬砂岩	北上山地、古生界
167	〃	D II-d 5	II層(下)	167	15.4	9.5	4.9	1,080.0	泥質硬砂岩	〃
168	〃	D II-i 5	II層	168	12.6	8.7	5.7	910.0	硬砂岩	〃
169	〃	D II-h 7	III層	169	11.9	8.1	4.3	650.0	〃	〃
170	〃	D II-e 6	II層(下)	170	12.7	7.0	5.2	650.0	粘板岩	〃
171	〃	D II-f 7	III層	171	11.3	6.4	4.9	600.0	花崗閃緑岩	北上山地、中生界
172	〃	D II-e 7	II~III層(II下)	172	10.9	7.0	3.8	440.0	硬砂岩	北上山地、古生界
173	〃	D II-e 7	II~III層(II下)	173	13.2	7.2	4.0	560.0	〃	〃
174	磨石	D II-g 2	II層(下)	174	13.4	11.1	7.6	1,740.0	花崗閃緑岩	北上山地、中生界
175	〃	D II-d 4	III層	175	14.5	9.8	6.6	1,390.0	硬砂岩	北上山地、古生界
176	〃	D II-e 5	II層(下)	176	13.0	9.4	6.3	1,180.0	〃	〃
177	〃	D II-i 5	II層	177	11.0	7.8	7.8	850.0	アルコース質硬砂岩	〃
178	〃	D II-f 5	III層(下)	178	10.8	8.7	5.8	780.0	泥質硬砂岩	〃
179	〃	D II-h 5	III層(上)	179	11.5	7.6	5.0	680.0	輝石安山岩	〃
180	〃	D II-e 5	II層(下)	180	10.9	8.1	5.5	800.0	輝石砂岩	〃
181	〃	D II-h 3	II層(上)	181	10.3	8.4	4.9	630.0	硬砂岩	〃
182	〃	D II-g 6	III層	182	11.3	8.0	5.7	750.0	〃	〃
183	〃	D II-d 7	III層(上)	183	11.3	8.3	6.1	930.0	凝灰質硬砂岩	〃
184	〃	D II-i 6	III層	184	10.7	7.8	5.0	680.0	〃	〃
185	〃	D II-e 7	II~III層(II下)	185	11.9	7.4	5.3	740.0	硬砂岩	〃
186	〃	D II-e 6	II層(下)	186	9.0	7.9	6.7	590.0	〃	〃
187	〃	D II-e 6	II層(下)	187	9.8	7.0	5.9	580.0	〃	〃
188	〃	D II-f 5	III層(上)	188	8.4	6.6	4.9	390.0	アルコース質硬砂岩	〃
189	〃	D II-i 6	III層	189	7.8	6.1	5.9	400.0	凝灰質硬砂岩	〃
190	〃	D II-g 4	II層(右上)	190	8.4	5.9	5.0	360.0	硬砂岩	〃
191	〃	D II-h 5	III層	191	8.5	6.3	5.4	410.0	輝石安山岩	二戸、中新統
192	〃	D II-i 4	III層(相当)	192	7.6	5.4	4.3	260.0	硬砂岩	北上山地、古生界
193	〃	D II-j 4	III層(相当)	193	8.1	5.1	3.4	190.0	泥質硬砂岩	〃
194	〃	D II-d 6	III層	194	7.3	6.3	3.7	260.0	凝灰質硬砂岩	〃
195	〃	D II-g 6	III層	195	13.8	10.4	6.3	1,390.0	半花崗閃緑岩	〃

表2 遺構外(礫石器) No.3

番号	器種	出土地区	層位	図版番号	法			重量(g)	石質	産地
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
196	磨石	D II-g 2	III層(上)	196	13.7	10.1	6.7	1,380.0	輝石安山岩	二戸一帯、中新統
197	〃	D II-c 6	II層(上)	197	10.5	9.6	6.5	1,000.0	〃	〃
198	〃	D II-i 3	III層(下)	198	13.6	9.1	4.7	950.0	半花崗閃緑岩	北上山地、中生界
199	〃	D II-e 8	III層(上)	199	11.4	10.1	5.6	920.0	輝石安山岩	二戸、中新統
200	〃	D II-e 2	II層	200	11.2	9.5	6.0	920.0	〃	〃
201	〃	D II-d 3	III層(上)	201	10.8	8.8	5.9	820.0	〃	〃
202	〃	D II-e 9	II層(下)	202	10.2	8.9	4.7	550.0	〃	〃
203	〃	D II-d 3	III層(下)	203	9.5	8.3	4.7	560.0	〃	〃
204	〃	D II-f 0	III層(右)	204	10.0	9.5	7.0	930.0	〃	〃
205	〃	D II-d 6	III層(上)	205	10.8	8.1	6.1	740.0	〃	〃
206	〃	D II-e 5	III層(上)	206	11.3	8.9	6.8	900.0	〃	〃
207	〃	C III-c 6	I層	207	5.8	5.1	4.5	230.0	黒色粘板岩	北上山地、古生界
208	〃	D II-e 6	II~III層(II下)	208	12.7	11.0	4.9	930.0	輝石安山岩	二戸、中新統
209	〃	不明	不明	209	11.0	10.0	6.0	930.0	半花崗岩	北上山地、古生界
210	〃	D II-d 1	II層(上)	210	9.4	8.7	4.3	500.0	輝石安山岩	二戸、中新統
211	〃	D II-g 4	III層	211	9.2	7.9	5.0	490.0	〃	〃
212	〃	D II-f 5	II層(下)	212	8.2	7.1	5.0	420.0	〃	〃
213	〃	D II-g 3	II層(下)	213	9.9	8.8	5.0	590.0	〃	〃
214	〃	D II-e 4	II~III層(II下)	214	10.3	9.7	5.6	750.0	硬砂岩	北上山地、古生界
215	〃	D II-d 5	III層(上)	215	8.6	8.4	4.7	500.0	輝石安山岩	二戸、中新統
216	〃	D II-g 5	II層(下)	216	9.2	8.8	4.9	530.0	〃	〃
217	〃	D II-b 5	II層(下)	217	12.8	9.2	7.3	1,190.0	高輝石安山岩	奥羽山地、第四系
218	〃	D II-f 7	III層	218	10.4	9.7	7.3	990.0	半花崗閃緑岩	北上山地、中生界
219	〃	D II-d 7	III層(右)	219	9.4	8.9	6.4	740.0	輝石安山岩	二戸、中新統
220	〃	D II-f 7	III層	220	10.2	8.3	6.8	700.0	〃	〃
221	〃	D II-g 3	III層	221	12.7	6.2	6.6	740.0	硬砂岩	北上山地、中生界
222	〃	D II-g 5	III層	222	12.8	8.6	5.1	910.0	輝石安山岩	二戸、中新統
223	〃	D II-d 4	III層	223	12.1	9.4	6.0	970.0	〃	〃
224	〃	D II-e 8	III層(上)	224	11.9	10.7	5.2	880.0	〃	〃
225	〃	D II-g 2	II層(下)	225	10.5	7.7	5.2	520.0	〃	〃
226	〃	D II-f 2	II層(下)	226	8.1	5.8	4.1	300.0	凝灰質硬砂岩	北上山地、古生界
227	〃	D II-g 3	II層(下)	227	10.9	6.9	6.8	740.0	輝石安山岩	二戸、中新統
228	石弾	不明	不明	228	7.5	5.7	3.3	170.0	〃	〃
229	〃	D II-f 7	III層	229	7.3	5.7	3.2	170.0	〃	〃
230	〃	D II-f 7	III層	230	6.8	4.9	3.0	160.0	〃	〃
231	〃	D II-d 7	III層(下)	231	5.1	4.2	2.7	60.0	〃	〃
232	〃	D II-e 6	II層(下)	232	5.3	5.1	2.8	80.0	〃	〃
233	〃	D II-d 5	III層	233	6.3	6.1	3.8	190.0	〃	〃
234	〃	D II-d 3	II層(下)	234	6.2	5.2	3.6	150.0	〃	〃
235	〃	D II-h 2	II層(下)	235	6.2	5.1	3.9	150.0	〃	〃
236	〃	D II-e 7	II~III層(II下)	236	3.9	3.0	2.3	36.5	〃	〃
237	〃	D II-f 6	III層	237	6.8	5.8	4.6	250.0	〃	〃
238	〃	D II-e 6	III層	238	7.5	5.6	5.4	290.0	〃	〃

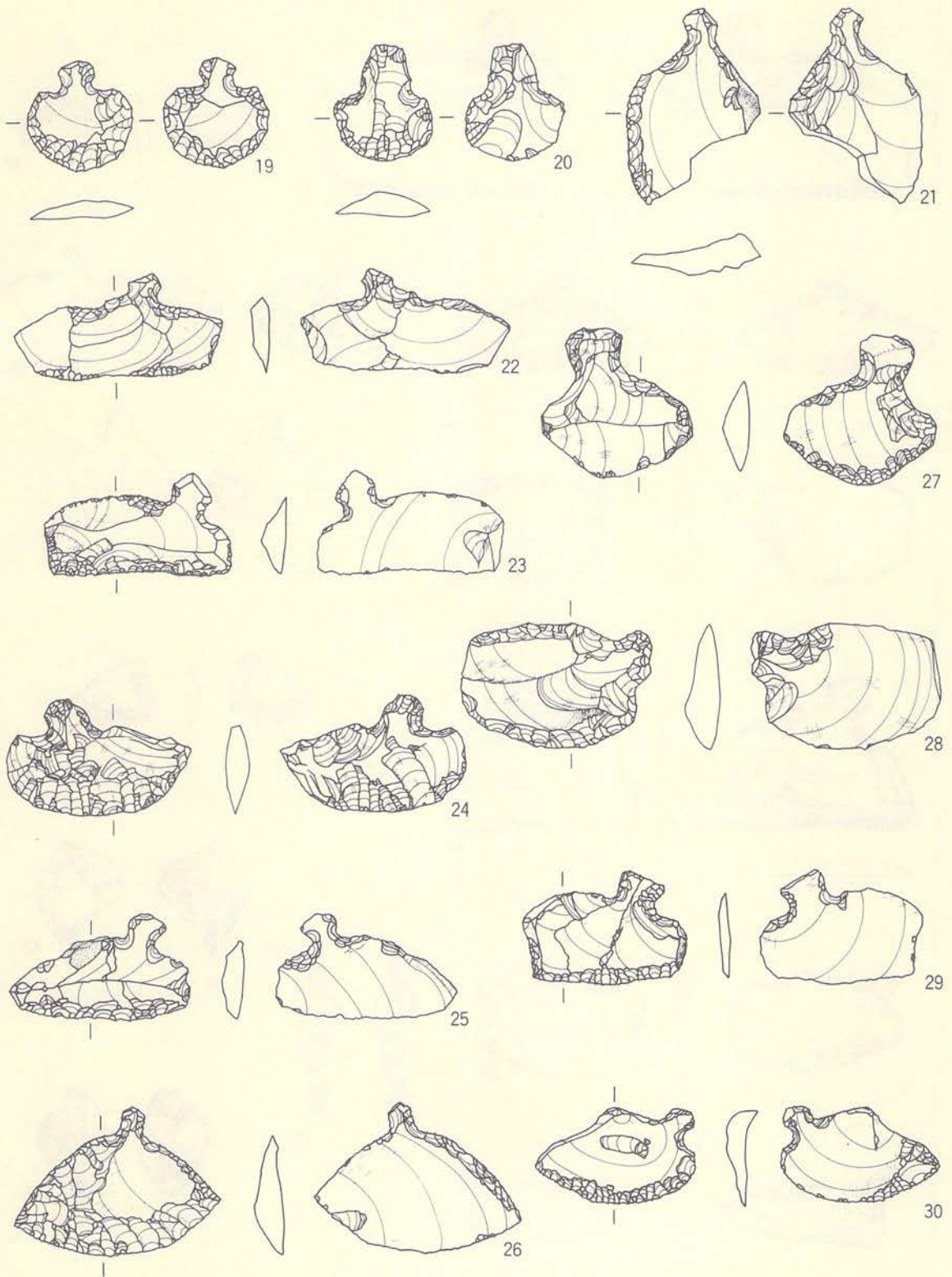
表2 遺構外(礫石器) No. 4

番号	器種	出土地区	層位	図版番号	法量				石質	産地
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)		
239	石 弾	D II-e 5	III層(上)	239	6.9	4.7	4.0	190.0	輝石安山岩	二戸、中新統
240	〃	D II-d 7	II層(下)	240	5.1	4.1	3.4	90.0	〃	〃
241	〃	D II-g 4	III層(上)	241	4.7	3.7	3.4	90.0	硬砂岩	北上山地、古生界
242	〃	D II-e 7	II-III層(II下)	242	4.0	3.7	2.5	51.4	〃	〃
243	〃	B III-f 8	II層	243	6.4	6.1	5.1	290.0	〃	〃
244	〃	D II-e 8	II層(下)	244	5.5	5.1	4.5	160.0	輝石安山岩	二戸、中新統
245	〃	D II-g 3	III層(上)	245	4.4	4.2	3.9	90.0	普通輝石安山岩	〃
246	〃	D II-e 6	II層(下)	246	4.1	3.6	3.1	70.0	輝石安山岩	〃
247	〃	D II-d 7	II層(下)	247	3.7	3.4	3.1	50.0	〃	〃
248	石 皿	D II-e 5	II-III層(II層)	248	20.2	18.8	3.8	1,560.0	粗粒砂岩	〃
249	〃	D II-e 7	III層(上)	249	40.3	22.5	8.4	5,940.0	凝灰質砂岩	〃
250	〃	D II-b 5	III層	250	27.6	15.3	5.1	2,800.0	角閃珸岩	北上山地、古生界
251	〃	D II-h 8	III層	251	17.7	18.5	5.4	2,600.0	普通輝石安山岩	〃
252	〃	D II-e 2	II層(下)	252	41.3	26.8	7.9	9,750.0	凝灰質硬砂岩	〃
253	〃	D II-c 7	III層(上)	253	33.5	23.4	7.0	4,740.0	硬砂岩	〃
254	〃	D II-f 5	II層(下)	254	27.0	23.5	5.6	4,830.0	〃	〃
255	〃	D II-i 7	III層	255	27.6	24.4	7.1	6,700.0	〃	〃
256	〃	D II-f 1	II層(下)	256	7.8	5.5	6.0	380.0	半花崗閃緑岩	〃
257	〃	D II-d 4	II層(下)	257	47.6	30.6	9.7	?	普通輝石安山岩	二戸、中新統
258	〃	D II-e 5	III層(上)	258	37.7	29.2	5.8	8,550.0	〃	〃
259	〃	D II-e 4	II-III層(II下)	259	42.7	26.3	6.7	9,580.0	輝石珸岩	北上山地、古生界
260	〃	D II-b 5	III層	260	34.1	25.8	7.3	9,850.0	輝石安山岩	二戸、中新統
261	〃	D III-h 8	III層	261	26.2	21.1	6.6	6,310.0	〃	〃
262	〃	D II-e 5	II-III層(II下)	262	27.8	21.3	7.2	4,990.0	〃	〃
263	〃	D II-b 5	II層(上)	263	28.2	21.6	6.7	5,870.0	半花崗岩	北上山地、中生界
264	〃	D II-e 6	II層(下)	264	25.8	22.5	5.4	4,260.0	普通輝石安山岩	二戸、中新統
265	〃	D II-e 5	II-III層(II下)	265	29.4	22.0	8.7	7,400.0	輝石安山岩	〃
266	〃	D II-i 5	II層(下)	266	28.1	25.2	8.4	7,280.0	花崗閃緑岩	北上山地、古生界
267	〃	D II-h 1	II層(下)	267	30.0	15.5	5.7	3,070.0	輝石安山岩	二戸、中新統
268	〃	D II-j 2	II層	268	34.1	15.7	5.6	3,110.0	硬砂岩	北上山地、古生界
269	〃	D II-f 5		269	24.0	17.4	5.1	2,910.0	普通輝石安山岩	二戸、中新統
270	〃	D III-d 5	II層	270	22.5	17.8	7.4	4,370.0	硬砂岩	北上山地、古生界
271	〃	D II-d 2	III層	271	22.7	18.9	6.1	2,400.0	普通輝石安山岩	二戸、中新統
272	〃	D II-h 4	II層	272	18.9	19.2	5.2	2,700.0	輝石安山岩	〃
273	〃	D II-e 6	II層(下)	273	22.0	14.9	4.8	2,300.0	硬砂岩	北上山地、古生界
274	〃	D II-h 2	II層(下)	274	19.8	18.2	4.6	2,170.0	〃	〃
275	〃	D II-g 3	II層(下)	275	22.2	12.9	5.8	1,850.0	〃	〃
276	〃	D II-g 3	II層(上)	276	18.3	16.2	5.0	2,020.0	〃	〃
277	〃	C II-i 5	I層	277	19.4	15.9	2.7	1,020.0	輝石珸岩	北上山地、中生界
278	〃	D II-g 2	II層(下)	278	18.0	13.5	3.5	1,150.0	輝石安山岩	北上山地、古生界
279	〃	D II-f 5	II層(下)	279	16.9	16.1	3.4	1,240.0	〃	二戸、中新統
280	石 棒	D II-d 4	III層(上)	280	57.3	中心4.1 4.4	4.0	1,500.0	粘板岩ホルンフェルス	北上山地、古生界
2										



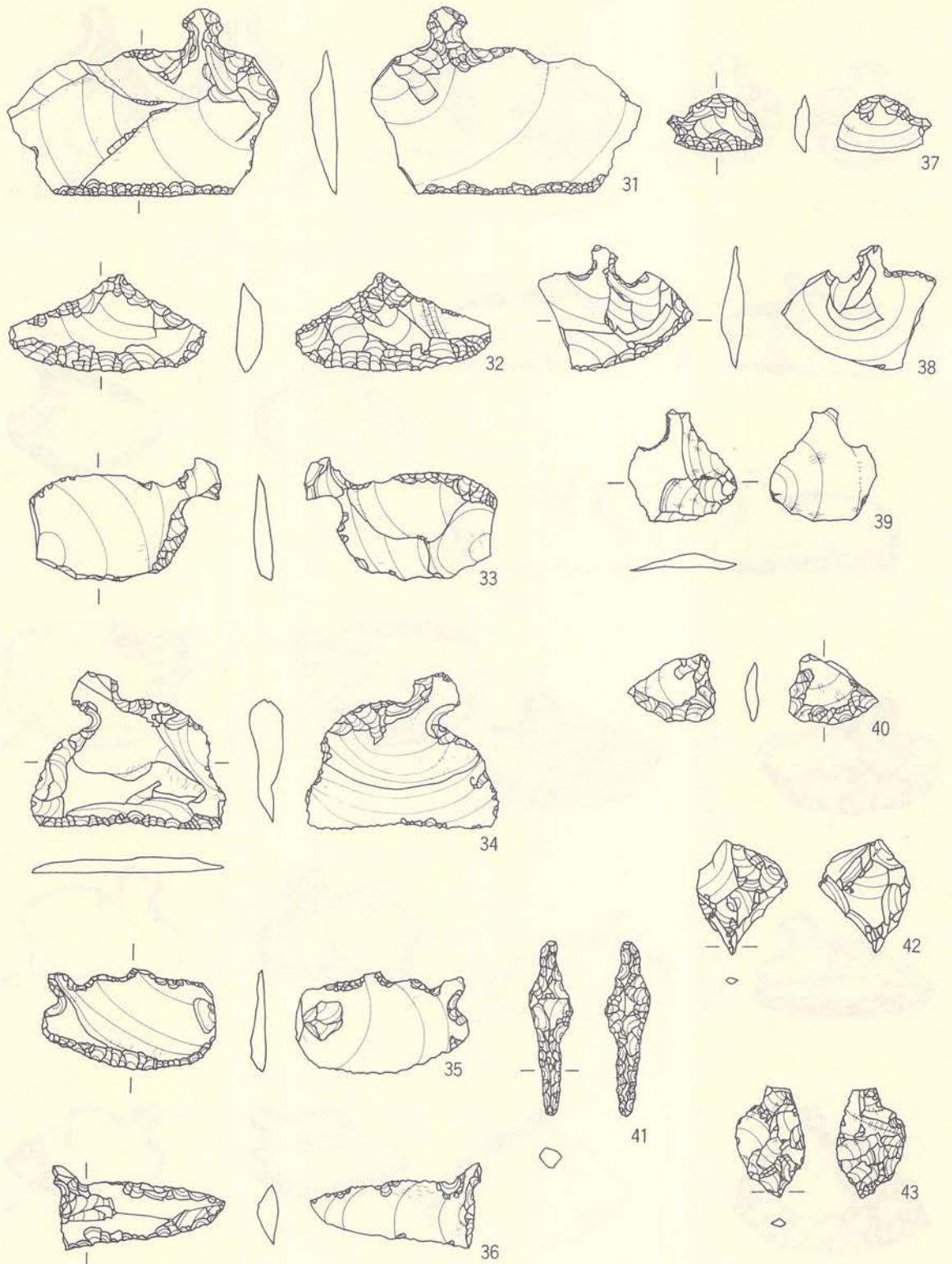
第66図 遺構外出土遺物(1)

S- $\frac{1}{2}$



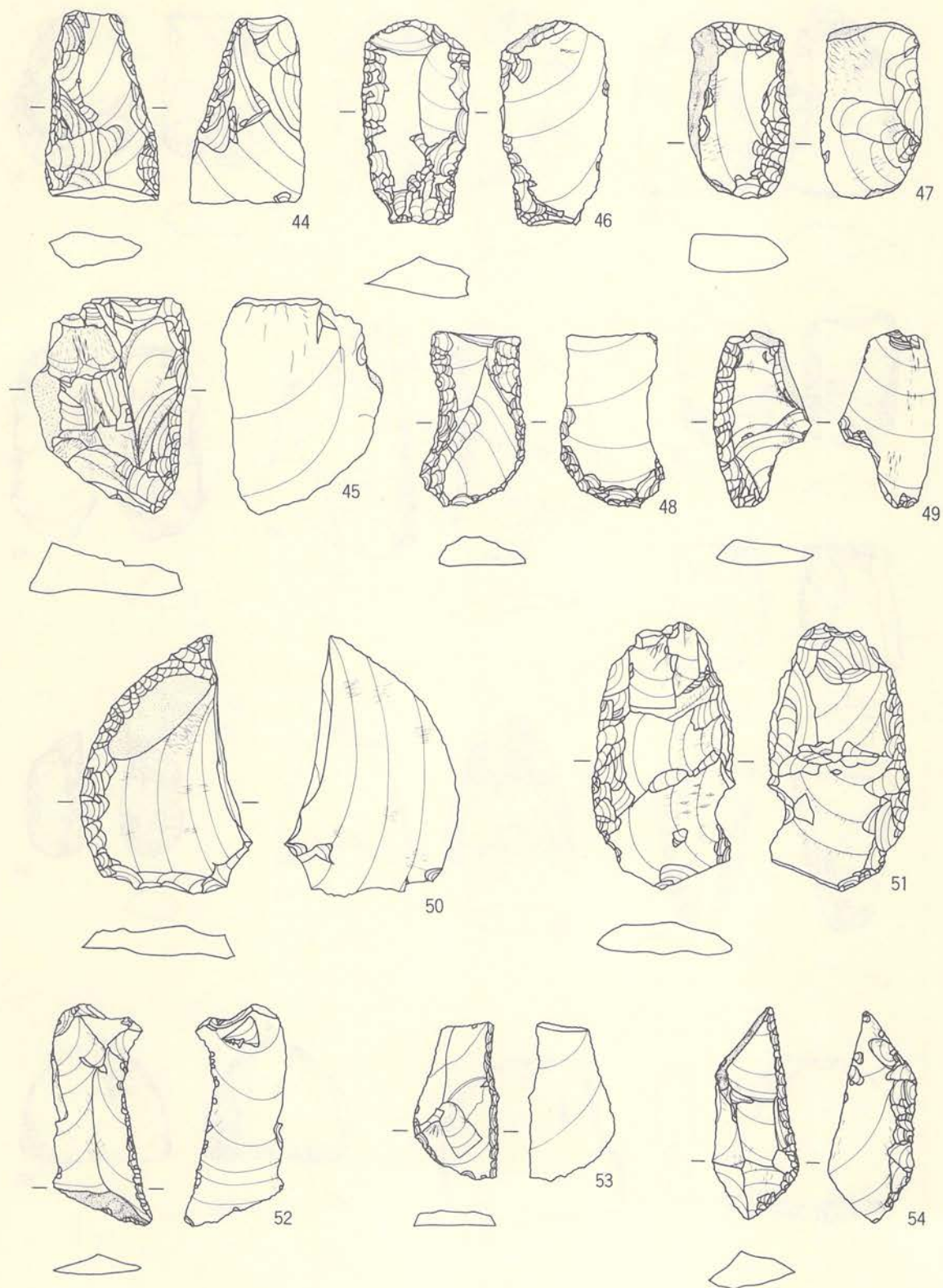
第67図 遺構外出土遺物(2)

S = $\frac{1}{3}$



第68図 遺構外出土遺物(3)

S- $\frac{1}{2}$



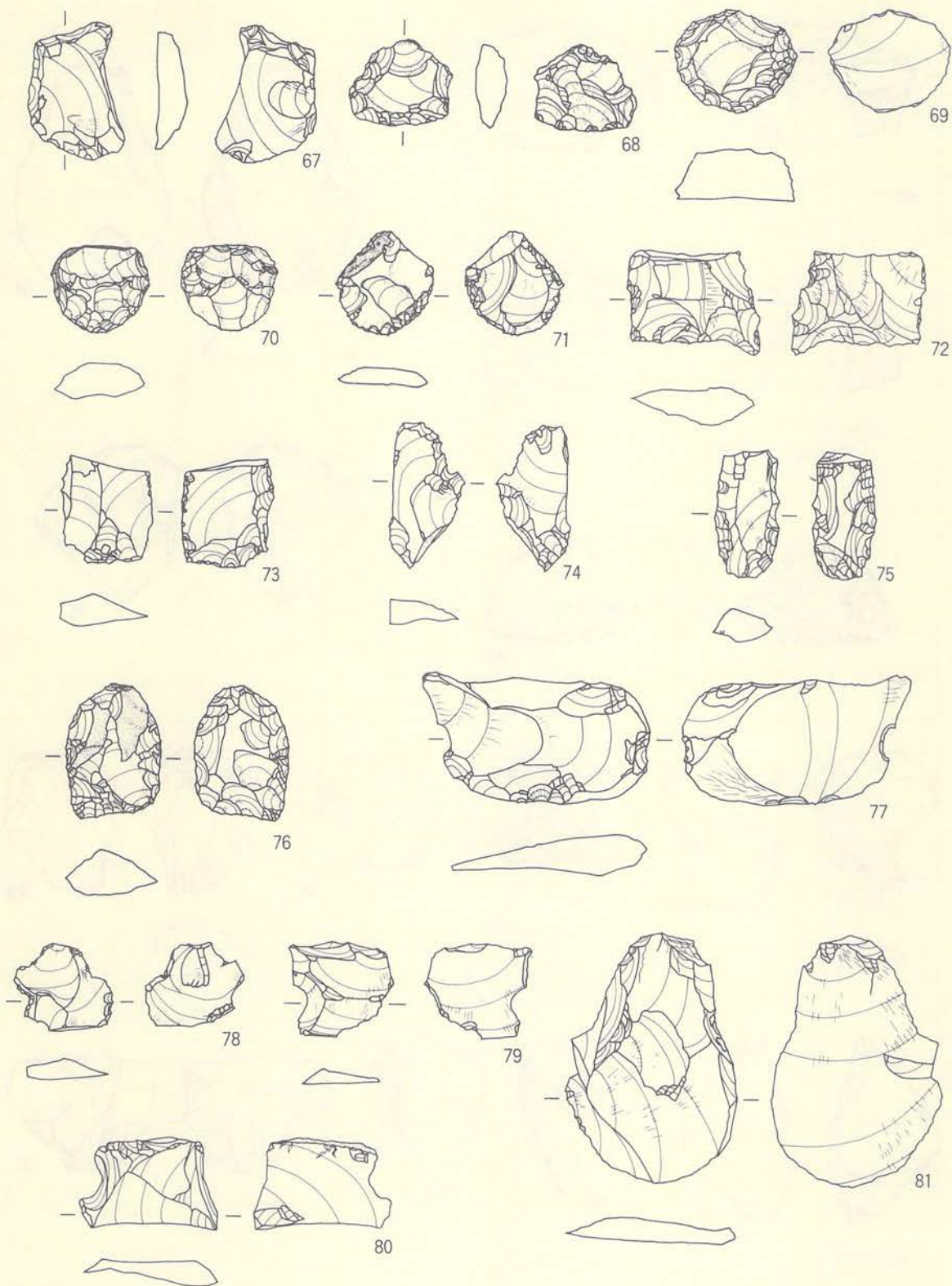
S-1/2

第69図 遺構外出土遺物(4)



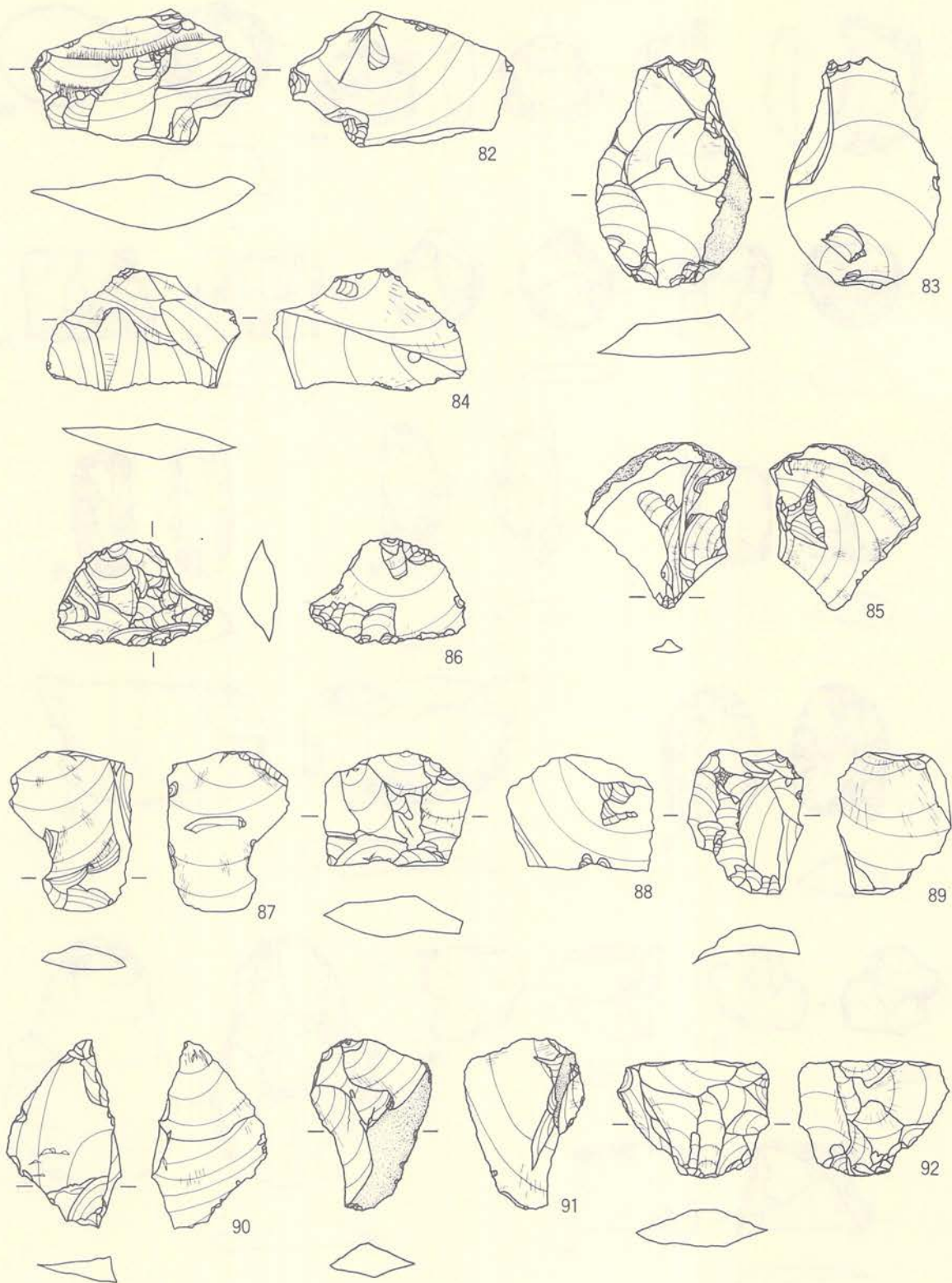
第70図 遺構外出土遺物(5)

S- $\frac{1}{2}$



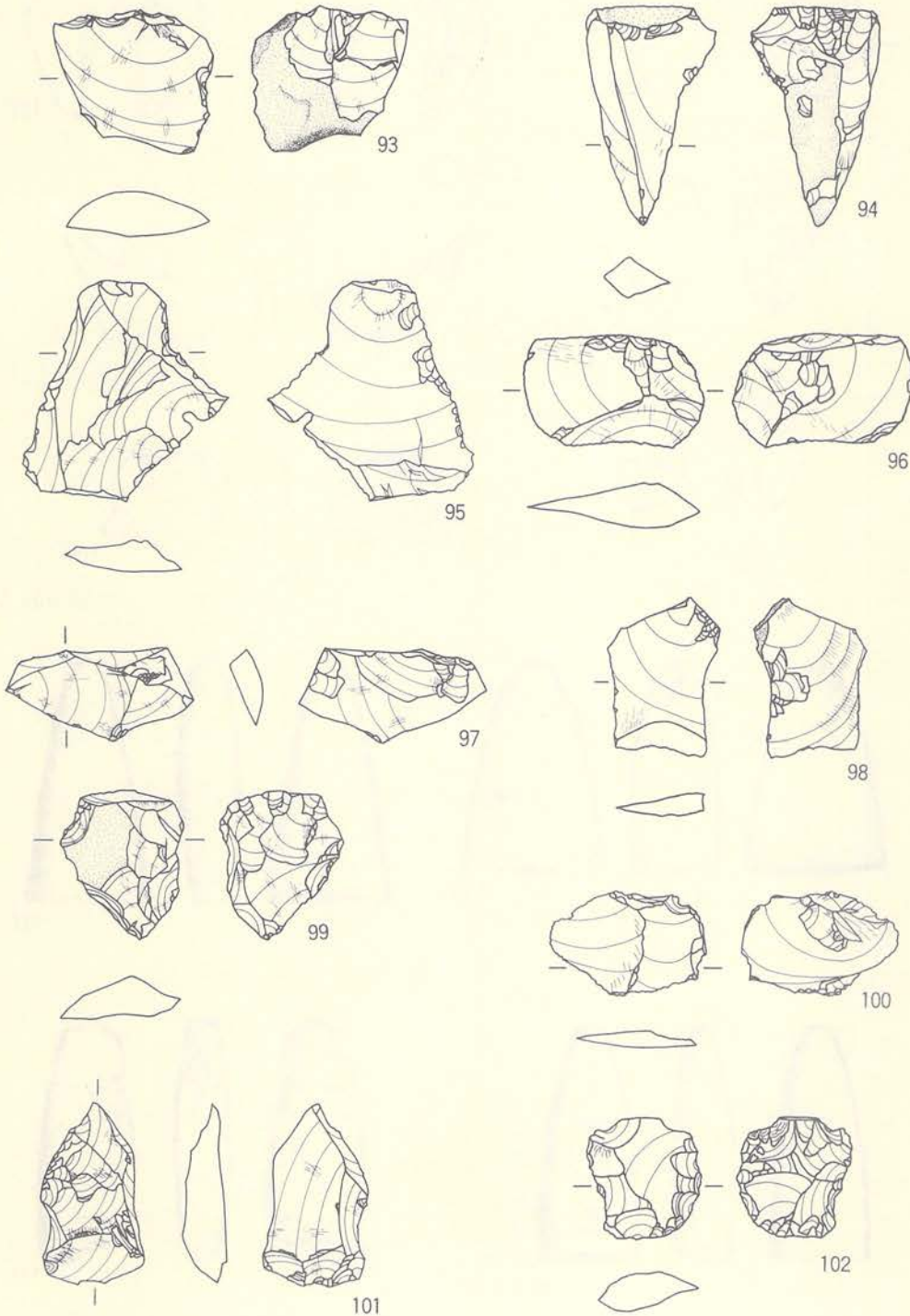
第71図 遺構外出土遺物(6)

S = $\frac{1}{2}$



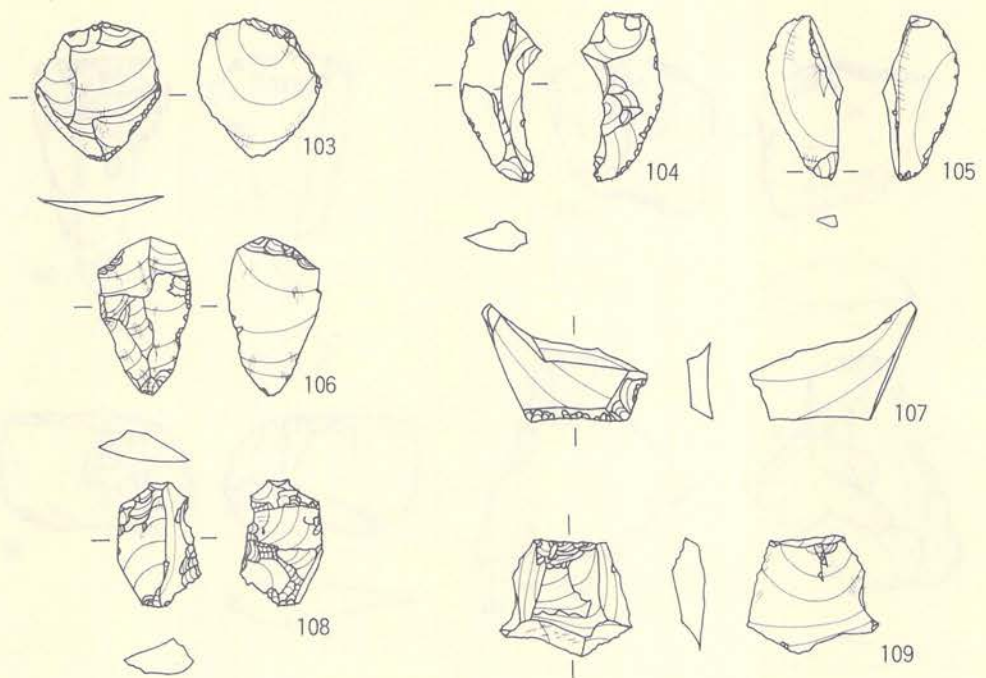
第72図 遺構外出土遺物(7)

S- $\frac{1}{2}$

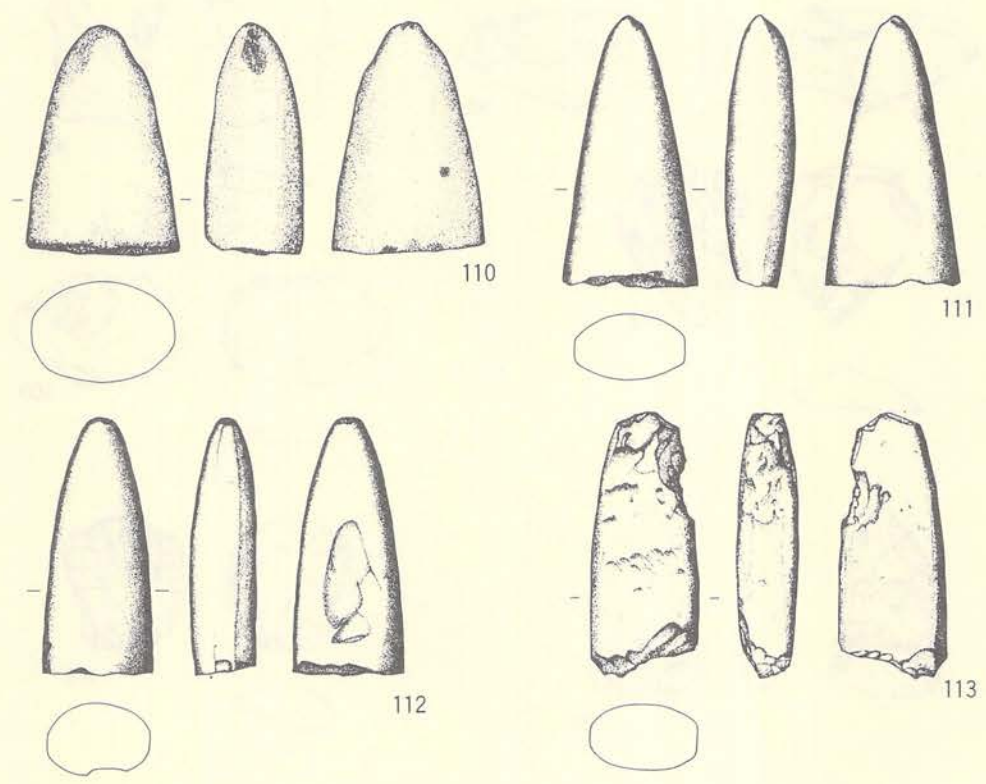


第73図 遺構外出土遺物(8)

S = 1/2

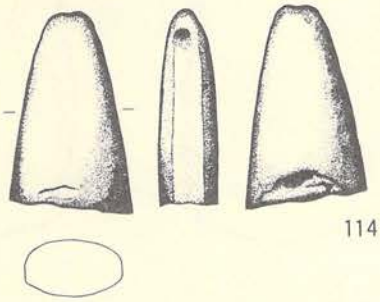


103~109 S = $\frac{1}{2}$

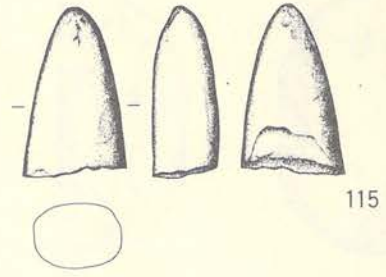


111~113 S = $\frac{1}{3}$

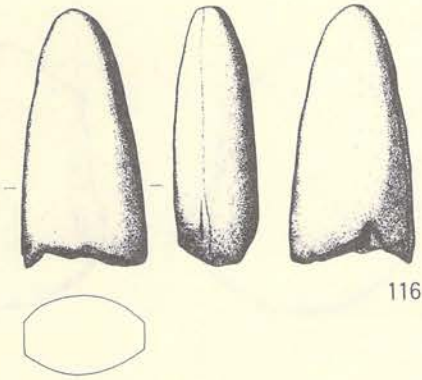
第74図 遺構外出土遺物(9)



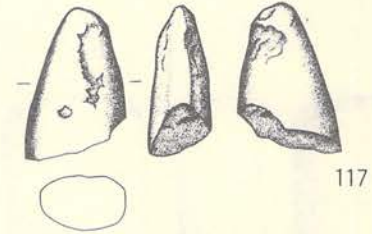
114



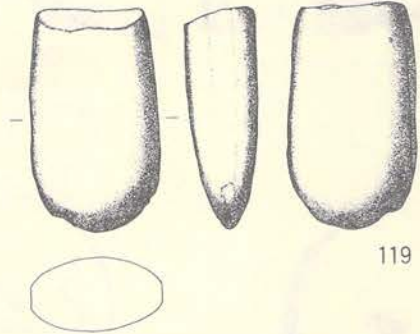
115



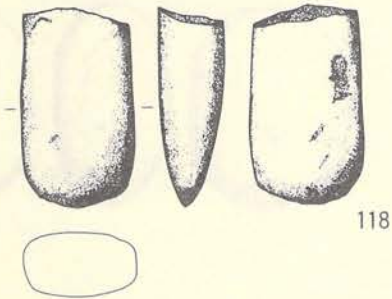
116



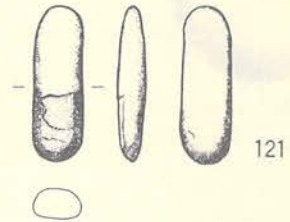
117



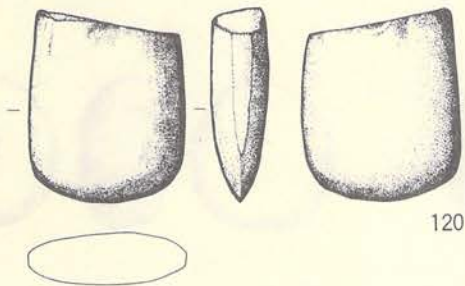
119



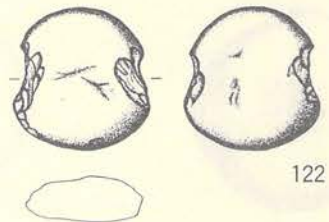
118



121



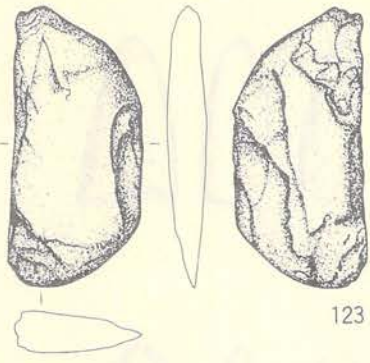
120



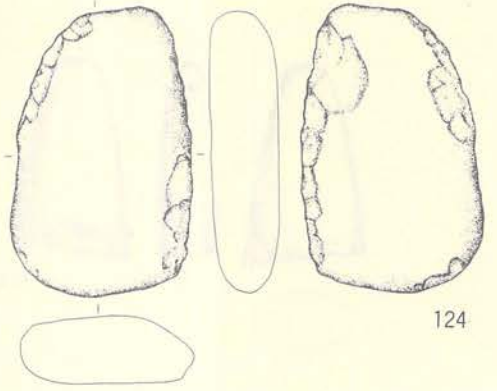
122

第75図 遺構外出土遺物(10)

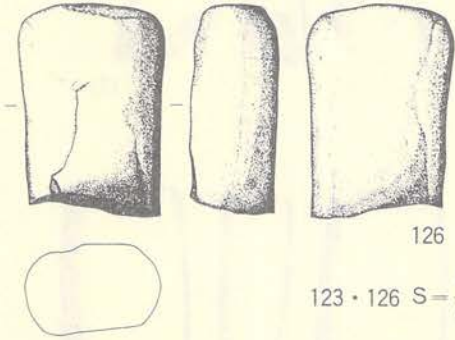
S- $\frac{1}{3}$



123

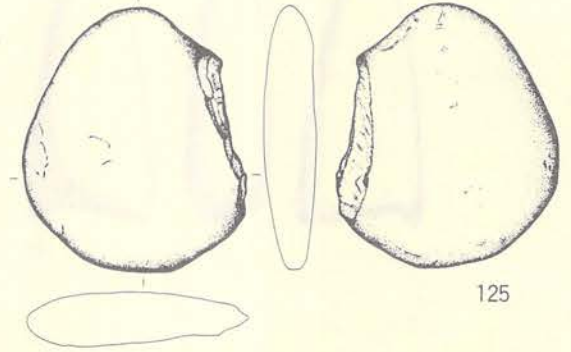


124

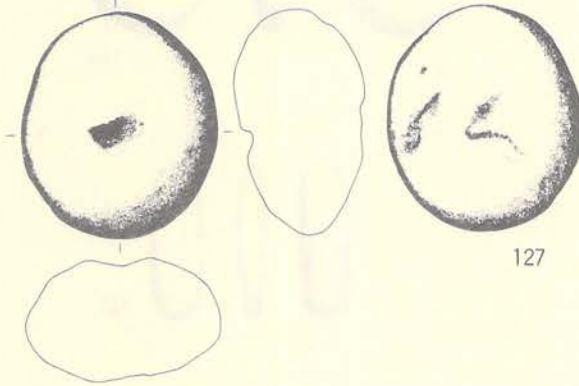


126

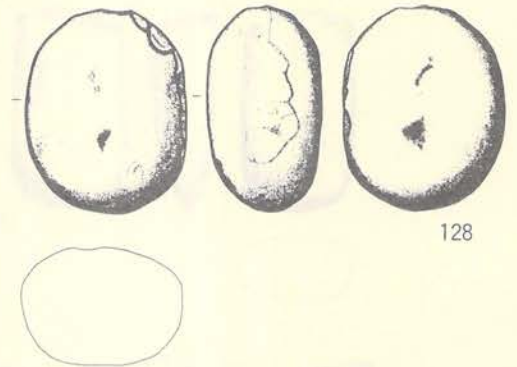
123 · 126 S = $\frac{1}{3}$



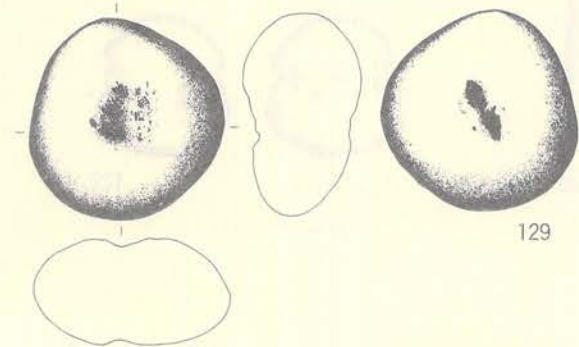
125



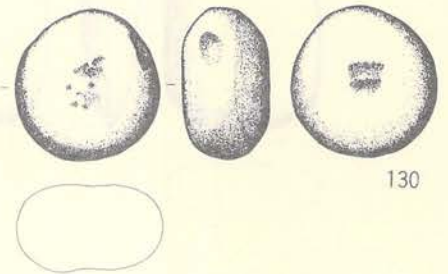
127



128



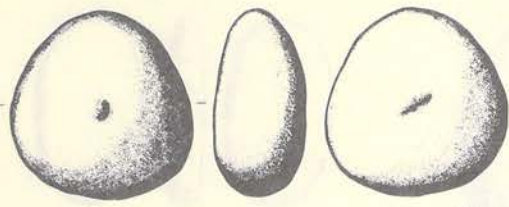
129



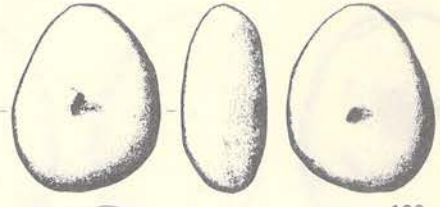
130

124 · 125 · 127 ~ 130 S = $\frac{1}{4}$

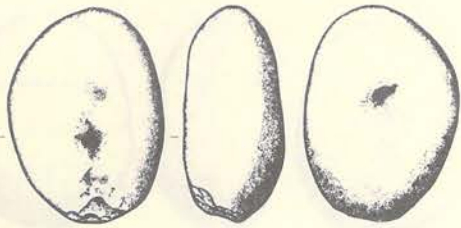
第76図 遺構外出土遺物(1)



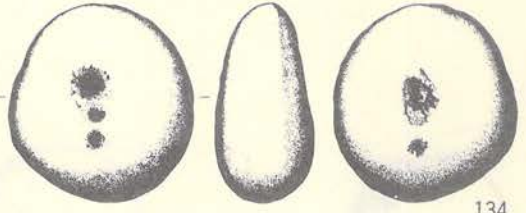
131



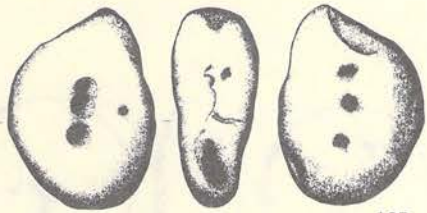
132



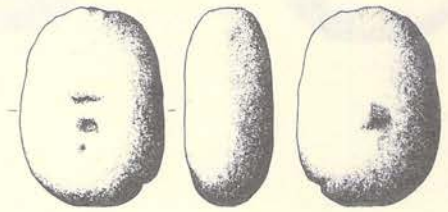
133



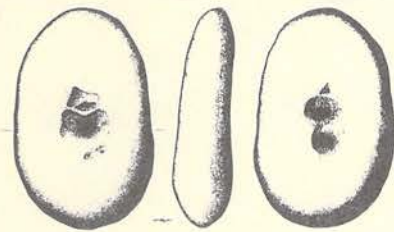
134



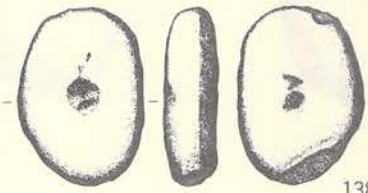
135



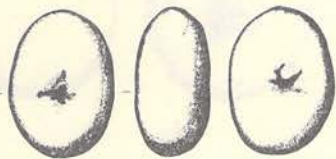
136



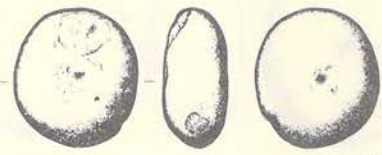
137



138



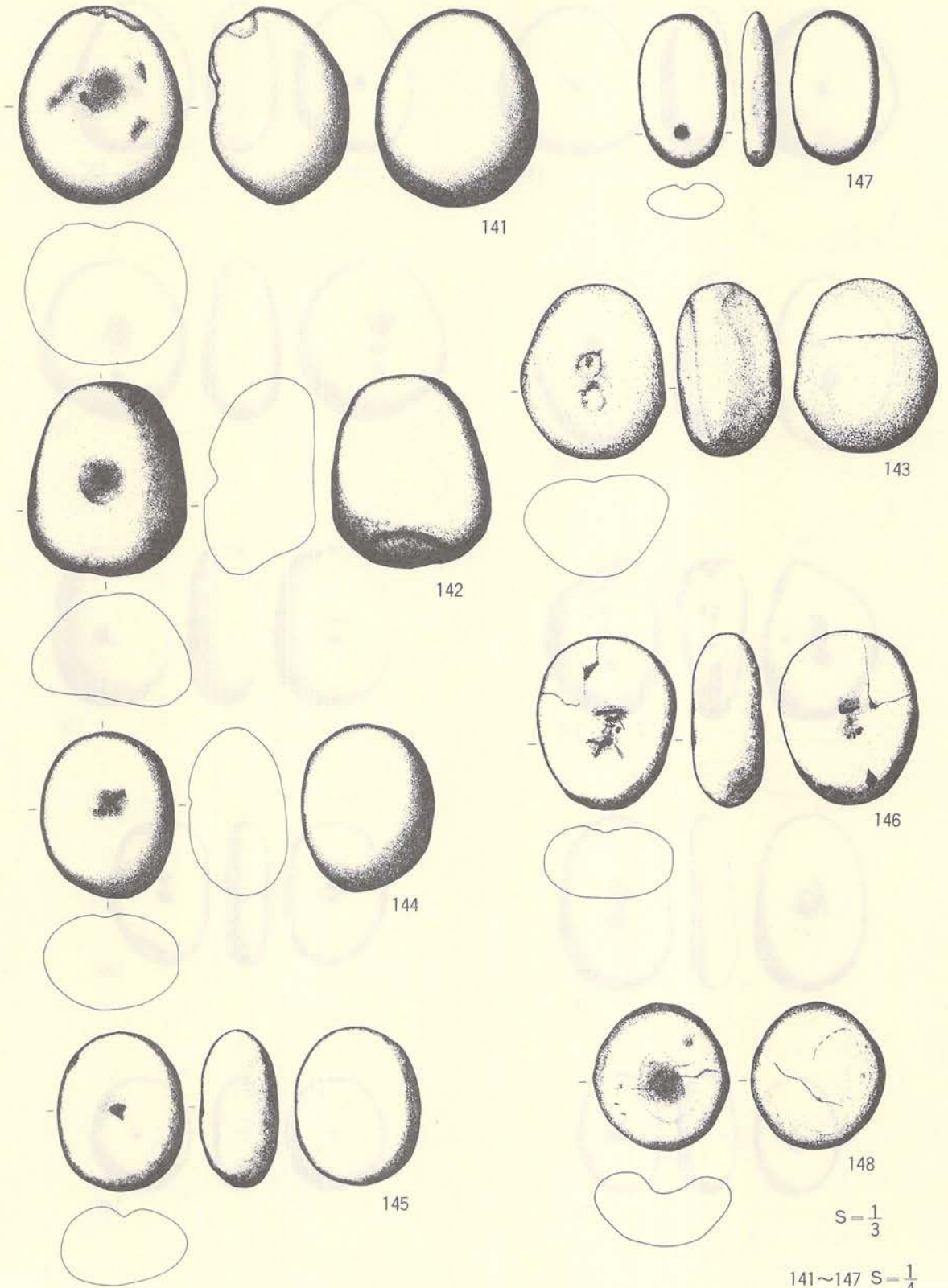
139



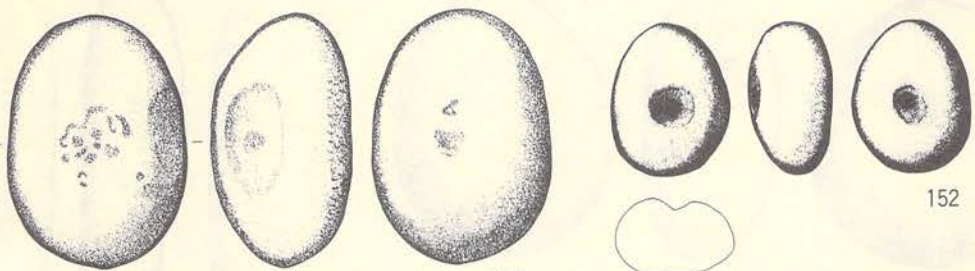
140

第77図 遺構外出土遺物(12)

S=1/4

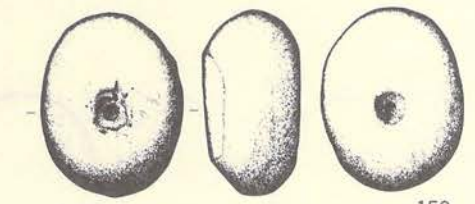
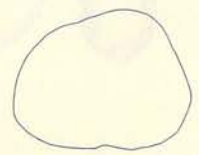


第78図 遺構外出土遺物(13)

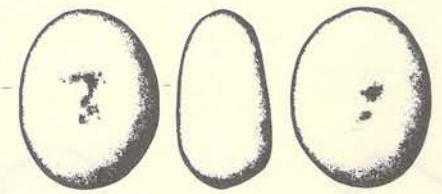


149

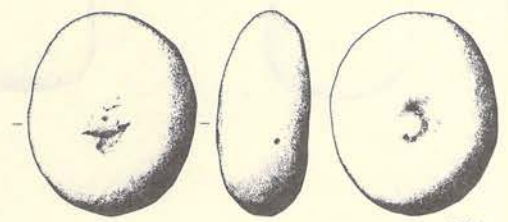
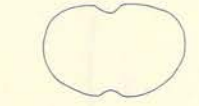
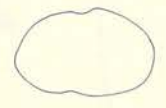
152



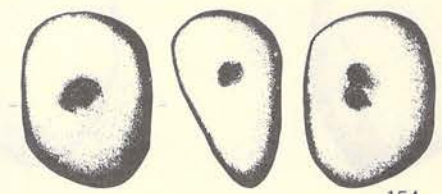
150



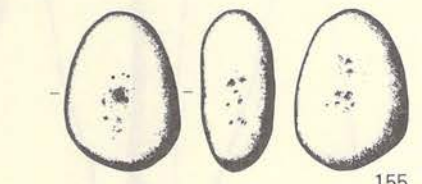
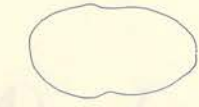
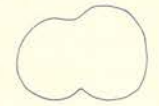
151



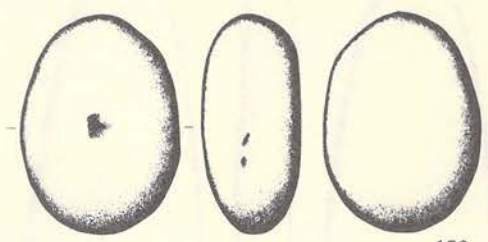
153



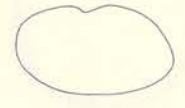
154



155

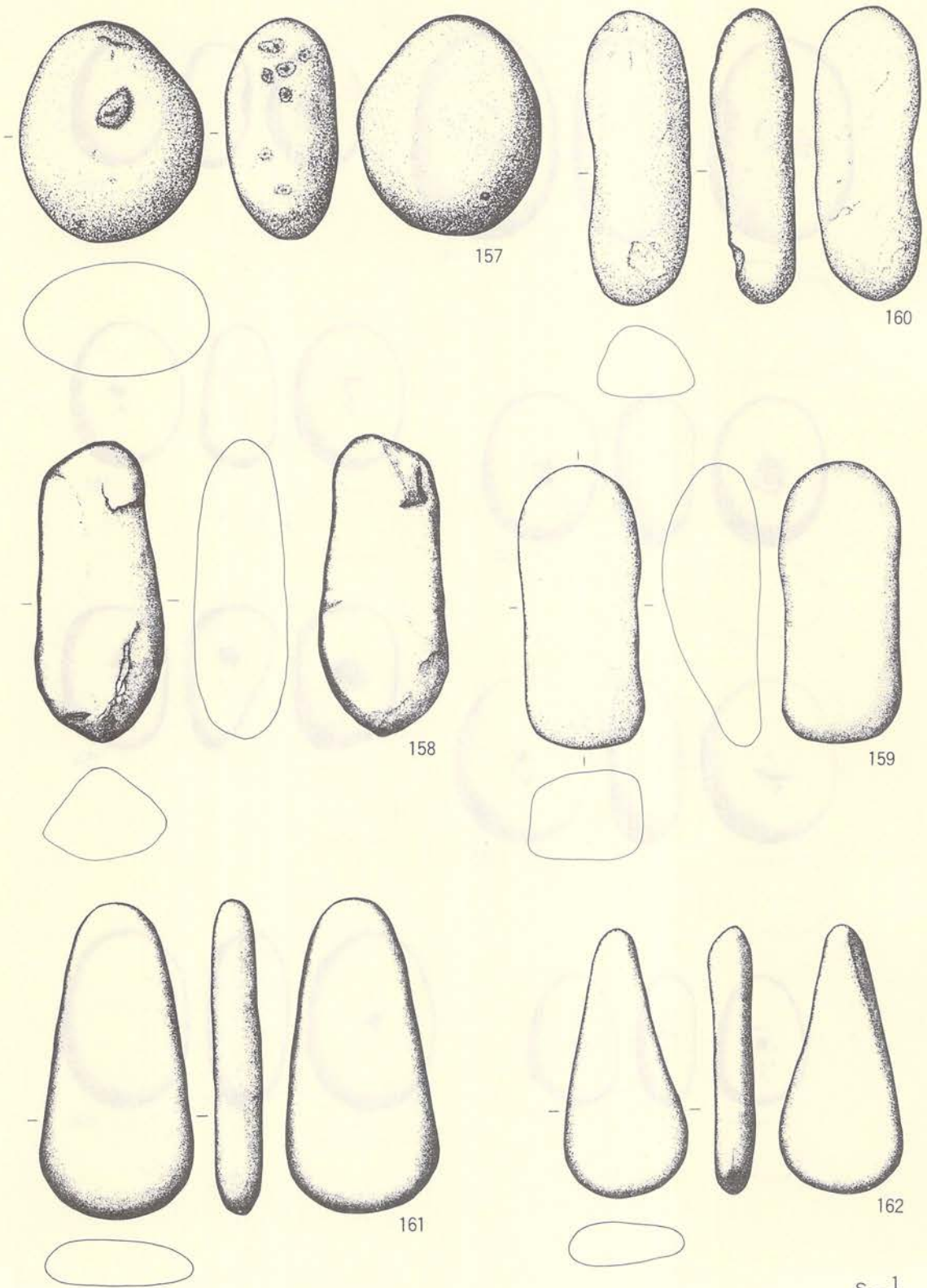


156



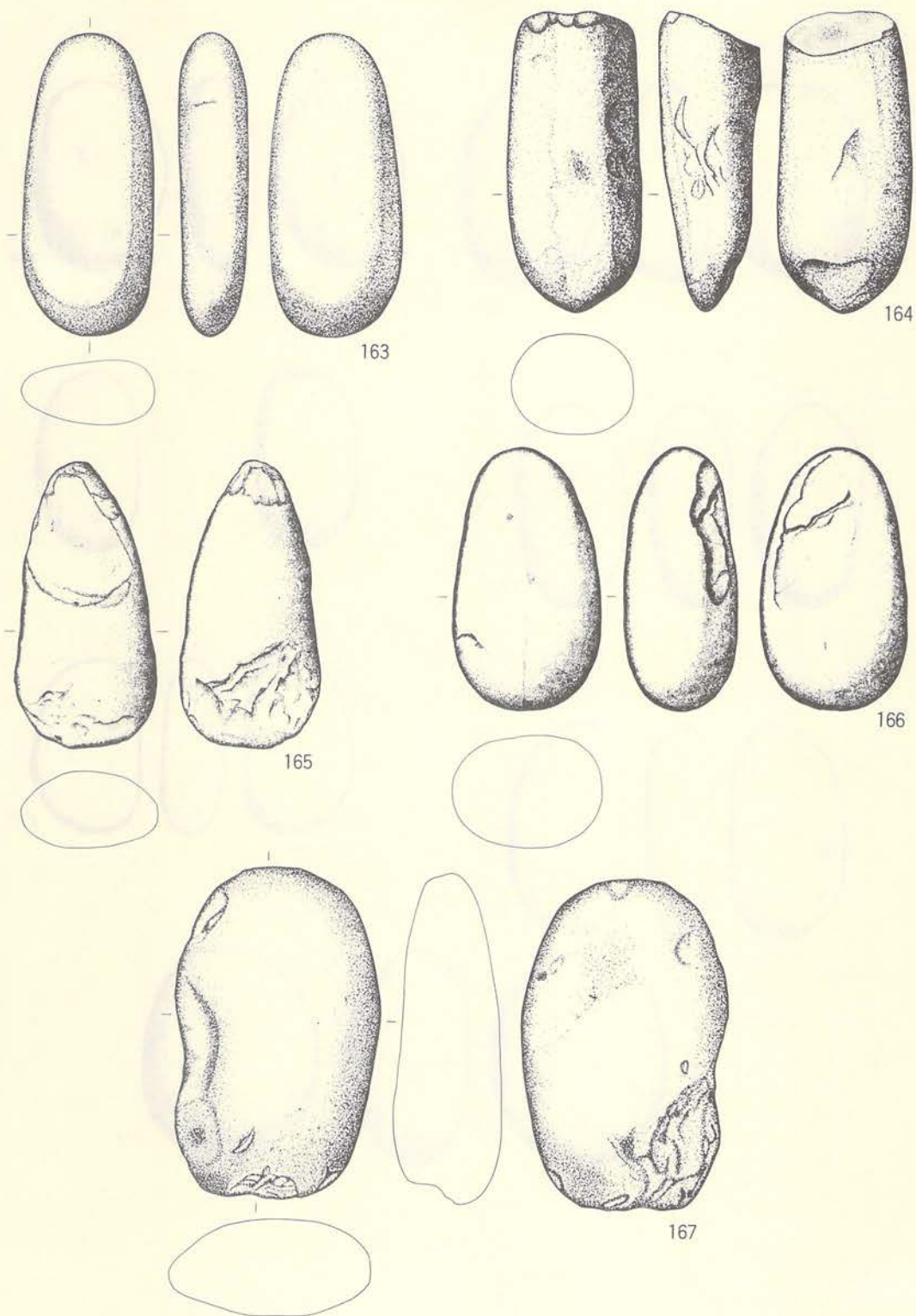
$s = \frac{1}{4}$

第79図 遺構外出土遺物(14)



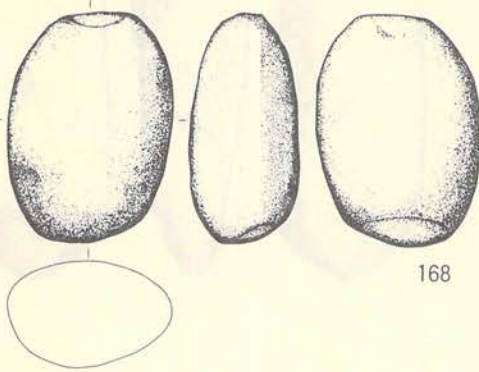
第80図 遺構外出土遺物(15)

S = $\frac{1}{3}$

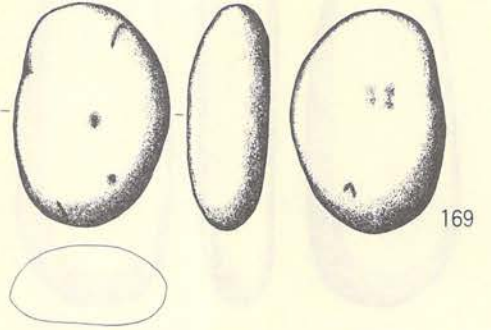


第81図 遺構外出土遺物(16)

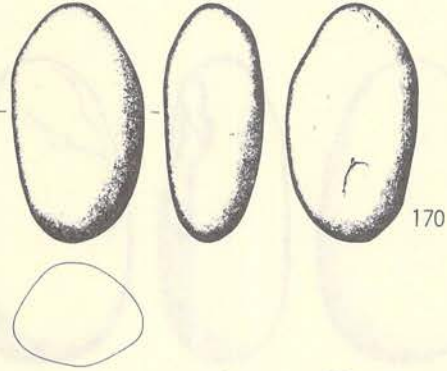
S- $\frac{1}{3}$



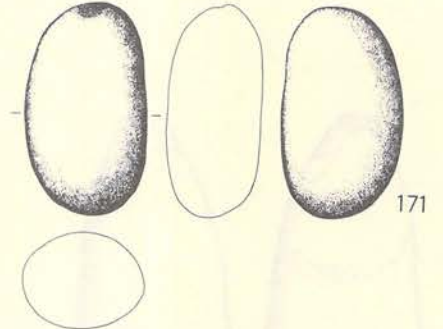
168



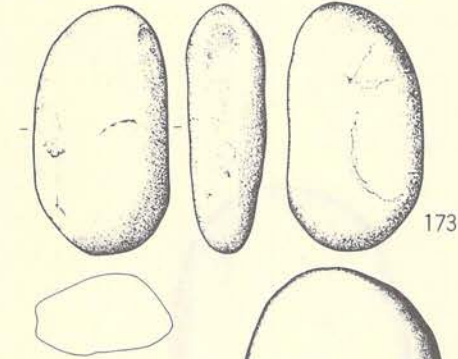
169



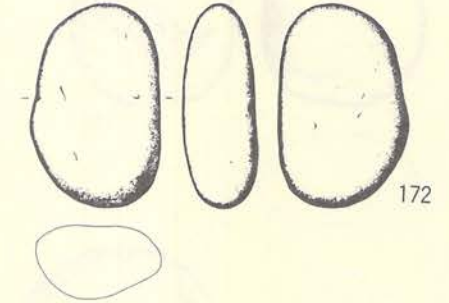
170



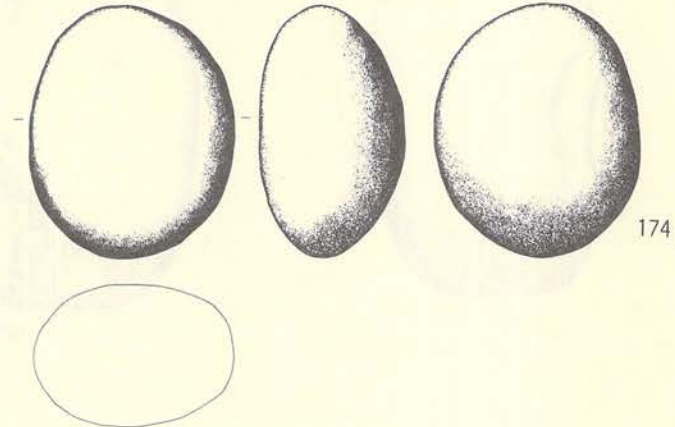
171



173



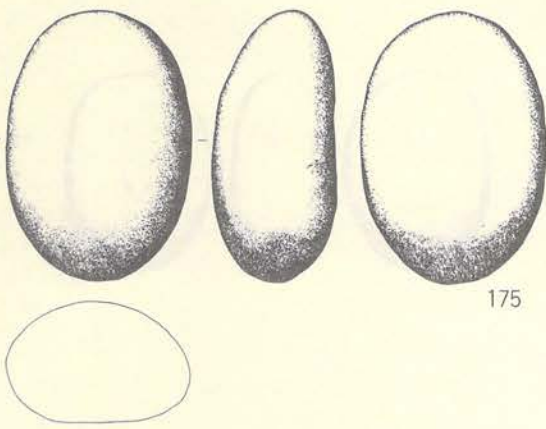
172



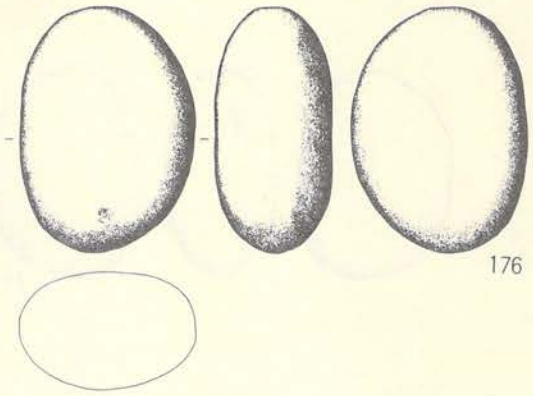
174

第82図 遺構外出土遺物(17)

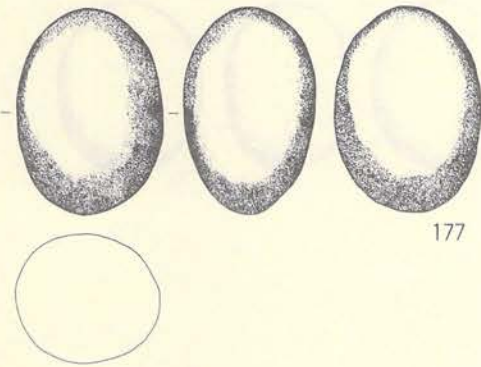
s = $\frac{1}{4}$



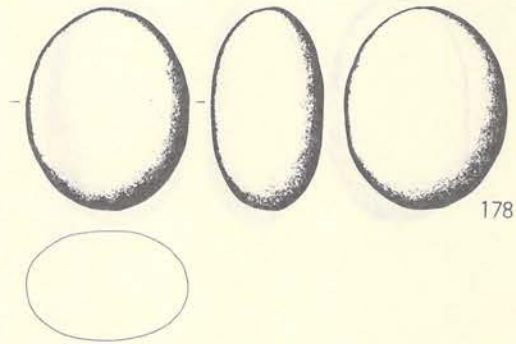
175



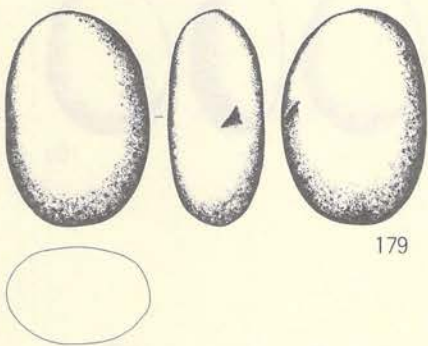
176



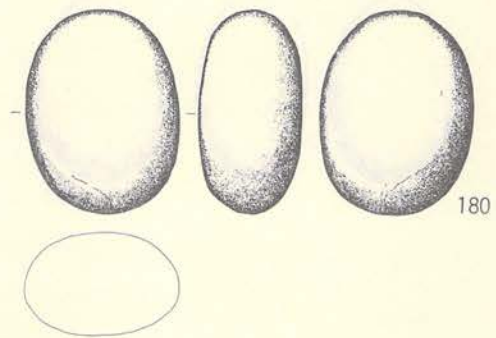
177



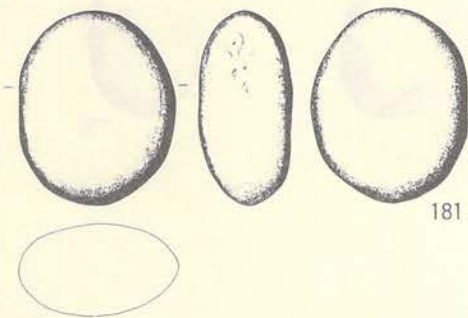
178



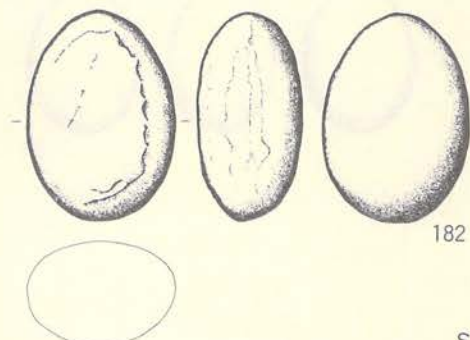
179



180



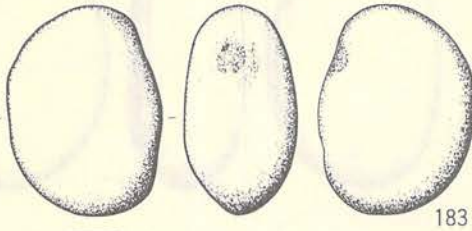
181



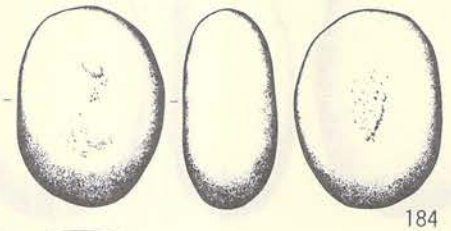
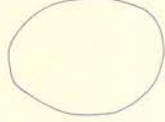
182

S = $\frac{1}{4}$

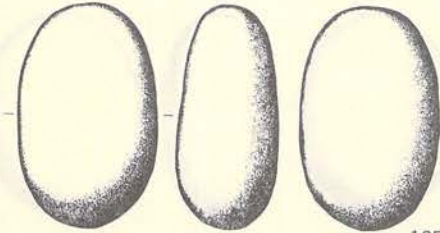
第83図 遺構外出土遺物(18)



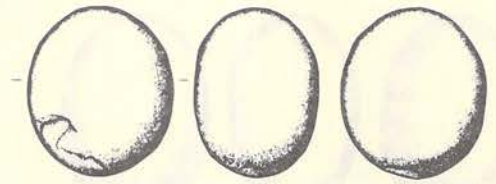
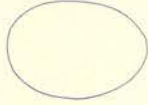
183



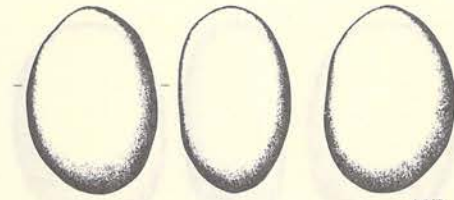
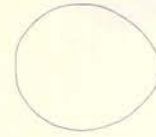
184



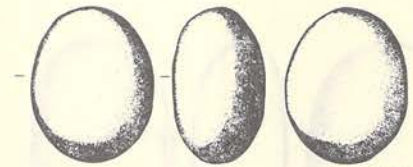
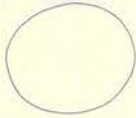
185



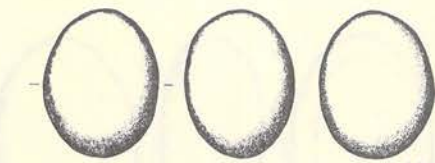
186



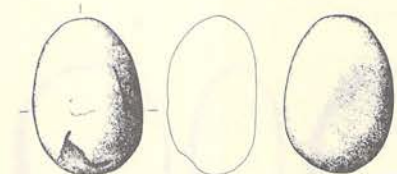
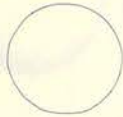
187



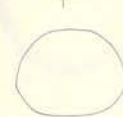
188



189

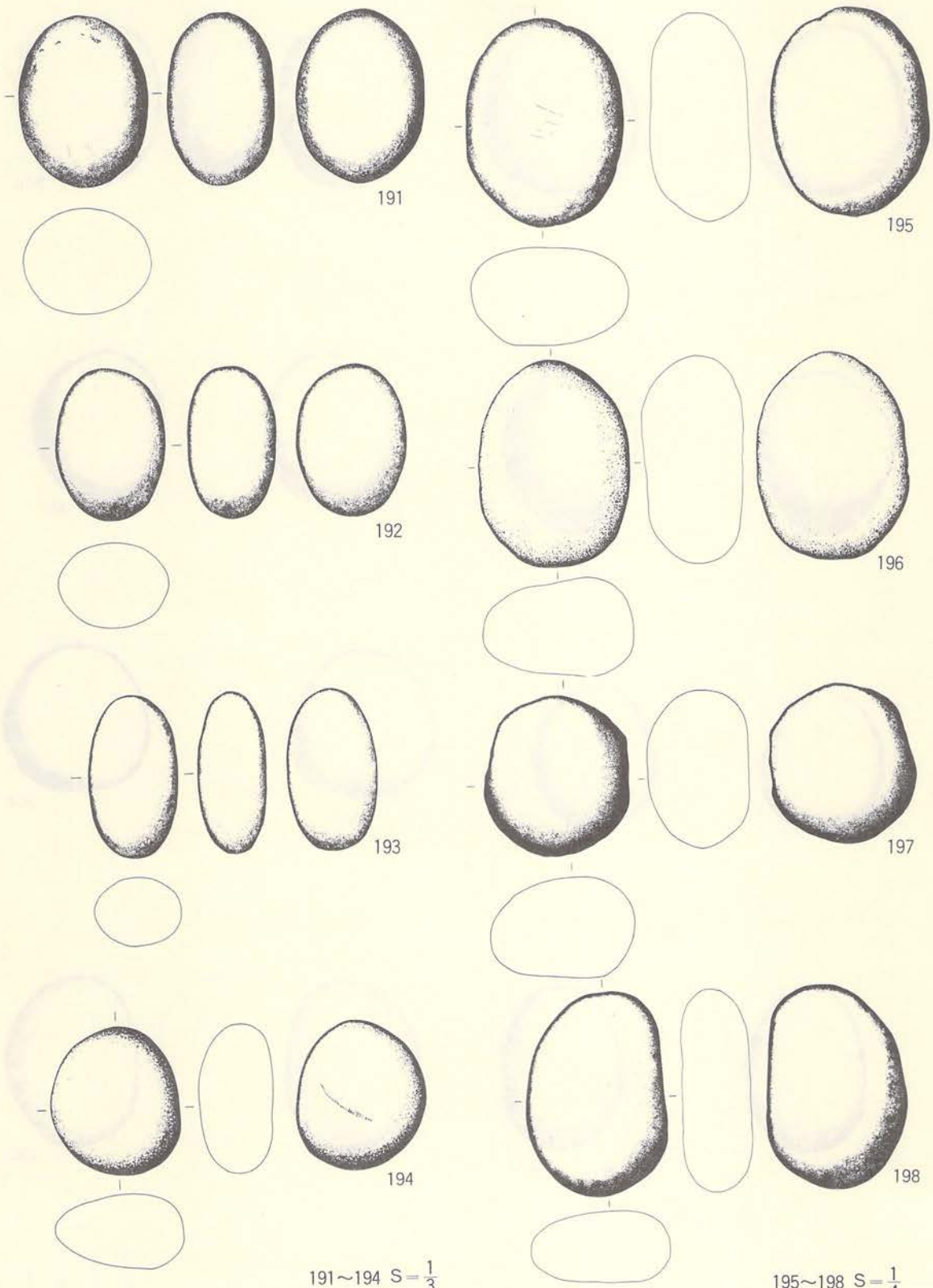


190



第84図 遺構外出土遺物(19)

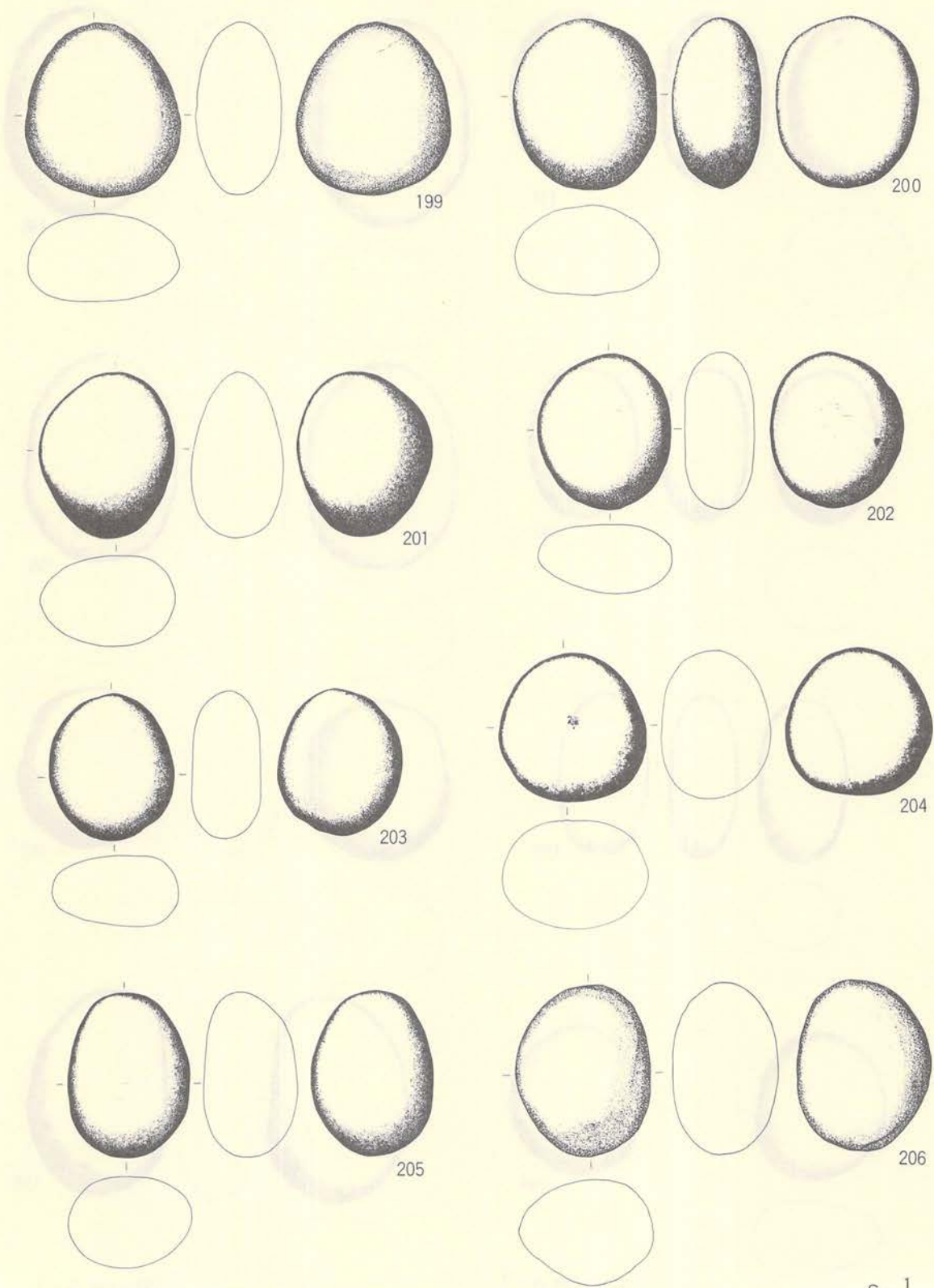
S = $\frac{1}{4}$



191~194 S = $\frac{1}{3}$

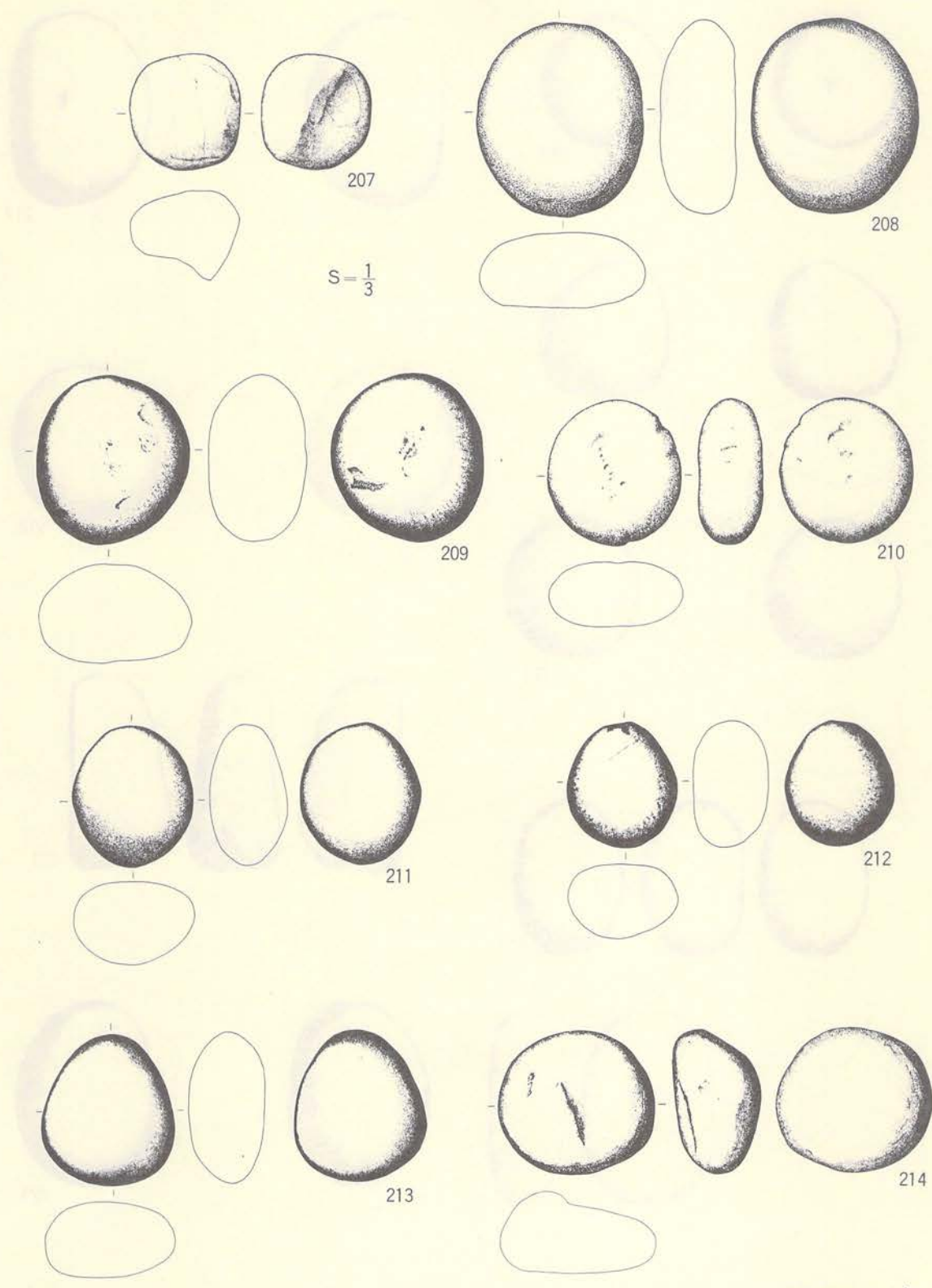
195~198 S = $\frac{1}{4}$

第85図 遺構外出土遺物(20)



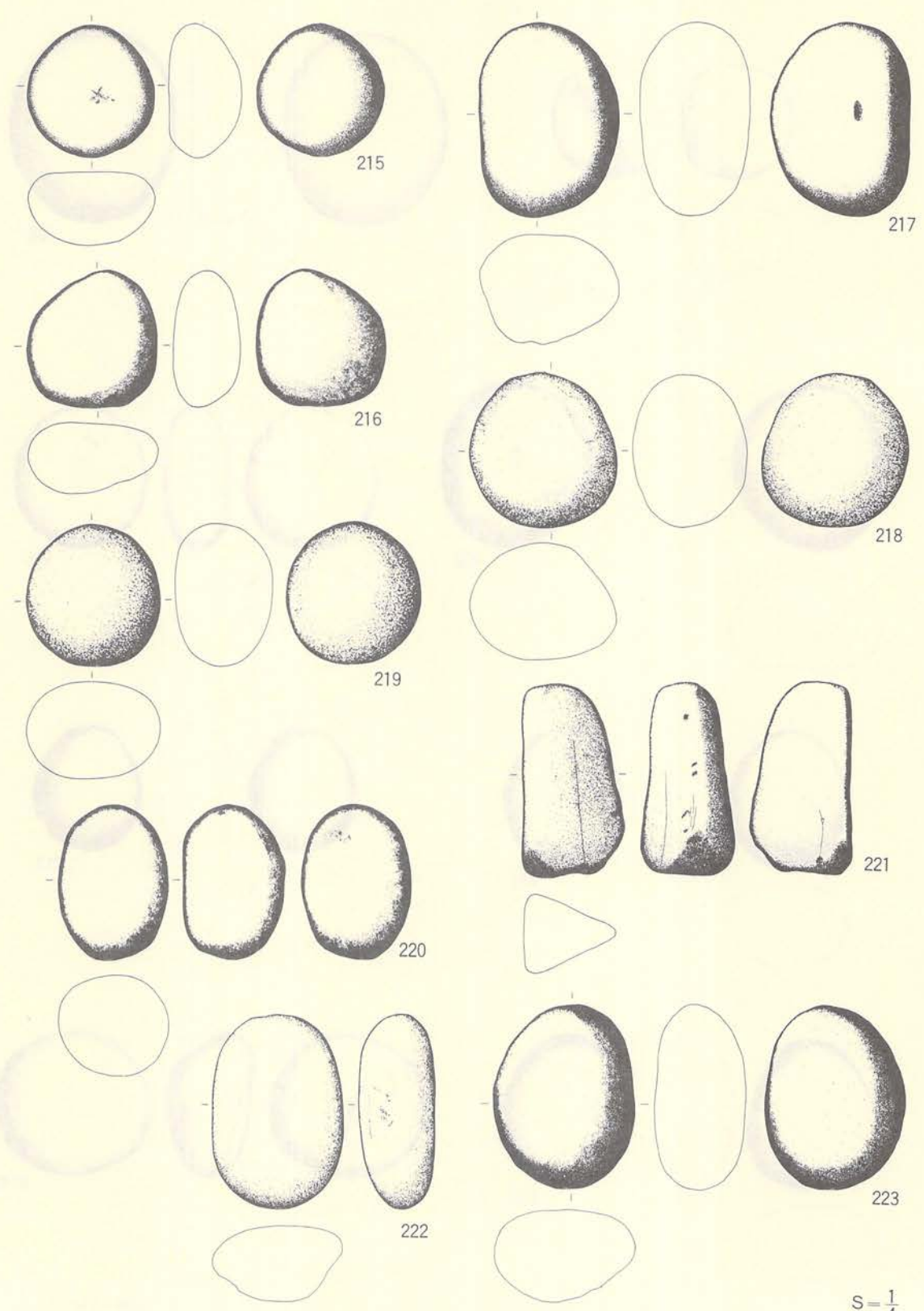
$s = \frac{1}{4}$

第86図 遺構外出土遺物(21)



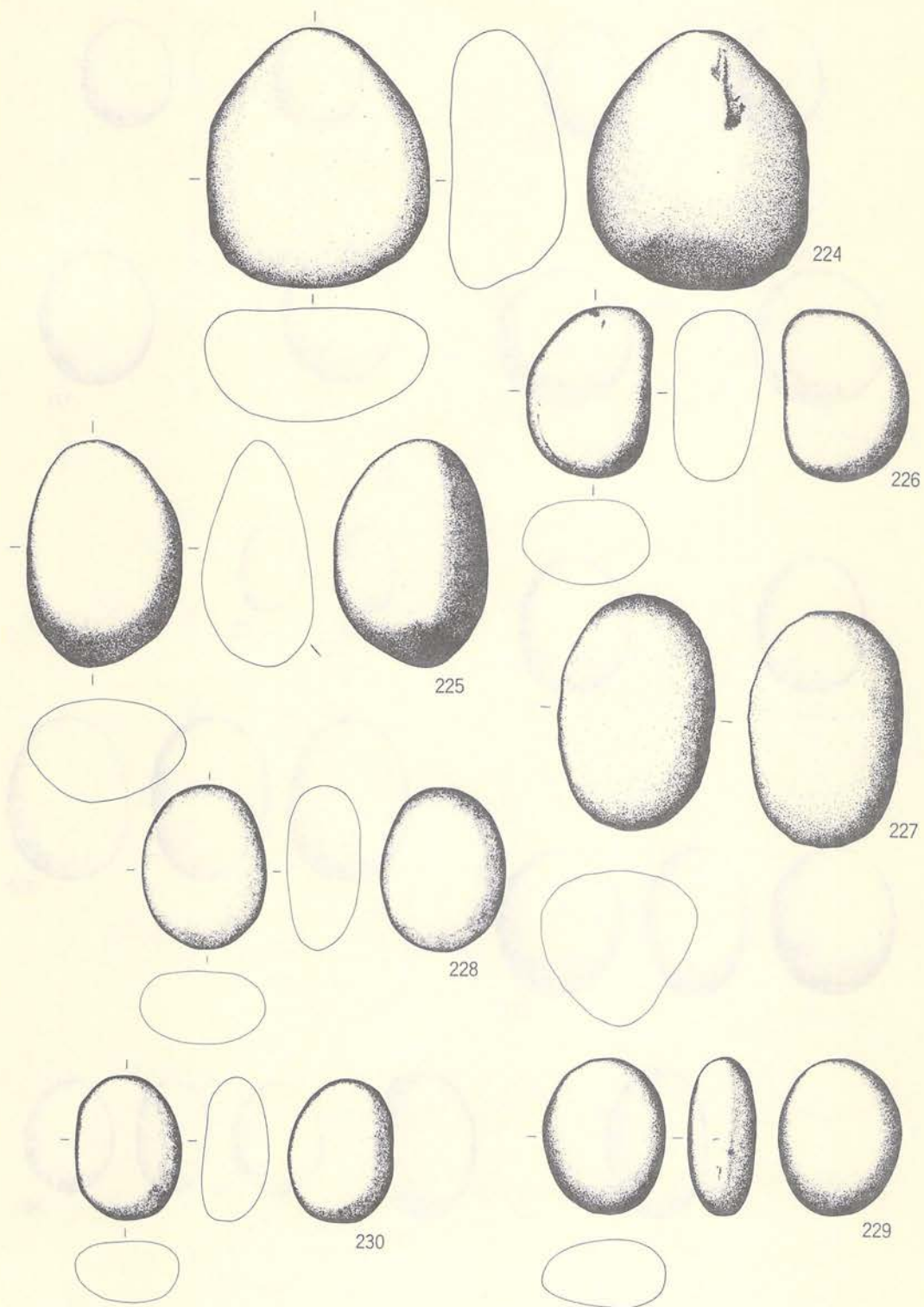
第87図 遺構外出土遺物(22)

208~214 S=1/4



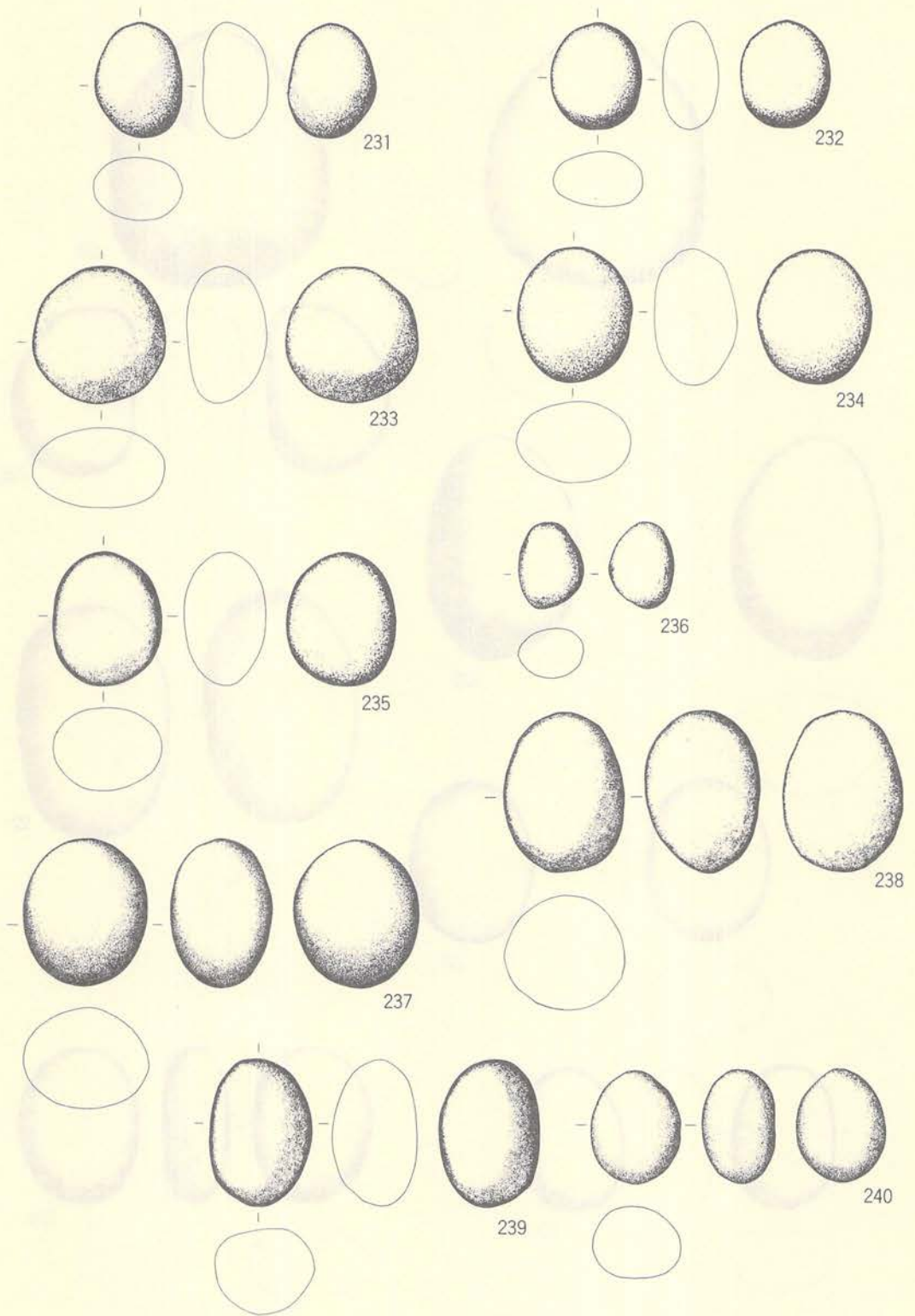
第88図 遺構外出土遺物(23)

S = $\frac{1}{4}$



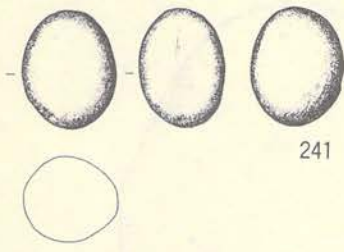
第89図 遺構外出土遺物24

S = $\frac{1}{3}$

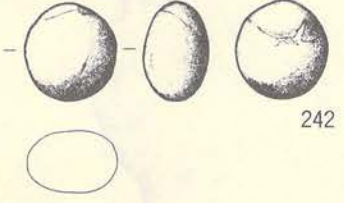


第90図 遺構外出土遺物(25)

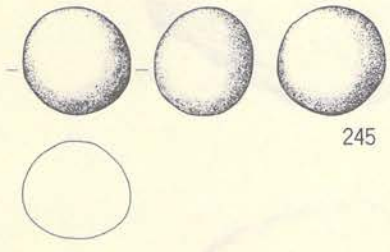
S = $\frac{1}{3}$



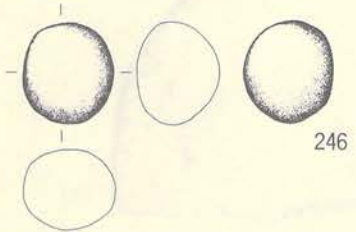
241



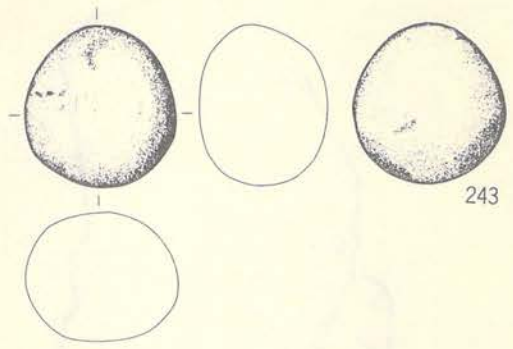
242



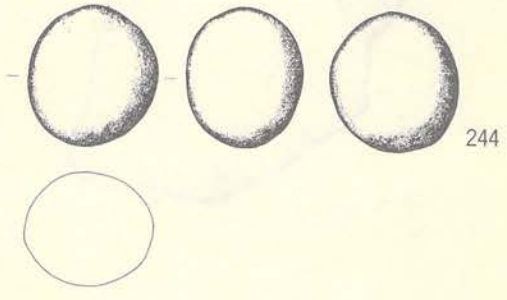
245



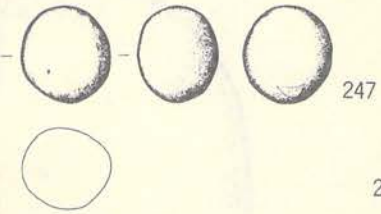
246



243

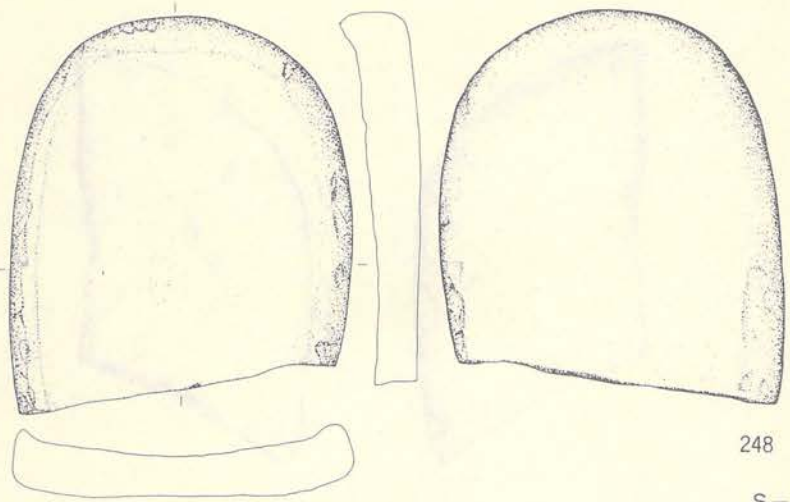


244



247

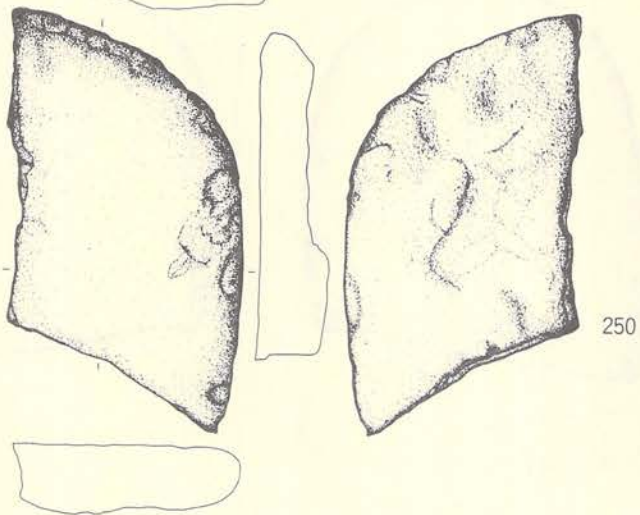
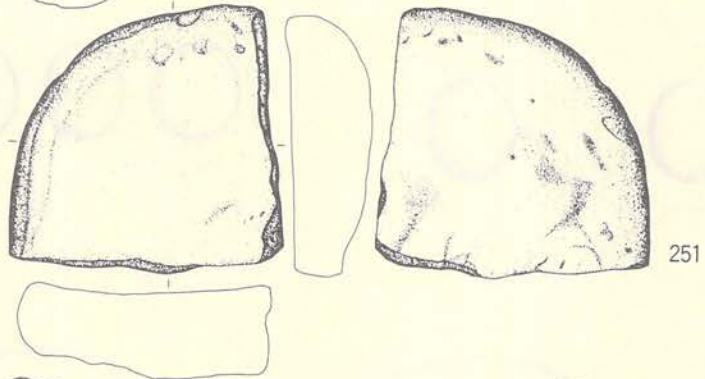
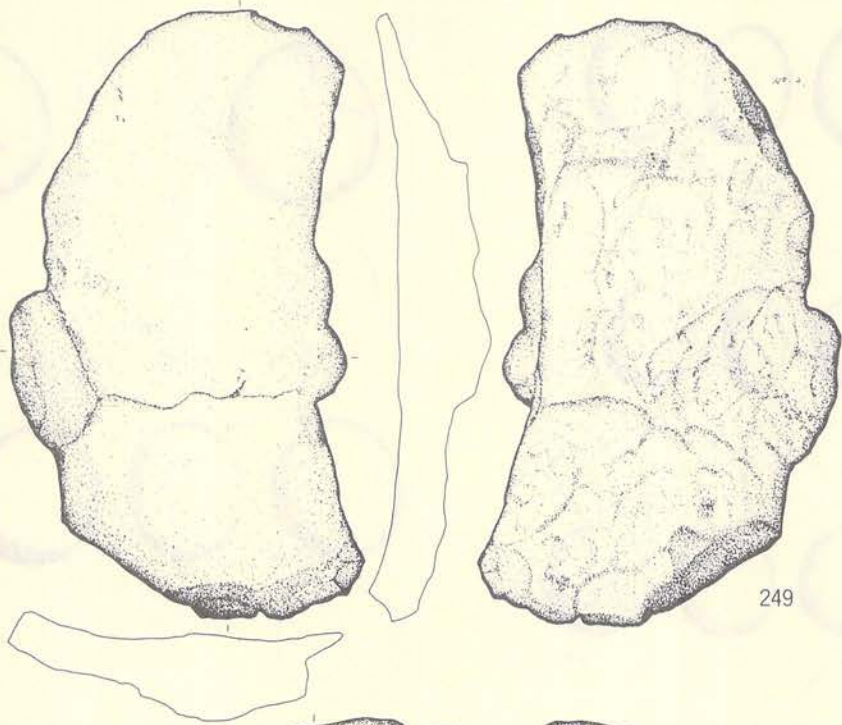
241~247 S = $\frac{1}{3}$



248

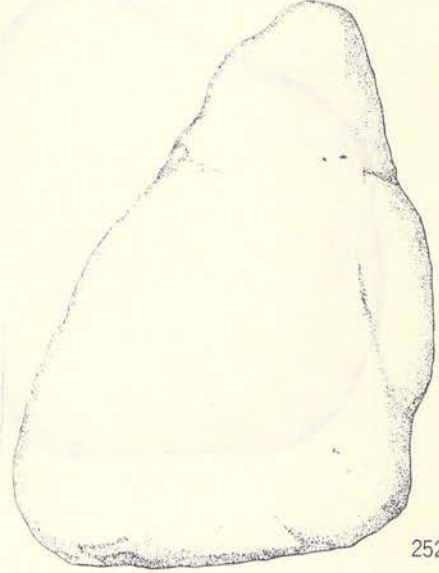
S = $\frac{1}{4}$

第91図 遺構外出土遺物(26)

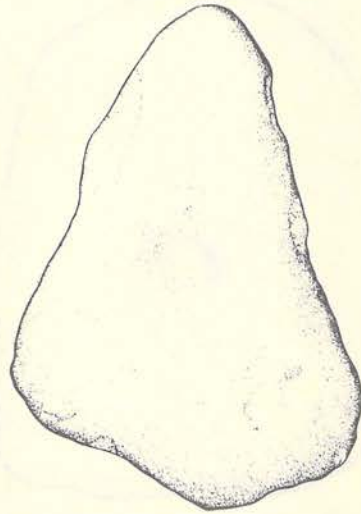
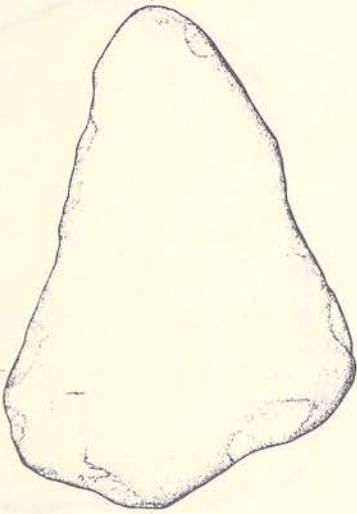


第92図 遺構外出土遺物(27)

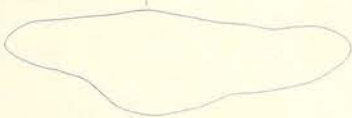
S- $\frac{1}{5}$



252

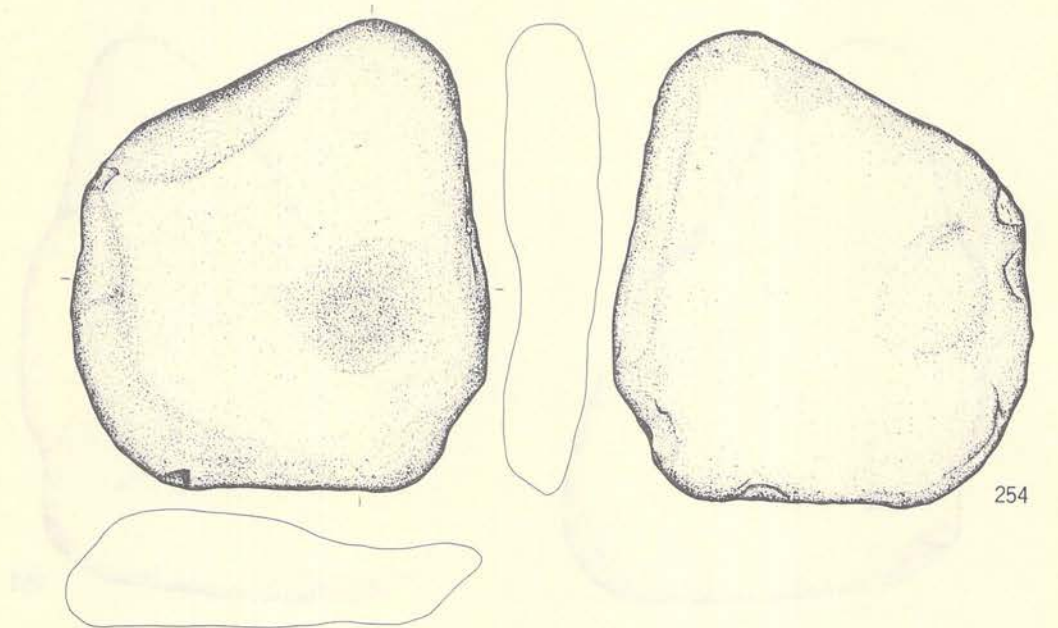


253

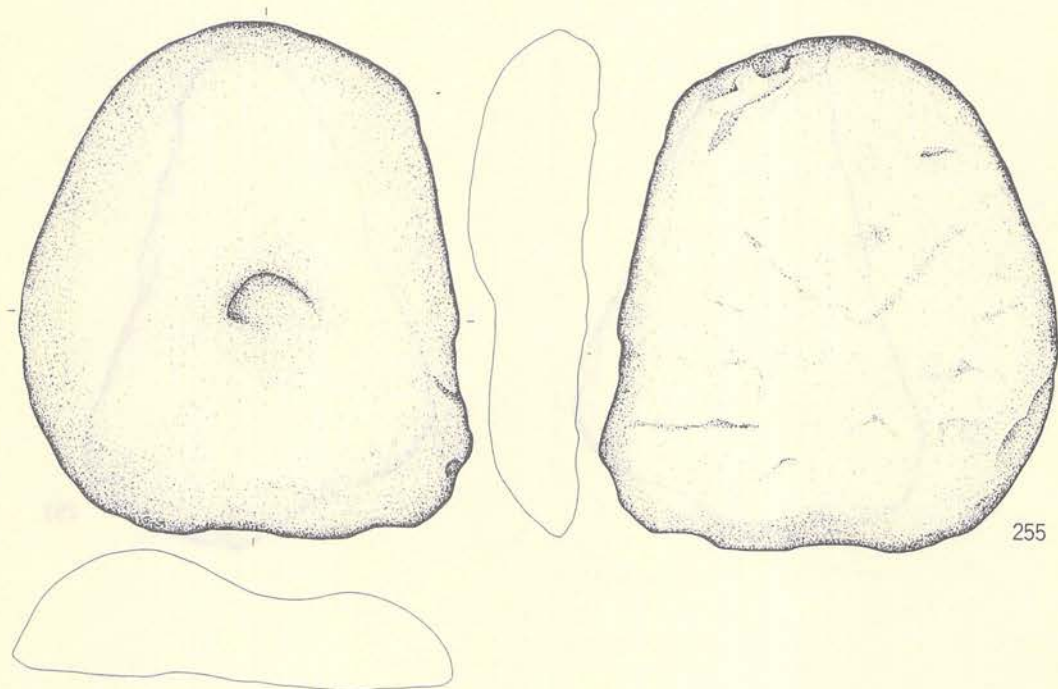


S = $\frac{1}{5}$

第93図 遺構外出土遺物(28)



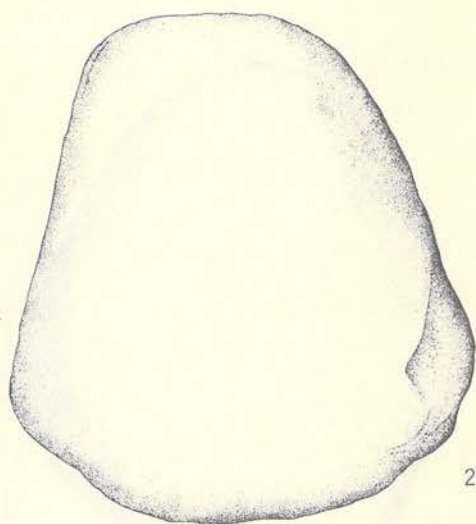
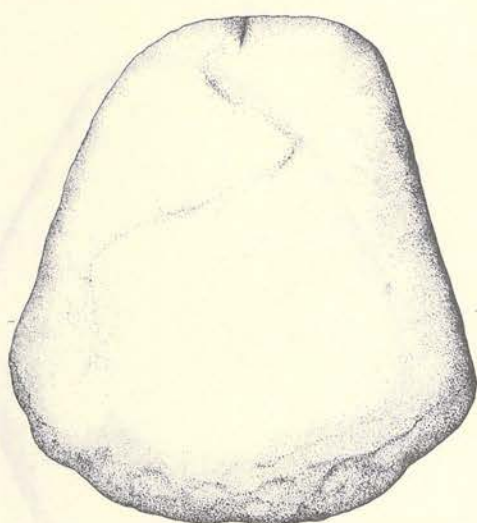
254



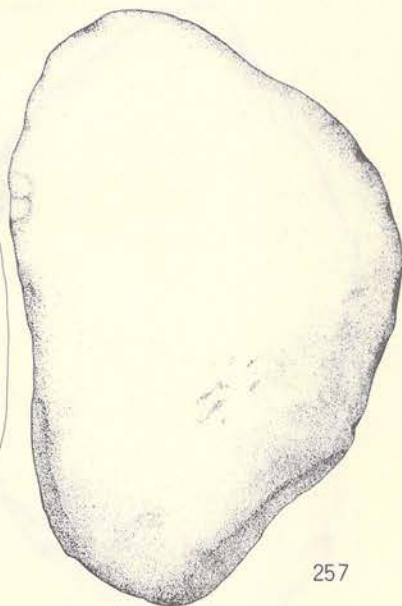
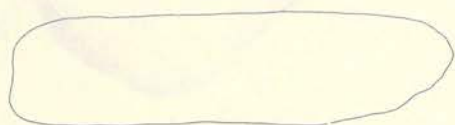
255

第94図 遺構外出土遺物(29)

S = $\frac{1}{4}$



256

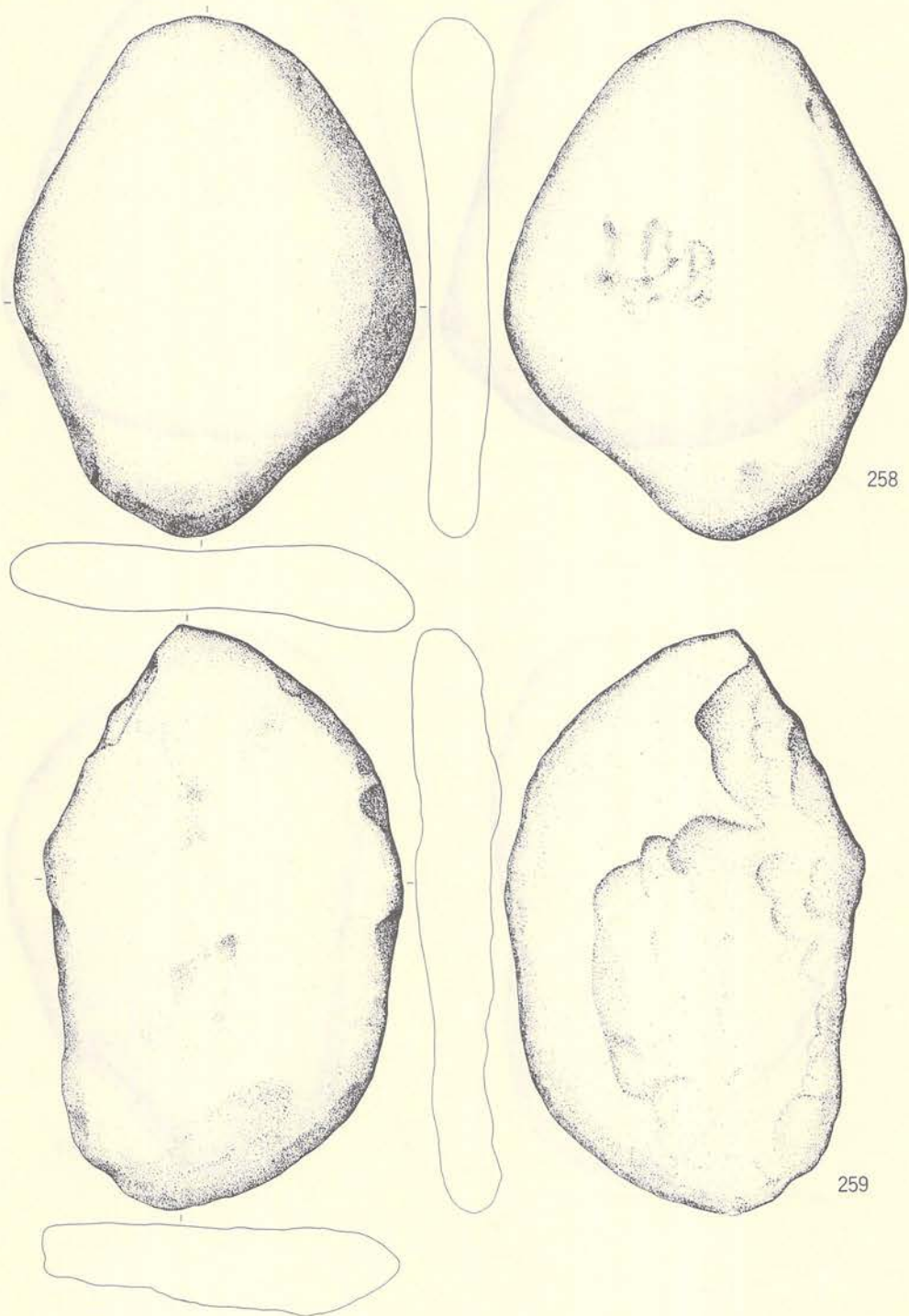


257



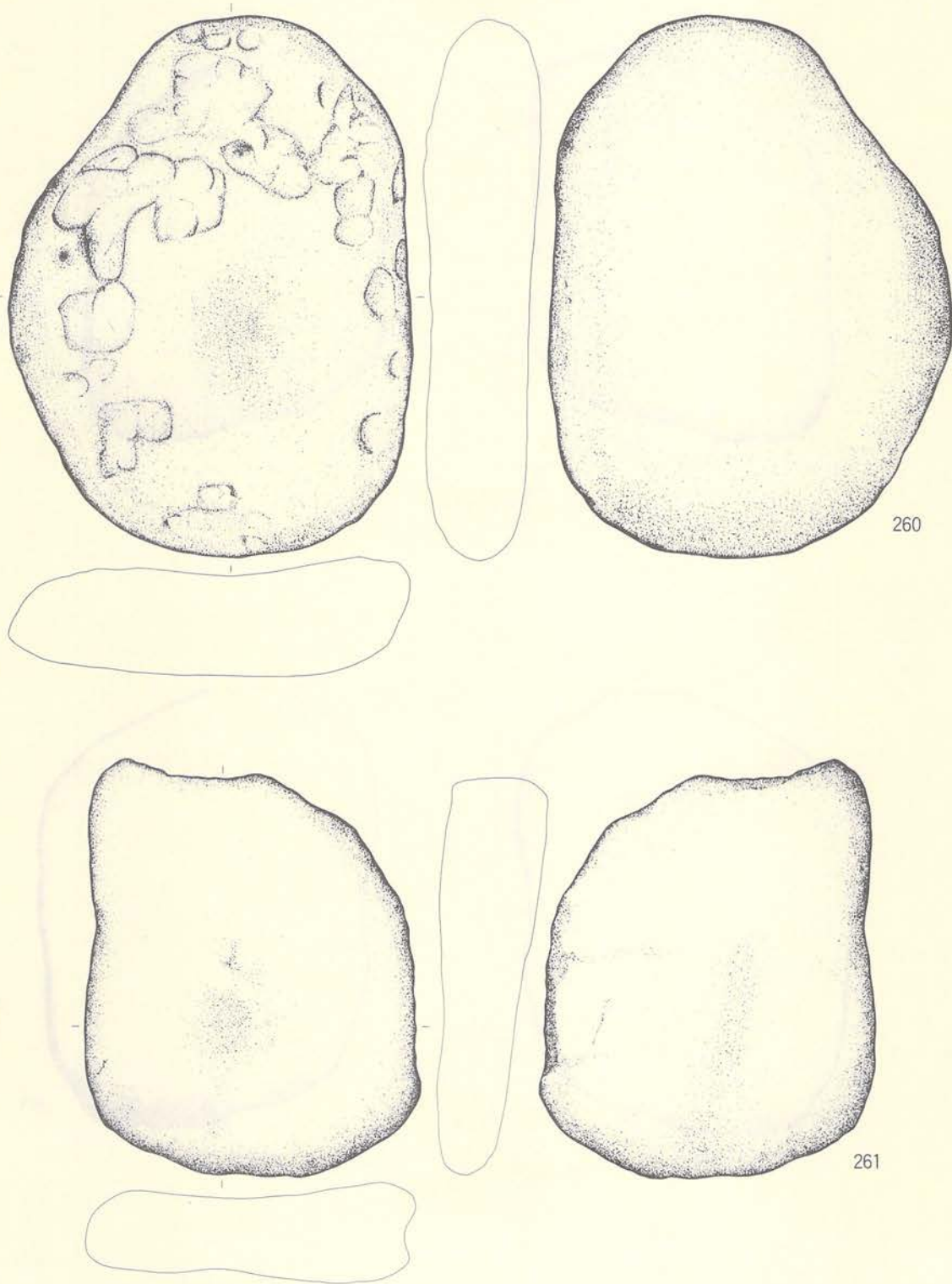
第95図 遺構外出土遺物(30)

S- $\frac{1}{6}$



第96図 遺構外出土遺物(31)

S- $\frac{1}{5}$

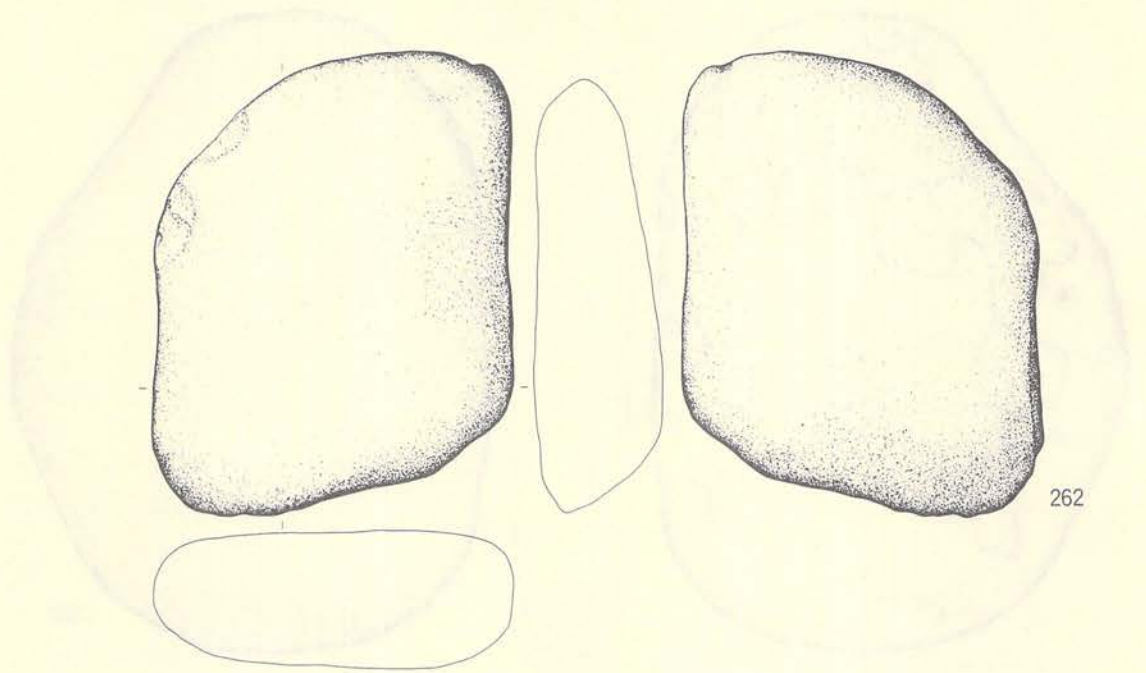


260

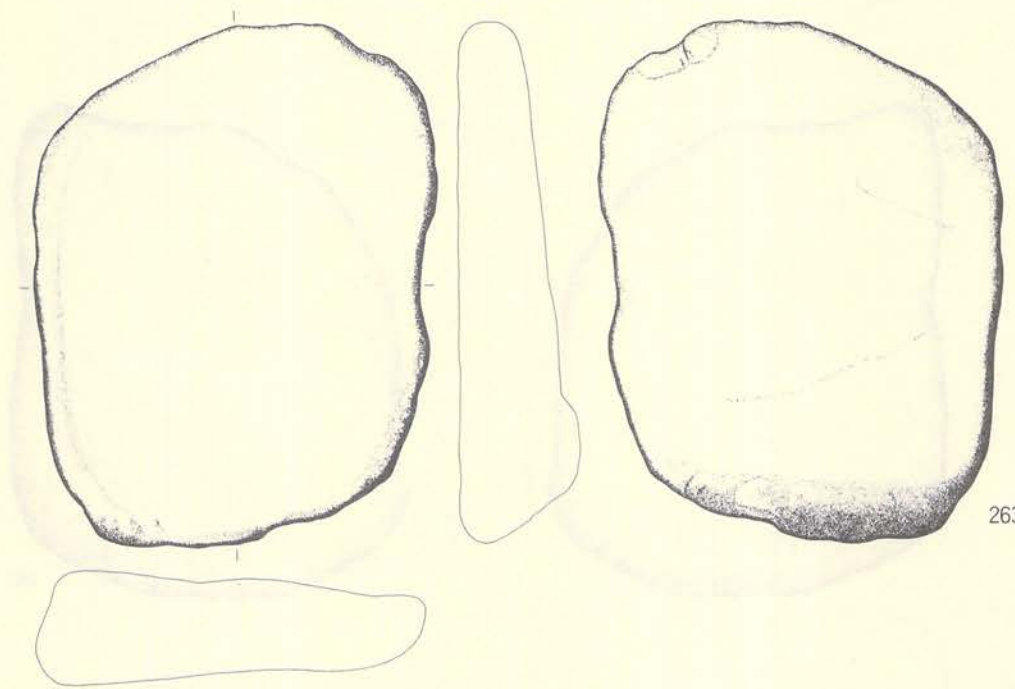
261

S = $\frac{1}{4}$

第97図 遺構外出土遺物(32)



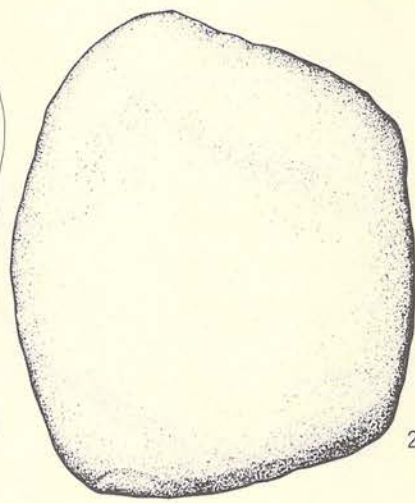
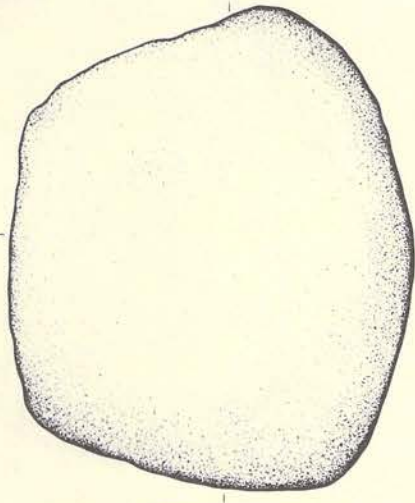
262



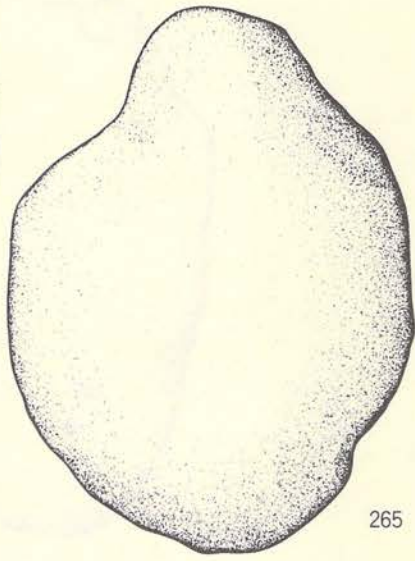
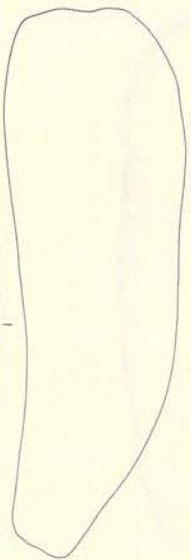
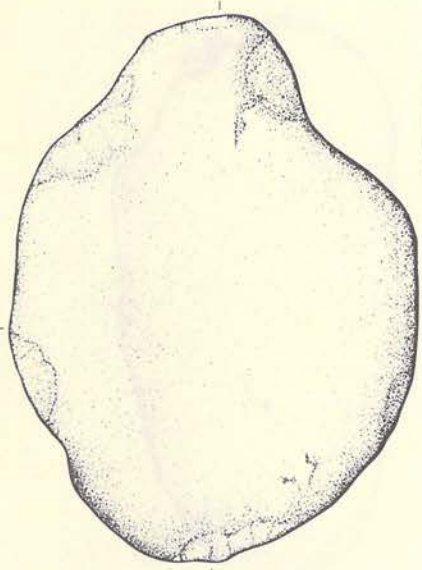
263

第98図 遺構外出土遺物(33)

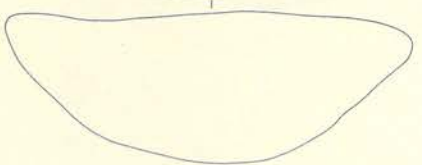
S=1/4



264

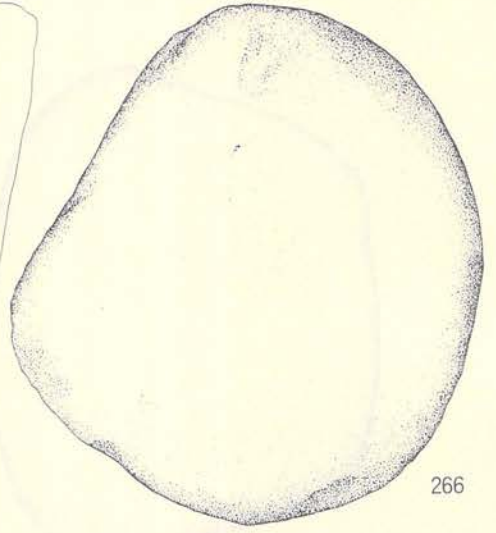
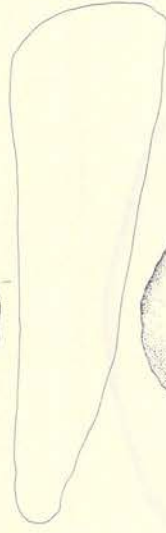
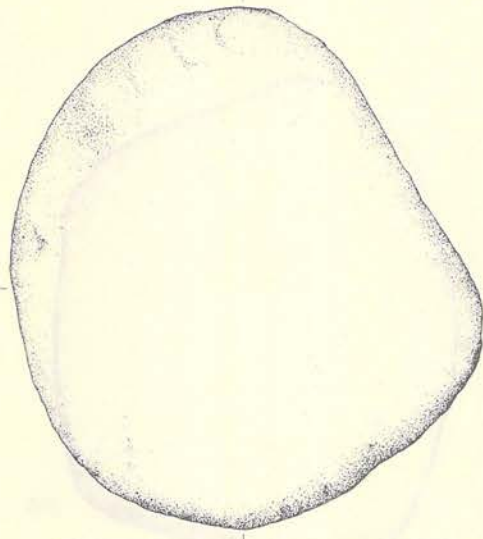


265

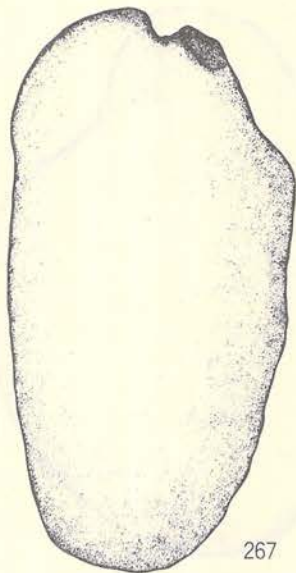
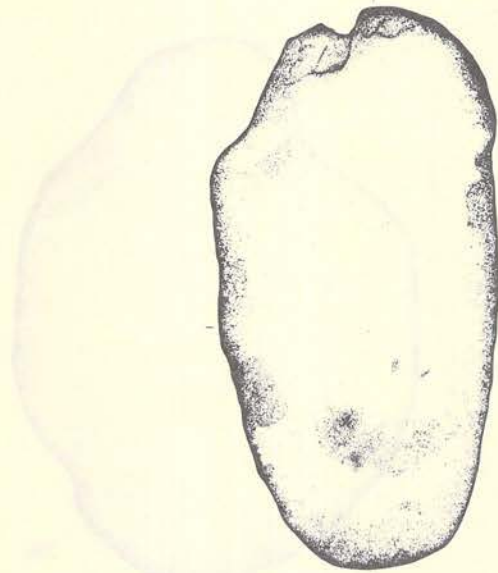


S=1/4

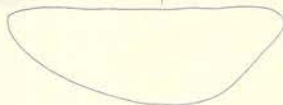
第99図 遺構外出土遺物(34)



266

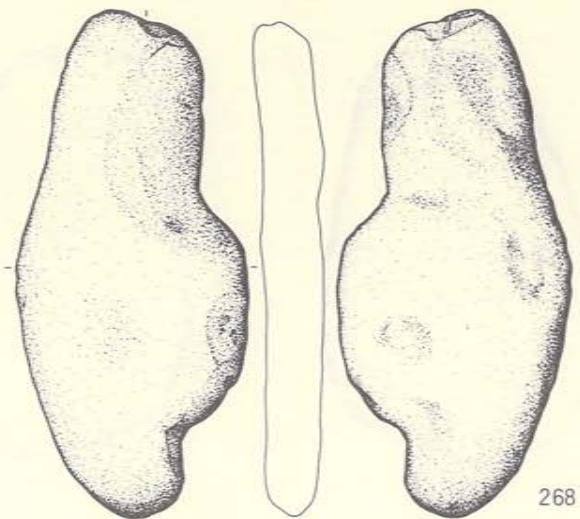


267

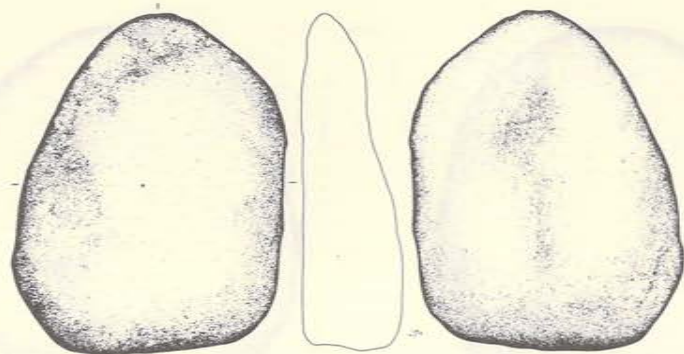


S- $\frac{1}{4}$

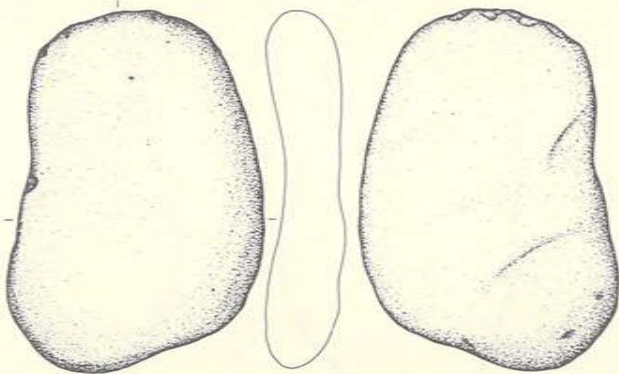
第100図 遺構外出土遺物(35)



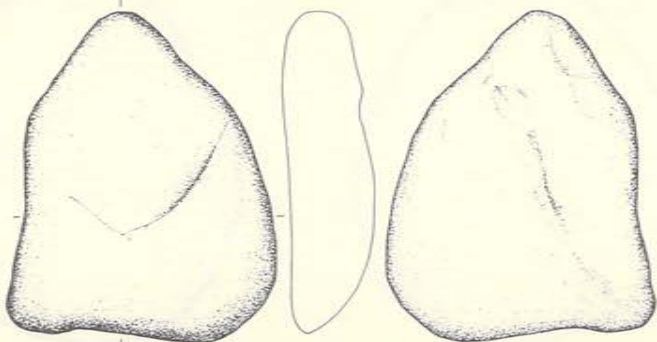
268



270



269



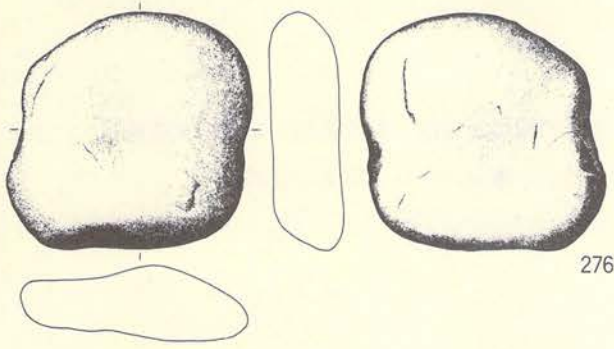
271

第101図 遺構外出土遺物36

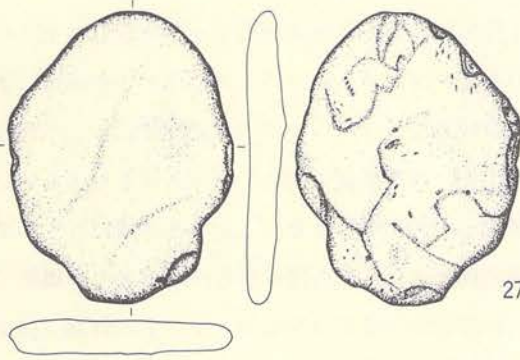
S=1/5



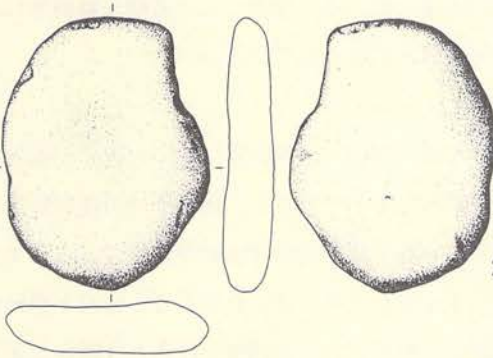
第102図 遺構外出土遺物(37)



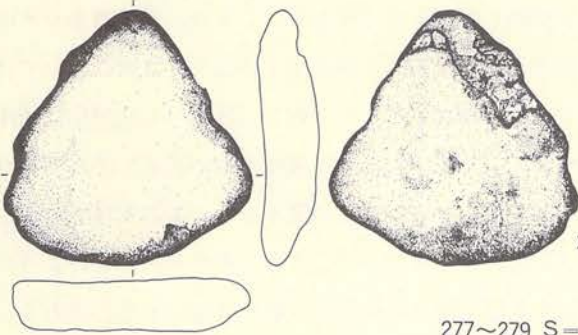
276



277

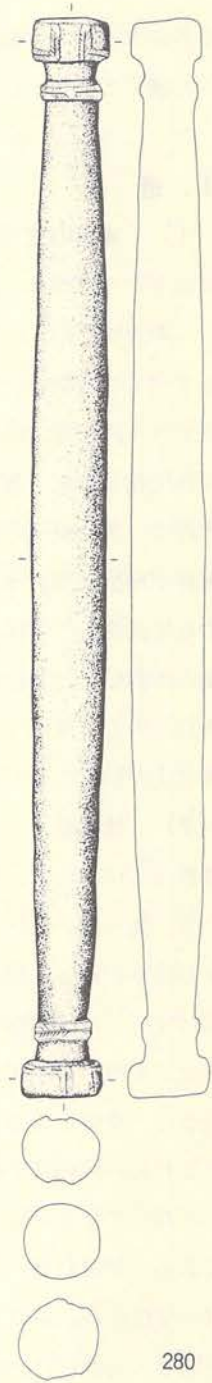


278



279

277~279 S = $\frac{1}{5}$



280

S = $\frac{1}{4}$

第103図 遺構外出土遺物(38)

ま と め

小井田Ⅳ遺跡の発掘調査の結果、遺跡の環境、検出された遺構および出土遺物は、これまで述べた通りである。以下、今迄記載してきた事実について簡単に要約する。

1. 遺 構

(1) 遺構の立地面

検出された遺構は、住居址4棟、ピット9基、焼土遺構5ヶ所、排水状の施設1ヶ所である。これらの遺構の内、住居址1棟（BⅢ-1住居址）と排水状の施設1ヶ所（DⅡ-151）を除いたすべての遺構は、本遺跡内南西側のDⅡ区に位置する。この立地面は、小井田川によって形成された段丘面である。現状地は、その背後の山地からの土砂の運搬堆積によって埋没し、小扇状地化した所である。従って、遺構検出面は現地表面下約1.2～1.5mにもおよんでいる。検出面は、基本層序のⅣ層面で、にぶい黄褐色の細砂層である。上記の2遺構以外すべてこの土層面が検出面であることと、これら遺構の構築された場所は砂層と湧水の激しい場所で、長期的な生活面としては不適当なこと、それに住居址の構築状況等からすべて同時期（縄文後期末葉の所謂瘤付土器群の時期）、宮戸Ⅲa式併行のものであり、かつ短期間の居住地として使用されたのではないかと思われるような状況を呈している。なお、この遺構が廃絶された後に黒褐色土が数度にわたって流入堆積し遺物包含層が形成されている。

(2) 住居址

BⅢ-1住居址は、傾斜面に位置しているため、西側～南側にかけての $\frac{2}{3}$ 近くが削剝を受けている。従って、形状、規模、および柱穴配置等が不明であるが、他の3棟の住居址は砂層上および湧水の激しい場所に構築されたにもか、かわらず比較的保存状態が良好である。すなわち形状はすべてほぼ円形を呈し、規模は3m～4mを計るものばかりである。柱穴と思われるピットは、すべての住居址から3～6個の範囲内で検出されたが明確な柱穴とは断定しえなかった。また、その位置等から柱穴配置等も不明である。これは、おそらく砂層中に構築されたためにこれらの住居址が廃絶した時に柱穴が同じ砂によって埋まってしまい、その存在が不明になったためではないかと考えられる。しかしこれは推測の域を出ず、従って詳細については不明である。炉はDⅡ-1住居址以外のすべてに存在する。すなわち、BⅢ-1住居址は地床炉、DⅡ-2住居址とDⅡ-3住居址は石囲炉で、その位置はほぼ遺構中央である。また、DⅡ-2住居址の石囲炉は、砂層面に構築したものとしてその工夫の後がみられるのが特徴点である。すなわち、石囲炉の構成礫の内側の礫は立位に深く埋設され、さらにそれが崩れないようにその脇、および上部から二重、三重に補強する形で礫と黒褐色土が敷かれていることである。な

お、横に置く様に敷かれた礫は、南西側に扇状に開くが、この形状は複式炉の前庭部分にも類似するものであり、おそらくその名残的なものではないかと思われる。しかし、この住居址は後期末葉に位置するものであり、はたして複式炉の様相を呈する炉址がこの時期まで続くものかは疑問であり、今後さらに検討の必要があろうと考えられる。

(3) ピット

8基のピットは、検出および精査中に湧水が激しく、また砂層中に構築されているため正確な検出は困難であった。従って正確な形状、および規模は不明である。特に断面形はほとんど不明である。わずかに検出された残存部から推定すると、D II-51ピット（楕円形で2m前後の規模）を除いた7基のピットはすべて、形状が円形若しくはそれに近いもので、規模は、1m前後を計るものばかりである。断面形は残存する底部の形状から推定して、おそらくフラスコ形かピーカー形を呈したものであったのではないかと思われる。

(4) 焼土遺構

5ヶ所の焼土遺構は、すべて現地性のものである。検出面が住居址およびピット群と同じことから同時期のもつとで、おそらく野外におけるなんらかの目的で使用された跡であると考えられる。

(5) 排水状の施設

この施設は、山地側から小井田川に向って遺物包含層を東西に切るように構築された「暗渠」状の施設である。再堆積の遺物包含層を切る状況から相当新しい時期のものと思われるが、しかし詳細については不明である。

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は土器、土製品、石器および石製品からなる。これらの中で、特徴点がみられるのは、土器の大半が粗製土器、それも深鉢が多いことと、石器の器種が凹石、磨石、敲石、石皿といった所謂調理用具として使用された石器が圧倒的に多いことである。また、この遺跡の立地する地形面が小井田川によって形成された段丘面であり、現河床に隣接する場所であることと、その背後に湧水帯が存在する等を含めて、当時（縄文後期末葉を中心とする時期）の生産活動のあり方を解明する上で貴重な資料となるのではないかと思われる。さらに周辺の遺跡等の関連等を含めて資料の蓄積が必要であり、今後の研究課題といえよう。なお、本報告書では実際に出土した土器（特に後期を中心として）と石器について簡単に記述するにとどめたい。

(1) 土器

本遺跡の遺構内および遺構外から出土した土器は、縄文時代中期から晩期にかけてのもの、弥生時代の土器である。こゝでは、それらの中で最つとも出土量が多かった後期の土器について記述する。

〈第II群土器について〉— 縄文時代後期の土器

縄文時代後期の土器は、初頭から末葉までの全時期に渡って出土している。しかし、その分類は事実記載の所で述べた通り、層位的に確認したものではなく、また再積性の包含層からの出土が大半であったため細片が多く明確な器形、および器面に施文された全体の文様構成等を把握することができなかった。そのため分類は、土器片に施文されている個々の文様、モチーフの特徴から細分したものである。従って後期の全時期に渡って出土したとはいえ、どのような器形、および文様等の変遷がみられるのか把握することができなかったのが実情である。以下、その文様等の諸特徴から従来の土器型式に併行して分類したことを記す。

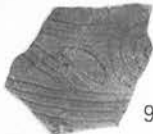
第1類は十腰内I式や大潟式と呼ばれる土器群に併行すると思われるものを一括した。近年この十腰内I式をさらに細分しようとする傾向がみられるが、ここでは、その中で葛西励(1979)によって試みられたI～III段階の分類を参考にして細分した。すなわち、第1類Aが第I段階、Bが第II段階、Cが第III段階にそれぞれ併行するものとした。第II類は十腰内II式、関東地方で加曾利B₁式と呼ばれる土器群に併行するものを一括した。文様は平行線化した磨消縄文が主体を占める。なお器形、器面調整および文様等で第I類と大きく変化することと、地域性がなくなる点で大きな特徴点が見られる。第3類は十腰内III式、加曾利B₂式に併行するものを一括した。前類の磨消縄文が曲線化することと、刻目帯を有すること、また深鉢および鉢形土器の口縁部にみられる大波状口縁が特徴的である。第4類は十腰内IV式、東北南部で西ノ浜式と呼ばれる土器群に併行するものを一括した。第3類から第5類への過渡的様相を呈した土器群である。第5類は、所謂瘤付土器群で十腰内V式、東北南部で宮戸III a式、新地式に併行する土器である。本遺跡の段丘面で検出された遺構群は、本類に属する時期のものである。第6類は、十腰内VI式、宮戸III b式に併行するものを一括した。本類は、晩期への過渡的様相を呈する土器群で、一部では、大洞B式の最っとも古い時期に入れられているものも存在する。しかし、本報告書では、全体の器形および文様モチーフの特徴から、その前段階として本類に分類した。しかしその分類には、明確なものはなく今後さらに検討の必要があろう。

(2) 石器

遺構内外の石器の出土は、使用痕跡の認められる剝片(29点)を含めて総計484点である。これらの中で所謂無加工の礫石器である凹石、敲石、磨石、石弾状石器、砥石、石皿が337点出土しており、全体の約7割を占めている。それも大半が調理具と云われる石皿、磨石、敲石である。この点が本遺跡出土遺物の中で、粗製土器が出土土器の大半を占めていることとあわせて特徴点ともいえる。なお、これらの石器の石質からその供給源は、当遺跡が立地する北上山地ばかりでなく奥羽山地、特に雫石盆地まで求められている。これは、当時すでに産地(供給地)と加工地(供給された所)の間に流通ルートがあったことを考えさせる事例である。この点について今後さらに資料の蓄積によってその解明をまちたい。

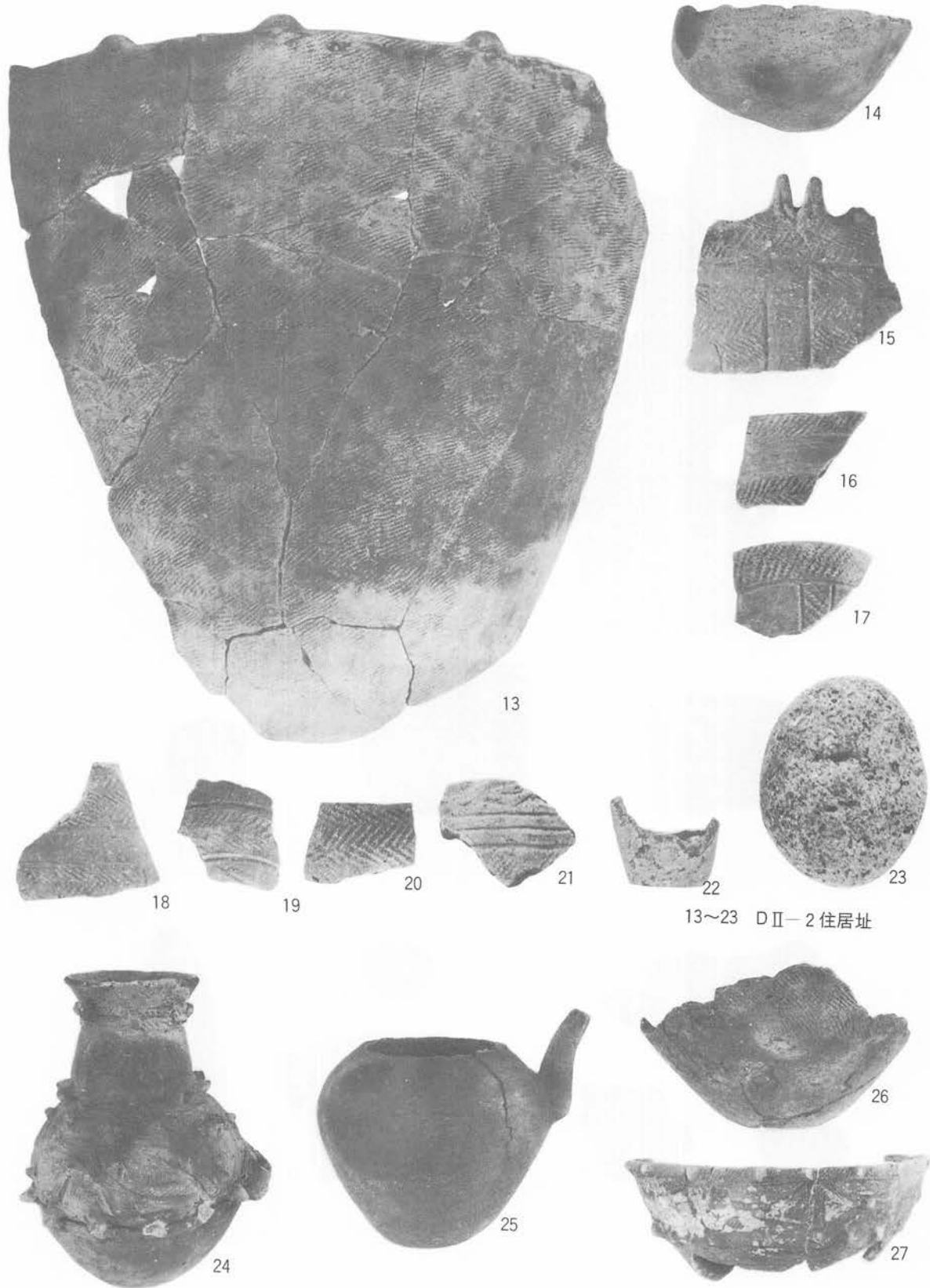


1~6 BII-1 住居址

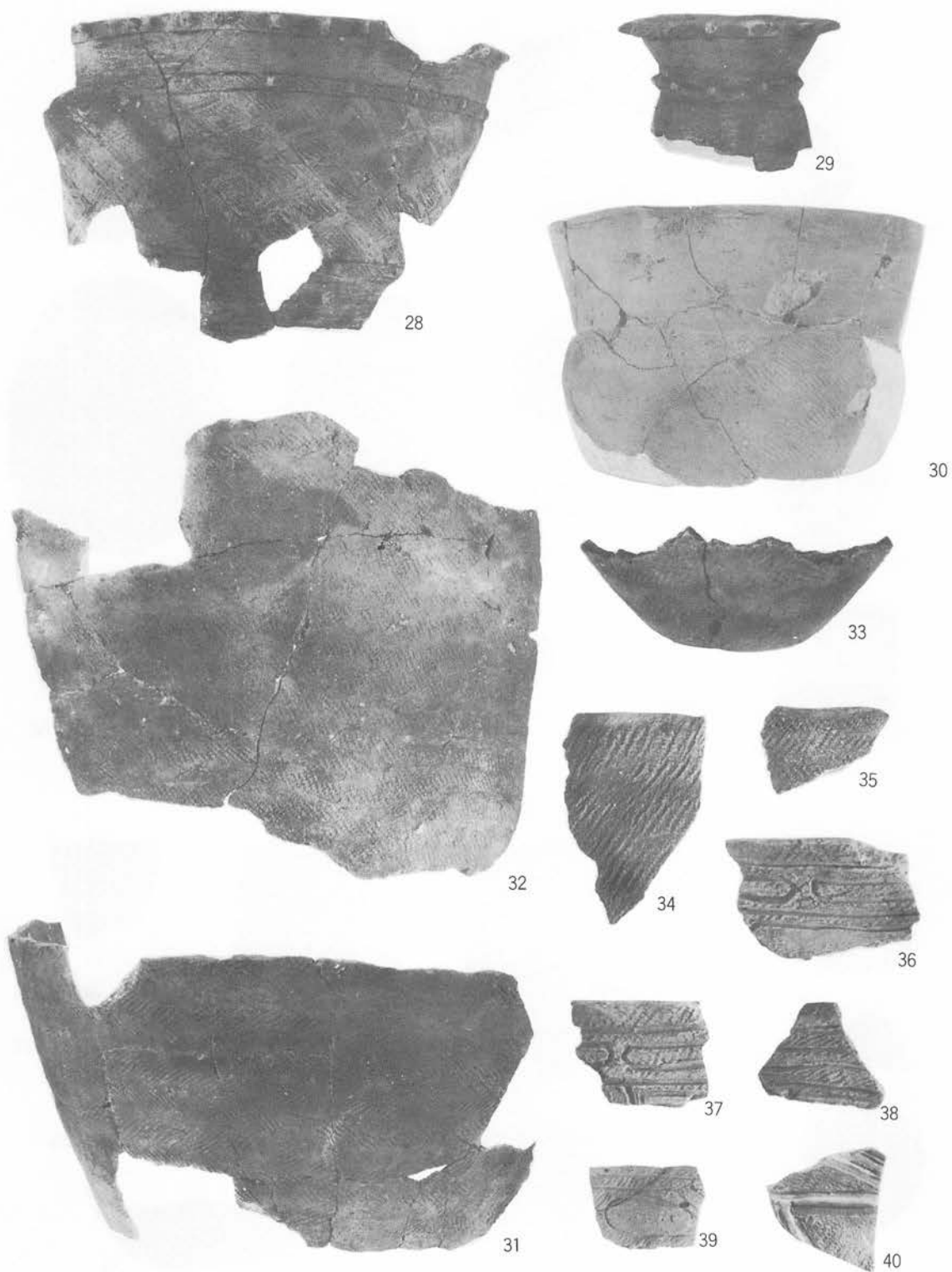


7~12 DII-1 住居址

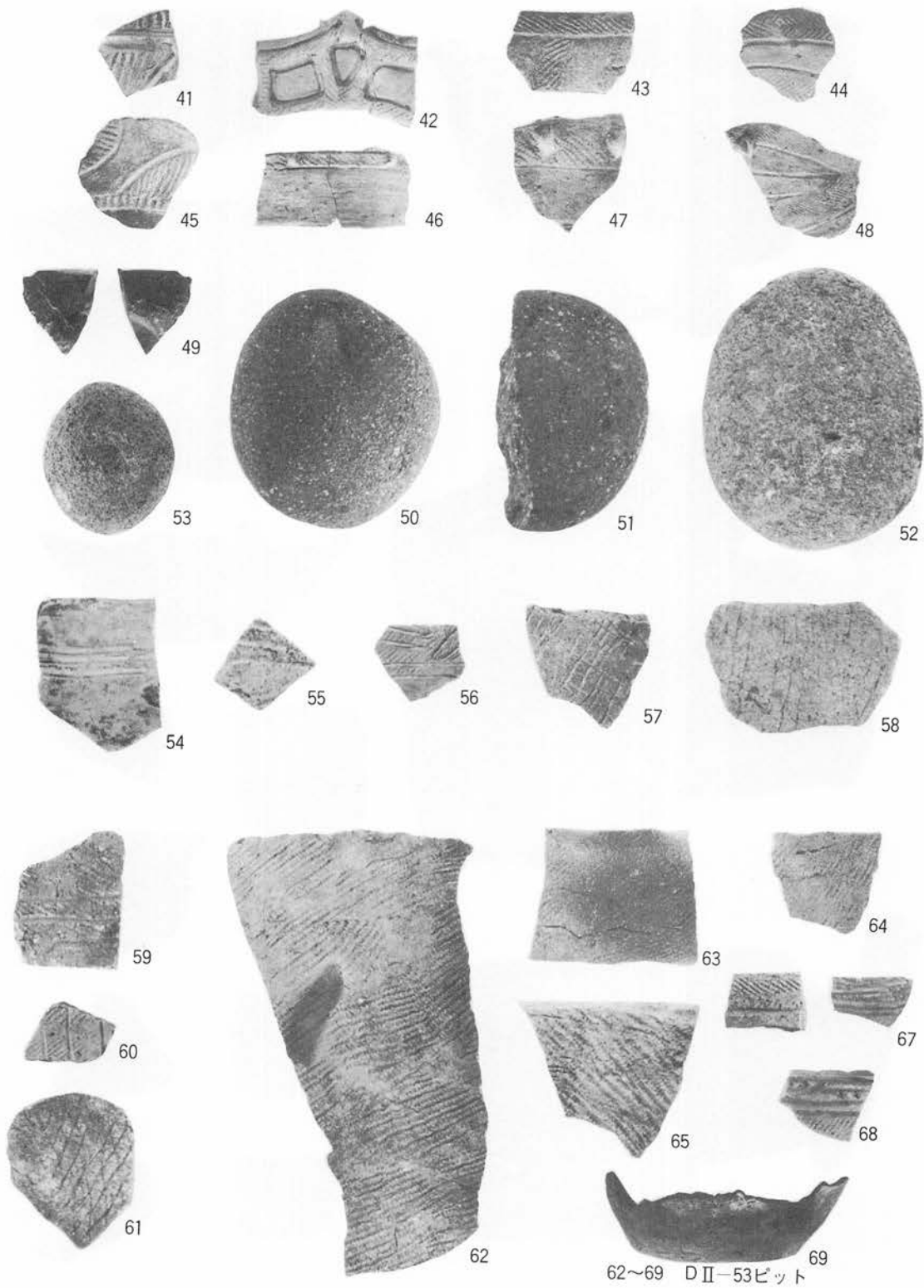
写真図版 8 遺構内出土遺物(1)



写真図版 9 遺構内出土遺物(2)



写真図版10 遺構内出土遺物(3)



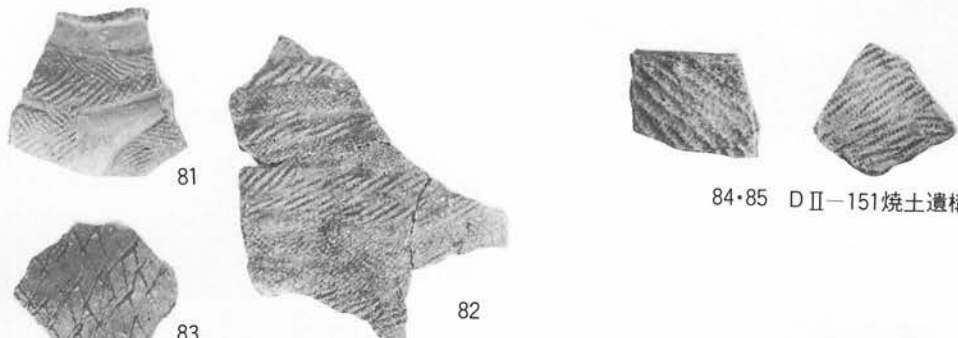
写真図版11 遺構内出土遺物(4)



70~76 DⅡ-54ピット



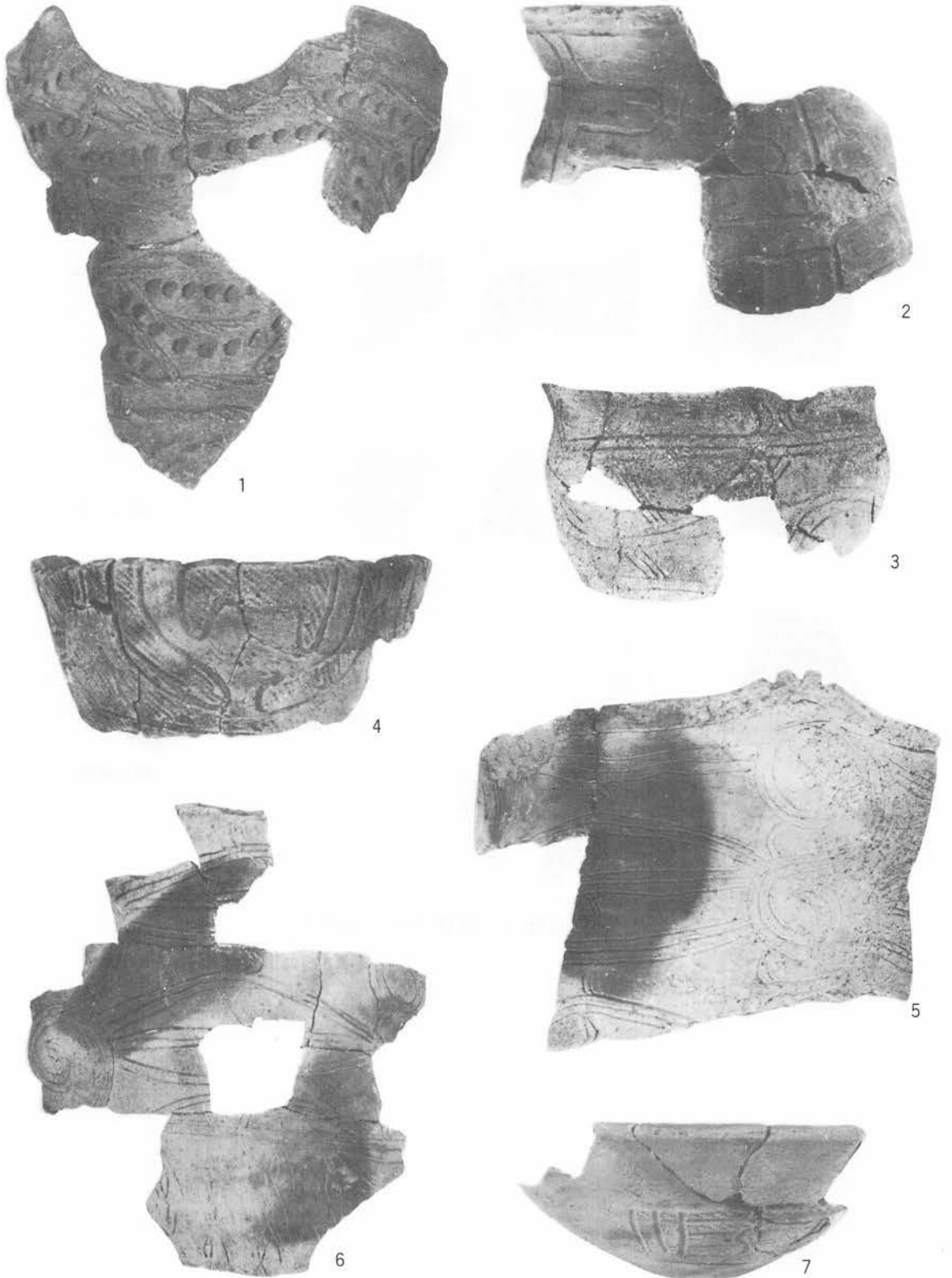
77~80 DⅡ-55ピット



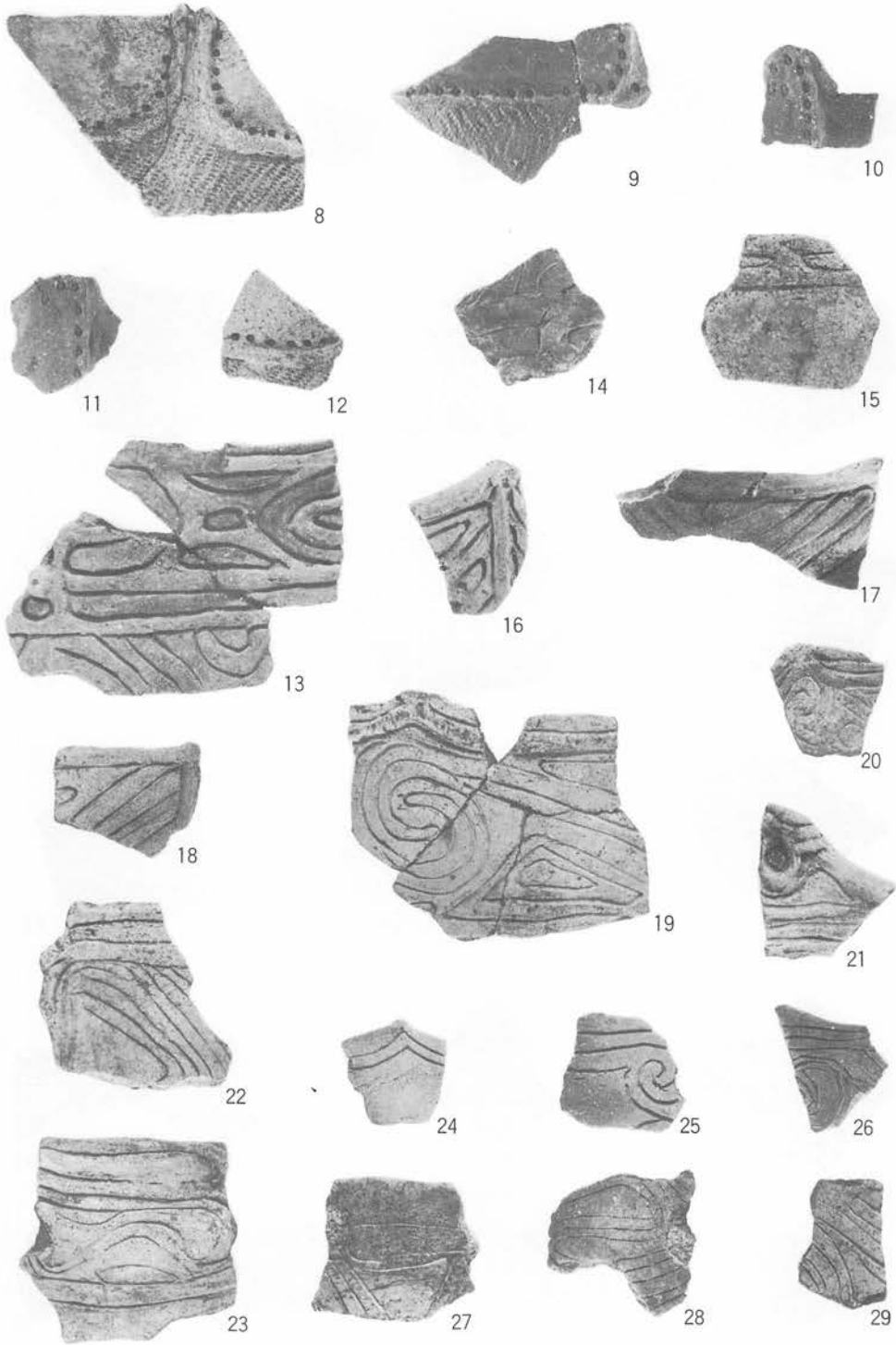
84・85 DⅡ-151焼土遺構

81~83 DⅡ-56ピット

写真図版12 遺構内出土遺物(5)

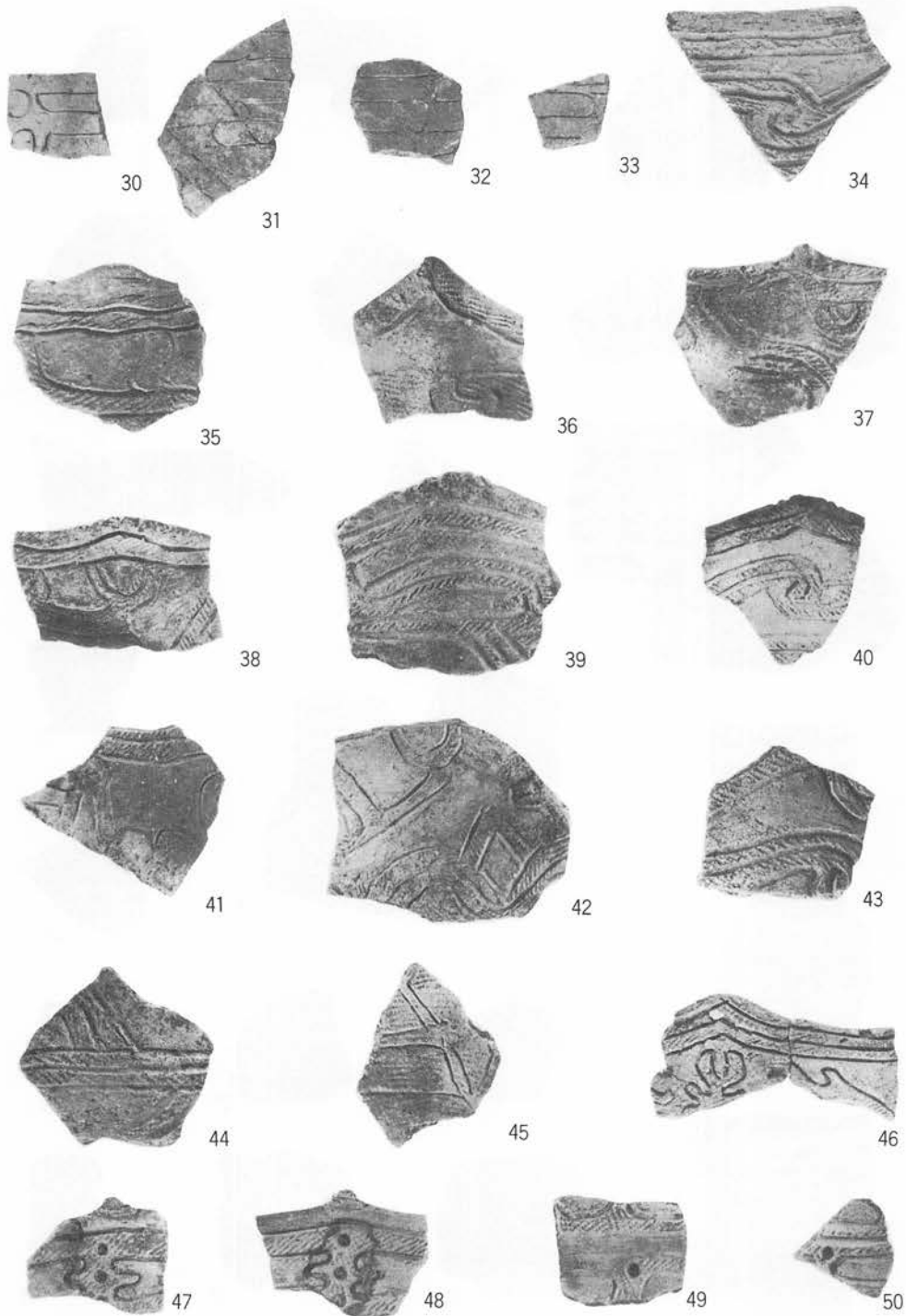


第I群第1類1. 第II群第1類A. 2, C-b. 3·4, C-a·5·6, 第2類A. 7
 写真図版13 遺構外出土遺物(1)



第I群第2類, 8~12, 第II群第1類, A3~18・13, 19~25, C-a. 26~29

写真図版14 遺構外出土遺物(2)



第Ⅱ群第1類C—a. 30~33, C—b. 34~50

写真図版15 遺構外出土遺物(3)



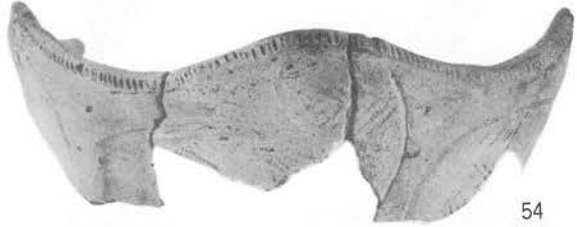
51



53



52



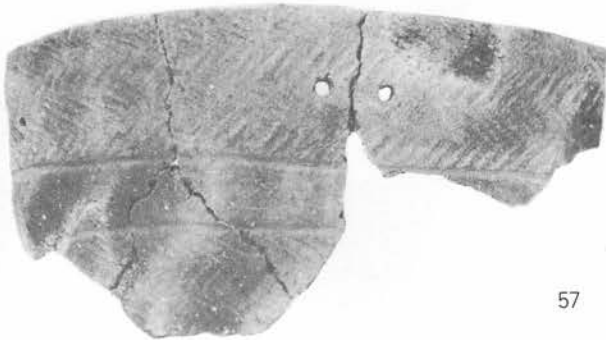
54



55



56



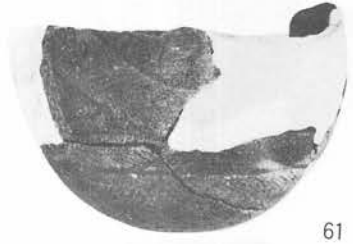
57

第Ⅱ群第2類A—51・52, 第3類A—53・54, B—55~57

写真図版16 遺構外出土遺物(4)



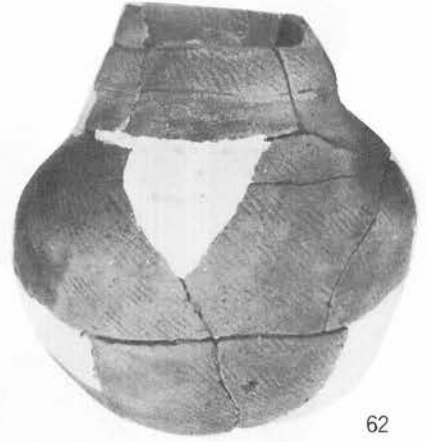
58



61



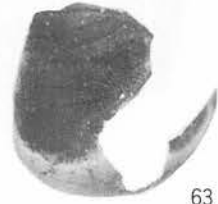
59



62



60



63



64



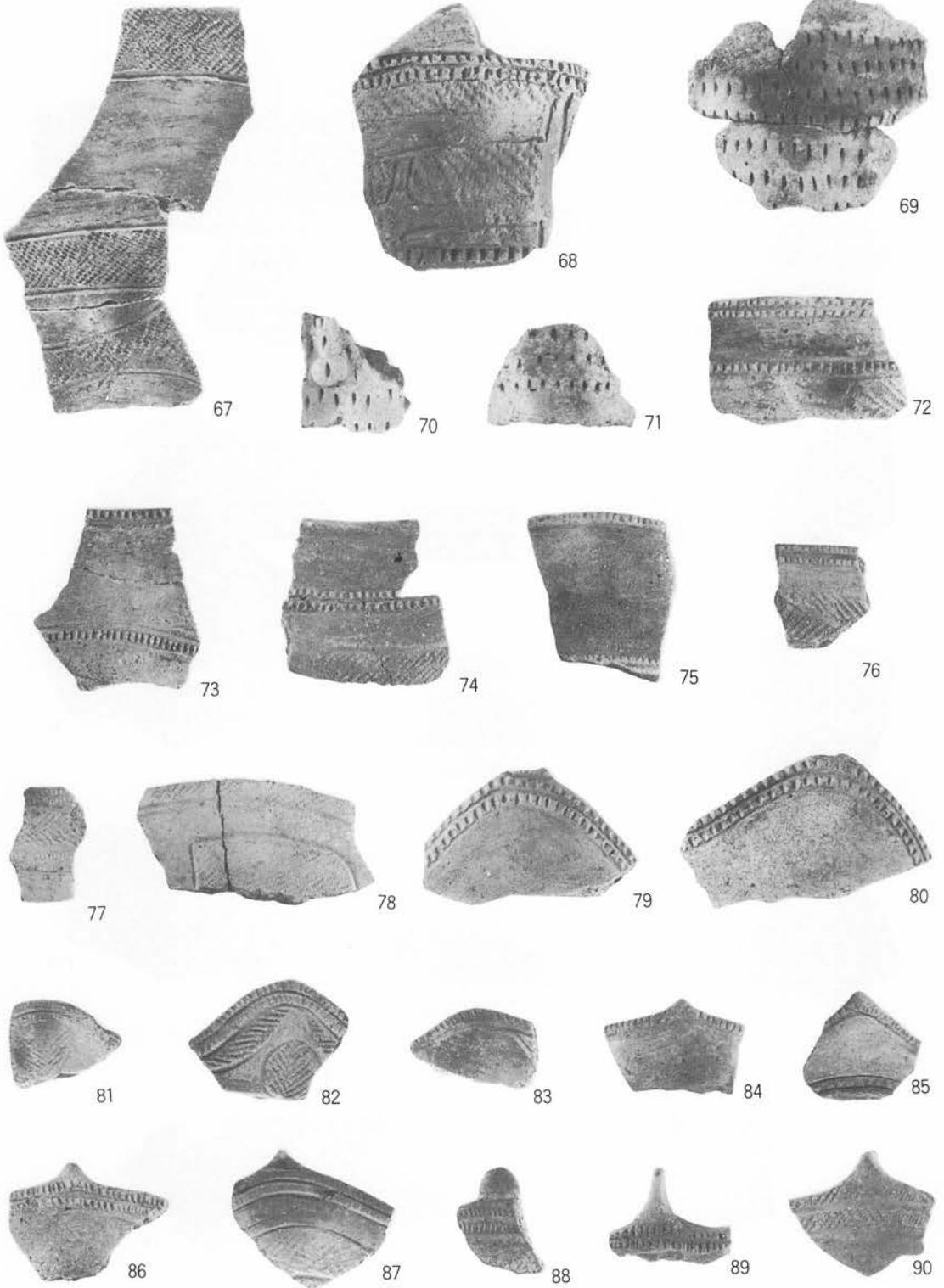
65



66

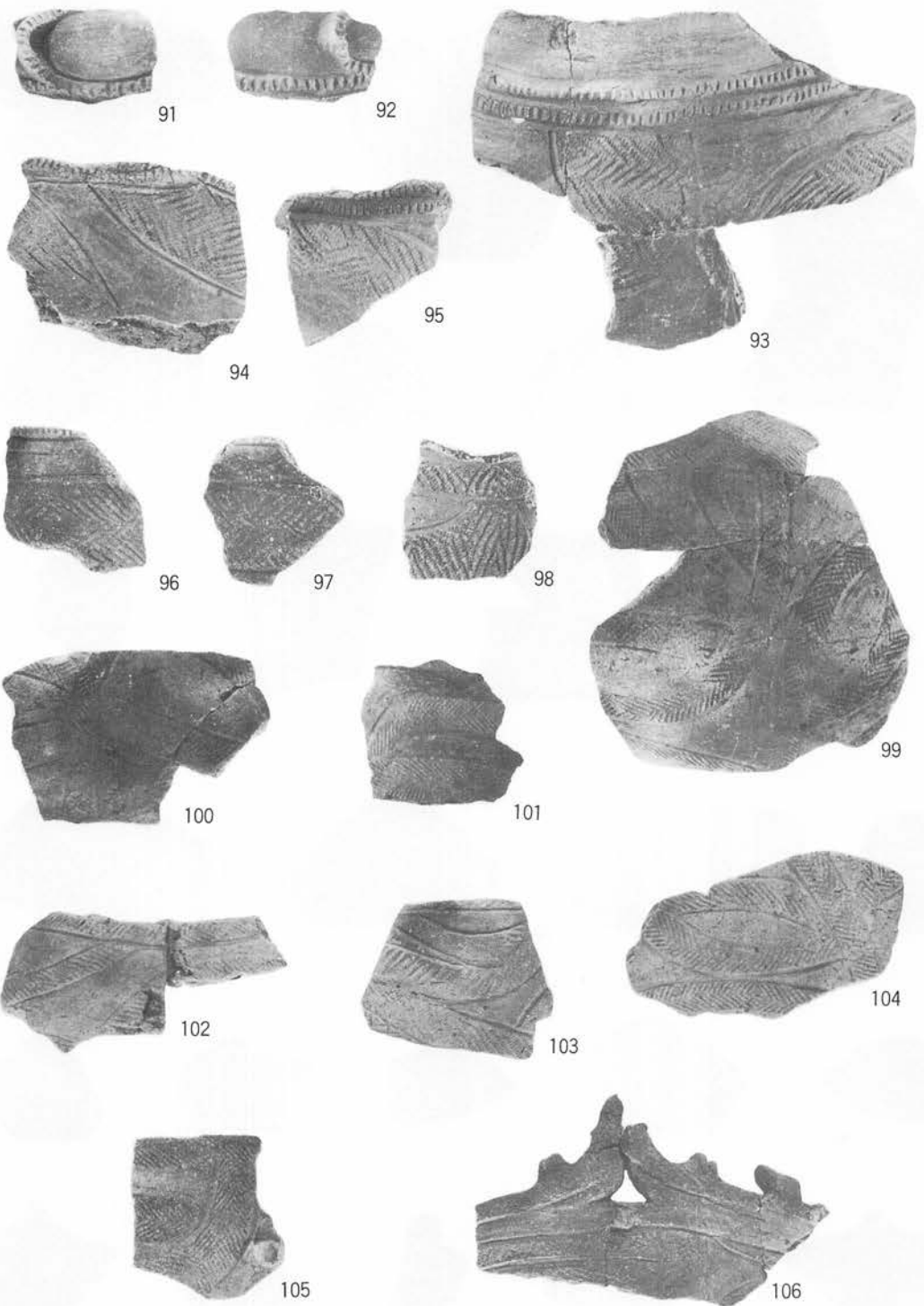
第Ⅱ群第4類A. 58・59・65, B. 60・61・63・64

写真図版17 遺構外出土遺物(5)



第Ⅱ群第2類A. 67・68・, B. 69～71, 第3類A. 79～90

写真図版18 遺構外出土遺物(6)

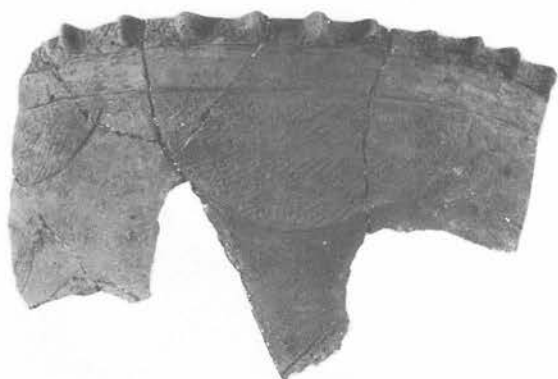


第Ⅱ群第3類A. 91・92, 第4類A. 93~97, B. 98~104, C. 105~106

写真図版19 遺構外出土遺物(7)



107



108



109

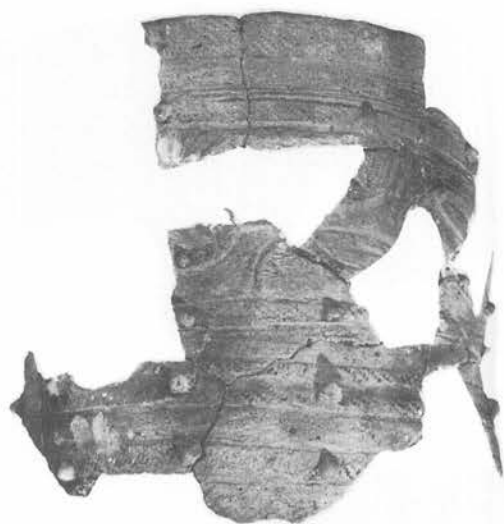


第Ⅱ群第5類A—a. 107~109

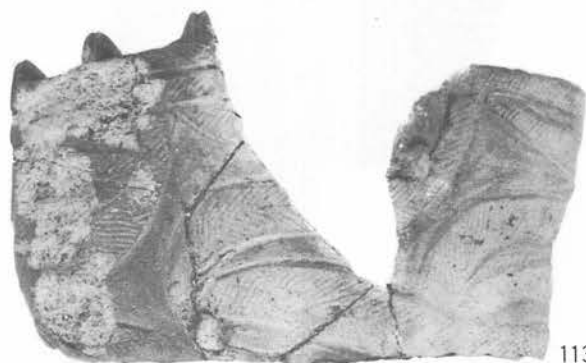
写真図版20 遺構外出土遺物(8)



111



112



113

第Ⅱ群第5類A—a. 111~113

写真図版21 遺構外出土遺物(9)



114



115



116



117



118



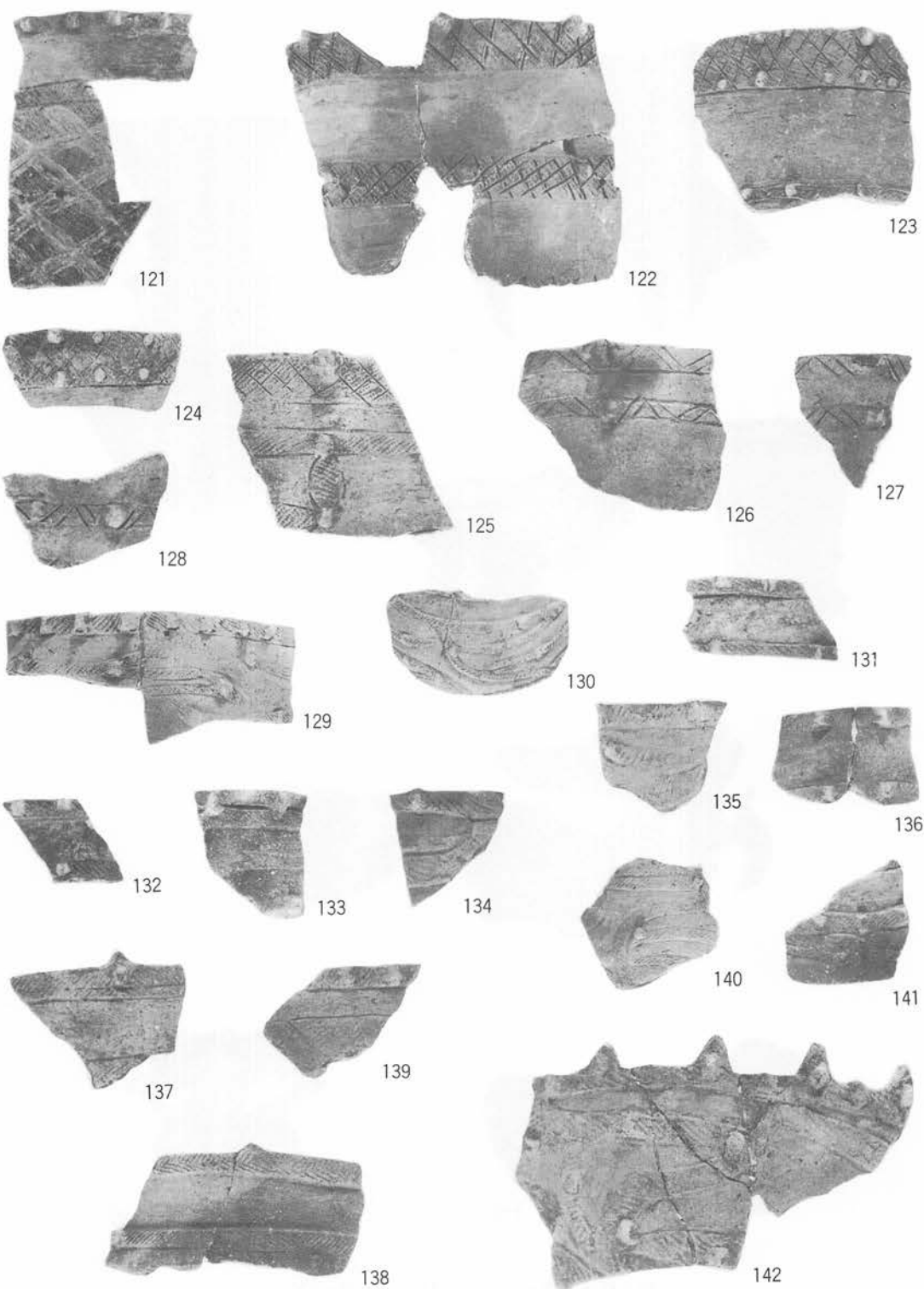
119



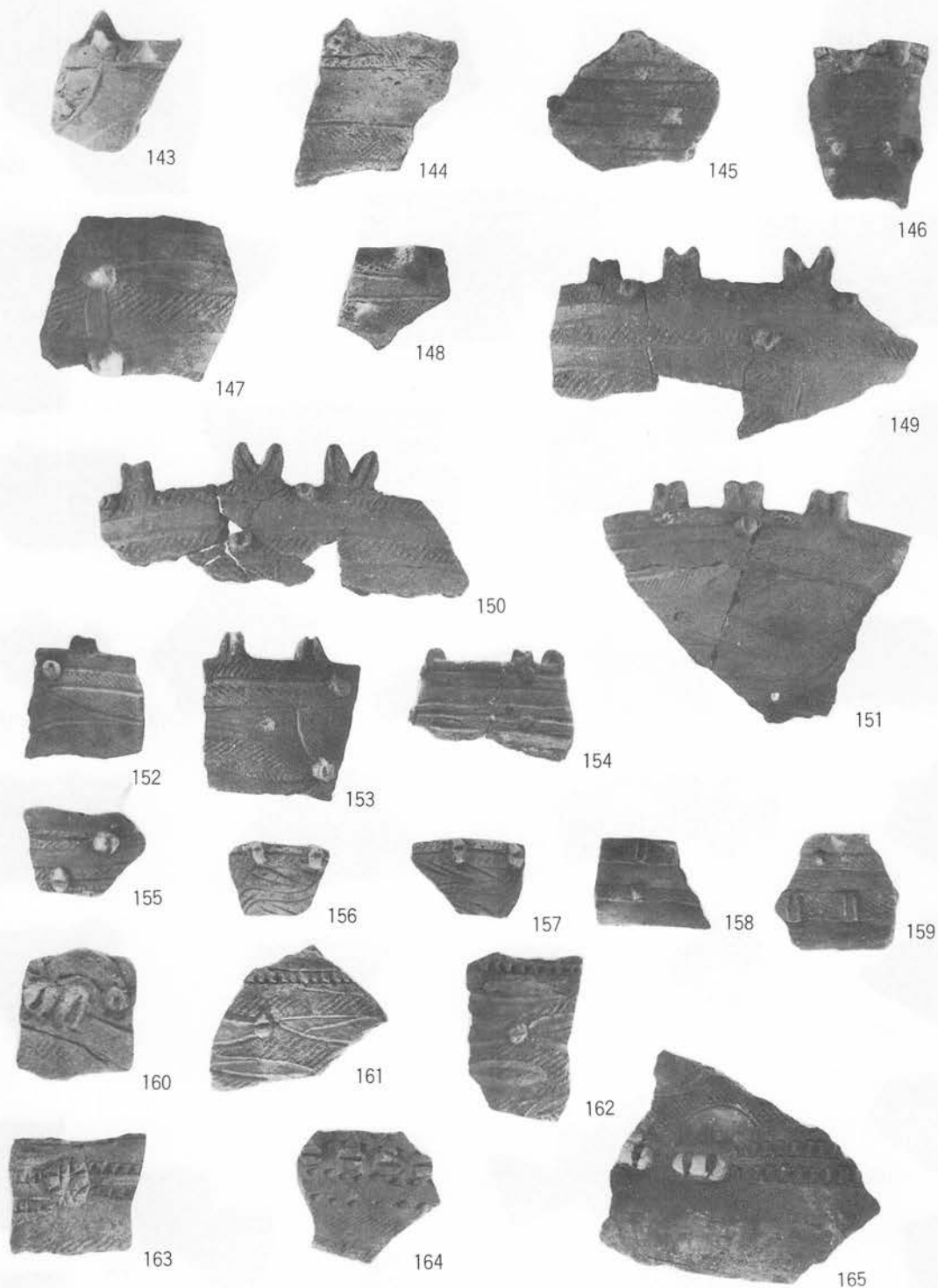
120

第Ⅱ群第5類A—a. 114~117, C. 118~120

写真図版22 遺構外出土遺物(10)

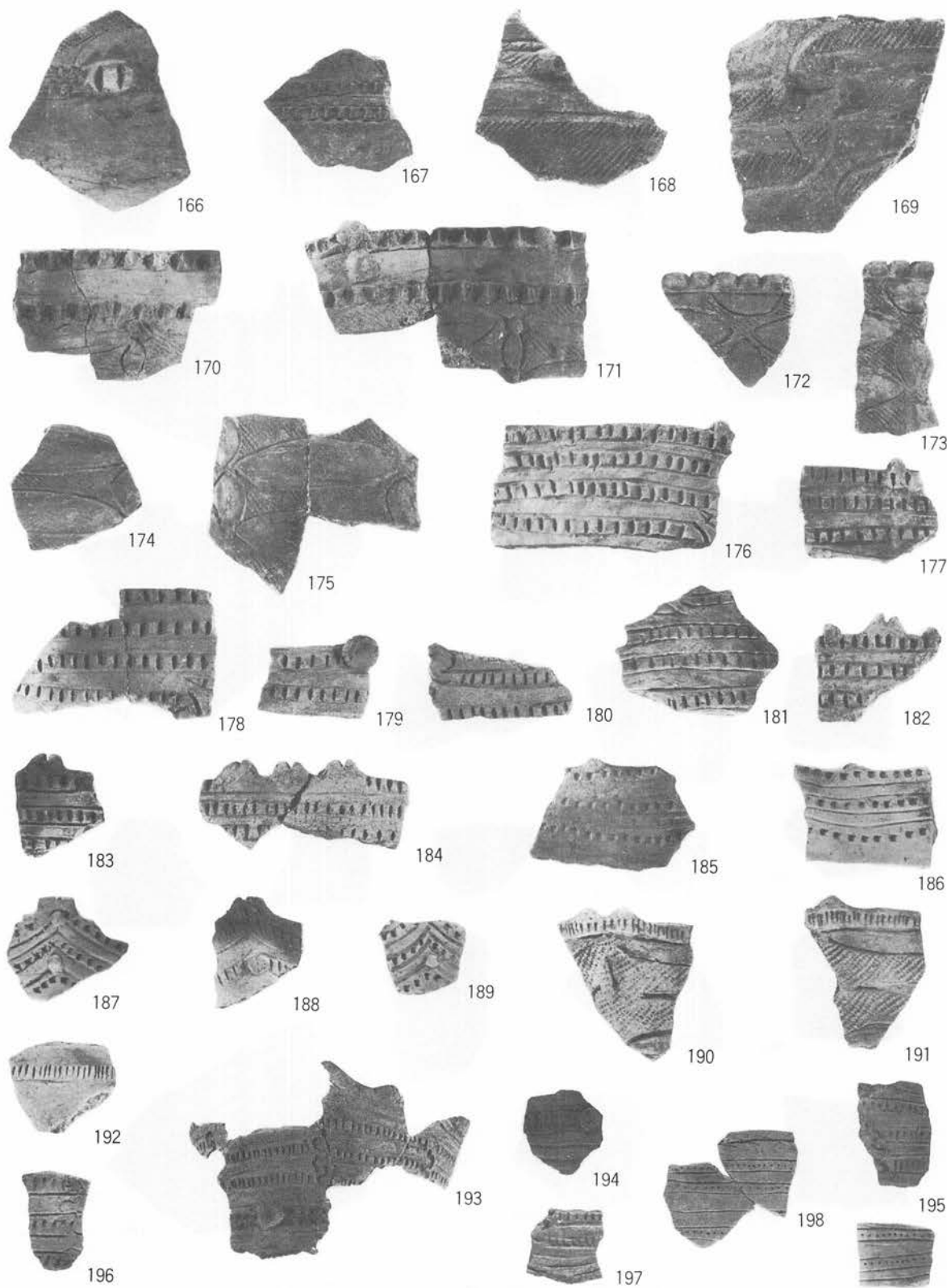


第Ⅱ群第5類A—a. 121~142
 写真図版23 遺構外出土遺物(11)



第Ⅱ群第5類A—a. 148~148, A—b. 149~165 143

写真図版24 遺構外出土遺物(12)



第Ⅱ群第5類A—b. 166~175, B. 176~199

写真図版25 遺構外出土遺物(13)



200



201



202

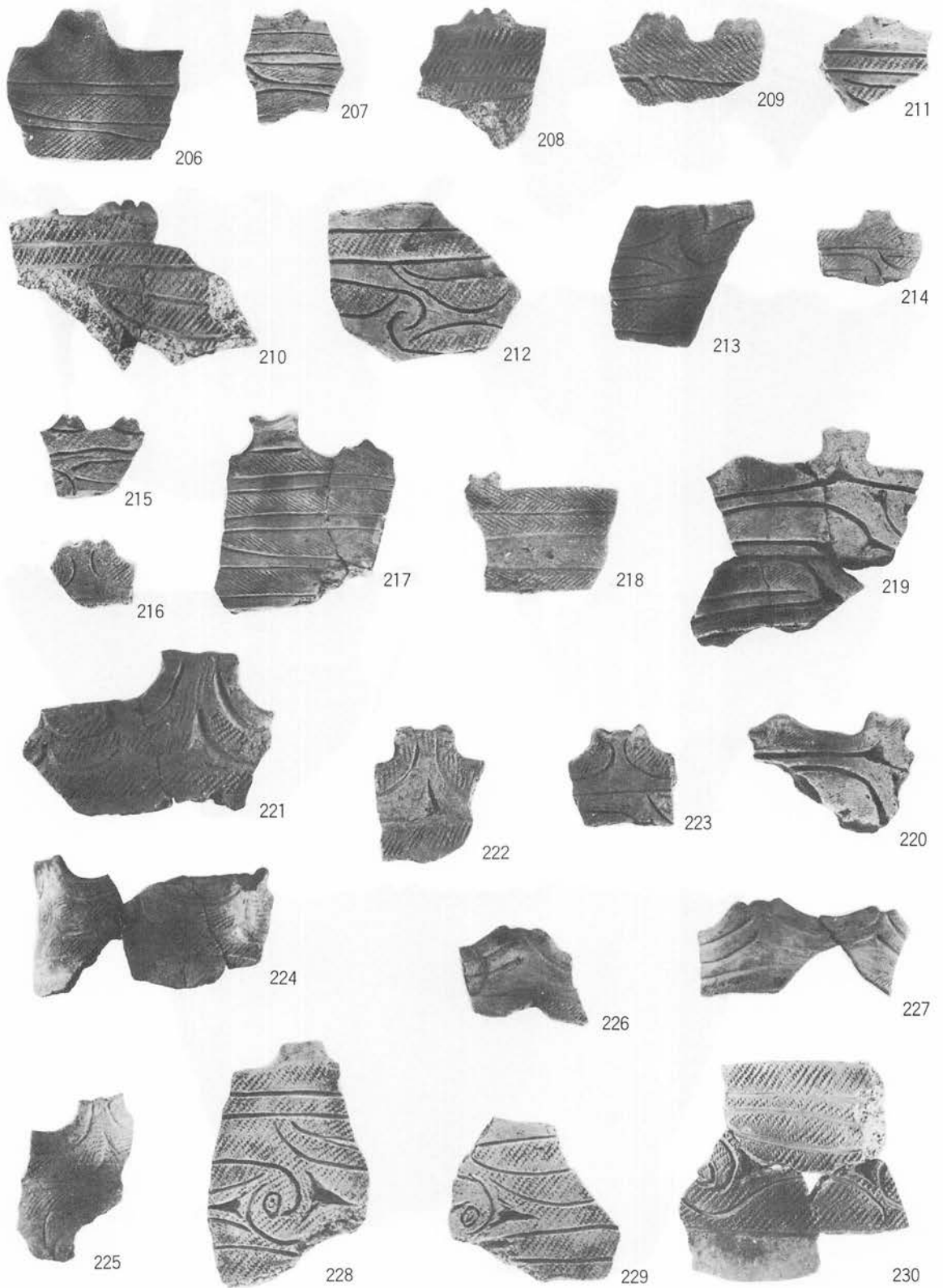


203

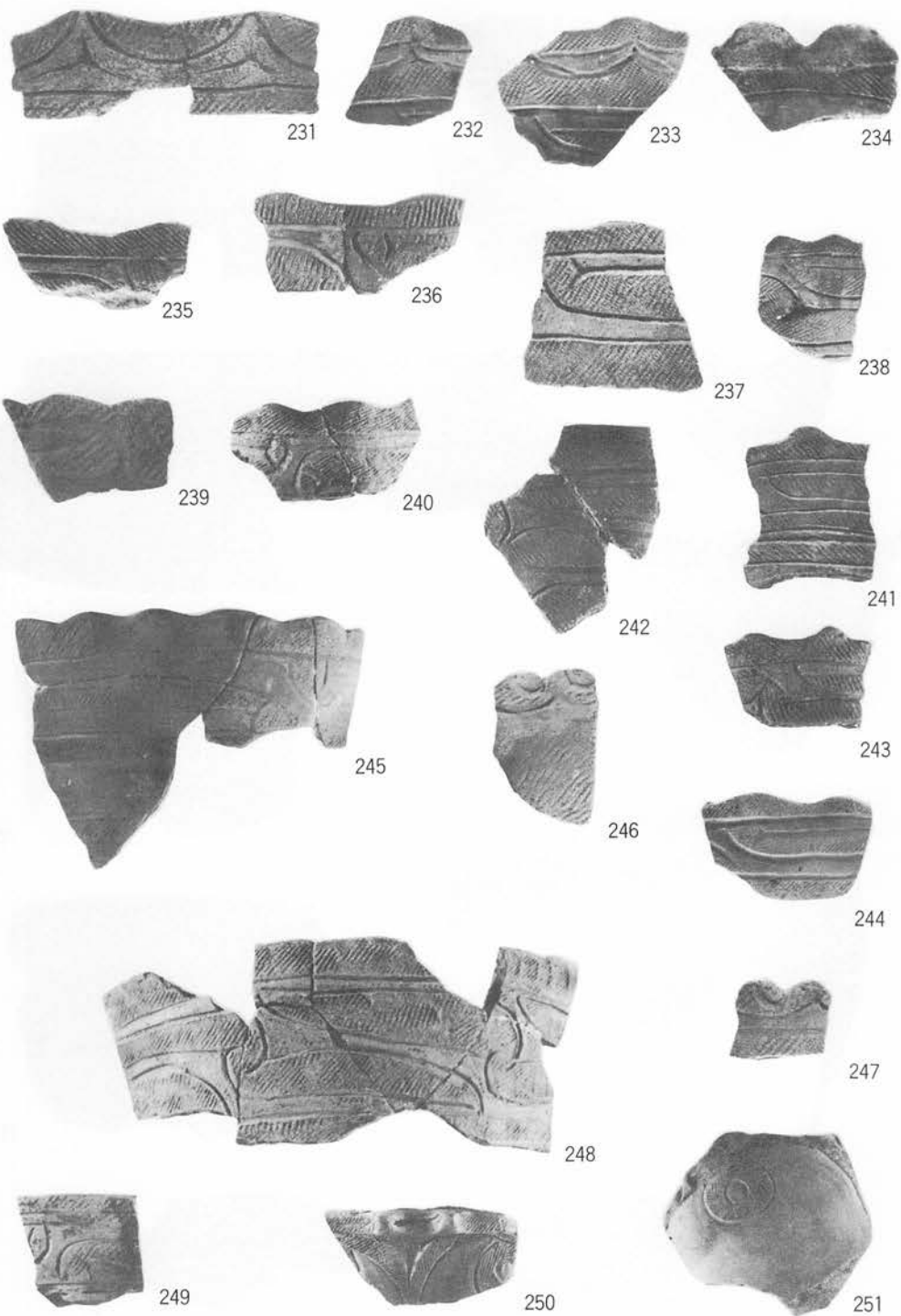


204

第Ⅱ群第5類B. 200~201, 第6類A. 202~205
写真図版26 遺構外出土遺物(14)

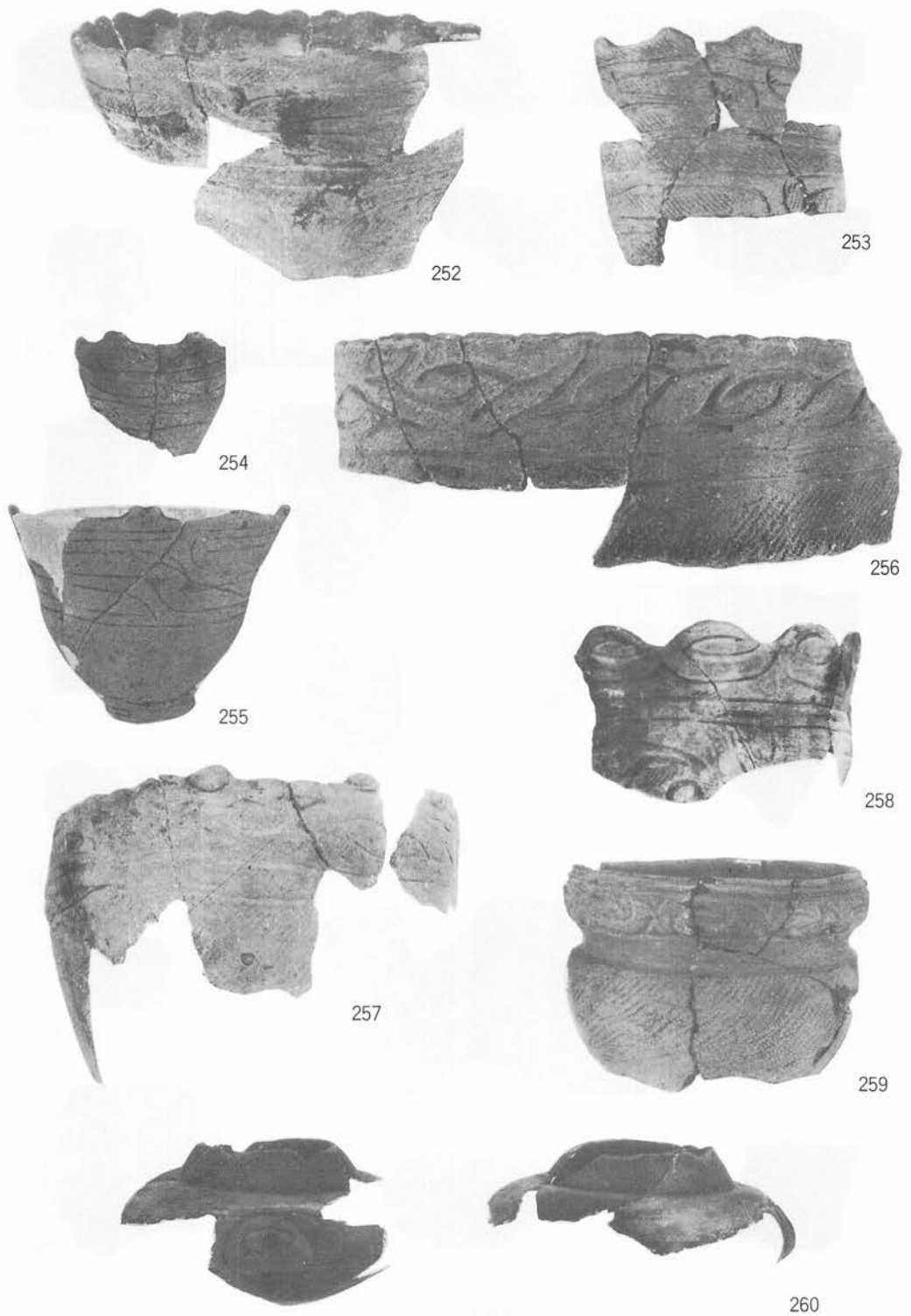


第Ⅱ群第6類A—206~230
写真図版27 遺構外出土遺物(15)



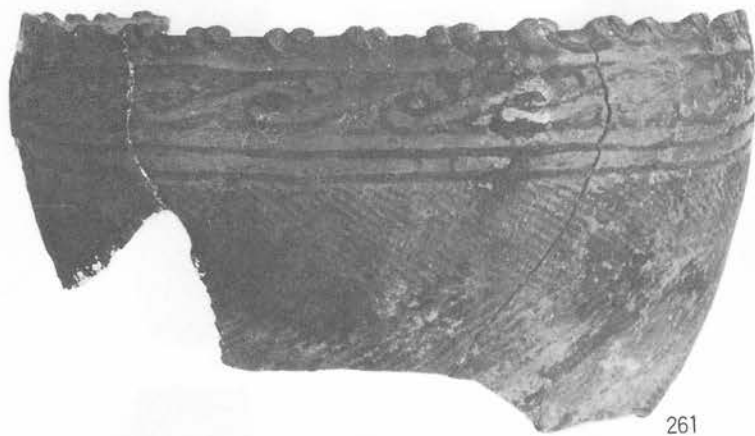
第Ⅱ群第6類B. 231~251

写真図版28 遺構外出土遺物(16)

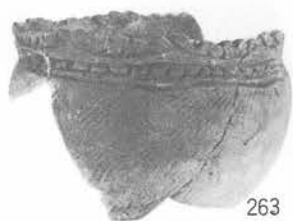


第Ⅱ群第6類A. 254・255, B. 252・253, 第Ⅲ群第1類A. 256・257, B. 258・260 258~260

写真図版29 遺構外出土遺物(17)



261



263



264

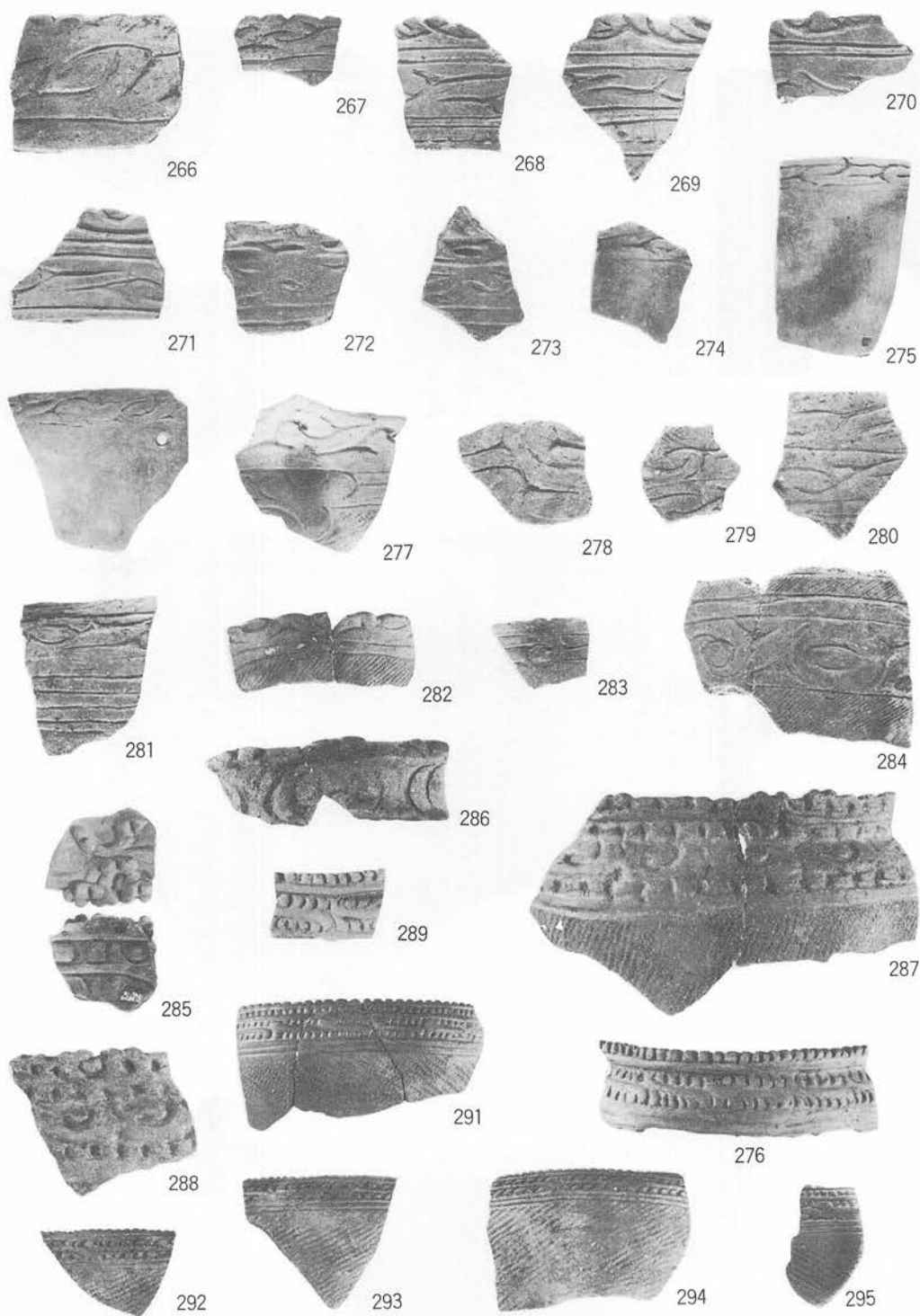


262



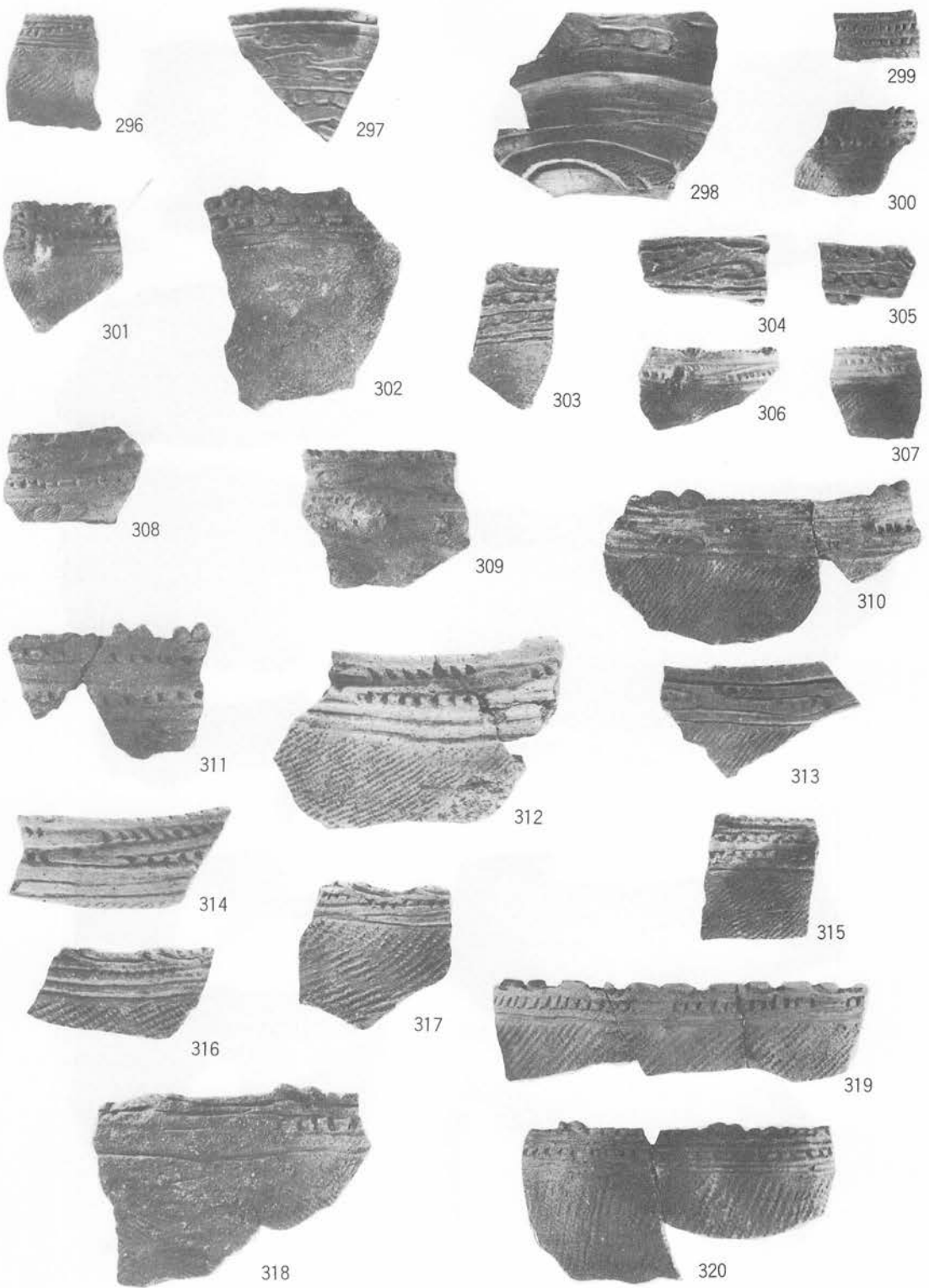
265

第Ⅲ群第2類261~265
写真図版30 遺構外出土遺物(18)



第Ⅲ群第1類A. 266~276, 278~282, B. 277・283・284, 第2類286~295

写真図版31 遺構外出土遺物(19)



第Ⅲ群第2類
 写真図版32 遺構外出土遺物(20)



321



322



323



324



326



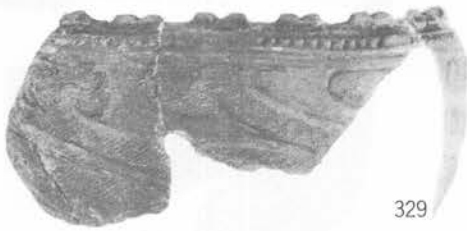
327



325



328



329



330

第Ⅲ群第2類321~323, 第3類A. 324~328

写真図版33 遺構外出土遺物(2)



331



332



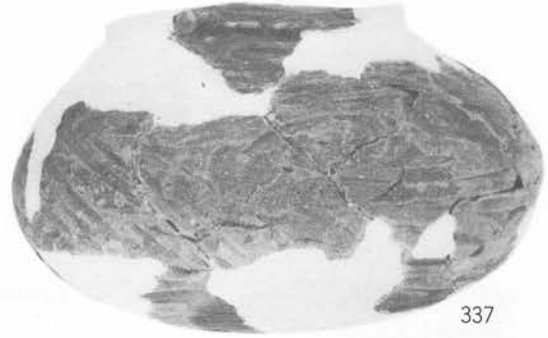
333



336



334



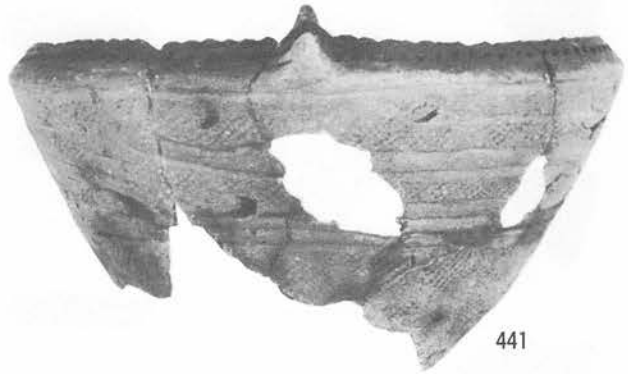
337



335



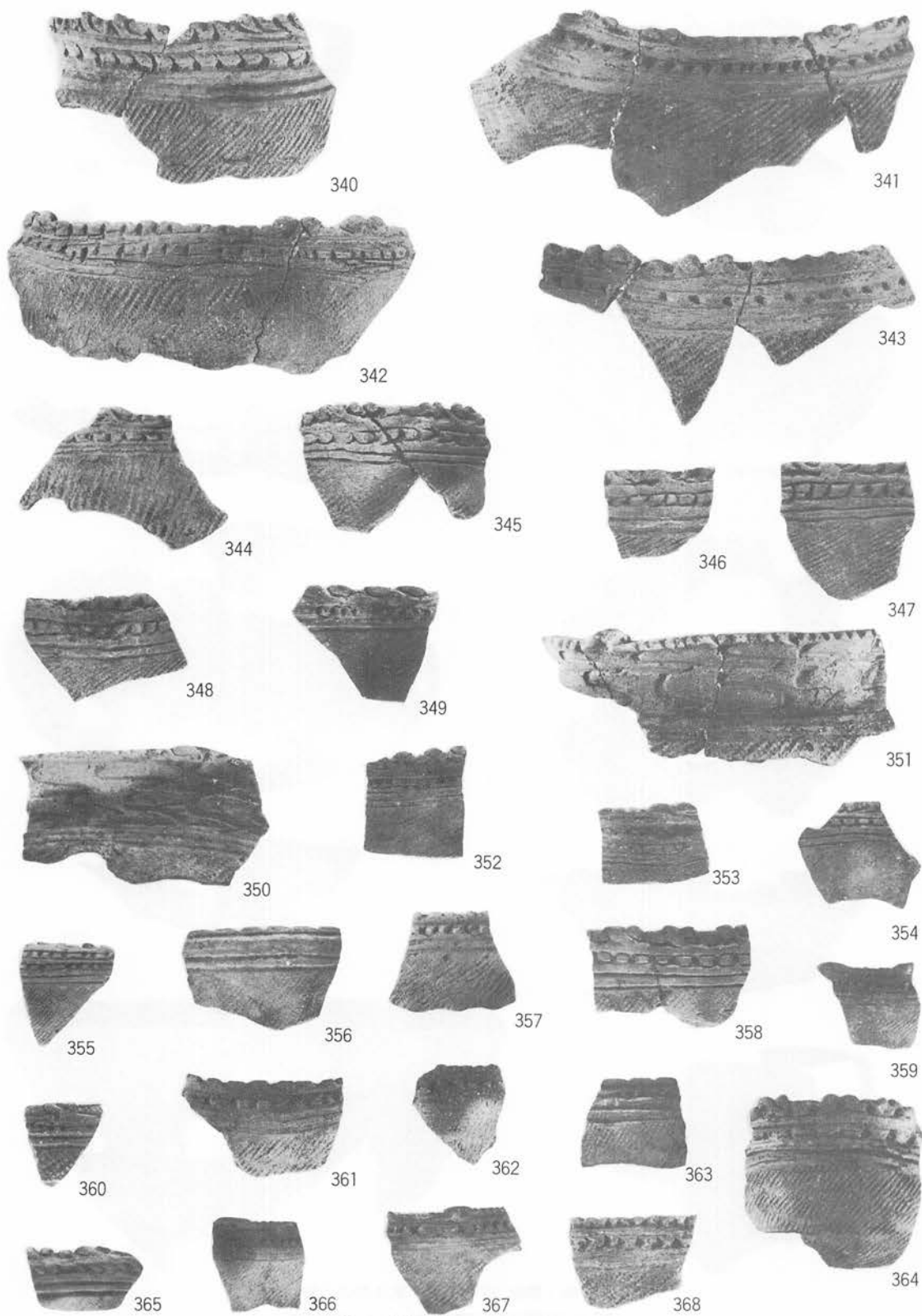
338



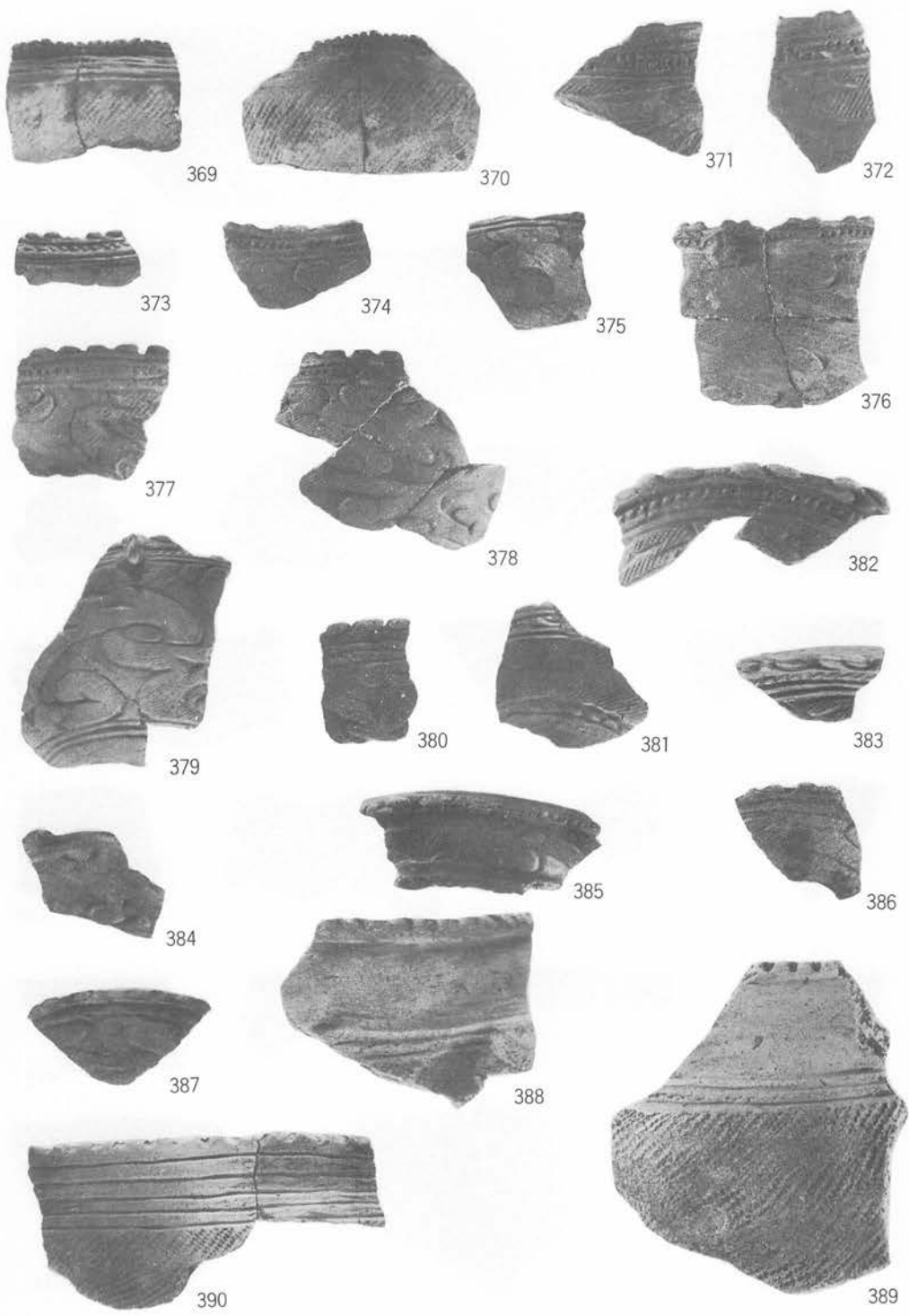
441

第Ⅲ群第3類B. 331~337, 第4類A. 338・441

写真図版34 遺構外出土遺物(22)

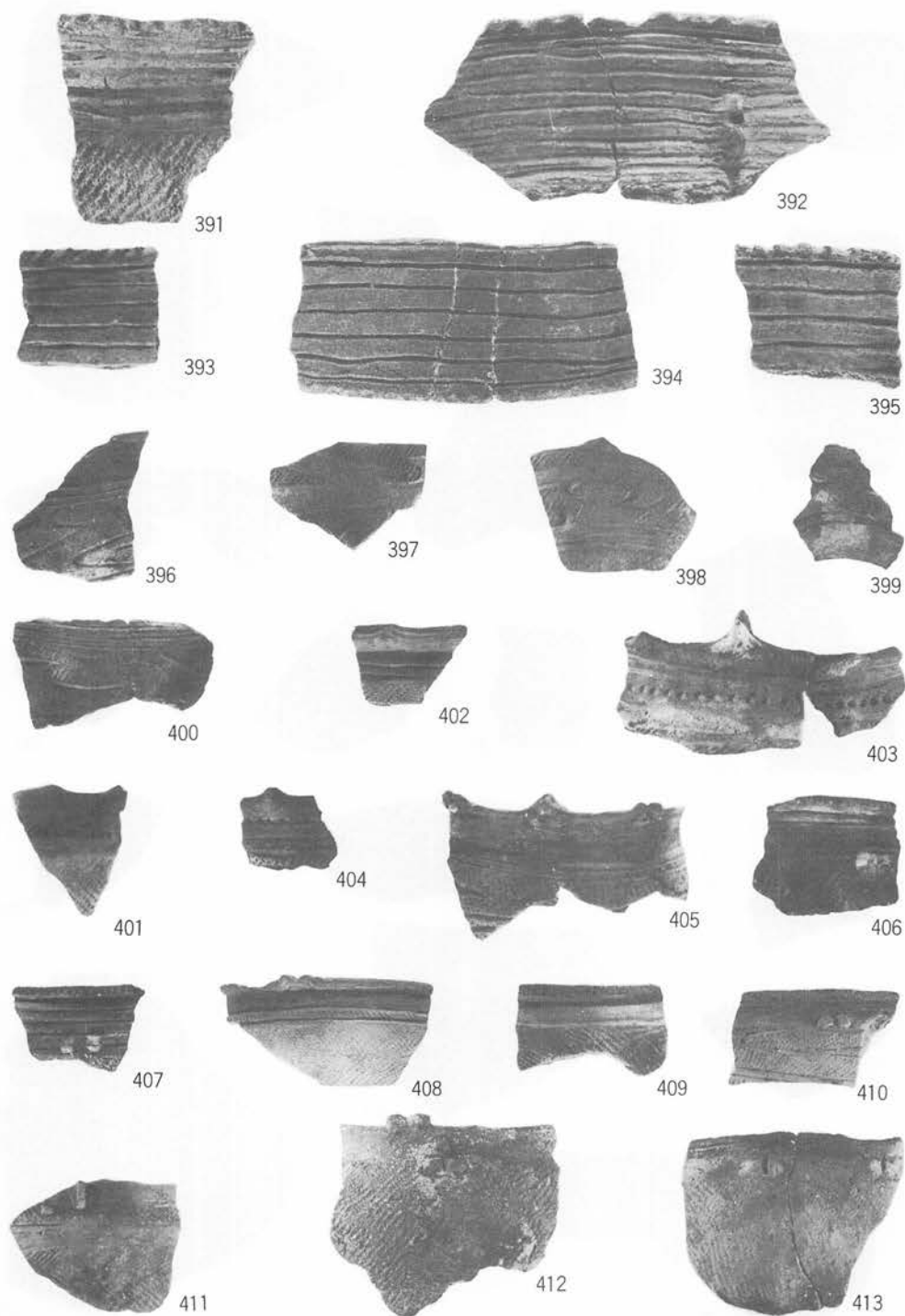


第Ⅲ群第3類A. 340~368
 写真図版35 遺構外出土遺物(23)



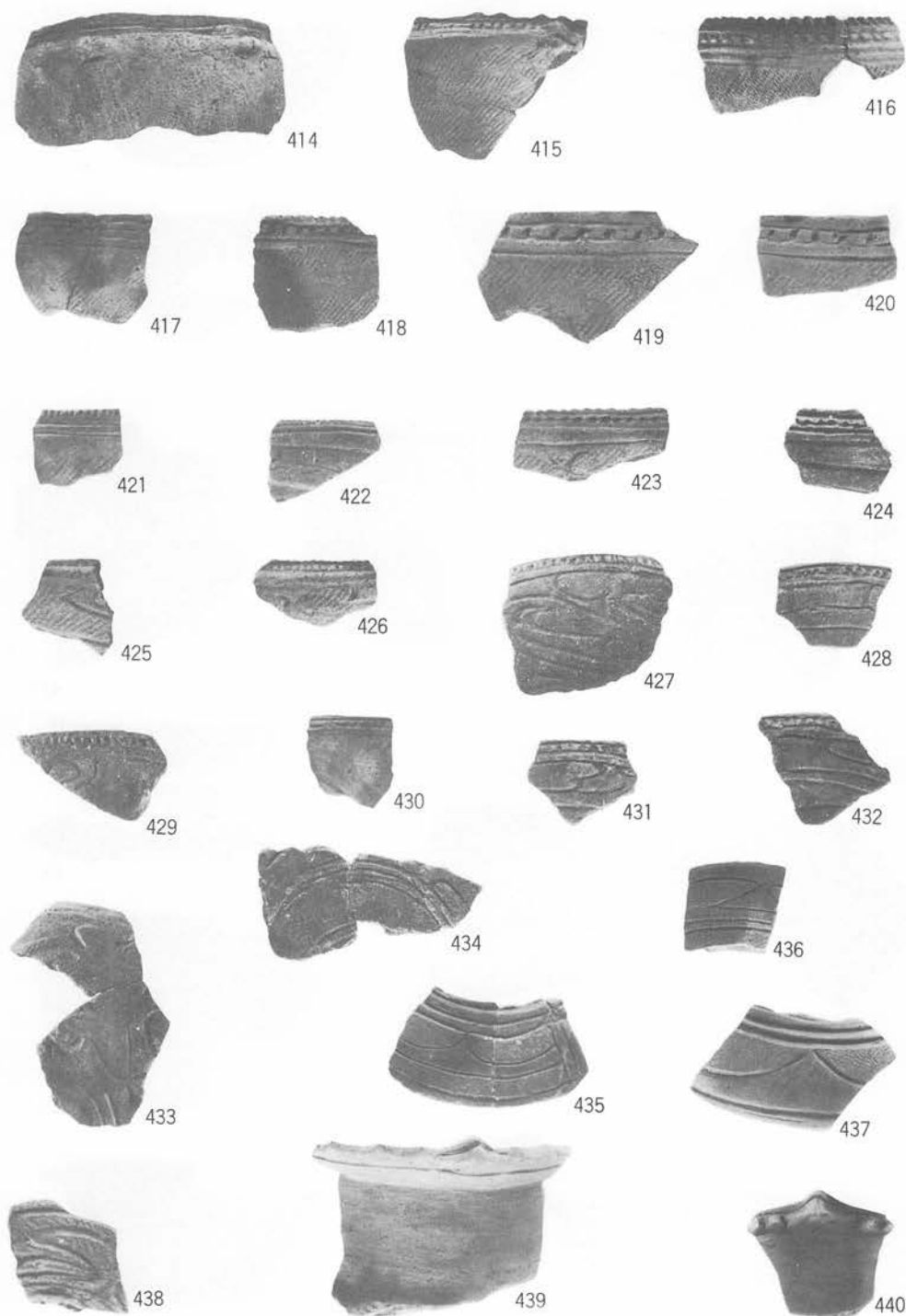
第Ⅲ群第3類A. 369-370, 第3類B. 371~387, 第4類A. 388~390

写真図版36 遺構外出土遺物(24)



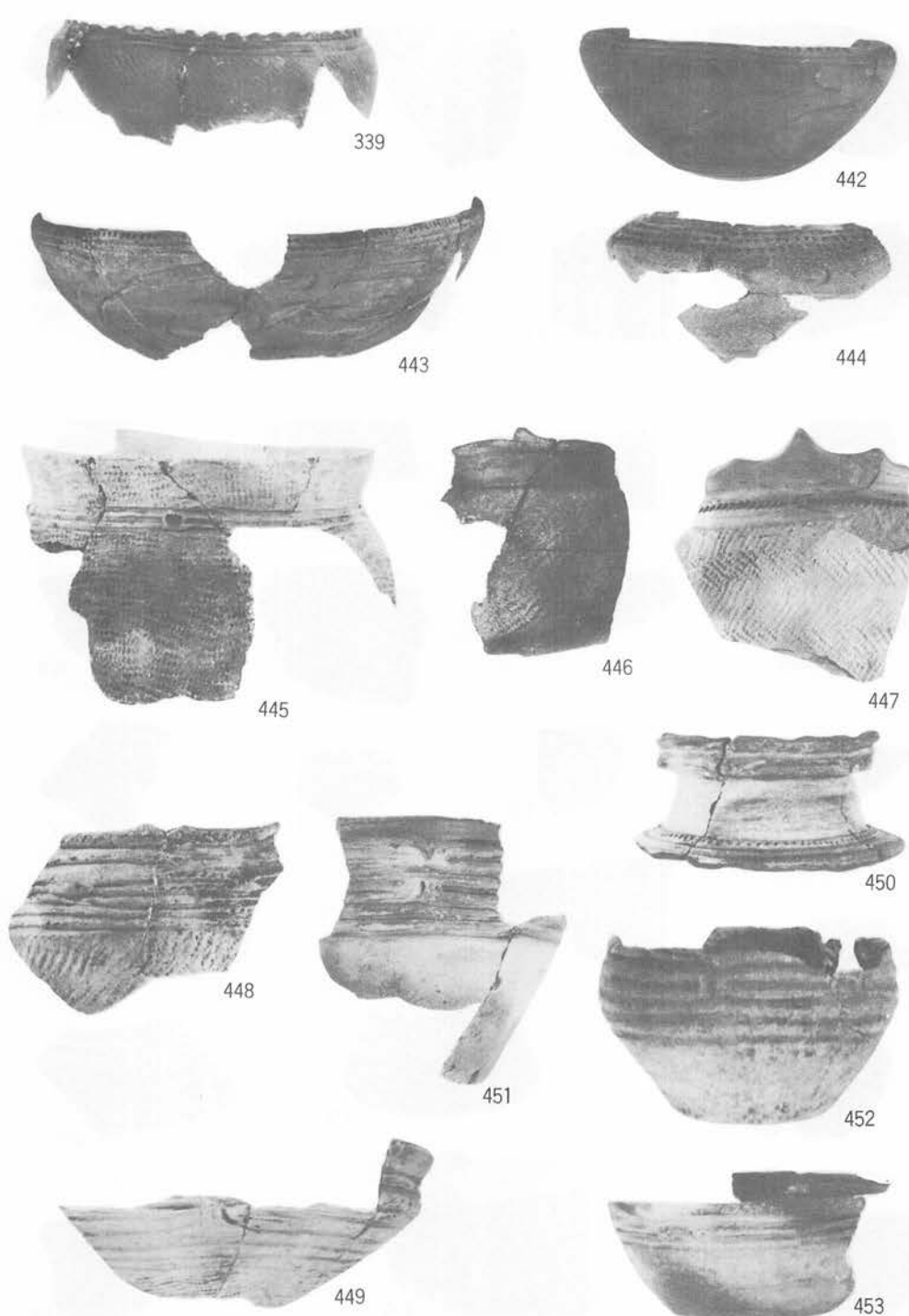
第Ⅲ群第4類A. 391~395・401~413, B. 396~400

写真図版37 遺構外出土遺物(25)



第Ⅲ群第4類A. 414~421, B. 422~440

写真図版38 遺構外出土遺物(26)



第Ⅲ群第4類B. 339・442～444, 第5類445～453

写真図版39 遺構外出土遺物(27)



454



455



456



457



458



459



460



461



462



463



464



465



466



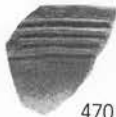
467



468



469



470



471



472



473



474



475

第Ⅲ群第5類454~463, 第6類464~472, 第Ⅳ群第1類473・474, 第2類475

写真図版40 遺構外出土遺物(28)



476



477

第IV群第2類476・477



478



479

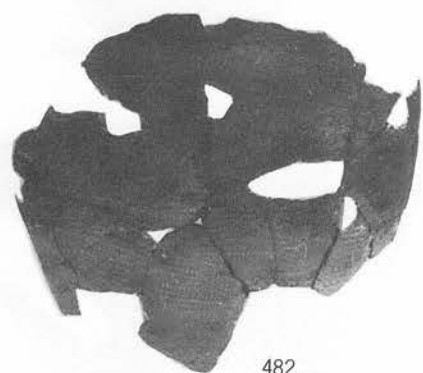
写真図版41 遺構外出土遺物(29)



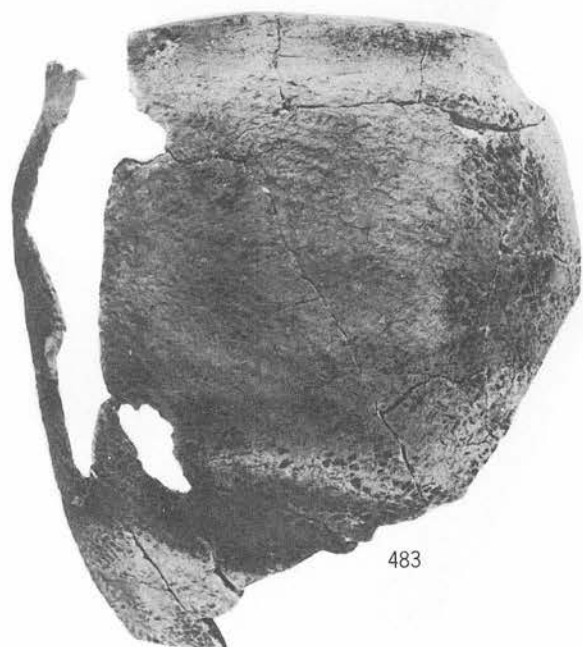
480



481



482



483

写真図版42 遺構外出土遺物(30)



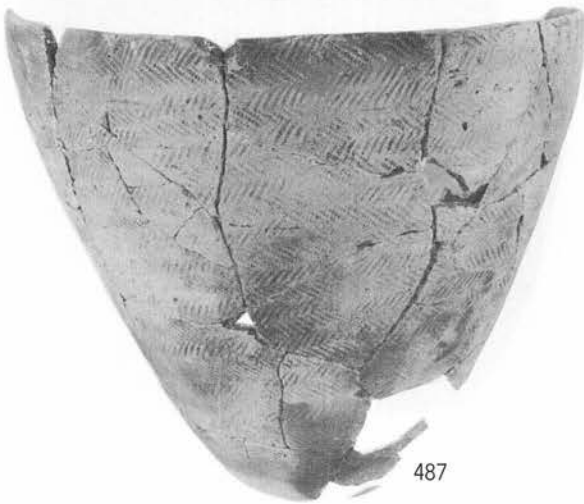
484



485



486



487



488

写真図版43 遺構外出土遺物(31)



489



490

写真図版44 遺構外出土遺物(32)



491



494

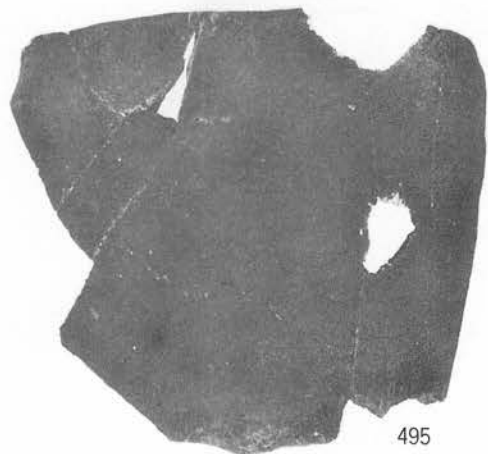


493

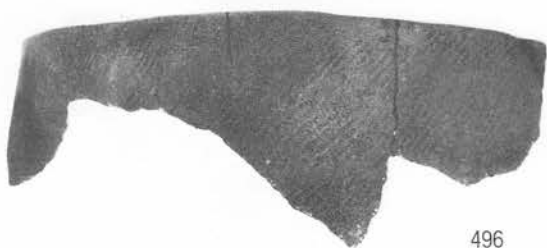


492

写真図版45 遺構外出土遺物(33)



495



496



498



497



499

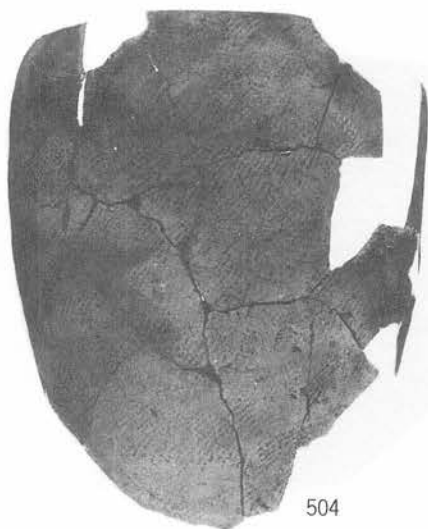


500

写真図版46 遺構外出土遺物(34)



502



504



503



505



506



507

写真図版47 遺構外出土遺物(35)



508



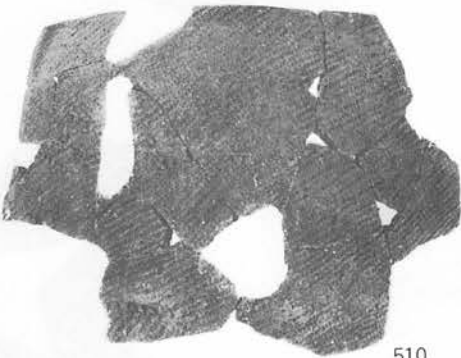
513



509



511



510



512

写真図版48 遺構外出土遺物(36)



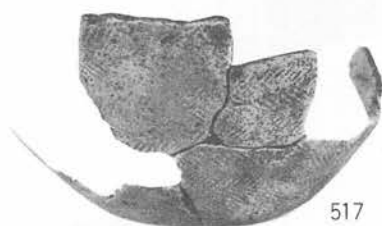
514



515



516



517



518

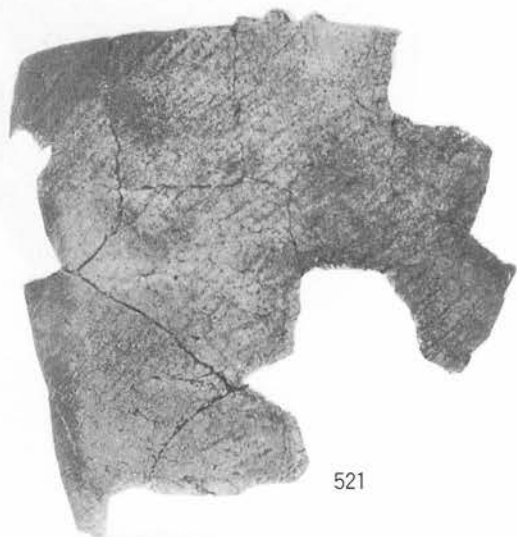


519



520

写真図版49 遺構外出土遺物(37)



521



522



523

写真図版50 遺構外出土遺物(38)



524



525



526



529

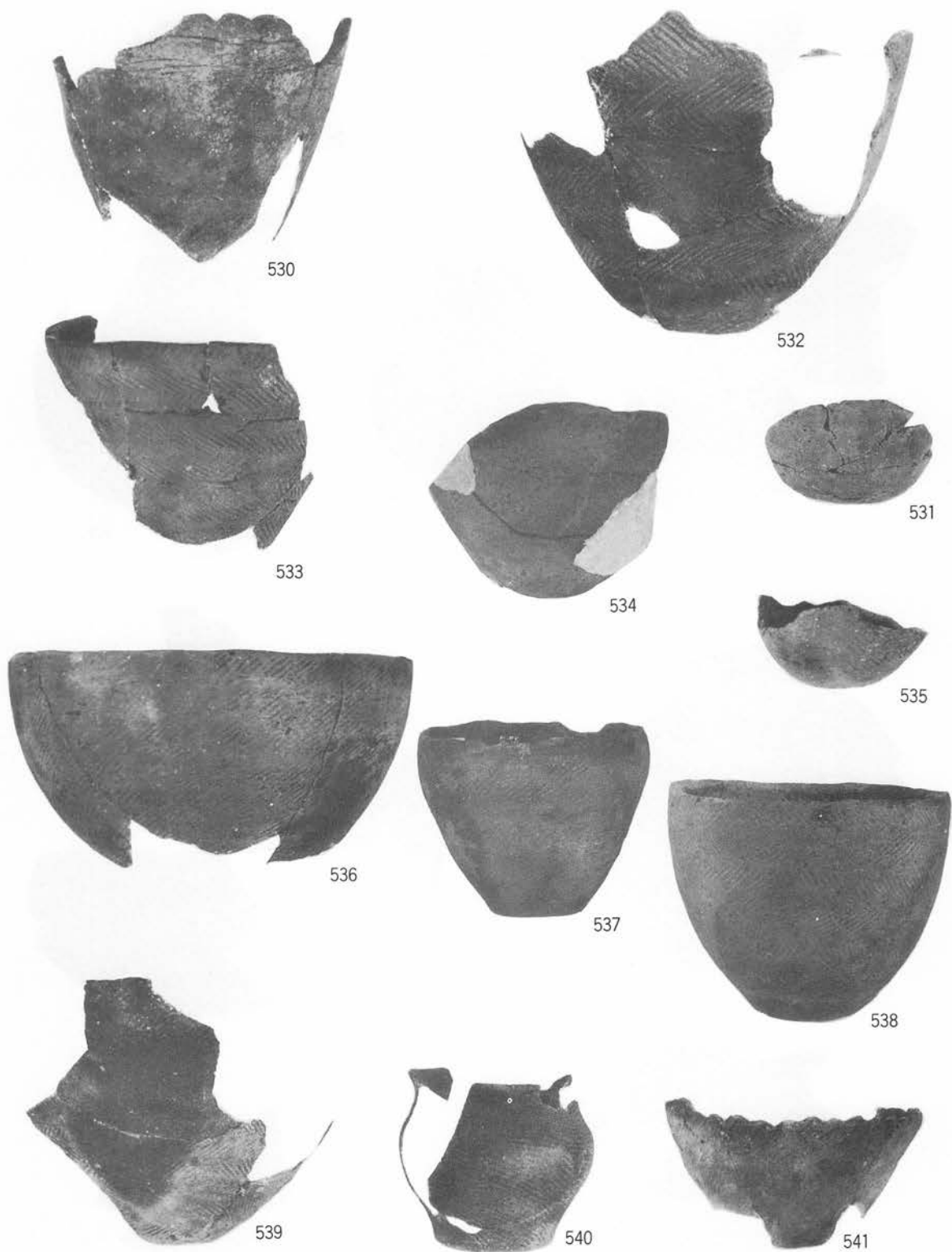


527



528

写真図版51 遺構外出土遺物(39)



写真図版52 遺構外出土遺物(40)



542



543



544



545



546



547



548



549



550

写真図版53 遺構外出土遺物(41)



551



553



552



554



555



556



557



558



559



560

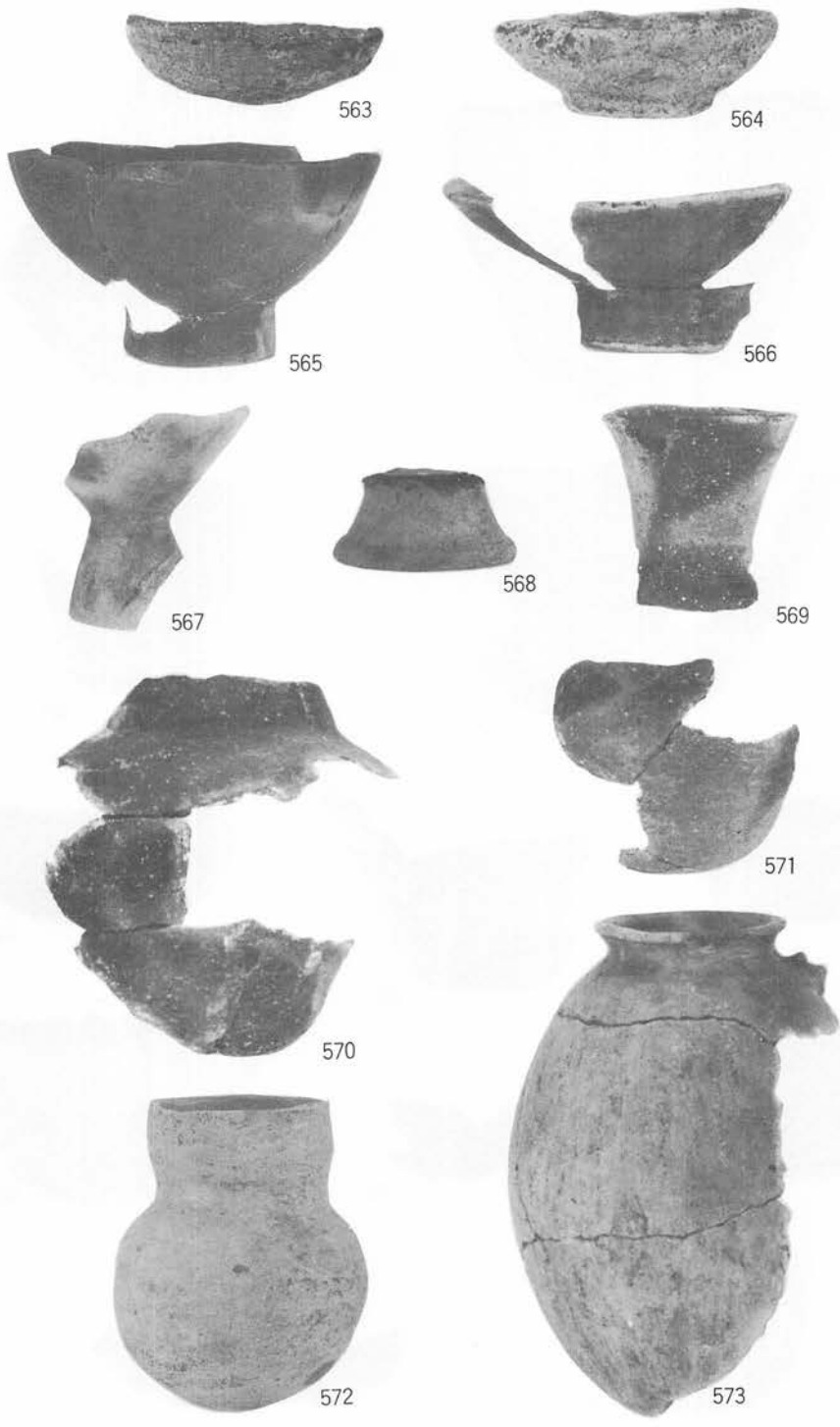


561

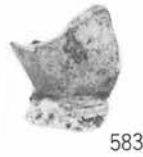
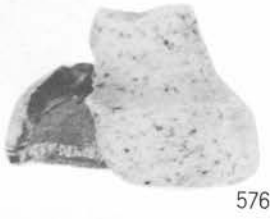


562

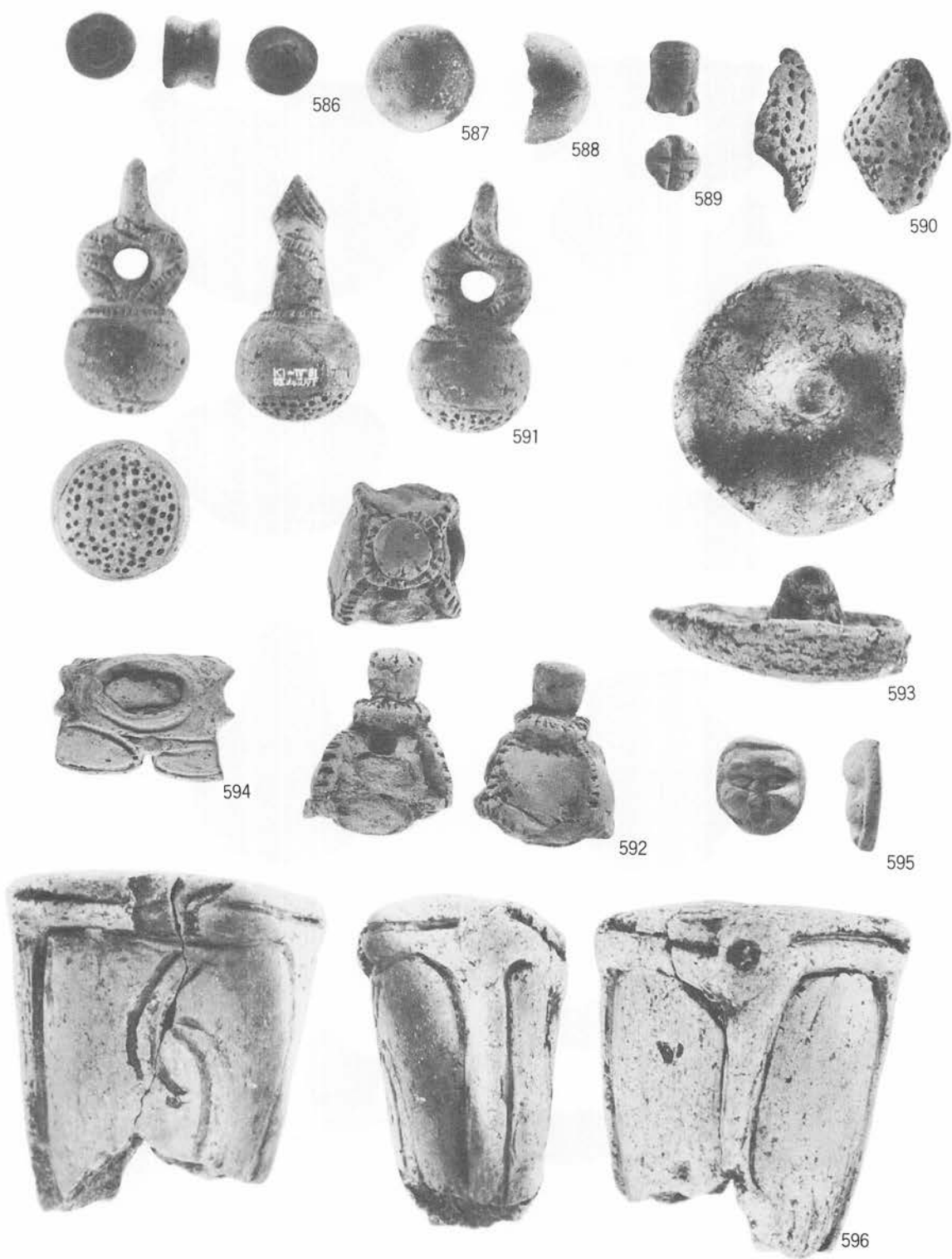
写真図版54 遺構外出土遺物(42)



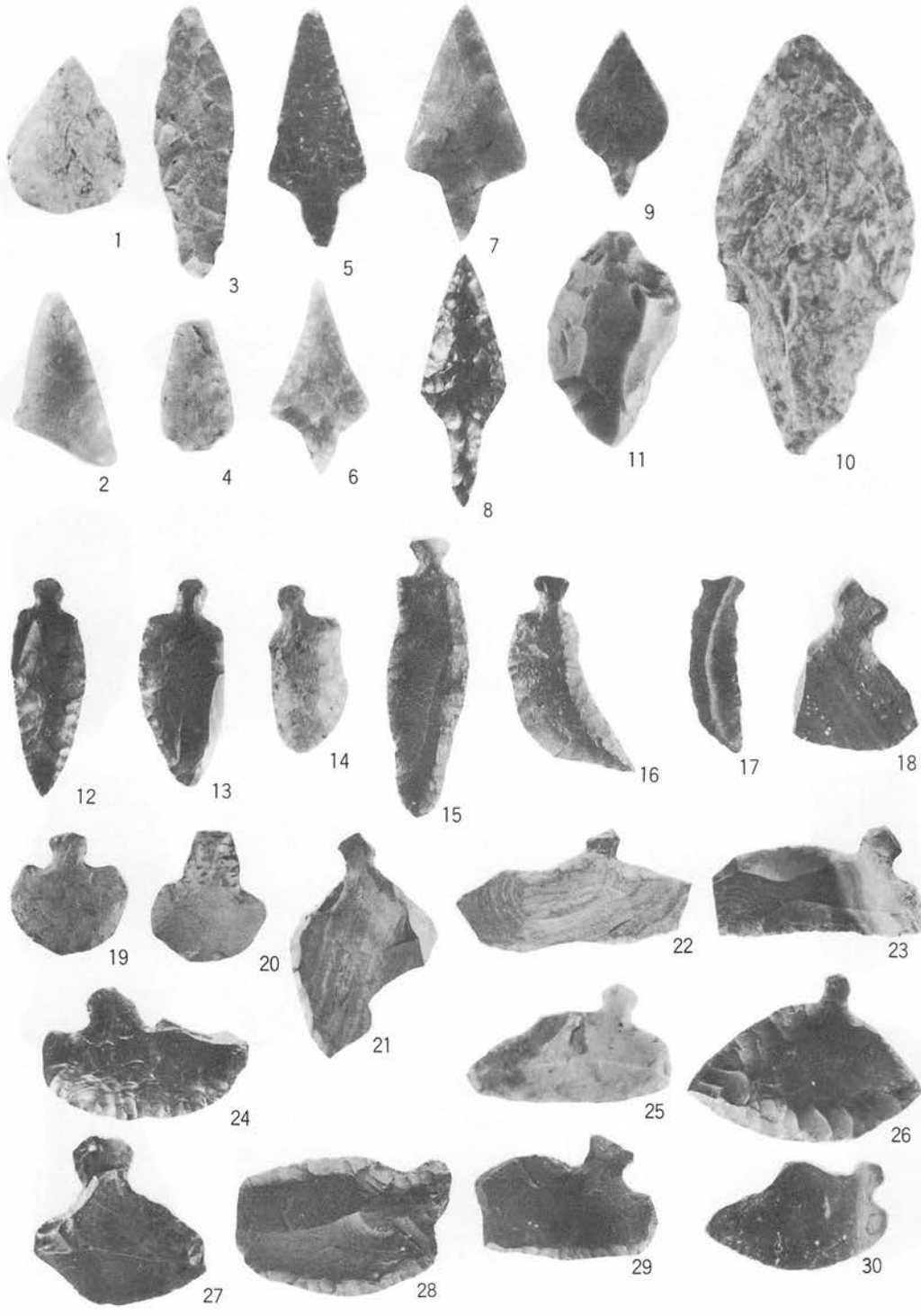
写真図版55 遺構外出土遺物(43)



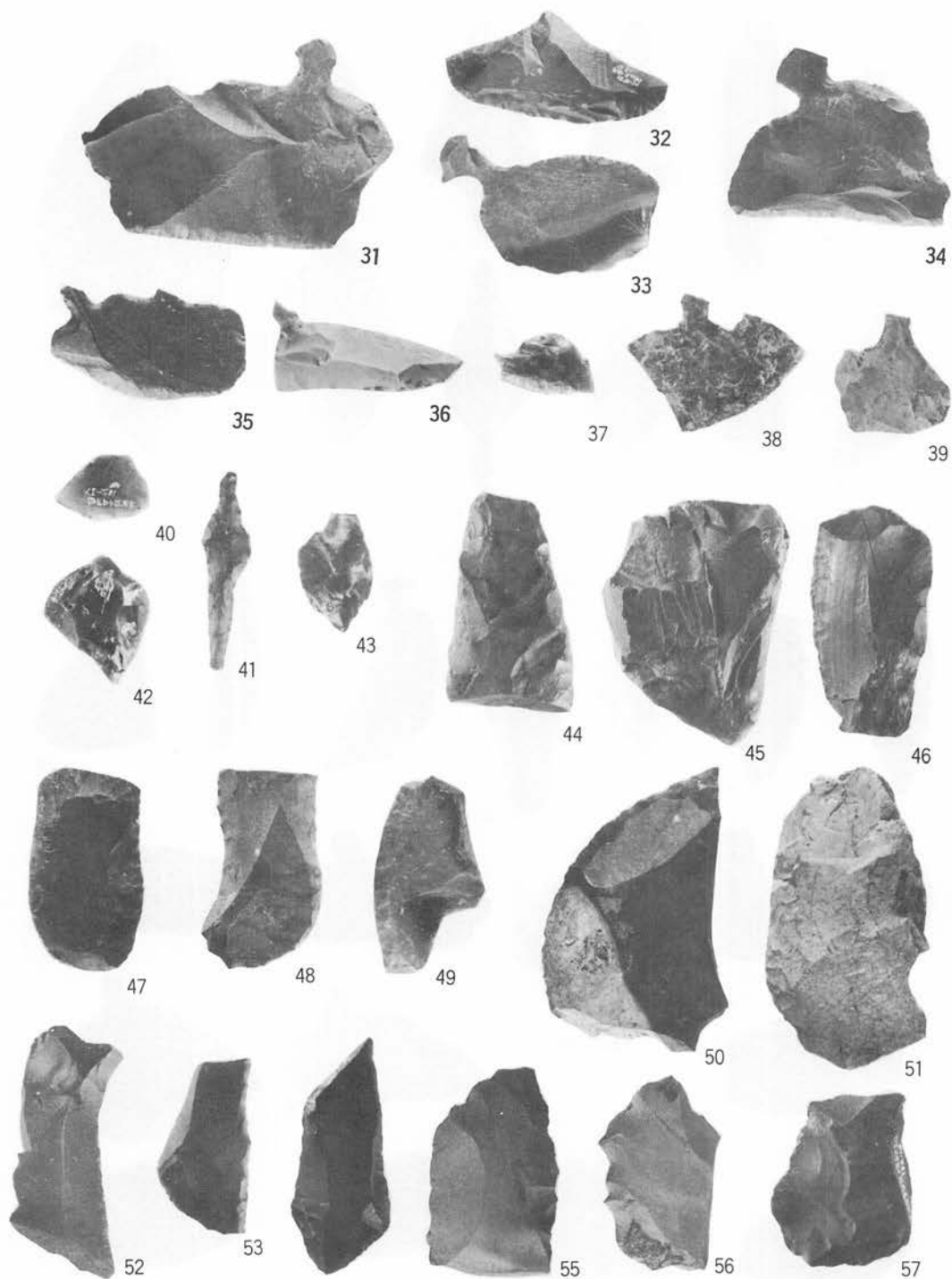
写真図版56 遺構外出土遺物(44)



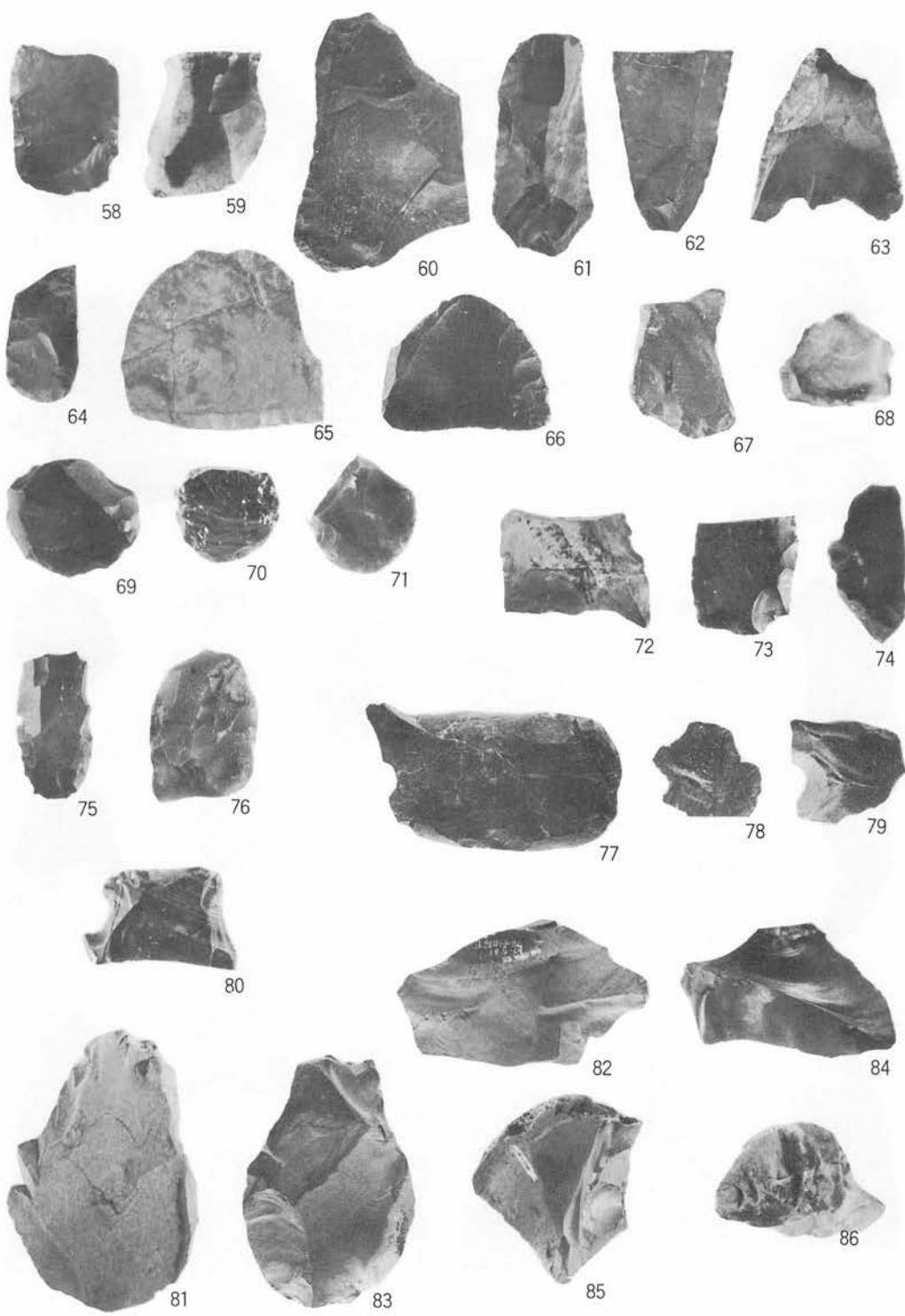
写真図版57 遺構外出土遺物(45)



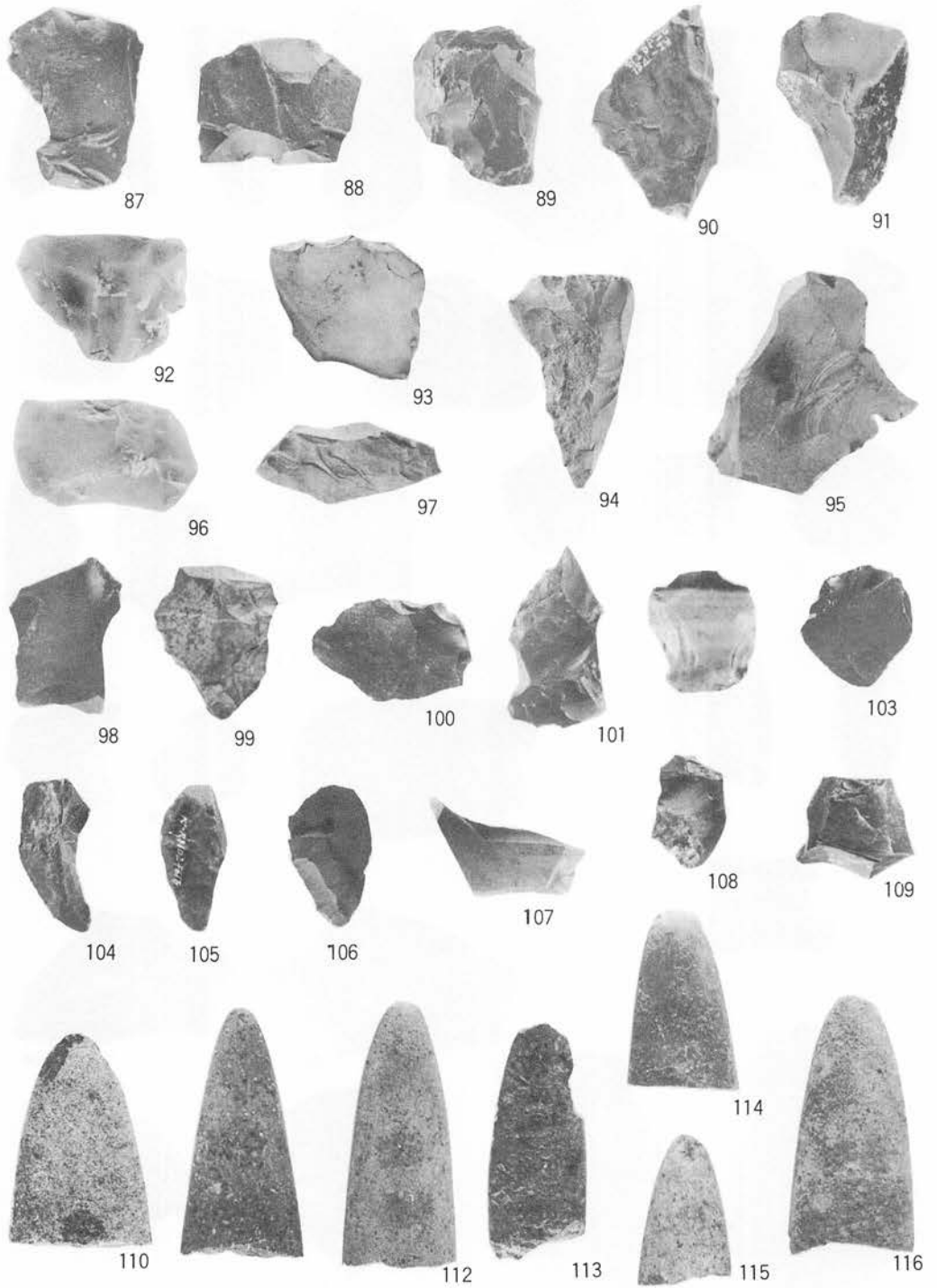
写真図版58 遺構外出土遺物(46)



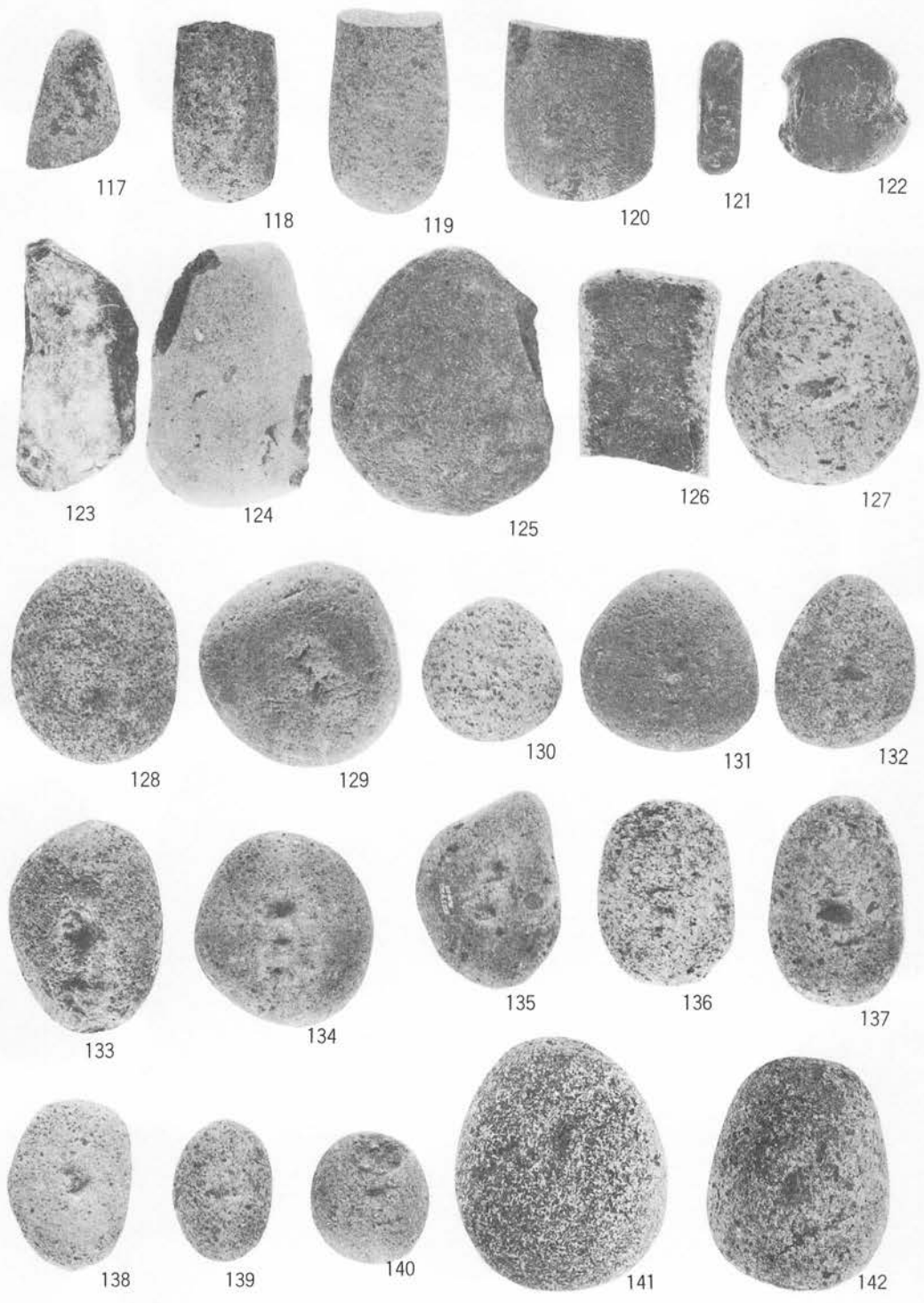
写真図版59 遺構外出土遺物(47)



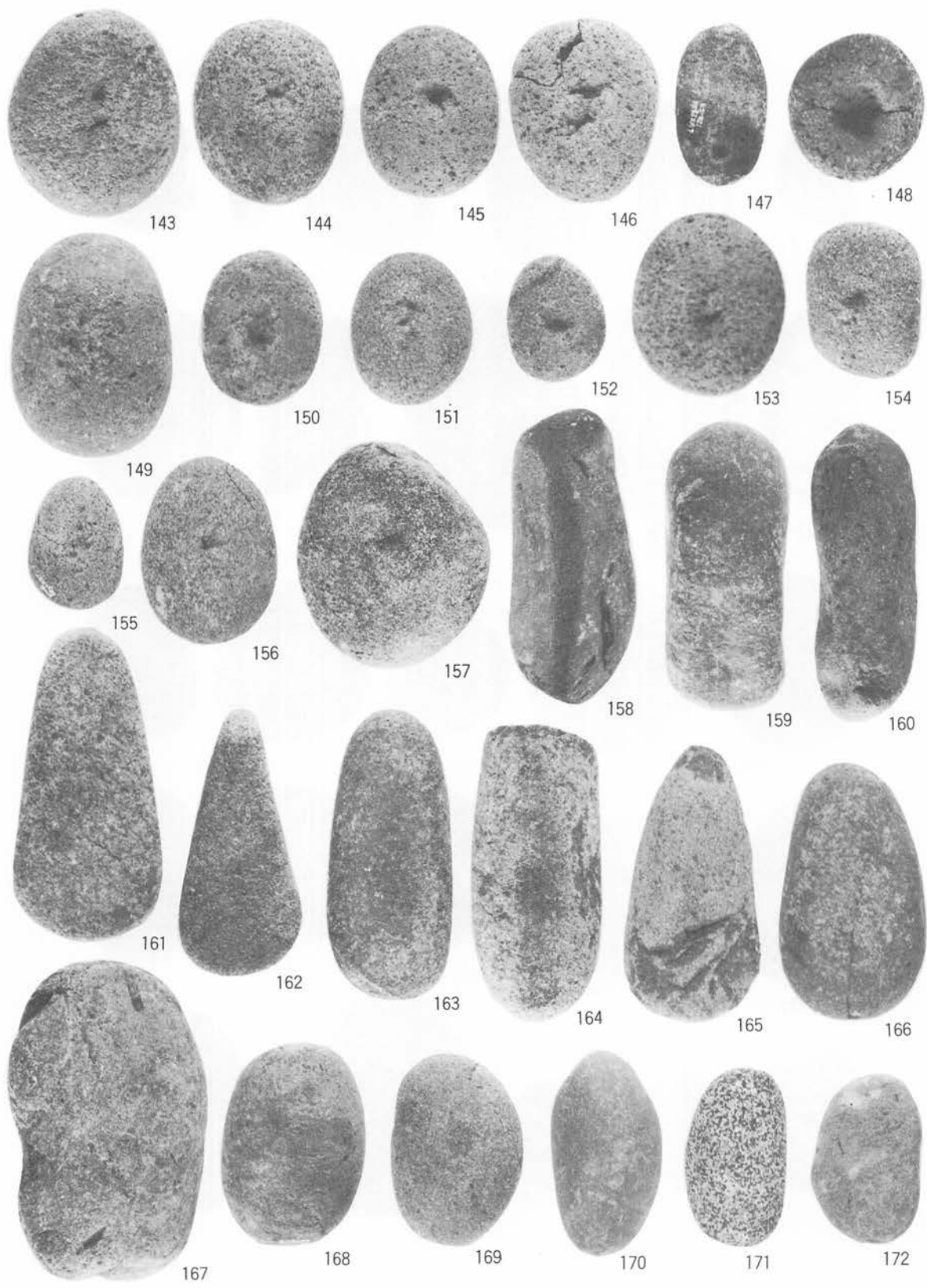
写真図版60 遺構外出土遺物(48)



写真図版61 遺構外出土遺物(49)



写真図版62 遺構外出土遺物(50)



写真図版63 遺構外出土遺物(51)



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



186



187



188



189



190



191



192



193



194



195



196



197



198

写真図版64 遺構外出土遺物(52)



199



200



201



202



203



204



205



206



207



208



209



210



211



212



213



214



215



216



217



218



219



220



221

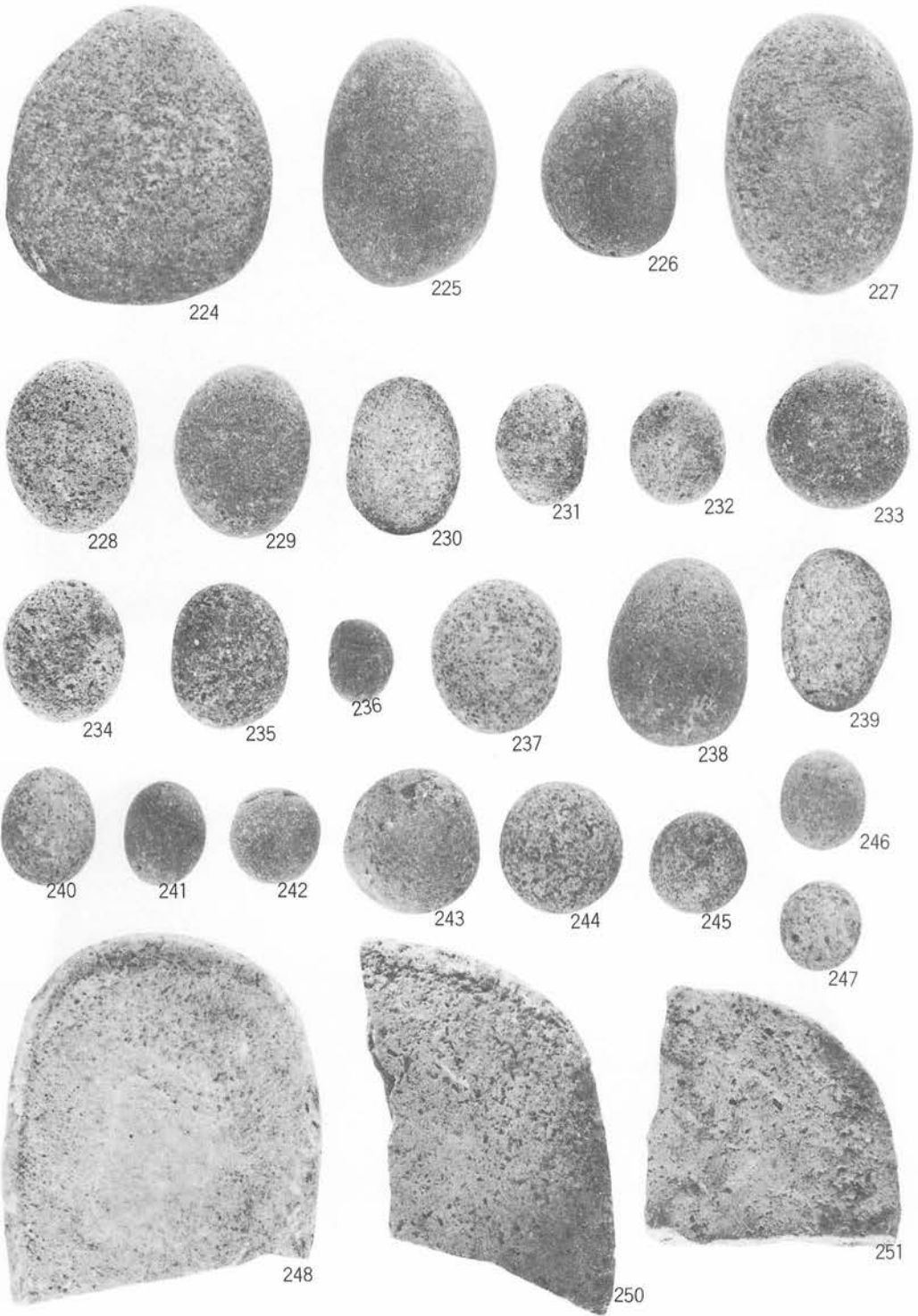


222



223

写真図版65 遺構外出土遺物(53)



写真図版66 遺構外出土遺物(54)



249



252



253



254

写真図版67 遺構外出土遺物(55)



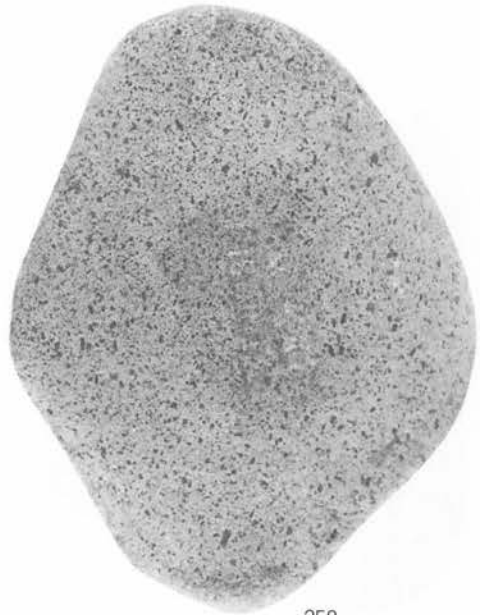
255



256



257



258

写真図版68 遺構外出土遺物(56)



259



260



261



262

写真図版69 遺構外出土遺物(57)



263



264



265



266



267



268



269

写真図版70 遺構外出土遺物(58)



270



271



272



273



274



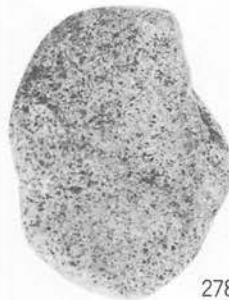
276



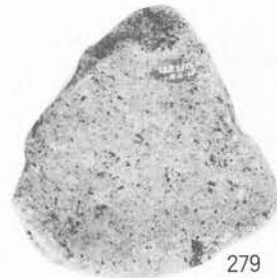
277



275



278



279



280

写真図版71 遺構外出土遺物(59)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第69集
小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和58年10月25日

発行 昭和58年10月31日

発行 (財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷
TEL (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

© 岩手県埋文センター 1983
